
gic Ride Project Freedom～ 仮面の幻想教師 麻帆良に俺！参上！

3MX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M·R·P·F ｝ Magic Ride Project
F
readam ｝ 仮面の幻想教師 麻帆良に俺！参上！

【Nコード】

N0326R

【作者名】

3MX

【あらすじ】

とある世界のとある人間がなく死んでしまった…。その者は魔法先生の世界に現れた
自由に原作イベントを攻略しながら、平穏な暮らしを取り戻せ。この物語は原作知らずの作者が贈る為、過度な期待はしないでください。あ。（あらすじと内容は異なることが稀によくあるらしい）

タイトル変更

旧タイトル『幻想とライダーと神の力を持って麻帆良に俺！参上！』

現在ある番外編

f a t e / s t a y n i g h t

魔法少女リリカルなのは

遊戯王GX

C3ーシーキューブー

I S インフィニット・ストラトス

ブログという始まり（前書き）

遂に独立しました
反省はしている
後悔はしていない

プロローグという始まり

ダンダンダン！

闇夜に鳴り響く銃声

ザシュツ

何かを切り裂いた用なら音

そんな世界に

一人の男が現れた

《タカ　トラ　バッタ　タトバ　タトバタトバ》

800年前の…

《サイクロン　ジョーカー》

風を纏い…

《カメンライド　ディケイド》

全てを破壊するため…

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

幻想の力を…

『五つ星神器 百鬼夜行』

神の武器を…

《スキヤニングチャージ》

《ジョーカー マキシマムドライブ》

《ファイナルアタックライド D D D デイケイド》

仮面の力を得て…

物語は動き始める

プロローグという始まり（後書き）

『天才野郎はFクラス 神は二物を与えます』も宜しくお願いします

第一話／始まりは唐突に…（前書き）

先ずはここから始まります

第一話／始まりは唐突に…

「またココか…」

俺は二十数年ぶりにココへ来た

あの神がいる空間

そうボ○ルドより白い

牛乳色の世界だ

事実『バカテス』の世界では

明久や雄二、土屋、秀吉

島田、姫路、優子に愛子

霧島さん達と楽しく

騒いだりして

文月学園を卒業した

今となつてはいい思い出だ…

それはそうと

何故呼ばれたのか

その理由を聞く必要がある

神を呼ぶか…

スウウウウ

『ゴットマアアアアン!』

「地球が危ない!」

来たよ神：

どうして伝わるんだろう

ネタ的に古いぞ

「フオフオフオ、久しぶりじゃのう」

「ああ」

「で、『バカとテストと召喚獣』の世界はどうじゃったか？」

「かなり楽しかった」

「それはよかったの」

「でだ、またココに喚んだ理由はなんだ」

「聞きだいかのう？」

「四天王奥義『三步h』「ま、待つんじゃ」

「何だ、話してくれるのか？」

「当たり前じゃ」

「で…」

「うむ、実はのう」

く神説明中く

「というわけじゃ」

簡単に説明

暇つぶしに誰かを別世界に送ろうとした↓俺は面識がある↓FFF
団から逃げれる奴なら大丈夫↓白羽の矢↓喚びだし↑今ココ

俺は取り敢えず手を出す

「どういう意味じゃ」

「流石に戦闘があったらやばいだろ。アンタのことだ。楽しんで来

いとか言ってるが、原作介入しないと楽しく無いんだよ」

「わかつとる。今回は戦闘がある世界じゃからの、三つまで能力をやる…遠慮はしてほしい」

「それじゃ、『東方project』の全能力とスペルカード、あとは『仮面ライダー』の変身、『うえきの法則』の神器」

「先に言っておくが、贅沢じゃね」

「貰える物はもらっておくのが、礼儀だ」

「もう一つ言っておくが、『東方project』のスペルはあまり使うではないぞ」

「何故だ？」

「強すぎるからじゃ」

「それがどうしたんだい？」

「説明しておく必要があるのう」

神はこう言った

「強すぎる力には、世界の修正力が働き、世界を崩して行く。幸いにも仮面ライダーは架空ではあるが存在していた。

しかし、東方projectは存在していない。そのため、出来れば使わないでほしいのじゃ」

「うえきの法則に関しては…」

「今回の世界では精霊とかがいるのでな、神がいたところでかわらんじゃろ」

「ならいいか」

「ではお馴染みの下りを行くぞい」

「よしこい」

すると足場が現れて

巨大な手に立っている状態になる

「そんな能力で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない」

そして俺は飛び降りた

BGM

エエエエエエエエ

「到着」(ドヤ顔)

俺はデカイ樹木の近くに降りた

P r r r r !

ピッ

『はい？』

『ワシじゃ』

『新手な詐欺ですか？』

『酷いのう』

『で、何のようだ』

『渡し忘れた物があるのじゃが、今から送るからちと待っておれ』

ピッ

フアアアア

電話を切ると同時に

目の前に一台のバイクが
出現した

「コイツはライドベンダー」

よく見ると紙が挟まっているので取って開いた

『コレはワシからの餞別じゃから受け取るがいい、能力について書いといたからよく読むように。【東方project】について：使いたい能力を持っている奴を思い浮かべれば使用可能。【仮面ライダー】について：お主が変身出来るのは、ディケイド、ダブル、オーズの三体じゃ、オーズドライバーとコアメダルはポケットに入っているから安心せい。ディケイドとダブルに関しては後で贈る。』

【うえきの法則の神器】について：ただ名前を言えば使用可能じゃ。それともう一つ、【主の体について】：とても頑丈。凄い力持ち。速い！速すぎる！回復力マジパネェ。みたいじゃから。頑張るのじやぞ。お主の人生に幸福を… 神より』

「ありがとよ神…」

ダンダンダン

俺は銃声らしき音がする方に向かうことにした

「行くぜ！」

ブォン

一人のイレギュラーが
この物語にどう影響するのか

第一話／始まりは唐突に…（後書き）

次は刹那と真名に会います
主人公設定はそのあと

第二話／出会いは必然的に…（前書き）

でなわけで第二話投稿

第二話／出会いは必然的に…

ブオオオオオオン

現在、ライドベンダーで絶賛爆走中です

意外とスピードでるんですね

ダン！ダン！

「音が近くなってきた」

急ぐか…

??? 視点

「数が多すぎる！」

切っても切っても限りなく現れる鬼

『嬢ちゃん、そろそろ諦めたらどうだい？』

「誰が諦めるか」

ザシユッ

私は鬼を切り裂く

「刹那！後ろだ！」

しまっ！

私は死を覚悟し目を瞑った

キキーツ！

ドンッ

『グハッ』

いつまでたっても痛みが来ないので、目を開けるて

「コレが鬼か…」

バイクに乗っている

一人の人間がいた

暗くてよく見えないが

声からして男だろう

すると彼はポケットから

何かを取り出し

「変身！」

そう言った

??? 視点終了

キキーツ！

ドンッ！

『グハッ』

いやー

間に合って良かった

俺は周りを見渡す

「コレが鬼か…」

原作でも確かそうだった筈

早速試してみるか

俺はポケットから

オーズドライバーと

コアメダルを三枚取り出し

《ティン ティン ティン》

「変身！」

《タカ トラ バッタ タトバ タトバタトバ》

仮面ライダーオーズに

変身した

『なんだオマエ?』

「仮面ライダーオーズ」

『仮面ライダー? 知らんな〜んなもん』

「別にいいさ」

俺はトラクローを展開し
鬼を切り裂き

バツタレッグで
蹴り飛ばす

『調子に乗るな』

ガキン
ガキン

「グッ…」

俺はトラメダルを外し
別のメダルを入れ

《ティン ティン ティン》

《タカ カマキリ バツタ》

『姿が変わった!』

ザシュツザシュツ

「コレは使いやすいな」

俺は手と脚に力を入れて跳ぶ

「でいやああああ!」

カマキリアームで
鬼を切断した

その衝撃で残りの鬼は消えた

「ふう、一件落着」

俺は変身を解除した

??? 視点

「刹那! 後ろだ!」

私が叫んだ

しかし、もう遅かった

彼が来なければ…

キキーツ！
ドンッ！

『グハッ！』

突如バイクが現れて
鬼は跳ねた

私が刹那に近づくと

「変身！」

そう言って

《タカ　トラ　バツタ　タトバ　タトバタトバ》

姿を変えた

それにあの歌は何だ？

「それにしても凄いな…」

何者かはわからんが

あの数の鬼を圧倒している

今度はメダルのようなものを取り出してベルトの真ん中に入れた

《タカ　カマキリ　バツタ》

「姿が、変わった」

さっきはトラの爪のようだったが、今度のはカマキリの鎌みたいな

腕になった

「刹那、アレはいつたい…」

私は刹那に聞いてみたが

「真名、私にもわからない」

そう言われた

すると脚の腕が光り

鬼の群集に飛び込み
切り裂いた

「ふう、一件落着」

そして、正体を表した

さっきはトラの爪のようだったが、今度のはカマキリの鎌みたいな
腕になった

「刹那、アレはいつたい…」

私は刹那に聞いてみたが

「真名、私にもわからない」

そう言われた

すると脚の腕が光り

鬼の群集に飛び込み

切り裂いた

「ふう、一件落着」

そして、正体を現した

??? 視点終了

俺がライドベンダーに跨り帰ろうとすると

「待ってくれ！」

呼び止められた

「どうなさいましたか？」

一応聞いておこう

「アナタは何者ですか？」

やっぱりその質問ですか

「まず乗って下さい。走りながら聞きますから」

俺はそう言い

二人を乗せる

よい子は真似しちゃ駄目だぞ

ブオオオオオン！

「で、アナタは何者ですか？」

「通りすがりの異世界人」

「真面目に答えて下さい！」

「真面目だよ。さっきみたいなのがいるんだから、異世界があってもおかしくないでしょ」

「うっ…」

完全論破

「何でここに来たかは知りませんがね。そう言えば名前」

「ああ、すまない。私は龍宮真名」

「桜咲刹那と申します」

「俺は忍竹薫。忍でいい」

「では忍さん。あってほしい人がいるんだけど」

「構わないよ」

「そうか」

ブオオオオオオン

バイクの音が闇夜に響いた

その頃、戦闘場所では…

「いったい何があったんだ」

綺麗に斬られた

多くの木々を見て

誰かが呟いていた…

第二話／出会いは必然的に…（後書き）

次回、VSタカミチでコンボ発動します。あくまで予定です。確実に学園長に会います

主人公について（前書き）

主人公紹介とか誰得ですか？

主人公について

名字 忍竹 名前 薫

年齢 18 性別 男

身長 175?

体重 78?

体型

痩せ型で筋肉質

黒髪に黒目

『バカとテストと召喚獣』の世界から再び蘇った主人公

学力は凄く

葉加瀬や超鈴音並みである

性格

少々変態だが

紳士な一面もある

女性には優しい

自分の信じる道は何が何でも進み続ける
自由人だが筋は通す

能力

『東方project』の全能力と全スペルを扱う。スペルを使う

ことは基本的にはない

『仮面ライダー』に変身できるがディケイド、ダブル、オーズの三体になれる

『うえきの法則』の神器が使える。魔王は1日三発までしか撃てず、四発目は撃てるが、体に物凄い負担が掛かる

備考

普段は仮面ライダーに変身して戦う。一人でダブルになれば、コンボと使っても負担がない。ディケイドのカメンライド時に変身しているライダーのファイナルフォームライドになれる。例…龍騎時にドラグレッター、キバ時にキバアローになれる

普段の身体能力

パワーだけ『東方project』の『星熊 勇儀』の四割減だと思ってください
他は同じくらい

前世の死因

病院食で食中毒になり死亡

主人公について（後書き）

結論…作者が得します
（設定を忘れない為）

第三話／命を救ったんだから俺のモノになれ（前書き）

刹那と真名が主人公に食べられます。VSタカミチはもう少し後で
した

第三話／命を救ったんだから俺のモノになれ

ドドドドドドドド

俺はライドベンダーを
とある寮の裏に停めた

「刹那、肩貸してやる」

「ありがとうございます…」

「真名、悪いが開けてくれ」

「ああ」

ガチャ

「失礼します」

俺は刹那を椅子に座らせ

「怪我の様子をみる」

靴下を脱がし、足を触る

「軽い捻挫だな」

「…そうですか」

「刹那、捻挫くらい早く治せ」

「まあ、安静にしておくのが一番だな」

ひとまず

塗り薬を塗り、湿布を貼り、固定しといた

「何から何まで、すみません」

「いやいや」

「出来れば、お礼がしたいのですが…」

「礼ねえ…」

「何でも言って下さい」

「そうだな。俺のモノになれ」

「「えっ！」」

部屋の空気が凍る

「何でもいって言っただろ」

「いや、その、わたし／＼／＼」

俺は刹那に近づき

「体で払ってもらおう」

そう言い

「ひゃう！」

お姫様抱っこでベットまで運んだ

刹那視点

私は椅子に座らせられて

「怪我の様子を見る」

そう言われた

誰にも言っていない筈だが
見た目でわかってしまうかと思
っていたら

いきなり靴下を

脱がして触ってきた

あ、ダメ：

くすぐったい：

「軽い捻挫だな」

「：：そうですか」

軽い捻挫で安心した

「出来ればお礼がしたいのですが…」

私は彼にそう言う

この男——忍竹薫さんは

私の命を救ってくれた

命の恩人だから

「何でも言ってお下さい」

できることなら何でもしたい

すると彼は

「そうだな。俺のモノになれ」

そう言ってきた

いや、いくら命の恩人とはいえいきなりそんな／＼／＼／
別に嫌じゃないですよ
でも…

そして私の耳元で

「体で払ってもらおう」

そう言い

私を抱き上げた

「ひゃう！」

そのままベットに連れて行かれて、投げられた

「冗談だ」

ウチの純情を返してえな今日の
刹那視点終了

「冗談だ」

いくら俺でもそんなことはしない双方の同義の上なら話は別だが…

「俺は床で寝かせてもらう」

「そうかい。ならお休み」

「おやすみなさい」

俺は眠りについた

↓次の日の朝↓

「ん…朝か」

俺の目覚めは早い

前世では

一人暮らしをしていたからだ

ひとまず服を着て

台所に立つと

「一晩の恩義で朝飯を作ってやる」

一人でそう言ったそう言った

本日はメニューは

ベーコンエッグ

ポテトサラダ

ソーセージ

パンである

作っている途中に

刹那が起きて

「あ、その／＼／＼おはようございます／＼／＼」

「うん。おはよ」

恥ずかしそうに挨拶した

「もうすぐ朝ご飯が出来るから、準備して」

そして：

「」「いただきます」「」

また1日が始まる

第三話／命を救ったんだから俺のモノになれ（後書き）

勢いで書いてしまいました
本当に申し訳ございません！

第四話／やはりどの世界も学園長は妖怪なのか!?(前書き)

V S タカミチまで書きました

主人公は前の世界では学園長に対して不貞不貞しい態度でした

第四話／やはりどの世界も学園長は妖怪なのか!?

コンコン

俺は今

大きな扉の前にいる

ん？

何故かって？

話は少し遡るが…

回想

「忍さん。昨日言った通り会って欲しい人がいるのだが」

「そうだったな。で、誰に」

「学園長」

刹那と真名は

この麻帆良学園という場所で
警備や護衛をしている

その依頼主が学園長

確かに一度は話をした方がいい気がする

その後、真名に連れて行かれ
今に至る

回想終了

俺がノックをすると中から

『開いておる』

そう言われ

扉を開けた

「失礼します」

「邪魔するぞ」

「……忍さん。もう少し穏便に頼みたいのだが」

いや、前の世界ではこの入り方で良かった筈
坂本も吉井も俺もそうやってきた

『フオフオフオ、君が忍竹薫君かう？』

突如、話し掛けきた奴を見る

「なん…だと…」

「どうしたんだい？」

「ぬ、ぬらりひょんがい——」「ワシ人間じゃから！」

「嘘だ！」

ポン

真名が肩を叩いてこう言った

「残念ながら、人間です」

「そうだったか……」

『そろそろ話がしたいのじゃが？』

「そうですね」

『では簡単な自己紹介から始めようぞ』

「わかりました。自分は忍竹薫。忍でいいです。異世界人から来ました」

『僕は近衛近右衛門じゃ。この麻帆良学園の学園長をしておる。ところで異世界人とは、どういうことじゃ』

「それはですね」

『少年説明中』

「にわかに信じ難いのう」

「魔法があるんですから、異世界が合ってもおかしくは無いと思いますよ」

「そう言われるとそうじゃな」

「はい」

「ところで忍君」

「どうかしました？」

「ここで働かんか？」

「それもいいですね」

「表では君には教師と広域指導員として働いてほしいのじゃ」

「表と言うことは裏もあるのですか？」

「うむ。裏では、学園の警備と護衛を頼みたいのじゃが」

「構いませんけど、幾つか条件があります」

「条件とはなんかの？」

「一つは自分について散策しない。2つ目は能力について調べない。3つ目は自分のやり方に干渉しない」

「ふむ。それならいいじゃろう」

「で、いつから働けばいい？後、住むところは？」

「教師に関しては後日連絡するとして、今は女子寮の管理人室で生活してほしい」

「はあゝ。しゃあない」

「それと、今夜10時に世界樹の前に来てはくれんかの？そこで皆に紹介する」

「今夜10時に世界樹前。わかりました」

そして、俺と真名は
学園長室から出た

キングクリムゾン

〽夜10時…世界樹前〽

約束通り来ましたよ
来ちゃいましたよ

だって暇だったんだもん

「へえゝ。沢山いるんだ」

刹那に真名、学園長に加え

沢山の人が集まっている

そんな中

「コホン！今宵、皆に集まって貰ったのは他でもない。新しく警備の者が入ったので紹介したい。忍竹薫君じゃ」

紹介されたので

一歩前に出て挨拶する

「彼がどれほどの実力が見てもらうためにタカミチ君と試合してもらうが、いいかの？」

「いいですよ」

「宜しく」

この人がタカミチか
ダンディーな人です

「では両者、始め！」

「変身！」

《タカ トラ バッタ タトバ タトバタトバ》

試合開始と共にオーズに変身

「！」

タカミチは驚いた

すると俺の体が空気の塊に
飛ばされた

「速いな…」

俺はバッタのメダルを外し
別のメダルを入れ
スキャンし

《タカ　トラ　チーター》

姿を変えて

ダン

タカミチを殴った

「速い！」

ダンダンダン

何度も連続で殴った

タカミチは一旦、距離を取り

「本気で行かせてもらうよ」

そう言った

「右手に『魔力』、左手に『気』を…」

パンッ

乾いた音が響き
オーラを纏った

すると

先ほどとは
比べものにならない程の
重量と速さを持った塊が
俺を襲った

「使ってみるか、コンボ…」

俺は動きを止めてこう言う

「俺の本気を見せてやる」

メダルを三枚とも外し
別のメダルを入れてスキャンする

コレがコンボの力だ

《サイ ゴリラ ゾウ サゴーズ サゴーズオ!》

「ウオオオオオ」

俺はドラミングと共に
タカミチに向けて衝撃波を
ぶつける

タカミチは腕をクロスして
ガードするが

体が浮き

石や地面にぶつかり倒れた

《スキヤニングチャージ》

俺は両足を揃えて真上に跳び
地面に降りると

正面に重力破をとばす

タカミチは重力は動きを封じられて俺に引き寄せられる

俺は脚を一步退き

構えると

頭の角と両腕が光る

サゴーズブレイクスリーの体制に入るが：

「そこまでじゃ」

学園長のストップがかかる

俺はサゴーズブレイクスリーを中断したことにより、タカミチが数メートル前で止まる

「ははは…アレを喰らったらずかったかな」

タカミチは笑っている

「コレで忍君の実力がわかったじゃろ。それでもまだ不満があるものはおるかの？」

誰もいませんね

「では、本日は解散！」

帰って寝るか…

その時、世界樹の上で…

「ほお、なかなか面白い奴が来た」

微かに笑う

幼j「誰が幼女だ」がいた

「無視するなああ！」

第四話／やはりどの世界も学園長は妖怪なのか!?(後書き)

ノリで書きちゃう自分が怖い

((; 。 ㄥ)) ガクブル

てかコンボ強ええ!

第五話／住処と新たな力（前書き）

主人公は料理上手

第五話／住处と新たな力

タカミチとの試合を終えて指定された住居

女子寮の管理人室へと

俺はバイクを走らせた

「ここが俺の住居…」

ガチャッ

「案外広いんだな」

「入ったこと無いけど確かに広いな」

「そうですね」

あれ？

幻覚が見える…

「忍さん。どうしましたか？」

…幻覚じゃなかった

「真名、刹那、どうしてココにいる？」

一応、聞いておく

「いや、忍さんの部屋がどんなものが見たくてね」

「私もそうです」

そうですか

俺は台所に行き

冷蔵庫の中を確認する

晩御飯はどうにかなるか

「二人とも俺はこれから晩御飯だが、一緒にどうだ」

「いいんですか？」

「構いませんよ」

そういうわけで

調理開始

こうみえて

前世では10人分も作ったことがあるから、今更二人分増えたところで変わらない

そんなこんなで調理終了

「どうぞ」

「肉じゃがですか」

「そうです」

「では戴こうかな」

パクッ

真名が一口食べる

「……………」

「真名、どうした？」

ポタッ…

「う、グスッ」

泣いてる！

「どうした。味が悪かったのか？」

「貴様！真名に何を食べさせた！」

刹那、刀を向けなくてくれ！

「グスッ…、違うんだ…、美味しすぎて、涙が…」

「えっ？」

「そうなのか」

「ああ」

刹那は刀をしまい謝った

「ごめんなさい忍さん！」

「別に気にしてないから」

「ありがとうございます」

そして刹那も肉じゃがを一口食べる

「……………」

ポロツ

「…美味しいです」

その後、晩御飯を食べ終えた二人を部屋まで送った

「やることもないからメダルの確認でもするか」

オーズはメダルの組み合わせで力を発揮する
確認しといて損はない

「えーと頭は、タカ、クワガタ、ライオン、サイ、シャチ」
一通りあるみいだ

「次は腕だな…クジャク、カマキリ、トラ、ゴリラ、ウナギ」

「最後は脚と…コンドル、バツタ、チーター、ゾウ、タコ」

ちきんと揃ってるな

「カンドロイドは無いけど別にいいか」

ふあっ…

眠くなってきた

俺は取り敢えずベットまで行き寝た

〳次の日〳

「朝か…」

俺の朝は早い

夜明けと共に起き

顔を洗うことから始まる

「新聞取りに行こ」

だがここで違和感に気付く
テーブルの上に箱があった
昨日は無かったのに…

「んだこれ？」

箱の下に手紙が挟まっている
ひとまず見てみるか

『昨夜はお疲れ様じゃ。コレは昨日送ると伝えておいた物じゃから
警戒はいらん。それと、初勝利おめでとう 神より』

「見ていたんだな」

俺は箱を開ける

中には数本のUSBメモリのような物と差込口が二カ所ある物があり、もう一枚手紙があった

『コイツは見ての通り、ダブルドライバージャ。それと、定期的に
白いメモリを送る。ソイツを使い自分だけのメモリを作るのじゃ。
なお、この手紙は開封後20秒でメモリになります 神より』

ポブン

手紙は音を立てて
白いメモリになった

因みに箱の中には
サイクロン ジョーカー
ヒート メタル
ルナ トリガー
ファングの七本があった

言い忘れたけど

灰色のオーロラで移動するやつが使えるみたい

人間、やってみるもんだね

そんなこんなで朝の6時30分

P r r r r !

電話がなったのででる

『もしもし?』

『フオフオフオ、今朝はよく寝られたかの?』

『そこそこは』

ぬらりひよんでした

『君の担当クラスが決まったからの連絡させてもらった、すまぬが
今から来てもらえぬか?』

『わかりました』

そして電話を切る

さてと、行きますか

俺はライドベンドアーを走らせた

第五話／住処と新たな力（後書き）

感想、お待ちしております

第六話／この歳で教師になるなんて…（前書き）

主人公はまだ若いんです

第六話／この歳で教師になるなんて…

コンコン

俺は学園長室の扉を叩く

『開いておる』

ここはいつも開いているのではないだろうか？

そう思いながら入る

ガチャッ

「失礼します」

今日はタカミチもいる

「おはよう忍君」

「おはよう」

挨拶は基本だからするよ

「おはようございます。今日も頭が痛いですね」

「そうじゃろそうじゃろ」

「で、なんの用だ？」

「君の担当クラスと担当科目が決まったので、読んだのだ」

俺は灰色のオーロラを使い
ぬらりひょんとタカミチを
女子寮の管理人室に送った

「いきなりどうしたのじゃ！」

「なんというか、誰かに見られている気がしたので、話ならここでも構いませんよね」

く学園長説明中く

「――だからの明日から頼んだの」

「わかりました」

俺は二人を学園長室に戻した

俺は二年A組の副担任
担当科目は主に科学と数学

クラスの担当はタカミチのようだが、出張が多いためほぼ副担任が見るらしい

護衛の件で話を聞いたが
学園長の孫である

『近衛 木乃香』は

とてつもない魔力を持っている為にそれを利用しようとする者がいるらしい

本人には魔法について何も知らないので守ってほしいそうです。護衛に関しては報酬が高いので嬉しい

その頃、学園長室では…

『まさか、気付かれていたとは…。だがどこまでわかったかのう？』

『スミマセン。彼の収集は出来ませんでした』

『それは…』

今、学園長室にいるのは

学園長室『近衛 近右衛門』

広域指導員『高畑・T・タカミチ』

それと

『フードを被った男性』の
三人がいた

学園長が驚いているのは

フードの男性が見せた

一枚の紙

『イノチノシヘン』とも呼ばれていて

他人の記憶を読み取ったり

その記憶に存在するものを呼び出したりする事ができるのだが
フードの男性が見せた紙は

黒く塗りつぶされていた

『彼は何者なんですか…』

『それがわからんのじゃ』

『クフフ…。興味が湧きますね』

フードの男性は気持ち悪い笑みを浮かべた

『クウネル君。今日は呼び出してすまなかった』

『こちらこそ、何も掴めなかったのですから。それと私はこれで』

そう言い

フードの男性…

クウネルは、学園長室を出た

後に、この男と戦うことになるなんて誰も知りはしなかった

（女子寮管理入室）

俺は考えている

神は自分だけのメモリを作れという無茶を言ったからだ

「ヒートは炎のメモリだから、氷結系のメモリにしようか」

確か劇中で

氷河期の記憶

『アイスエイジ』が

あったのを覚えている

俺がそんなことを思っていたら隣で

『アイスエイジ』

そう聞こえた

俺が音のした方を見ると

何も書いてなかった白いメモリはなくなっていた

その代わり

『I』と書かれた

水色のメモリがあった

どうやら念じる事で

メモリになるようだ

一本作っただけど

悪くはない

明日から頑張るか：

そして俺は早めに寝た

〽次の日〽

「キツチリ8時間睡眠」

今日は目覚めがいい

朝の支度を終えて朝7時

電話が入る

『もしもし？こちら女子寮管理入室』

『儂じゃ』

『どうかしましたか？いまから向かうのですが』

『おお、そうであったか。なら心配はいらんかったの』

俺はライドベンダーに携帯を固定して走り出した

『実は少し早く来て貰おうと思って――』

『もう着きますから。後でお願いします』

〈学園長室〉

「昨日話した通り、君には二年A組の副担任をしてもらう」

「はい」

「タカミチ君。案内を頼む」

「わかりました」

「それと忍君。頑張るのじゃぞい」

「了解してます」

〈廊下〉

「タカミチよ。どんなクラスなんだい？」

「そうだね。元気が有り余っている子達が沢山いるよ」

「そうですよね」

そして着きました

二年A組！

中から声がする

騒がしいな

定番の黒板消しまであるし

「ハハハ…あの子達は、忍君はここで待ってて中でも呼ぶから」

タカミチは扉を開けて

落ちてきた黒板消しを受け止め足元に張ってあるロープを飛び越え
吸盤付きの矢をよけた

『おお〜』

『はい、みんな席に着いて、出席をとるから』

『はーい』

騒がしいけど素直だな

『えー。今日から新しく副担任になる人がいます。入って来て下さい』

呼ばれたわ

ガラガラ

俺は扉を開けた入るが

足元にあるロープに躓いた
すると上からバケツが落ちてくるが床に手を付いて倒立踵蹴りを決める

「ふうー危ない危ない」

「「「………か、「「「」」」」

このパターンはまさか！

俺は耳を塞ぐが

「「「格好いいー！ー！」」」」

バインドボイスウウウ！

俺、高級耳栓付いてないから

窓にヒビが入るとかどんだけだよ。元気が有り余りすぎの間違いですよね

「どこから来ましたか？」

「彼女いる？」

「歳はいくつなの？」

「勝負するアル！」

O i ミス ミウス オイ

最後のはなんだ！

あ、刹那と真名がいる

「それでは忍君。自己紹介をよろしく」

「えー。今日からこのクラスの副担任になる忍竹薫です。忍で構いません」

このクラスは異常な気がする

中学生体型じゃない奴や

小学生とかいるし

留学生が多いうえ

ロボットに幽霊がいる

「それじゃ、一時間目を少しだけ、忍君へ質問にしたいと思います」

謀ったなタカミチイイイ！

こういうクラスでは

遠慮しなかった！

「んじゃ。俺に質問がある人は手を挙げ「はい！」たら撃つぞ」

俺は輪ゴムを飛ばした

「ピャア！」

当たったのを確認して
クラス名簿を見た

「それじゃ、朝倉和美に発言権を与える」

でこをさすっていたが
その一言で覚醒した

「早速質問させてもらうよ。初めに身長と体重、年齢に興味や特技を教えて下さい」

「身長も体重は最近測ってないからわからん。歳は18だが、教員免許は持っているから心配はない。趣味は料理だ。それと、女子寮の管理人室にいるから好きな時に来ていいから」

「次の質問。どこから来たんですか？」

「伊豆です」

勿論、適当である

「最後の質問。ズバリ！このクラスで気になる人は？」

うわっ！

みんな一斉にこっち見たよ

てか、刹那と真名が凄い睨んできたし

ひとまず答えるか

「そうだなー。好意を持ってくれるのは嫌ではないな。五十音順で言うとか相坂さよ 和泉亜子 絡繰茶々丸 古菲 釘宮円 近衛木乃香 桜咲刹那 龍宮真名 超鈴音 長瀬楓 鳴滝史佳 長谷川千雨 宮崎のどか ザジとこの辺かな」

『双子なのに…』

とか聞こえた

「でも、一番は決めてませんから皆さんチャンスはありますよ」

この一言が

主人公の命運を大きく変えた

第六話／この歳で教師になるなんて…（後書き）

気になる人は多分、ヒロインになる予定です。（あくまで予定です）

第七話／エヴァさん吸血鬼なんですネ（前書き）

キャラが掴めないよお

第七話／エヴァさん吸血鬼なんですネ

キンコーン

今のが二限目の授業のチャイムなので俺は扉を開ける

ガラガラ

「俺の初授業だ。しっかり受けろよ」

「「「はい」」」

「いい返事だが、まずは皆の実力が知りたい。今からテストをするぞ」

「「「え〜」」」

「そう言うな。満点を取ったら何か一つだけ言うことを聞いてやる」

クラスに

静かなる闘志が燃え上がる

「全員に配り終えたか？それじゃあ初めて。時間は10分」

さて、どうなるかな？

〜10分後〜

「はいそこまで、無駄な抵抗は止めてペンを置け」

俺は回答を集めて
採点を始めた

「点数を発表する。上からと下から、どっちからがいい？」

「上からお願いします」

「んじゃ言うぞ。満点は三人！超鈴音 葉加瀬聡美 龍宮真名？」

「どうして私は疑問形なんだい」

「カンニング…」

「そんなことはしない」

知らなかった

真名は頭がいいのか

「全体的にケアレスミスが目立つな。六人ほど危ういな」

あえて口に出さないのは大人の対応

「いくらここがエスカレート式だとしても、これじゃ進級は難しいな…」

グサグサグサグサ

クラスのいたるところで何かが刺さる音がした

「今回はいきなりなのもそうだが。テストは日にちと範囲がわかってるんだから、予習復習を忘れずにやるんだぞ。それから満点の三人は、後で何をしてほしいか言うんだな」

他に言うことはないな

「それじゃ、教科書の53ページを開い——」

キングクリムゾン

キンコーン

「もうチャイムか…。今回はここまで、各自復習を忘れないように」

ガラガラ

俺が教室をでると

「忍先生」

呼ばれたので振り向くと

「茶々丸さん。どうしましまか？」

絡繰茶々丸がいた

「放課後、お時間がありましたら屋上にきて頂けませんか？」

「構いませんけど、もしかして告白とかですか？」

「いえ。そうではありません。呼び止めて失礼しました」

茶々丸視点

私はマスターに忍先生を放課後、屋上に来てもらおうように言われま
した

早速実行します

「忍先生」

「茶々丸さん。どうしましまか？」

まずは第一段階を完了
作戦を第二段階へ移行

「放課後、お時間がありましたら屋上にきて頂けませんか？」

すると先生は

「構いませんけど、もしかして告白とかですか？」

ボフィン

この一言で

私はオーバーヒートのような感覚を覚えましたが、冷却機能をフル稼働させて冷まします

「いえ。そうではありませんん。呼び止めて失礼しました」

もう限界です

私はそう言い

そそくさと教室に戻りました

ああ／＼／

恥ずかしいです…

あれ？

私が恥ずかしいなんて？

茶々丸視点終了

＼放課後＼

俺は屋上にいます

生徒の頼みは断れませんよ

ガチャン

「あ、忍先生」

扉を開ける音と共に茶々丸が来ました

エヴァさんも一緒です

「先生？最近、新しい警備員が増えたみたいじゃないですか？」

どうしてそれを…

「そうですか。アナタも裏の人間ですか」

「そうだ。あのタカミチにも勝ったみたいだしな」

「見てたんですか、照れますねえ」

「それ程の力があるんだから、私のことも知ってよな」

「知りませんよ」

「ククッ、ならば教えてやる私は真祖の吸血鬼『闇の福音』だ」

「だから知りませんよ。というよりエヴァさん吸血鬼なんですね」

「ふざけるな！そんな嘘を通せると思っているのか！」

「しつこいですね。なんと言っても知らないものは知らないんですから」

「マスター。先生は嘘を言っているとは思いません」

「なに！」

「まだ自分、仕事があるので戻りますよ」

「待て！話は終わってない！タカミチを倒した時のアレはなんだ！」

「エヴァさん。アレについては探らせませんよ」

「どうしてもか…」

「そうです」

「ならば力づくでも、教えてもらう！」

「はあ…」

「茶々丸」

「わかりました」

茶々丸は俺の腕を掴んで飛んだ。なんだ！HANNA☆SE

「流石にあの場所でやるのはまずいからな」

考えての行動ですね

「んで、ここは」

俺はとあるログハウスに連れて行かれた

「ここは私の家だ」

13へえ

するとエヴァは奥から水晶を持ってきた

「この中で見せてもらう」

パチン

指をならすと水晶が光り出し、俺たちの包み込んだ

「どこだ！」

「聞いて驚くなよ。ここはあの水晶の中だ」

16へえ

「少しは驚け！」

「ああ。マスターがあんなにも無邪気に……。録画録画」

「さて先生、始めようか」

エヴァは左手を俺に向けて

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ氷精、17頭。集い
来たりて敵を切り裂け魔法の射手、連弾・氷の17矢!!!」

攻撃してきた

俺は逃げるが追尾らしい
それなら

俺は走りながらベルトを着け変身する

「変身!」

《クワガタ トラ チーター》

オーズになる

「!?!」

チーターレッグで魔法の射手との距離を離し

バチバチバチバチ

クワガタヘッドから電撃を放ち

魔法の射を打ち落とす

「ならば、来たれ氷精 爆ぜよ風精 氷爆!!!」

氷が目の前に現れ爆発する

「ちい・・・」

チーターじゃ反応に遅れるし、コンボがあるけど見せたくないな…。
どうするか

そうだな！試してみるか

俺はオーズドライバーを外した

「観念したか」

「いや、これからが本番だ」

今度はダブルドライバーを着けて

「変身！」

《サイクロン ジョーカー》

仮面ライダーWになった

「姿が変わった！」

「さあ、お前の罪を数えろ！」

第二라운드의開始だ！

第七話／エヴァさん吸血鬼なんですね（後書き）

最後のは決め台詞なので

エヴァの罪を数えろという意味ではありません
めんどくさい表現でスミマセン

第八話／「エヴァさん吸血鬼なんですね」 「凄いだろ」 (前書き)

前回の続きからですが
なにやら怪しげな空気が…

第八話／「エヴァさん吸血鬼なんですね」「凄いだろ」

「さあ、お前の罪を数えろ！」

俺はオーズの変身を解除し

11人目の平成仮面ライダー

ダブルに姿をかえた

「ふっ、なんだ姿が変わっただけじゃないか」

「舐めてると痛い目にあうぞ。なんなら茶々丸も一緒に来いよ」

「ほお、その言葉後悔させてやる！行くぞ茶々丸！」

「はいマスター」

茶々丸が前衛に来た

ジェット噴出を利用して拳や蹴りを放つが『疾風』は名ばかりではない

きちんと追いついている

むしろ茶々丸を越している

俺はジョーカーメモリを外し

灰色のメモリを入れる

《ヒート メタル》

「！？色が変わった」

そう

サイクロン ジョーカーは

右側が緑色をしていて

左側が黒であるが

メタルにより

緑から赤に

黒から灰色に変わった

「ロケットパンチ」

茶々丸の腕が飛んでくる

俺はそれをメタルシャフトで弾いて一気に近付くが

「茶々丸！下がれ！」

エヴァの一声ですぐさま後退した

「喰らえ！闇の吹雪！」

強烈な吹雪が襲いかかってくるのに対して

俺はメタルメモリをドライバーかは抜きメタルシャフトに入れた

《メタル マキシマムドライブ》

するとメタルシャフトの両端から火が吹き出した

「メタルブランニング」

さらにメタルシャフトを回転させて火を全体的に広げた

それは闇の吹雪もろとも

エヴァと茶々丸を呑みこんだ

「ククッ、やりますね。忍先生？」

エヴァの声が聞こえた

火が落ち着くと

氷の盾を持ったエヴァがいた

「まさか闇の吹雪がやられるなんて思ってたくなくな」

メラメラ

「次で終わらせ——」

メラメラ

「おーい！マント燃えてるぞ」

メラメラメラメラ

「誰がそんなことを——」

「マスター、燃えてます」

「なにっ！」

だが時既に遅し

エヴァのマントは半分燃えたところで力を失い
エヴァは落下した
下は海ですね

「拙いな」

俺は両方のメモリ抜き
金色と黒のメモリを入れる

《ルナ ジョーカー》

ルナのメモリの効果で腕を伸ばしエヴァを空中で捕まえる
茶々丸が空中でホッとしていた

「今のはなんだ！腕が伸びたではないか！」

降りるやいなや
凄惨な形で迫ってきた

「落ち着いてエヴァさん」

そうだ

何事もまずは落ち着こう
そのヒットした頭を冷やすのが先だ

「う、うむ。すまなかった」

「さっきについては説明するつもりでしたから、安心して下さい」

「そうだったか…」

「ここではなんですから、移動しましょう」

「では城に来るがいい」

俺とエヴァと茶々丸は

一際目立つ城に向かった

「で、まずは何から話しましょうか？」

俺はエヴァに聞いてみる

「まずは貴様が何者かを教えろ！その後、さっきの姿についてだ」

やはり、そうきますね…

一応正体は隠しときますか…

「俺が何者かというのは、2つ目の質問と一緒に答えましょう」

「そうか」

俺はファングとアイスエイジを除く、所持メモリ六本とダブルドラ
イバーを見せた

「コイツはガイアメモリといって『記憶』を内包したものだ。使えば超人になれるがメモリの毒素にやられて使用者を崩壊させる場合もある。最悪の場合、死に至る。ドライバーを使えばメモリを制御できる」

「それとお前がどう繋がるのだ？」

「話は最後まで聞け。俺は他のガイアメモリを回収するため旅をしていたが、資金不足の為に学園長に雇って貰った。さっきの姿はこのドライバーとガイアメモリで変身した姿。ドーパントや魔法使い相手にも効果がある」

「そうだったか…。それにしても、これに似たものを物を前に拾ったことがあるな」

「!?! ホントか」

「ああ、確か物置にあった気がするぞ」

「そうか! それじゃ、そのメモリ譲ってくれ!」

「まあ、助けてもらったし貸しがいくつか出来たからな…。いいだろう」

ごめんなさいエヴァさん

流石に異世界人なんて言えません

くログハウスく

「茶々丸。持ってきてくれ」

「はい。マスター」

茶々丸が取りに行くと

エヴァが

「忍。^{バクティオー}仮契約しないか？」

「なにそれ？」

「知らないのか？ 知らない説明してやろう」

^{バクティオー}
仮契約とは

契約魔法陣の上でキスをし契約を行いパートナーとなり潜在能力を引き出したり固有のアーティファクト（魔法の武器）が与えられるのである

「で、どうする？ するのか？ むしろやれ！」

「すまない。ただ、今は興味が無いんでね」（墮天使風）

「なぜだ？」

「別に理由は無いんだが、強いて言うなら契約のしたかかな？」

「まさか初めてなのか？」

「いや」

前の世界ではしたことあるから間違えではないだろ

「そうなのか…」

少し落ち込むエヴァ

「マスター。お持ちしました」

茶々丸が戻ってきた

「そうか。受け取れ忍」

「どうぞ先生」

「三本もあったのか？」

「はい。倉庫を探してましたら、発見しましたので」

「そうか。ありかとな茶々丸」

俺は茶々丸からメモリを受け取り頭を撫でた
ほんのりと顔が赤いが大丈夫か？

「そんじゃ。まだ仕事があるから、戻るぞ」

「もう少しゆっくりしたらどうだ？」

「生憎、先生なんでね」

俺はそう言い残し
ログハウスを後にした

（それにしても、なんでガイアメモリがエヴァのところにあるんだ？ しかも三本あった。神は世界の修正力は働かないと言っていたが、やはり俺の存在がイレギュラーであるために修正力が働いているのか。それともこの世界になにか起きているのだろうか？ どちらにしても、今は情報が少なすぎる。野菜が来てないから、まだ原作には程遠いがそれも時間の問題だな。とにかくガイアメモリが存在している事はわかった。ミュージアムが存在していないのがせめてもの救いだ。エヴァは拾ったと言っていたが、もしそれが本当だとしたらこの学園の生徒が拾ってドーパントになるかもしれない。ガイアメモリには人を魅了する力があるから、そうになったら一大事だな…）
俺はそう考えながら戻って行った

（麻帆良某所）

暗闇の中で一人の男が逃げていた

「な、なんなんだ！ あいつは！」

ドンッ

「ヒィッ！」

男は何かにぶつかり倒れた

その男の前には青年が立っていた。高校生くらいだろう

すると青年は

USBメモリのような物を取り出して

《マグマ》

腕に挿した

「た、助けてく——」

叫ぶが誰にも聞こえず

男は消滅した

次の日

麻帆良新聞に

『突然の失踪！消えた会社員の謎』

昨夜、10時過ぎ

麻帆良在住の会社員（54）が突如として姿を消した

荷物を荒らされた形跡はなく

現場には溶かされた鉄パイプなどが落ちていた

警察はこれを誘拐事件として捜査する——

と書かれていた

第八話／「エヴァさん吸血鬼なんですね」「凄いだろ」（後書き）

オリジナルメモリを募集します。メモリの色、効果、名前を書いて一言に贈って欲しいです

第九話／狙われたA／Sは俺が守る（前書き）

前回までの三つのあらすじ

一つ、エヴァから三本のメモリをもらう

二つ、麻帆良で失踪事件が起きる

三つ、謎の敵が現れた

第九話／狙われたA／Sは俺が守る

俺が教師を初めて二週間が過ぎた。ここでの生活にも馴れてきているため、苦労はないでも最近

麻帆良で謎の失踪事件が起きているのである

しかも被害者は魔法関係者

学園長はタカミチに捜査をさせているが、今のところ何も掴めてないみたいである

そのため深夜の警備を強化している

「はあ。これで四件目か」

「どうしましたか？ 忍さん？」

「瀬流彦か…。いや、最近物騒でな、生徒が狙われないか心配なんだ」

「そうですね。タカミチさんでさえ何も掴めないなんて」

説明しておこう

彼は瀬流彦といって

俺のよき話し相手だ

職員室で席が隣のため

仲がいい

「まあ、見つかるのも時間の問題だな」

「そうですね」

俺は席を離れて職員室を出た
今は放課後だから
アソコにいるな…

ある場所に向かうため

コンコン

「朝倉。いるか？」

「先生。どうかしたの？」

俺が来たのは新聞部
麻帆良のパパラッチこと
朝倉和美を訪ねた

「いや、なんか情報を掴んでないかと思ってな」

「先生。ドラマの見過ぎじゃない？今の時代、情報屋なんていないよ」

誤魔化してるが
この顔は何かを掴んでるな

俺は食券を五枚だした

「で、何の情報か欲しいの」

釣れたな

「最近、麻帆良で失踪事件が起きているのは知ってるよな」

「もちろん」

「それについての情報が欲しい」

「そうだね。被害者に共通点は無く。犯行現場にも共通点は無くて、財布や携帯も残っていることかな。あといつも写真が落ちているみたい」

すると朝倉は辺りを気にし出して部室の鍵を閉めて俺の耳元でこう言った

「どうやら、この事件の犯人は麻帆良の男子生徒らしいです」

「それはホントか？」

「はい。裏は取ってないけど、確かな情報です。信じて下さい」

「わかった。それと、この事件にはあまり関与しない方がいい気がする」

「どうしてですか？」

「お前が狙われるかも知れないからな」

俺は鍵を開けて新聞部を出た

（夜）

「あ、がつ、助け——」

暗闇の中

また一人消滅した

「これで後、一人……」

そこにいたのは

人型をして人語を話すが

その姿はまるで火山

全身に岩が付いており

岩と岩の間を赤く

腕が燃えている

「やっと見つけたよ」

不意に背後から声がした
人型が後ろを振り向くと

「君が事件の犯人だね」

ダンディーなおじさん
麻帆良学園二年A組の担任
高畑・T・タカミチがいた

「悪いけど拘束させて貰うよ」

タカミチは居合い拳を放つが
人型は少し下がるだけ
端から見ればダメージが無いように見えるがそれなりにダメージは
与えられている

人型は右手を突き出した

タカミチは危険を感じて後ろに跳んだ

人型の右手からは大量のマグマが吹き出しタカミチがいたところを
溶かした
吹き出したマグマはその勢いを増しタカミチを襲う
マグマは液体の為、居合い拳だと被害が大きくなってしまう
魔法が使えないタカミチにとっては相性が最悪である
ゴーストタイプに格闘タイプで挑むものだ

タカミチはその場を退いた

現場から少し離れた所では…

「これはスクープだわ」

朝倉和美が人型の姿をカメラに納めていた

幸いな事に

タカミチの姿は撮られなかった

写真を撮り終えた朝倉は

その場を後にした

再び現場

「邪魔が入ったが、まあいいか。残りは一人だしな」

人型の姿は無く

そこには青年がいた

「俺より上手い写真を撮る奴はいらない。朝倉和美…。次はコイツだ」

一枚の写真を握り潰して

青年はそう呟いた

場所は学園長室に移る

「そうであつたか…」

タカミチの報告を受けた
学園長、近衛 近右衛門は
考えていた

犯人を逃したのは痛い

それ以前に、正体が学園の生徒であるという情報が入ったからである

困ったものじゃの

タカミチ君では勝てないとなると、忍君に頼むしかないが彼の警備
と護衛の仕方は自由だから、自ら探すことはないか…
となれば…

「タカミチ君。引き続き調査の方を頼むぞ」

「はい」

今はさらに情報を集めることが先決じゃ

く次の日く

ポストに手紙があった

送り主は神となっている

『久しぶりじゃの。そっちの生活には馴れた頃だろうと思って送っ
た。お主の能力に『地球の本棚』を追加したからの、調べたいこと

があれば使うように。それと、世界の修正力には気を付けるのじゃぞ 神より』

今日は土曜日でないから
試してみるか

俺は両腕を広げ
意識を浮かせる

「コレが地球の本棚か…」

数え切れない程の本棚が現れる。この中から幾つかのキーワードを使い絞り込み

「検索を始めよう。今回は、次の被害者の特定。最初のキーワードは『麻帆良』」

大量の本棚が消えるが
まだ多すぎる

「二つ目のキーワードは『魔法』」

残りは100冊くらいか

「三つ目のキーワード『写真』」

そのキーワードで本が絞られた

本のタイトルを見て、俺は部屋を飛び出した

朝倉視点

今日はなんだかスクープの予感がするから街に来ています

昨日の写真は絶対に噂の

『魔法少女』や『魔法おじさん』に関係している

すると私の前に一人の男の人が出て来てUSBメモリのような物を取り出した

あれはなんだろう

朝倉視点終了

明日菜に朝倉の居場所を聞くと「今日はスクープの匂いがする」って言って街の方に行ったよ。と言われた

オレはライドベンダーを走らせて明日菜の指を指した方に行った

そう、さっきの本のタイトルは『Kazumi Asakura』
次の標的は朝倉だった

走っていると電話がなった

知らない番号だがひとまず出てみると

「先生！助けて！」

朝倉の声がした

「朝倉か！今どこにいる！」

「ハア：ハア：。街の外に続く：橋の近く：」

「分かった！いま行く！」

く橋近辺く

朝倉視点

なんなのコレ？

どうして私が狙われてるの！

もう駄目！走れない！

助けて！先生！

「——くらあああ！」

ああ、先生の声が聞こえる

私は声のする方を向くと
一台のバイクがコッチに向かっている

「せん……せい……」

私は涙が出ていた

朝倉視点終了

「朝倉 あああ！」

俺は叫んだ

そこに救える命があり
そこに救わなくちゃいけない命があるから

神。俺は決めたぜ……

俺は戦う！

救える命は全て救うため！

ダンッ

朝倉に近付いていた
人型……。マグマドローパントをライドベンダーでぶっ飛ばす

「大丈夫か！朝倉！」

朝倉は涙目になりながらも

「先生〜！」

抱きついてきた

「朝倉……。スマナイ」

トスッ

「あっ……」

俺は朝倉を気絶させた

「タカミチ。いるんだろ？出てこいよ」

「バレてましたか」

「当たり前だのクラッカー」

「ココにいるってことは、あれを任せていいんだよね」

「ああ」

「それじゃ、よろしく」

タカミチは朝倉を抱えてどこかに行った

俺はダブルドライバーを装着してメモリを入れる

「変身！」

《サイクロン ジョーカー》

「さあ、お前の罪を数えろ！」

生徒に手を出したんだ

きつちりと落とし前付けてやるよ

俺はマグマドーパーント（次からMD）を殴る

ジュツ！

「アツツ！」

熱すぎるやろ！

マグマだから当然か：

俺はサイクロンをヒートに

ジョーカーをメタルに変える

《ヒート メタル》

メタルシャフトを振るい

相手の装甲を崩していく

「ウオオオオ！」

MDの雄叫びと共に
体からマグマが溢れ出し
突っ込んできた

MDが通った場所は
溶けマグマの道ができる

「ありゃ、ヤバいな」

俺はMDのタックルを避けて
水色のメモリを出した

「使ってみるか…」

ヒートを抜き

水色のメモリを入れる

《アイスエイジ メタル》

すると

赤から水色に変わる

メタルシャフトをMDに振り下ろすが灼熱の腕で防がれる
そして、MDの腕が氷漬けになった

「マグマこと凍らせるとかどんだけだよ…」

だが、氷は白い煙を上げて溶かされてしまった

「一気にメモリブレイクだ」

俺はメタルを抜いて

メタルシャフトに入れた

《メタル マキシマムドライブ》

メタルシャフトの片端に氷の塊ができる

それを地面に叩きつけると、一直線に氷の道ができMDにぶつかる
MDが氷の道にぶつかると同時に全身氷漬けになった

俺は氷の道を滑りながらメタルシャフトを構え

「フローズンインパクト！」

掛け声と共に

氷の塊で相手を砕いた

ドガン！

MDは爆発し青年が現れる

「ボクより…いい写真を撮る奴は…みんな——」

青年は這いずりながらマグマメモリを掴もうとするが

グシャ

その前に踏み潰すと

青年は気を失った

俺は変身を解いて
タカミチに連絡した

『コッチは終わった』

『…そうですか』

『ああ』

俺は青年をライドベンダーに乗せて学園に戻った

後で聞いた話だが

青年は魔法関係者ではなく

自分より写真が上手い奴が偶々、魔法関係者だったらしく。朝倉を
狙ったのは、麻帆良学園新聞の写真が自分より上手かったかららしい

朝倉については

この事件に巻き込まれた日の記憶を封印する形で落ち着いた

本来は記憶を消すのだが

俺が学園長に頼み

そうしてもらった

（月曜日）

「おはよう朝倉」

「お、おはよう忍先生／＼／」

「どうした。顔が赤いぞ？」

「な、なんでもありません。私、これから新聞作るので失礼します！」

「何があったか知らないが、まあいいか」

また新しい1日が始まる

野菜が来るまで

後、3ヶ月と半月

第九話／狙われたA／Sは俺が守る（後書き）

最後のは、記憶を封印されていますが、何故か主人公を見ると恥ずかしくなりという記憶が蘇るフラグです

まだまだ

オリジナルメモリを募集しています。一言にメモリの名前、色、効果、ダブルドライバークロストドライバークを書いて欲しいです。よろしく願います

第十話／先生。部活見学で求婚される（前書き）

タイトルでネタバレしています

第十話／先生。部活見学で求婚される

MDの事件が解決して一週間

これといって変わった事は起きていない

「平和だな」

俺は紅茶を飲んで

自分自身の幸せを感じていた

「忍さん。僕にも紅茶下さい」

「瀬流彦。これはオリジナルブレンドで、そのつど少し変わるから味の保証はしないぞ」

「チャレンジ精神ですよ」

俺はコップに注いで渡した

「あ、そういえば忍さんは部活動の顧問とかしないんですか？」

「……………してないな」

「だったら今度、部活見学にでも行ってみたらどうだい？」

「タカミチ、いたんだな…」

「最初からいたよ。あと、その紅茶、僕にも一杯貰えるかい？」

「そうだな。今日の放課後あたり行ってみるか…」

そして放課後…

「まずは体育館に行ってみるか」

俺は地図を見ながら
部活見学に行った

この学園は無駄にデカイからな、下手したら迷うのは確定的にあきらかである

そうしているうちに体育館到着

『ヘイ！パス！』

『裕奈！任せたよ』

ポスッ

「凄いな裕奈は…」

現在、バスケ部の練習をしています

裕奈は俺に気付いて声を掛けてきた

「先生。私になんかようなの？」

「いや、部活見学をしているところだ」

「だったら、一緒にバスケしよ！」

いま着ているのはスーツなので正直、やりづらいのだが…

「だめ…。ですよね」

こう涙目で頼まれたら

断りたくても断れず

「一試合だけですよ」

「へへへん」

余程嬉しいらしい

「先生は私のチームに入って」

「わかった」

俺は今日の占いで一位だったし、ラッキーカラーの青を身につけて

いる

「三番、交代！」

俺はゼッケンを受け取りコートに入った

「先生。期待してますよ」

「大丈夫だ。問題ない」

そして

『試合開始！』

俺はゴールの近くに寄った

「裕奈、パス！」

ボールを受け取り
ダンクを決める

「格好いいよ先生」

「そうかい」

∴
∴
∴

結果的には勝った
ラッキーカラーのおかげで
スリーポイントが決まる

吉井や坂本と悪ふざけしているみたいで楽しかった

さて、次はどこに行くか…

すると、一枚のポスターを見つける

「なにになに？ 強者求！ 中国武術研究部」

俺の頭の中には

ブルー・3が出てきて

ジャッキー・チュンと共演している映像が出てくる

「行ってみるか…」

見た目は道場みたいでわかりやすかったが見ていて暑苦しい

道場に入るならお決まりの言葉を言い入った

バンッ

「たのも〜」

『『『あん？』『』』』

歓迎はされなかった

もっとsparkling now♪
強く かざしたSeoul♪

「電話だ」 ピッ

俺が出た瞬間、時が止まる

『はい？』

『神です』

『どうも』

『今回は朗報じゃ』

『というと…』

『そっちでは気や魔法が使えるのは既に分かっているようだな』

『それがどうした』

『つまり、紅 美鈴、霧雨 魔理沙、パチュリー・ノーレッジ、アリス・マーガトロイドの能力が使えるということじゃ』

『な、なんだってー！』

『伝えたからのサラダバー』

ピッ！

俺が電話を切る

そして時は動き出す……………

『何の騒ぎアル!』

ここ声、この話し方は…

「先生アルか？」

「うすっ」

「早速だけど、勝負アル」

いやいや

早速じゃないだろ

あまりにも速すぎる

「遠慮しときます」

「勝負アル。勝負するアルよ」

上目遣い＋涙目

可愛い！可愛すぎる

負けるな俺

挫けるな俺…

「う…。うう…」

ムリダアアアア!

「わかりました。勝負しましょう」

「ほんとアルか! やったアルよ!」

「悪いが胴着を貸してくれ」

く先生着替え中く

ガラッ

「先生。まだアルか?」

「古菲! いきなり開けるな!」

現在、俺は上半身裸である

「ぐぐぐ、ゴメンアル!」

ピシャッ!

全く、少しは恥じらいというものを持つてだな――
おっと、それどころではない
まずは帯を巻かなくては:

ガラガラ

結局、帯が結べず

上半身裸でやることにした

「せ、先生。なんで上を着てないアルか／＼／」

「帯が結べないからだ！」

「そうアルか」

そして、顔が変わる

「それじゃ、勝負アル！」

『審判はこの、豪炎寺 薫が勤めさせられます。ルールは相手を倒すか、降参させれば勝利になる。それでは試合開始！』

始まると同時に

古菲が動く

一気に距離を詰めて

掌打を打ってきた

俺は体を横に移動し古菲の腕を掴み掌打の勢いを利用して投げ飛ばした

「今のは危なかったアル」

「そのまま着地とかないだろ普通」

「私、本気でいくアル」

古菲は構えなおした

ならば俺も最高の武術をみせよう。いくぞ美鈴！

俺は『紅 美鈴』の能力『気を操る程度の能力』を発動させて構えた

そして…

「崩拳！」

「虹色太極拳！」

お互いが渾身の一撃を放った

『そこまで！』

試合は…

『勝者！挑戦者！』

リーチの差で『虹色太極拳』が決まる俺が勝った
てか、俺は挑戦者だったのか！？

「ハハ…。負けちゃったアル」

「古菲は強いよ。俺が保証する」

「あの…。先生／＼／」

「どないした？」

「私の…、婿になってほしいアルよ／＼／」（モジモジ）

「はあ？」

「私は自分より強い人と結婚しなくちゃいけないアル。古家の決まりアル」

「それで？」

「だから、その／＼／。私の婿になるアル」

俺は瞬間移動さながらのスピードで『中国武術研究部』を飛び出した
だって、恐いんだもん
血涙流しながら「古部長の仇！」とか言ってくるんだもん

その時、頭に声が聞こえた

（神は言っている。ここで逃げる定めではないと…）

そうだってオイ！

でもこのままじゃ
ジリ貧になるのがオチだ
だったら…

俺は振り返り拳を構えた

「メガトンパンチ！」

『ルビンッ』

『ゴルバツ！』

『ピギーッ！』

色んな声を上げて

『中国武術研究部』の方に
飛ばした

次の日から

毎朝、古菲に勝負を挑まれたのは余談である

そして

『中国武術研究部』の近くで
顔の形をした跡が見つかったらしい…

第十話／先生。部活見学で求婚される（後書き）

麻帆良四天王最強化計画でも始めようかな？

第十一話／お見合いですか？いいえ、ケファイアです（前書き）

毎度毎度、タイトルでネタバレしていますね

第十一話／お見合いですか？いいえ、ケフィアです

時が過ぎるのは速いですね

葉はその姿を

赤や黄色に変えて

私たちに秋を知らせてくれる

10月11日

その日は何もない

とても平和な日だった

いくら暇だからといって

だらけているのはいけない

俺はこの広い麻帆良学園を散策することにした

ライドベンダーを走らせているとこんな光景が：

『お嬢様！お待ちください』

『いやや！また爺ちゃんが勝手に決めたんやろ。ウチは自分で決めたんや』

着物姿の木乃香が

がたいのいい黒服の男達に追われていたのである

生徒が困っているのを

見逃せはしない

俺はライドベンダーで木乃香と黒服の間に入りドリフトを決めて土埃を巻き上げる

『ゴホッ、ゴホッ』

『いったいなんなんだ？』

そう言われちゃ答えよう

「なんなんだ？と言われたら。答えてあげよう世の情け——」

「その声は忍先生！ちようどええ。先生！ウチを奪ってほしいんや」

「いいところだったのに……。まあいい。乗れ！木乃香」

俺は木乃香を後ろに乗せてヘルメットを被らせる

そうしていると土埃がおさまった

『なっ！貴様！お嬢様から離れろ！』

「悪いな。お前等の迫いかけているお嬢様は、俺が頂いた！」

そして、ライドベンダーで大量の土埃をあげて
その場を去った

『お爺様に連絡しなければ……』

「ところで、どうして追われてたんだ？」

俺はさっきの状況の理由を聞いた

「それはな、いつもウチの爺ちゃんが勝手にお見合いをさせてくるんや。それが嫌になって逃げ出して来たん」

「そうか。で、相手はどんな奴だったんだ？」

「ウチ、お見合い聞いて飛び出したさかい、相手のこと知らへんのよ」

「確かにそりゃ、嫌だよな。そんなの俺だっ——」

核融合炉にさ　飛び込んでみたいと〜♪

「木乃香。携帯出して貰える」

「ええよ」

木乃香の俺のポケットから携帯を出して渡した

俺は携帯をライドベンダーに繋げると、スピーカーから声がした

『大変じゃ忍君！木乃香が何物かにさらわれたのじゃ！』

木乃香が首を横に振る

『さらった奴の特徴とか分かりますか？』

『犯人はバイクに乗っていて、年齢は20前後の男じゃ』

『了解しました』

俺はそこで電話を切った

「先生……。お願いがあるんや」

「なんですか？」

「このまま、ウチと遠くに逃げてほしいんよ」

「……………悪いな。それはできない」

「どうしても駄目なんか？」

「ああ」

「……………」

「木乃香。お前はまだ中学生だ。勉強もしなくちゃいけない。遊ばなくちゃいけない。それにな……」

「それに……？」

「友達を置いてどこかに行きたいのか？」

「う、ウチは…」

「どうしたいんだ？」

「ウチは、明日菜と、せつちゃんと、クラスのみんなと、先生と一緒ににいたい」

「なら決まりだな。麻帆良にかえるぞ。しっかり捕まってるよ」

ギュッ

木乃香が捕まったことを確認して、ライドベンダーを飛ばした

そして夕方

「お、お嬢様ー！」

戻るやいなや、刹那が木乃香に抱き付いた

「せつちゃん。心配してくれてたんか？」

「無事でなによりです」

うんうん

仲良きことは美しきかな

『学園長。こやつがお嬢様を連れ去った奴です』

げっ、黒服

『どやつかの？おお、忍君じゃったのか？』

俺の麻帆良生活オワタ

「爺ちゃん。先生を辞めさせんといて」

木乃香：

「そもそも、ウチが悪いんや。先生に連れ去ってって頼んだんやから」

「そうであつたか」

これで解決か
よかったよかった

「でな、爺ちゃん。相手は誰やったんか？」

「俺も気になる」

「私も、少し…」

刹那、オマエもか

「フオフオフオ、驚くではないぞ」

ゴクリ：

「なんと忍君じゃ！」

俺ですか！

むしろ俺なんかでいいんですか！

「何故に俺！？」

「歳もあまり離れておらんし、木乃香との面識もあるからの」

だめだこの妖怪

早く何とかしないと

「木乃香もなんか言ってやれ」

俺は木乃香に振るが

「ええよ／＼／＼」

なんだって？

「ウチ、先生とやったら結婚してもええよ／＼／＼」

「待て木乃香。俺は教師だから、生徒との関係は御法度だ。いくら自分が私有混合しないとはいえ、まずいやろ。せめて高校卒業までは――」

「高校卒業したら、結婚してくれる？」

「そうだな。その時も、俺が相手でもいいなら考えてやる」

「ホンマか！なら約束や」

俺と木乃香は小指を出して

「指切りげんまん、嘘付いたら針千本のーます」

いつ聞いても物騒な歌だ

「へへへ。約束やで。約束」

「これは守らないと大変なことになるな…」

刹那に関しては
涙を流しながら

「よかったですね。お嬢様」

そう言っていた

先に言っておくが

考えておくで結婚するわけじゃないから勘違いするなよ

くその夜く

影を操る少女が一人、鬼と戦っていた

「これがあれば私は…、私は強くなれる」

「シャドー」

そして、少女の姿は消え

鬼は背中から影に刺されて消えた

「今の私なら勝てる。誰にでも勝てる…」

少女は影の中から現れとそう言った

第十一話／お見合いですか？いいえ、ケファイアです（後書き）

朝倉√と古菲√と木乃香√が出来ました。なんで作ったんだろう

主人公の仮契約はどうしよう？やったとしても、決めるのが面倒く
さい

するとしたら木乃香の従者にする予定

第十二話／警備の仕事、最近していない気がする…（前書き）

神器って凄いわ

第十二話／警備の仕事、最近していない気がする…

夜の麻帆良学園

「それにしても暇だ…」

俺は今夜

警備の仕事をしているのだが
敵さんが来ないので時間を持て余している

「立っているだけで金が入るんだから、いいだろ」

今回のパートナーは
龍宮真名と

「真名！気が緩んでるぞ！先生もしっかりして下さい」

桜咲刹那でお送りします

「刹那、そんなにピリピリしてたら綺麗な顔が台無しだぞ」

「そ、そうですか／＼／」

「ほら、刹那も緩んだ」

「先生がそんなこと言うからで——」

「来たか…」

結界に反応あり

そして、大量の鬼や悪魔を召喚した

「さてと、やりますか」

刹那は刀を

真名は拳銃を構えた

「一つ星神器、鉄」
くろがね

俺は左手を大砲にした

「驚いた。まるで大砲だよ」

真名が左手を見てそう言った

「今は、仕事が先だ」

「そうですね」

ドオンッ

俺の鉄が発射されると

刹那と真名は左右に散った

鉄は鬼を十体巻き込んで消える。もう一発撃ったが、コイツは真っ直ぐにしか飛ばないため簡単に避けられた

「だったら、三ツ星神器、快刀乱麻^{ランマ}」

右手がバカでかい剣になり
辺り一体を刈り取った

『魔法の射手！火の42矢！』

術者らしき奴が現れて

俺に魔法の射手を放つが

「五ツ星神器、百鬼^{ビツク}夜行七ツ星神器、波花」

鞭のように波花を使い魔法の射手を撃ち落とし百鬼夜行で術者を押し潰す

倒した術者の召喚した鬼や悪魔は消える

後は150体位かな
きつきに倒すか…

俺は懷から八角形 of 物を取り出して正面に向ける

「恋符『マスタースパーク』」

八角形 of 物から図太いビームが発射され
正面にいた敵は消えていた

マスパ淒すぎる

奥の手にしておこう

マスパでこの威力なんだから
ファイナルスパークや
ファイナルマスパだと、どうなるんだよ…

この時

マスパを受けた術者がいたことは、誰も知らなかった

「助けに行くか…」

そう思った矢先

「先生も終わったのかい？」

真名が戻ってきた。術者を一人倒したみたいだ

「そっちも終わったか」

俺は倒した術者を二人とも縛って担いだ

「残りは刹那か…」

「それじゃ、助けに行くか」

刹那視点

恐らく、先生と真名が術者を倒したおかげで、数は減ったがまだいる

「斬岩剣」

一体一体は弱いのだが数が一向に減らないため、私は焦っていた

「百花繚乱」

私は百花繚乱を放ち鬼を倒す

あれは！

私は術者らしき人影を見つけて追いかけるが鬼に行く手を遮られる

「待てっ！」

『悪いな嬢ちゃん。ワテらもこれが指名だからな』

「くっ……。斬空閃」

私が斬鉄剣を放つと

地面が光った

「なんでしょう？これ？」

刹那視点終了

俺は真名と術者を探している

「そっちにはいたか？」

「いや」

「そうか」

「となれば、刹那の近くにいるな…」

『待てっ！』

すると、刹那の声がして
動く人影を見つけた

距離があるけど逃がさない

「八ツ星神器、旅人^{ガリバー}」

地面がいくつもの四角にわけられて光り出し、神器は箱に閉じ込められた

ガリバーは捕獲用の神器であるため、0, 5秒で目標を捕まえる
外からの攻撃には弱いが
内側からは絶対に破壊できない

『くそっ！なんだこいつは！』

中から声がするがガリバはビクともしない

「四ツ星神器、唯我独尊^{マッシュ}」

地面から口が現れて

ガリバーごと相手を噛み潰す

「がっ…」

それが最後だったらしく鬼や悪魔は還った

「大丈夫か？せっちゃん？」

「はい。なんとか助かりましたけど…」

けど？

「せっちゃんは止めてください／＼／」

顔を赤くしながら止めてほしいなんて言われたら
もっと苛めたくなるじゃないか

俺は刹那に抱きつき背中を指でなぞる

「ひゃう／＼／」

可愛いなあオイ！

そのまま刹那で遊んでいると

「ああ／＼／そこは…、ら、らめえ」

バサッ

刹那の声と共に
白い翼が現れた

「見られてしまいましたね。そうです。私は化け物なんです」

「知らなかった…」

「これを見られてしまったら、私はもう、ここにはいられません…」

刹那は涙を浮かべるが

「刹那、そんなことはどうでもいいんだ」

「えっ…」

「白い翼とか天使じゃん」

「先生は知らないかも知れませんが、白い羽は鳥族にとっては禁忌なんですよ。私は人間と鳥族とハーフで鳥族にもなれず、人間にもられない化け物なんですよ!」

そうだったのか刹那…

俺は刹那を抱きしめたまま

「刹那、それがどうしたんだ? お前はお前だろ? それに、木乃香が言ってたぞ。みんなと一緒にいたいって、もちろんそんなかには刹那も入ってんだから、いなくなったら木乃香が泣くぞ」

「忍…先生…」

「泣きたいだけ泣け。今なら俺の胸をかしてやるから」

刹那は泣いた

自分の正体を知っても

それごと受け入れてくれる人がいることに

（10分後）

「落ち着いたか」

「はい…」

「戻るか」

俺が術者を連れて報告しに行こうとすると

「あの！」

刹那が呼び止める

「どうした？」

「お願いがあります。この事はお嬢様には内緒にして下さい」

「……わかった」

「ありがとうございます」「だが条件がある」？」

「もしも、木乃香に知られたら、ちゃんと自分の口で言うんだぞ」

「はい」

この日、一人の少女の心が
僅かだが救われたのであった

野菜襲来まで後、2ヶ月

第十二話／警備の仕事、最近していない気がする…（後書き）

刹那√もできました

第十三話／長谷川さん、今日からちうと呼びますよ（前書き）

日常編です

初めての予約投稿

第十三話／長谷川さん、今日からちうと呼びますよ

女子寮のとある一室

カタカタカタカタ

麻帆良学園二年A組

長谷川千雨はいた

カタカタカタカタ

パソコンに何かを打ち込んでいる様子です

カタカタカタカタ

カタカタカタカタ

カタカタカタカタ

カタッ

「今日の更新は終わったな」

どうやら

ブログを経営しているみたいです

さて、今回は

そんな彼女と一人の教師の話

千雨視点

「ふぁ…」

私はいつもと同じ朝を迎え
いつもと同じように登校する

でも今日は違った

8時15分

「寝坊したー！」

取り敢えず私は

急いで着替えて部屋を飛び出した。ちなみに朝ご飯はカロリーメイ
トだ

8時20分

チクシヨウ

間に合わないねえ

そう思っていたら

ドドドドドドドド

私の隣にバイクが止まり

「千雨。今日は学校休みだ」

盛大に転んだが

カロリーメイトは手放さない

私の貴重な食料だからな

「そんなところで転んでないで、早く立て」

私に声をかけて来たのは

異常な副担任の忍先生

なんで異常かというと

いや、先生だけではない

この学校が異常なんだ

特に私のクラス

あきらか小学生みたいのや

中学生じゃない体型の奴がいたりするが

うん、人の成長には個人差があるから、そういうのもあるな
次に留学生が四人いる

ここまでは多目に見るとして

一番の問題は…

どうしてロボットが普通に生徒としているんだよ！

おかしいだろ！

てか、変だろ！

そもそもこの麻帆良全体が普通じゃない

学校のシンボルである世界樹

私は今まで

テレビでも写真でも

あんなにデカイ樹は見たことがないし、聞いたこともない

あんなにデカイ樹なら

一度くらいテレビに出ててもいいはずなのに、それがないから異常なんだ

私は普通だからな

私は普通、私は普通

「千雨よ、どうせなら乗れ。送ってやる」

再び声を掛けられて

我にかえった

「いいのか？」

一応、聞くのが礼儀だろ

「そういうな。だったら飯にでも行くか？その様子だと、あまり食ってないだろうからな」

言い返せないのが悔しいが
今は甘えよう

「ほら、ヘルメット被れ」

私はヘルメットを被って

先生に捕まった

「そんじゃ、行くぞ。ちう」

「なんでそのことを知っ――」

「舌嚙むぞ」

ブオオオオオオン！

どうして私がちうだって知ってんだよ！

そして、出るなら出るって言えよ！ちよっと舌嚙んじまっただろうが！

く女子寮く

「着いたぞ、早く着替えてこい」

私は部屋に戻って着替える

どうせなら、アイツが見とれるような格好で…って！私を何を考えているんだ！

ううく

多分、あまり男を意識したことがないから気になるだけで、別に好きだとかそんなんじゃないんだからな！勘違いするなよって、あーもう。どうしたんだ私！

結局のところ、いつもの私服に着替えたんだが、なんか恥ずかしい

「待たせたな」

「別に気にしてないぞ」

服についてはなにも無しかよ

私は後ろに乗って出発した

なんか、私が彼女みてえじゃねえか／／／

千雨視点終了

俺は今日

「おっ、更新してんじゃん」

クラスの長谷川千雨が経営しているブログを見ていた

周りの奴らは知らないが

実は千雨はN o. 1ネットアイドル

ちうとして

その名を轟かしている

俺のHNは這いよる混沌である

決してニヤル子ではない

俺がドライブをしていると

千雨がカロリーメイトをくわうて走っていたので千雨の横で

「千雨。今日は学校休みだ」

そう言うのと盛大に転んだ

「そんなところで転んでないで、早く立て」

すると、立ち上がった

「千雨よ、どうせなら乗れ。送ってやる」

休みの日なのに来ちまったんだから、そんなぐらいする

「いいのか？」

「そういうな。だったら飯にでも行くか？その様子だと、あまり食ってないだろうからな」

転んでもカロリーメイトを手放さなかったのを見るとそうだろう

千雨はなにとも言わずに後ろに乗った

「ほら、ヘルメット被れ」

素直にヘルメットを受け取り被ったところで

「そんじゃ、行くぞ。ちう」

おっといけない
つい口が滑った

千雨が驚いた表情で

「なんでそのことを知っ――」

と言ってくるが

「舌噛むぞ」

女子寮までライドベンダーを飛ばした

く女子寮く

「着いたぞ、早く着替えてこい」

千雨は自分の部屋に戻ったのを確認して

「千雨、お前は自分のことは普通だと思っているかも知れないが、それはそれで異常だぞ」

そう呟いた

ガチャン

「待たせたな」

「別に気にしてないぞ」

似合ってるな

流石はNo.1ネットアイドル

普段着でもいいと思うぞ

千雨は俺の後ろに乗ったので
発進した

「まずは朝飯だ」

俺たちはいま

スター・ブックスコーヒー

略してスタブにいる。ライドベンダーはパーキングエリアに停めて
いる

似たような名前の店を聞いたことがあるが気のせいだろ

店に入り席に座り注文する

「キャラメルマキアートとBLTサンドを」

「私はカフェラテで」

注文を終えると千雨が聞いてきた

「なあ先生？どうして、私がちうだってわかったんだ？」

「それはね。俺が『這いよる混沌』だからだよ」

「…嘘、だろ」

「ホントだ」

「…でも、それじゃ。私がちうだって分かる証拠にはならないだろ」

「そうだな。目と口が似ているのと、教師の勘かな」

「ふーん。教師の勘ねえ」

『お待たせしました。キャラメルマキアート、カフェラテ、BLT
サンドでございます』

丁度いいな

「これから宜しく。ちうさん」

「こっちな。這いよる混沌さん」

俺はBLTサンドを一つ千雨の口に入れて

「まあ食えよ。朝飯食ってないだろう」

強制的に食べさせた

モキュッ

モキュッ

その後、軽い談笑をして
スタブを出た

そんな二人を見つけた
怪しげな人影が三つ

「ねえ亜子。今のって…」

「見たで、くぎみーは？」

「うん、見たよ。それとくぎみー言うな」

和泉亜子 大河内アキラ 釘宮円の三人である

「あの二人、まさか付き合ってたりにして…」

アキラの一言に亜子と円が反応した

「「追いかけよう！」」

タッタッタッタ

「二人共に待ってよー」

こうした三人の尾行？が始まったのである

一方、千雨と先生はというと

「千雨、行きたいところはあるか？」

「そうだな。買いたい服があるんだがいいか？」

「大丈夫だ。問題ない」

「ついて来てくれ」

「ちなみにそれは普段着か？それともちうでの衣装か？」

「ちうの衣装だ」

「…………そこには行かない方がいいぞ」

「どうしてだ？」

「クラスメイトが三人ほど付いてきている」

「マジかよ!？」

「デパートに変更してもいいか？」

「理由が理由だからな」

そして俺たちはデパートに向かった

「先生たち、デパートに向かっている」

「急いで追いかけるよ」

「はあ」

デパート内

「悪いな千雨。ちとお手洗いに行くついでにアイツらを捕まえてくる。それと買いたい服でも選んどけ」

「はいはい」

「先生が離れたよ」

「トイレじゃないかな？」

「いつまで、後を付けるの？」

「ずっと！」

「へえ。誰を付けるって？」

「そりゃ、先生と長谷川さ…」

デデーン！

亜子が俺を見て固まった

「どうしたの亜…」

デデーン！

円も俺を見て固まった

その後、アキラに説明してもらった

「何を勘違いしたかは知らんが、俺はただ、千雨が朝飯食ってないからスタブで食べて、買い物に付き合ってもらっているだけだぞ」

「そーなのかー」

「これも何かの縁だ。欲しい服があれば持って来い」

「いんですか？」

「そうだな。一着だけなら買ってやる」

「先生、太っ腹」

「それ程でもあるがな」

「行こ、くぎみー、アキラ」

「あ、うん」

「こらー！くぎみー言うな」

「早く決まれば昼飯をご馳走するぞ」

そう言うのと

三人の姿が消えた

後ろから

「先生？どうかな？」

「おお……。いいと思うぞ」

千雨が服を持ってきて
体に重ねた

「先生。決まったよ！」

速くねえか！？

三人とも戻ってきた

「会計してくるわ」

俺は四人から服を預かり
会計してもらった

「ほれ、せっかく勝ったんだから汚すなよ」

それぞれ服を渡した

「貰っちゃった／＼／」

「へへへ／＼／」

「ありがとうございます。私の分まで」

「そう気にすんなって、それよりも飯行くぞ！飯！」

時間も丁度

昼を過ぎたところだな

俺達は昼に

広島風お好み焼きを食べて

三人と別れた

今はライドベンダーで寮に戻っている途中

「先生……。今日はありがとうな」

「最後はあんなうちまったけど、楽しかったか？」

「そこそこだな」

「そりゃ良かった」

く女子寮く

「それじゃ、先生。また明日」

「どうしたんだ。そんなに改まって？管理人室にいるんだから、いつでも来れるだろに」

「そうだな」

「それじゃ、学校でな」

その日、ちうのブログに

『今日、這いよる混沌さんに会いました。一緒にご飯食べた買い物したり、楽しかったよ！ありがとう這いよる混沌さん』

そう書いてあった：

第十三話／長谷川さん、今日からちうと呼びますよ（後書き）

千雨はツンデレですね

表現が難しいですけど…

次回は

VS シャドードーパント

になればいいなあ…

第十四話／忍び寄るK／Tよ！全てを振り切れ！（前書き）

あるキャラがちよつとだけ登場します／キャラクターサイン／

第十四話／忍び寄るK／Tよ！全てを振り切れ！

近頃、気づいたのだが
メモリを作って無い気がする

その為に
白いメモリが届いても
放置している

「いったい何のメモリにするか？ ipp そのことアクセルにでもして
…。そうだ！ アクセルだよ！ それがあるじゃん」

そんな中

しじみがトゥルルルル
しじみがトゥルルルル
もっと熱くなれよ！

「メールだ…」

送り主は
『i、m GOT』と
なっている

内容は

『ワシにはわかるぞ。おぬしは今、アクセルメモリを作ろうとしておるな。そんなアナタに嬉しい情報をプレゼント！今からアクセルドライバーを贈る、だけど、メモリはそちらで頼みたいのだが、一つ約束してほしい。サイクロンアクセルだけにはならないことじゃ。エクストリームはこちらが贈る、作らなくて構わない。エンジンブレードはライドベンダーに付けておく 神より』

俺がメールを読み終えると

コンコン

『すみません。神の使いです』

どうやら来たようだ

「いま開けますよ」

ガチャッ

そこにいたのは

神の使いではなく

竜宮の使いである『永江 衣玖』であった

「これ、神がアナタにと」

衣玖さんは俺に小包を渡した

「あ、ありがとうございます」

「では私はこれで」

すると衣玖さんは
空を飛んでいった

衣玖さん…

神と知り合いだったんだ

それから部屋に戻り

小包を開けると

バイクのハンドルのような物が出てきた

「これがアクセルドライバーか…」

早速、アクセルとエンジンを作った。エンジンメモリはエレクトリックにもなるから便利だな。エンジンブレード専用だけど…

「今日は警備だったな…。使ってみよう」

念のため

トライアルも作った

メモリを三本も消費したが…

く夜く

「あれ？どうしたのエヴァ？こんなところに」

俺が警備する場所に行くと

そこにはエヴァと茶々丸

そして、人形がいた

「いやな。今日は一人だと聞いて、さぞかし寂しいだろうと思ったから来てやったんだぞ」

「先生。マスターはこう言っておりますけど、本当はかまって欲しいんです」

「うおい！なにを言っているんだ！私がそんなこと思うはずがないだろ！」

「先ほど、学園長にお電話されたときに『ほう。アイツ、今日は一人なのか、暇だし言ってみるか』と仰ってましたよ」

「ええい。黙れこのポンコツ！巻いてやる！」

「ああん／＼／マスター、そんなに巻いたら…」

平和だなあ

すると「ケケケ、オマエモ面倒なヤツラニ巻き込まレタナ」

人形が話しかけてきた

「喋れるのか？」

「アタリマエダ。モットモ、マスターが近くイナイト動けナイケドナ」

「で、名前は」

「チャチャゼロだ」

「俺は忍竹薫。忍でいい」

「ソウカ。ヨロシクナシノブ」

「こちらこそ」

エヴァが何かを思い出したように近づき
どこからかテーブルと椅子を4つだした

「忘れるところだった。暇だし、麻雀でもやろうかとおもってな。
丁度4人いる」

「ケケケ、面白ソウジャねえか」

「麻雀ねえ…」

十三歳の頃、代打ちしていたしな。今ではいい思い出が…

「いいですよ」

「キマリダナ」

俺とエヴァと茶々丸とチャチャゼロが椅子に座る

「先生が親でいいですよ」

「なんだ…。やけに優しいじゃないか？」

「くくく、特に理由はないですよ」

「そうかい」

順番は

俺↓チャチャゼロ↓茶々丸↓エヴァとなった

：

：

：

：

「リーチ、さあ先生の番ですよ」

「悪いなエヴァ。ロンだ」

「なにっ！」

「タオヤントイトイ。40符3翻5200だが、リーチで6200になるな…」

「クソッ、次だ！次！」

「ハイハイ」

三回やったところで魔法陣が現れる

「やっとおでした」

「何故だ…。どうやっても勝てない」

エヴァは落ち込んでいた

もちろん俺はイカサマをしたからね

あっちは三人共グルだから
それでチャラだろ

おいおい

敵さん来てますよ

俺はアクセルドライバーを巻いた

「変、身！」

「アクセル」

バイクのエンジン音が響き
仮面ライダーアクセルになる

「振り切るぜ」

エンジンブレードを構えて
召喚されると同時に
鬼を還していく

「おっ、術者発見！」

すると術者は俺の姿を見るや
逃げ出し

風の魔法だろうか？
走っては追いつかない

「だったら…」

俺はアクセルドライバーを両手で掴みバイクモードに変形した

「なにっ！バイクに変形しただと！」

いつの間にか

復活していたエヴァに言われ、空から戦闘を撮っていた茶々丸には

「バイクになるんですね」

と言われた

俺は術者を追い越して

バイクモードから姿を戻す

「アクセル マキシマムドライブ」

スーパーチャージブレイクを決める

俺は今日

これで終わりだと思っていた
だが…

「エヴァ、戻った…ぞ……」

俺は麻雀をしたテーブルの置いてある所で

見た景色は

黒い巨人と女の子と

倒れているエヴァだった…

エヴァ視点

私は今日

暇つぶしに一人で警備をしている忍のところに行った

茶々丸とゼロを連れて行き

4人で麻雀をするために

この前は負けたが

今回は勝たせて貰うぞ

「リーチ、さあ先生の番ですよ」

くくく、どうするんだ忍？

「悪いなエヴァ。ロンだ」

「なにっ！」

私はつい叫んでしまった

忍の役をみると

「タンヤオトイトイ。40符3翻5200だが、リーチで6200になるな…」

「クソッ、次だ！次！」

負けてられるか！

三回も負けた

「何故だ…。どうやっても勝てない」

こっちは三人で組んでるんだぞ

それなのにどうして

すると

「アクセル」

その音が聞こえ

バイクのエンジン音が聞こえて、我に帰った

「茶々丸。忍の戦いを空から撮ってこい」

私は茶々丸に指示を出して
地上から見る

忍が術者を見つけると

バイクになった！

「なにっ！ バイクに変形しただと！」

しかも速い！

何なんだホントに！

『やっと一人になりましたね』

いきなり声をかけられて

反射的に振り向くと

「ガハッ…」

私は何かに肩と膝を刺されて倒れた
関節が完全にやられてるな

「エヴァ、戻った…ぞ……」

忍、戻って来たのはいいが
血がたりな…

私はここで気絶した

エヴァ視点終了

俺はエヴァの前にいる
女の子に話しかける

「高音がエヴァをやったのか？」

「そうですよ」

コイツは麻帆良学園の魔法生徒である。名前は高音・D・グットマン

「何故だ…」

「決まってるじゃないですか？彼女は大犯罪者『闇の福音』ですよ
？何が悪いんですか？」

コイツ：

「さっきから何なんですか？私は正義ですよ？悪は倒すのが当たり前
前ですよ」

「テメエ、さっきから聞いてればエヴァのどこを好き勝手言いやが
って…」

「だったらどうしますか？あ、もしかして、アナタ『闇の福音』に
協力してますね。それだったらアナタも悪ですから、正義の私が殺
してあげますよ」

高音はUSBメモリを取り出

「それは、ガイアメモリ！」

「死んで下さい」

「シャドー」

首の付け根に挿した

そして

全身は黒い布に覆われていて
漆黒の槍を持っている

「シャドー、つまり影が…」

だったらこいつだな

俺は変身を解除してオーズドライバーをつけて

「変身！」

「ライオン トラ チーター ラトラター ラトラター」

オーズラトラターコンボに変身した

変身すると

『影よ』

高音…

今はシャドードーパントだな
(次からSB)

影の兵を30体ほど出し
一斉に襲わせるが

「ウオオオオオオオ！」

俺の叫び声と共に
ライオンヘッドが光り
影の兵が消える

消えないのはSBの背後にいる影の巨人

「終わらせてやる」

「スキヤニングチャージ」

目の前に輪っかが三つ現れる。それをくぐり抜け
ラトラータースラッシュスリーを決めた

だが…

切ったのは影の巨人

「どこにいつ——」

渡りを見渡すと後ろから槍で攻撃された

『私はここですよ』

S Bは俺の影から現れた

ラトラーターで追いつかない

俺はベルトを外し

「変、身！」

〔アクセル〕

再びアクセルになり
話しかける

「高音、一つ聞くぞ」

『はい？』

「力を手に入れてどうしたい？」

「決まってるじゃないですか？悪を倒すんです。正義は絶対なんですから」

「……………そうか」

そう答えるとS Bは
影の中に姿を消した

「力に溺れたか…。ならば俺が救ってやる」

アクセルメモリを抜き

大きなメモリを取り出す

「全てを…、振り切るぜ！」

「トリアル」

ピッ

ピッ

ピン

ブオオオオンッ！

俺はアクセルトリアルに
姿を変えた

「後ろ」

背後から槍が来るが

それを避け影から出ている手を掴みSBを引きずり出した

そのまま

蹴りを入れて飛ばし

影に入る前に蹴り上げる

俺はトリアルメモリを抜き

ボタンを押し投げからSBに近づく

トライアルに秒数が表示される

秒数が表示されて2・0秒で

S Bの目の前に近づき

何十発もの蹴りを入れる。あまりの速さにTの字に残像が残る

俺は最後の一発を入れ

落ちてくるトライアルメモリをつかみ時間を止めた

「トライアル マキシマムドライブ」

「9・8秒、それがお前の絶望までの時間だ」

時間は9・8で止まり

S Bの体はTの文字を浮かべて爆発した

その衝撃で高音の体から出た

シャドーメモリは粉々になった

どうやら高音は

シャドーメモリとの適合率が高かった為、最初のころは変化が無かったがメモリの毒素が強かったらしき一週間前から変だったらしい
そのせいか、一週間ぶんの記憶が抜けているらしい

メモリの後遺症は無いらしく

体調を戻してから

いつもの生活に戻るようだ

エヴァに至っては

その日に怪我が治り

次の日、授業に参加していた

凄まじい回復力だな

茶々丸にはトライアルの事を内緒にして貰っている
知られると厄介だしな

もうすぐ冬休みになるな：

学期末テストでも作るか

第十四話／忍び寄るK／Tよ！全てを振り切れ！（後書き）

主人公の着信音は

1000% sparking!

炉心融解

熱血着信×5種類

？のパーフェクト算数教室

恋愛サーキュレーション

エエエエエエエエ

などがあります

第十五話／期末テストと勉強会と冬休み突入（前書き）

超が変な妄想癖を持ってしまった

第十五話／期末テストと勉強会と冬休み突入

ガラガラ

俺はいつもように教室に入り
いつもように罨を避ける

「席につけ。帰りのHRを始めるぞ」

皆が席についたのを確認し
連絡事項を伝える

「えー。みんな知っている通り、もうすぐ学期末テストがあるのだ
が…」

俺は重たい口を開いて言った

「あまり言いたくはないのだが、この際だからはっきりしよう。ク
ラスの平均点数はとても低い！超や葉加瀬がいるのだが、『麻帆良
戦隊バカレンジャー』という組織が「だれがバカレンジャーよ！」
俺は誰とは言っていないぞ」

墓穴をほったな明日菜

「でだな、『バカレンジャー』の方々は手を挙げろ」

すると

五人が手を挙げる

綾瀬 夕映

神楽坂 明日菜

古菲

佐々木 まき絵

長瀬 楓である

「そんなお前等に嬉しいお知らせ！放課後、女子寮管理人室にて勉強を教えてやる。ちなみに食事付き」

「拙者達だけでござるか？」

「いや、不安な奴は誰でも参加していいぞ。でも部屋のことを考えてほしい」

「先生。質問です」

「どうした？まき絵」

「教科は数学と理科だけですか？」

「いい質問だな。教科に関しては何でもいいぞ。国英数理社音体家庭保険どれでも構わん」

「先生！私も質問です」

「朝倉はなんだ？」

「保険体育を教えてください」

「別にいいけど…、実技でね」

（（（（（ポフン／／／）））））

「ちよっ！先生！何をするつもりですか！？」

「なにして…、保険体育の勉強だよ。実技のね」

キーンコーン

「もう時間か。勉強したいやつは誰でも来ていいからな。今日はこれまで」

超視点

今、「ちようしてん」と呼んだのは誰ネ！

…気のせいアルカ

ワタシはとても悩んでいるヨ

その原因は副担任である忍先生…

実はある計画があり

それを成功させるために
この麻帆良を調べ上げたのネ

ここだけの秘密アルが
ワタシは未来人なのだヨ！

カシオペアを作って
この時代に来たネ

ある日のことネ…
突然、副担任が来たんだが
そんな歴史はなかったヨ

ワタシは副担任である忍先生のことをまほネット調べてみたが、
経歴が無かったネ

ワタシは計画の妨げになると考えて、先生を監視したアルが
ことごとく失敗してるヨ…

裏で働いているのをわかったのだけど、岩の破片とかで壊されたネ
なんとしてもコチラ側に引き込みたいアルヨ

そして今日
放課後に先生の部屋で勉強会があるらしいネ！
しかも、誰でも来ていいと言ってくれたネ

すると、和美が…

「保険体育を教えてください」

と言ったネ

それに対して先生は

「別にいいけど…。実技でね」

と答えたネ

ワタシは考えてしまったヨ

夜の管理人室に

ワタシと忍先生がいて

「先生…。ワタシにも、保険体育を教えてほしいネ／／／」

「天才の超さんがどうして？」

「ワタシ、知識はあるけど、実技ができないヨ。だから…」

先生はワタシを押し倒して

「だったら、今夜は付きっきりで教えてやるよ…」

「先生…」

そして、ワタシと先生は唇を――

（ポフン）

——
そんなことになったらどうするネ！きっとワタシ、そのまま先生に

キーンコーン

ハッ！

チャイムで我に戻ったネ

先生についてはコレを機に
いろいろと教えて貰うネ

覚悟してるネ…

フフフ…

超視点終了

時は流れ放課後

俺は勉強会している

管理人室には嬉しいことに
掘り炬燵があり
寒い日に必要だ

残念なことは4人しか
炬燵に入れないことである

何が言いたいのかって？

つまりだな：

「もうちょつと詰めなさいよ」

「狭いんだから我慢してほしいです」

一つの面に2人で入っている

とてつもなく狭い
狭すぎる！

今日来てくれたのは

明日菜、夕映、楓

まき絵、古菲の五人に

超と亜子を合わせた七人である

「超。お前もか？」

「優しくしてほしいネ／＼／」

「話が伝わってないだと…」

どこからか

『ラブ臭キターー！』と
聞こえる

炬燵には

夕映と明日菜

超と古菲

亜子とまき絵

俺と楓の組み合わせで

入っている

「忍先生。わかんないでござるよ」

「引っ付くな！離れろ」

隣にいる楓が

必要以上にスキンシップを取ってくる

「うう……。振られたでござる」

「そもそも告られてないから」

「楓、先生は私の婿だからダメアル！」

うおい！

古菲！いきなり何を言ってる

俺がいつ婿になった！

パンツ！

「「それはホントですか！（ござるか！）（アルカ！）」」

亜子と超が乗り出して

楓が腕にしがみつく

てか、三人共
顔が近すぎ！

「落ち着け。れれれ冷静になれ。古菲！俺がいつ婿になった！」

「それは、先生が私を倒した時アル」

あの時か！

「私は自分より強い人が好きアル。私を倒した人が婿になる！古家の決まりネ」

勝ち誇ったような口調で

自慢する古菲に

三人の視線が突き刺さる

「明日菜、まき絵、少し目を瞑ってくれ。いいと言うまで開けるなよ」

2人が目を瞑ると

俺は右手を挙げた

すると亜子、超、楓が古菲に襲いかかった

その間、0以下

「ニャアアアアア！」

古菲は部屋の角で椅子に座り

「燃え尽きたアル…」

ジョーと化した

「目を開けていいぞ」

「なんか嫌な音がしたんだけど…」

「機にしたら負けだ」

「そう…」

「さて、勉強の続きだ」

「はい」

素直でよろしい

「でだなまき絵、ここでさっきの公式を——」

「ホントだ！解けた！」

「先生。こっちはどうやるの？」

「この問題は、文章中に答えがな——」

「ホンマや」

「できました…」

「やれば出来るじゃないか！」

「夕映はもととできるです。ただ興味が無いだけです」

「超は…、わかってるよな」

「有無を言わせないとか酷いネ…」

「拙者、いまいちわか「さっきわかったって言ったよな」ってるでござる」

「明日菜、どこが出来ないんだ？」

「うーん。ここまでは解けたんだけど、その後が…」

「そうだな。ここでさっきの式に代入してその答えをこっちの式に代入するんだ」

「……………終わった」

「みんなよくやった。さあ飯にするぞ」

「わーい」

「お腹空いたです」

「楽しみでござる」

俺が台所に入り調理をしていると…

「忍せ「早く食べたいアル」

古菲が復活した

「そうじゃないネ！先生！あとで話があるヨ！」

「後でな」

その日

7人の少女は
晩御飯を食べて泣いた

「先生。また明日」

「じゃあな」

ボタン

超以外はそれぞれの部屋に戻った

「超、話ってなんだ？」

俺は炬燵に入り向かい合った

「実は先生に折り入ってお願いがあるネ」

「内容次第では受けてやる」

「簡単なことネ。次の麻帆良祭の時にある計画を行うネ。それに協力してほしいヨ」

「そういうのはクラスの奴らとやれよ」

「魔法を世界にバラすネ」

ピクッ

「どうして魔法のことを知っている」

「それは私が未来人だからネ」

「そうか」

「驚かないアルカ？」

「別に魔法があるんだから、宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいても変じゃないだろ」

「それもそうネ。ワタシ、未来でこの時代について調べたネ。でも先生のことは載ってなかったヨ。そこで「俺の正体を教えてほしい、だろ」…そうネ」

「誰にも言わないという約束をしてくれれば教えてやるよ」

「もし、約束を破ったら…」

「その計画を全力で潰す」

「わかったネ」

「それじゃ、話すぞ。俺は異世界人だ」

「……………」

「……………」

「それだけアルカ？」

「それだけだ。裏に関してはタカミチより強いぞ」

その後、超がこの時代に来た理由、目的、未来の出来事を教えてもらった

「で、協力してくれるカ？」

「悪いが断るよ」

「なんでアルカ？」

「別に魔法をバラそうがバラさまいが興味はないし、俺は教師だからやることあるんだ。でも、学園側には協力しない」

「それはホントカ！」

「だからといって、そっちに協力するとも限らない。祭りを楽しみたいからね」

「そうアルカ…。でもいい話が聞けたヨ。先生。ありがとネ！」

「まあ頑張れよ！」

「はいネ！」

超、自分の部屋に帰った

なんやかんやで

レギュラーメンバーに

刹那が加わり

時は流れて

テスト前日…

「お前たち、ホントよく頑張った。あとは本番までリラックスするだけ！」

「先生…」

「ご褒美に今日は、とびきり美味しいご馳走を作ってる」

「「「やったー！！」」」

これが後の麻帆良料理伝説である

「次の日」

「テストを始めるぞ。時間は50分、始めていいぞ」

（この問題は…!）

（解けるでアル!）

（これはこうして…）

……

……

……

「時間だ!全員、無駄な抵抗はやめてペンを置け」

全員置いたな

俺は解答を集める

「それじゃ、10分後にHRをやるから。静かにしろよ」

採点が楽しみだ

「テスト返却日」

「今から、テストを返すぞ。名前を呼ぶから取りに來い」

キングクリムゾン

その日

職員室にて

「忍先生。いったいどんな魔法を使っただんですか？」

「自分はただ、やり方を教えただけですよ」

明石先生は俺のクラスの
裕奈の親父さんである

「それにしても、二年A組のテスト、数学の平均だけ点数が、いつもより異常に高いんですけど…」

二年A組 平均 72点

「人間、やれば出来るってことですよ」

因みに、高いのは数学だけで
他はいつもと変わらなかった

そして…

「これで二学期は終わり冬休みになるわけだが、みんな自己や病気になるように。俺はいつも管理人室にいるから、何かあれば来ていいぞ。それじゃ、おしまい」

こうして

麻帆良学園は

冬休みに突入したのである…

第十五話／期末テストと勉強会と冬休み突入（後書き）

ついに冬休み突入

しかし、先生に休みは無かった

次々と襲いかかる脅威（雪玉）にいったいどう立ち向かうのか

次回！

先生！雪原に立つ

みんなも一緒に

シェルブリットオオオ！

第十六話／先生！雪原に立つ（前書き）

寒いのは勘弁してほしい

第十六話／先生！雪原に立つ

冬休み

それは今の時代

新年を迎える準備や大掃除を
行う長期休暇である

だが、世の中には
休めない人達がいる

ここ麻帆良にも
その一人がいるのである

「忍兄。早く早く」

「急がなくても、雪は逃げないぞ。あと、にいじやなくて先生だ」

「僕がそう呼びたいからいいの！」

「忍お兄ちゃん…」

「史香、お前もか！」

何があって今の状況になってるかって？

それはな…

く回想く

バンッ

「先生ー！雪だよ！遊びに行こ！」

「風香は元気だなあ」

俺は冬休み分の仕事を

既に終わらせている

あの時は、clock upとマッハと555アクセルを同時に使ったくらいのスピードだった

そのため

他の先生方には悪いが

コタツでぬくぬくとしていられるのだ

「ほら先生！外を見て雪だよ！雪！」

「遊びたいのか？」

「うん！」

「しょうがないな」。準備するから少し待ってろ」

昨夜から雪が降り

積もった為

あたり一面銀世界である

俺は外に行く準備を終えて
戻ると史香が来ていた

「よう史香！」

「おはようございます。忍先生」

「むゝ。遅いぞ。先生」

「ゴメンゴメン」

「しょうがないなあゝ。それじゃ、早く行こ！楓姉も待ってるよ」

ガチャン

管理人室を出ると
新聞配達を終えた明日菜と出会った

「アンタ達。教師と生徒というより兄妹みたいだよ」

と言われた

そのせいで…

「だったら忍兄だね」

「一応教師だぞ」

「ダメ…？」

涙目でこっちを見るな！

「仕方ないなあ…。それでもいいが、学校では先生だからな」

「わかってるって」

そして冒頭にいたる

～回想終了～

「楓姉～！」

外に出て少し歩くと
楓が待っていた

「おーい風香殿、史香殿、忍先生」

楓が手を振って近づいてくる

「忍先生。来てくれたでござるか？」

「風香に頼まれてな」

「そうでござったか」

「忍兄！楓姉！早く作ろーよー」

「忍殿、いつ二人の兄上になったでござるか？」

「ここに来る前だ」

「そうでござったか」

「俺も形だけでも妹ができたみたいで嬉しいがな」

「向こうは本当の兄妹になりたいと思っているかも知れないでござるよ」

「そんなもんkブベツ！」

突如、雪が視界を覆った

『ハハハハハハハ！忍兄、討ち取ったり！』

「ふうーううーかあー！」

『逃げろー！』

「待てえ！」

俺と風香の鬼ごっこが始まった

「悪い子はいねがー！」

「忍先生。それは、なまはげござる」

「忍兄。こっちだよ！」

「いつの間Nアハーン！」

声と反対側から雪玉を受ける

雪玉が飛んできた方を見ると
史香が雪玉を抱えていた

「これぞ『鳴滝分身の術』」

「やったな」

俺は雪玉を作り2人に投げた

「ヒャア！」

「冷たいです！」

「三人共、拙者もやるでござる」

最終的に雪合戦になった

ボスン

「疲れた〜」

俺は背中から雪に倒れた

『忍先生〜。かまくら作るでござるよ〜』

あいつら元気だな

「俺も楽しいからいいか…」

前の世界でバカやっていたみたいな気持ちになる

「行くか!」

俺は立ち上がり

かまくらを作りに向かった

「まずは雪山を作って——」

「後で中の雪を掻きだし——」

「」「完成—!!」
「」「」

「上出来だな」

かまくらは夕方になりかけたくらいに完成した

「外も中も頑丈だね」

「上に乗っても大丈夫でござる」

風香と楓が感想を述べていると史香が

クイッククイッ

袖を引っ張る

「どうしたんだ史香？」

「忍にい…。眠くなってきたです…」

俺は背中を向けておんぶする

「忍にいの背中、暖かい…」

そう言い

史香は寝てしまった

「史香殿も寝たでござるか」

楓が風香をおぶって来た

「風香もか…」

「おそらく、遊び疲れたのでござるよ」

こういうところは
まだ子供か…

「戻るか」

「そうでござるな…」

「忍先生」

「なんだ？」

「こうしていると…、夫婦みたいでござるな／＼」

「ツツコミは入れないぞ」

「酷いでござる…」

「でも…、見えなくはN『おや、先生に楓じゃないか』真名か…」
よかつた
朝倉じゃなくて

「真名殿、拙者達、夫婦に見えるでござるか？」

What!?

いきなり何を言い出すのだ！

それに真名！

一般ピープルには見えない

黒いオーラが漏れてるぞ

「そうだな。夫婦円満で毎日が幸せそうに見えるぞ」

顔を引き釣らせながら

真名は言った

「そうでござるか／＼／」

楓は勝ち誇った顔ですり寄って来るな

「楓。忍先生から離れてくれないか？」

「それはできないでござる」

「なら、力ずくで離れてもらう」

「忍先生。風香殿を頼むでござる」

楓は俺の背中に風香を乗せるとクナイを構え、真名は拳銃を構えて、戦闘を始めた

「…………、速く帰るか」

結論

すぐさま帰る

部屋は管理人室にあるスぺアで開けて、2人をベットに寝かせ
部屋から出ると

「……………」

「……………」

真名と楓がいた

「「忍先生は、私と楓の（拙者と真名の）どっちが好みなんだ（ござるか）！！」」

「そうだなあゝ。二人共、綺麗だしなあゝ」

「そうでがざるかゝ／＼／＼」

「ならいいが／＼／＼」

「俺は戻るから二人とも帰った帰った」

俺は管理人室に戻る

後ろで

「負けないでござるよ」

「望むところだ」

友情が深まっていた

第十六話／先生！雪原に立つ（後書き）

次回！初詣は龍宮神社で
褐色巫女さんが待ってます

第十七話／ここ数年、初詣に行っていないからかも知れないが参拝客の人数がおお

やつと書き終わった

テストがあつて書けなかったわ

第十七話／ここ数年、初詣に行っていないからかも知れないが参拝客の人数がおお

1月1日

あけましておめでとうございます。なんて皆は言っているが、やはり正月は寝て過ごすに決まっている

『ゼロの使いじゃあらへんで』略して…

言わない方がいい気がするな

そんなことはどうでもいい

俺は年越しそばならず

年明けそばを食べている

ズズー

「やっぱり正月は、ずりあげの蕎麦に限るな」

オールシーズン

ずりあげ蕎麦だがな

寝ぼけていたのかも知れないが、作りすぎてしまったので一人で処理しなくてはならないのである

ざっと六人前はあるだろう

現在、三分の二以下になる程食した

コンコン ガチャン

「ふぁい？（はい？）」

「あけましておめでどうやね。忍先生」

「おめでどうございます」

新年最初に見る顔は

刹那と木乃香か

着物が二人とも似合っている

「おふえふえほーほへひはふ（あけましておめでどうございます）」

「先生。食べるか、話すかにしていただけますか？」

ズズー

「食べるんですか…」

お腹空いてんだもの

「ご馳走様でした」

「なあなあ、先生。初詣行かへん？」

「そうだな。どうせ暇だし行こうかな」

「ほな。早速出発や」

俺たちは部屋を出た

「なあ先生。何も言ってくらへんの？」

「はて？なんのことやら」

「着物のことや！似合ってるやろ？」

少し顔を膨らませる木乃香
確かに男として申し訳ない

「似合ってるぞ」

「ほ、ホンマに／＼／」

「ああ／＼／」

「ウチだけやのうて、せっちゃんも似合ってるやろ？」

「お、お嬢様！」

「まあ、なんつうか。2人とも似合ってるし綺麗だから…。その、意識しちゃうんだが／＼／」

「照れるわな／＼／」

木乃香は恥ずかしそうに言うが、刹那に至っては顔を赤くして俯きながらボソボソと何かを言っている

いつの時代も

こういうのはそつとしてあげるのがいいと
教わったことがある

「あ！せっちゃん！」

「ななな、何でしょうか！お嬢様！」

「ちょっと来て欲しいんよ。先生はここで待っててな」

「いいぜ」

「ほな、行こ。せっちゃん」

「は、はい！」

木乃香は刹那の手を掴んで
寮の裏に回った

女の子同士

話したいことがあるんだな

俺はそう考えていた

女子寮裏

裏手に回った

刹那と木乃香は…

「あいな、せっちゃん？」

「なんでしょうか！お嬢様」

「正直に言うて欲しいことがあるんよ」

「…それはいい」

「せっちゃんも先生のことが好きなんやろ？」

「ななな、何をいいますか！？わ、私は別に忍先生のことが好きなどど…、そんなことが——」

「それじゃ、ウチが貰ってもええか？」

「それはダメです！」

「……やっぱりせっちゃん、先生のことが好きなんや」

「うう…／＼／」

「よかったわ。ホントのことを聞けたんやから」

「でも、私と先生が付き合っても釣り合わないといえますか…、それより、お嬢様の方がお似合いかと」

木乃香は首を横に振る

「そんなことあらへん。せっちゃんもお似合いや」

刹那の顔は真っ赤になり
高い熱量をもった

「……………」

「せっちゃん？」

「あ、はい！」

「大丈夫？急にボーとしてたさかい」

「だ、大丈夫です！それより早く行きましょう。先生を待たせていますよ」

「そうやね」

木乃香は振り向いて
刹那に言った

「ウチ、負けへんで」

「わ、私も負けません！」

「「フフツ」」

「ほな、戻るか」

「そうですね」

カッカッカッ

「だーれだ？」

俺の視界が暗くなる

「うーん。この声は木乃香だな」

「当たり前」

「話はすんだのか？」

「終わったで」

「そうか。なら行こうぜ」

ギュッ

俺が歩き出すと

左腕に木乃香がしがみついた

「歩きにくいのだが」

「ええやないか。この方が暖かいやろ？」

「そりゃ、そうだが…」

なんだろう

木乃香は誘っているのか!?

浴衣越しだが

柔らかい感触が両腕に伝わってくる

小さいながらも膨らみがあり

将来はききたいできるとみた

「ほら、せっちゃんも」

「あ、はい。では失礼します」

ギュッ

右腕に刹那がしがみつく

「先生。両手に華で嬉しいやろ？」

「普通は自分から言わないぞ。といきたいとだが、正直に嬉しいな。てか速く行かないか？」

「そうやった! ほな行くで」

少年少女移動中

「ここが龍宮神社や」

「へー。結構人がいるんだな」

俺たちは初詣をしに

龍宮神社にやってきました

来る途中にいろんな奴が

俺のことを殺意の籠もった目で睨んできます

FF団よりはあまいがな

いや、あいつらが異常なだけか：

そんなこんなで

賽銭箱の前まで来てしまった

チャリン

パンパン

二礼二拍手をし

今年の願いを届ける

(今年一年、平和に過ごせますように)

実際、神から手紙がきたり

電話したりしたしな

今更って感じたし

「なあなあ、先生は何をお願いしたんか？」

「ん？俺はな、今年は平和に過ごせますようにってお願いしたぞ。
2人はなんだ」

「へへえー。秘密や／＼／」

「私も秘密です／＼／」

ハハーン

女性の悩みですね

おそらく、『胸が大きくなりますように』とかだな

（作者は言っている…。そんなわけないと）

「…………、おみくじでも引くか？」

「それええなあ」

「ほら、刹那も行くぞ」

「もし、願いが叶ったら、私と先生は…………（ボソボソ）／＼／」

だが刹那は

ずっと俯いて

何かを呟いていた

「おい。刹那？」

「……………」

返事がないただの（ry

「しょうがないな」

俺は刹那の弱いところその1
背筋をなぞった

「ヒヤイ！」

「戻ったか。よし、刹那もおみくじ引くか？」

「はい／＼／」

「すみません。おみくじ一回」

「100円だよ。先生」

聞き覚えのある声だ
それに先生って：

俺は顔を上げるとそこには

「真名じゃないか」

褐色巫女さんがいた

「どうしたんだ？ 巫女さんのバイトでも始めたのか」

「家の手伝いだが」

そうか

たしかここは

龍宮神社だったな

「で、何番だい？」

「おっと！ そうだった…。えーと、69番」

ガサガサ

「どうぞ。先生」

俺はおみくじを受け取る

「それと、先生。後ろの2人は連れかい？」

振り向くと

刹那と木乃香がいた

「まあ。そんなところだ」

「ならいいが…」

さてと

今年の運勢はどうかな？

『小吉』

喜んでいいやら悪いやら
なんというか

コメントしづらいのがきた

『今年一年は波乱に満ちています。女難の相が現れます、貴方の周りの女性には注意しましょう。行動によっては回避ができます』

もう遅いです…

目の前で真名と刹那が
お互いにらみ合ってます

逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ。逃げちゃダメだ…

「木乃香はどうだった？」

逃げました

三十六計逃げるにしかりです

「『大吉』やったで／＼／＼」（『気になる異性との距離が近づきます。運命の人は意外と近くにいるかもしれません』って書いてあったけど、やっぱ運命の人って先生なんやな）

「よかったじゃねえか。俺は『小吉』だった」（『女難の相がでます』か…。苦手なんだよね。そういうの）

「私は『中吉』でした／＼」（『恋の道は棘の道。貴方の恋路は決して楽ではありません。殿方が多くの女性に好かれるため、愛を深めるは難しいでしょう。積極的なアピールが鍵』とは書いてありましたけど、このちゃんに真名まで先生が好きみたいやし、ウチはどうすればいいんや…）

それぞれ

思うことがあるようです

「帰るか…」

「うん／＼／」（さっきより格好良く見えてきたな／＼／）

「はい／＼／」（積極的に…。積極的に…）

ギュッ

刹那がまた

腕に抱きついてきた

プチッ

そして何かがきれる

真名

（刹那、後で覚えておけ）

刹那

（やはり真名も…）

真名は笑っているが

その視線は一般ピープルなら

確実に殺れるほどの力を持っていた

忍は刹那に引っ張られ

女子寮に戻った

こうして

新年を迎えたのであった

今年は大変な一年になるとも知らずに…

第十七話／ここ数年、初詣に行っていないからかも知れないが参拝客の人数がおお

作者

「次あたりで野菜がくるのだが、原作を少し知っている自分はその坊主が嫌いなんだよね」

忍竹

「そう言わずに書けや」

作者

「やってみるよ」

忍竹

「というわけで、次k「次回！野菜襲来！」最後まで言わせろ」

作者

「D A ☆ G A ☆ K O ☆ T O ☆ W A ☆ R U」

第十八話／（恋姫＋無双）月と（ネギま！）のどかが作者的には同じポジション

来ちゃったよ野菜少年

主人公は忙しくなりそうです

それに

あとかきが長くなっちゃった

第十八話／（恋姫＋無双）月と（ネギま！）のどかが作者的には同じポジション

「あんさ。学園長（妖怪）」

「どうしたんじゃ？ 忍君」

「ここで十歳の子供が教師になるとかならないとか聞いたんだが…」

「そのことか、ホントじゃぞ。学力については心配いらん。大学卒業レベルはあるからの。たしか、そろそろ来ると思うが」

「関係者なら俺のことは教えるなよ。そっちの方が楽だし、頼られるのは嫌なんでね」

「わかった。そうしよう」

「とりあえず紅茶をくれ。今日はアプリコットの気分だ」

俺は珈琲や日本茶も飲むが

紅茶派だから部屋には多くの紅茶がある

「すまぬ。ここにはないい」

「次は用意しといて下さいよ」

「面目ないの」

俺がソファに座り

来る前に自販機で買った『リン茶』^{アップルティー}を飲む

ちょっと甘いな…

バタバタバタバタ

バタバタバタバタ……バダンッ！

「学園長先生！ いったいどういうことなんですか！？」

「まあまあ、明日菜ちゃん…」

明日菜が赤髪の坊主を連れてきた。コイツが噂の子供先生なのだろう。最近は何歳でも店長になれるらしいからな

「まあ落ち着けや明日菜。ところで坊主、ここは君みたいな子供かくるところじゃない。家に帰って弁天堂Winでもやってなさい」

「待つんじゃ忍君。彼がさっき話していた子じゃよ」

あ、やっぱり

「そうだったんですか。そんなじゃ改めて坊主、名前はなんだ」

「ネギ・スプリングフィールドです」

そうですか

次からは野菜と呼ばせてもらおうよ

「それで、明日菜はどうしたんだ？ 木乃香、説明よろしく」

「この子が明日菜に占いで失恋の相が出てるって言ったんよ」

「学園長（妖怪）。この野菜、掬いようのないバカ野郎なんですけど、知識だけのバカ野郎なんですけど、も一つオマケにバカ野郎なんですけど」

「僕親切に教えたなのに…」

「こいつ、国に返しませんか。最近の郵便は海外にも送ってくれるみたいですし」

俺はな人の恋心を平然と踏みにじる奴は嫌いなんですよ

「だが、まだ一度目なので許しますけど、四度目からは容赦しませんよ」

仏の顔も三度までです

だいたい

（たぶん）初対面の人に失恋の相が出てますよ。なんてよく言えるたもんだな。それが親切とは世の中腐ってんなあ

「先生。これからやから、そんな怒らんといて」

「しょうがないな」

生徒の頼みだ

無碍にはできん

その後、野菜が教育実習生になるのを明日菜が反対するが、それを学園長（妖怪）が無視しして、野菜は正式に教育実習生となったのだ

「そのの彼が君の担当するクラスの副担任、忍竹薫君じゃ」

「忍竹薫だ。みんなは親しみを込めて忍先生と呼んでくれる」

「それじゃ、よろしくお願いします。忍先生」「気安く呼ぶんじゃないかね！」「えっ！」

「なんてな、冗談だ」

「それでは頼んだぞ忍君」

「任された。吉幾蔵。ネギ」

「はい」（吉幾蔵って誰なんだろう？）

カツカツカツカツ

「ところで忍先生。どんなクラスなんですか？」

「元気だが素直でいい子達だぞ。少し元気過ぎだがな」

「そうですか」

「なるようになるさ」

「そんじゃ、呼んだら入ってきて」

「はい」

ガラガラ

俺は黒板消しを半歩下がって避けると、床に張ってあったロープを蹴り、仕掛けを発動させる

「最後はこれだな」

最後にロープを切ると

水の入ったバケツが落ちて、教室を濡らす

俺は教卓について

こう言い放つ

「今回の仕掛け人は今すぐに手を挙げろ。今なら宿題二割増で許してやる」

『……………』

「誰もいないのか…。だったら連帯責任として全i「鳴滝姉妹と桜子です」よし三人は宿題五割増にしてやろう」

「うわああ〜ん」

「酷いよ明日菜」

「それから皆に一つ言うことがある。三学期からタカミチ先生は担任から外れます「えっ!？」」けど学校を去るという意味では無いので安心して下さい。そこで新しくこのクラスの担任になる先生を紹介します。入ってきて下さい」

ガラガラ

「えーと。今日からこのクラスの担任になります。ネギ・スプリングフィールドです」

「「「か…」」」

今日は高級耳栓のスキルが付いてるぜ

「「「カワイー…イ!」」」 バインドボイスウウウウ!

窓にヒビが入ったよ!

だが二学期を無駄に過ごした訳ではない
こんな時の対処方ぐらい心得ているのさ

「はいはい。みんな静かに、宿題を倍にされたいか?」

シーン

「素直でよろしい。それじゃ、一時間目を少しだけネギ先生への質問タイムに当てたいと思います。それと、俺のことは薫先生でもいい

いからな。二学期ちゃんと授業を受けてくれたしな。それじゃネギ先生、後はお願いしましたよ」

——キンコーン…

なんやかんだで放課後

「それじゃみんな、気を付けて帰れよ」

帰りのHRを終えた俺を

「薫先生。待ってな」

「なんだ？ わからないところでもあるのか？」

「そうじゃない。この後、時間ある？」

「直ぐにはできないな。借りてる本の返却日だし」

「そうやったか。残念やったな…」

「悪いなまた今度だ」

俺は図書館島に向かった

図書館島ってなにかって？

それはな

ここ麻帆良学園の誇る

世界にも類を見ない程の

とてつもない広さと

大きいお友達から

小さいお友達まで

幅広いニーズにも対応できる

多彩のジャンルの本が存在している為

図書館島と名付けられているのである

おや？

あれはのどかさんではない！？

あんなに本を高く積んで大丈夫なのだろうか？

前、見えてないんじゃないかね

そんなことを思っていると

のどかは階段で転んだ

俺は『射命丸 文』の能力

『風を操る程度の能力』を発動させて、のどかの腕を引き上げる。

流石は幻想郷最速と言われている射命丸、余裕で間に合ったよ

下の階ではネギ先生が杖を持ったまま驚いた顔をしている

魔法を使おうとしたの？

こんな場所では？

馬鹿なの…。死ぬの…。哀れなの？

明日菜に連れてかれてる

えっ！？なに？

魔法バレてんの？

やっぱ馬鹿なの…。死ぬの…。哀れなの？

「し、し、忍先生！」

「のどか、怪我はないか？」

「は、ハヒユユユ」

のどかは湯気を立てて
気絶した

「のどか。のどか…。ダメだこりゃ」

忘れてた…。確かのだか、男性が苦手なんだっけ。ひとまず保健室
に運ぶとしても、本はどうすっかなあ

そう

階段や廊下には

数多の本が散らばっている

「はあ」

『おや？薫先生。こんなところで何をしてるんですか？』

「夕映じゃないか。あつ、ちょうどいい。この本を図書館島まで運

んどいてくれないか」

「別に構いませんが、どうしてもどこを抱きしめているのですか？」

「ああ…。これはだな…」

少年説明中

「そうでしたか」

「てな訳だから、よろしく頼むよ」

俺はのどかを背負い
保健室に向かった

途中、目を覚ましたが

「へう」

なんて声を上げて
また気絶してしまった

のどかって前髪上げた方が可愛いんだな…

第十八話／（恋姫＋無双）月と（ネギま！）のどこが作者的には同じポジション

主人公が使っている能力

『東方project編』

『主に空を飛ぶ程度の能力』

『闇を操る程度の能力』

『冷気を操る程度の能力』

『気を使う程度の能力』

『火水木金土日月を操る程度の能力』

『寒気を操る程度の能力』

『剣術を扱う程度の能力』

『式神を操る程度の能力』

『歌で人を惑わす程度の能力』

『狂気を操る程度の能力』

『あらゆる薬を作る程度の能力』

『老いる事も死ぬの事も無い程度の能力』

『密と疎を操る程度の能力』

『風を操る程度の能力』

『毒を操る程度の能力』

『花を操る程度の能力』

『距離を操る程度の能力』

『白黒はつきりつける程度の能力』

『紅葉を司る程度の能力』

『豊穣を司る程度の能力』

『厄を溜め込む程度の能力』

『水を操る程度の能力』

『千里先まで見通す程度の能力』

『未知のアイテムの名称と用途がわかる程度の能力』
『光の屈折を操る程度の能力、光を屈折させる程度の能力』
『周りの音を消す程度の能力、音を消す程度の能力』
『生き物の動きを補足する程度の能力、動く者の気配を探る程度の能力』

『一度見た物を忘れない程度の能力』
『空気を読む程度の能力』
『大地を操る程度の能力』
『気質を見極める程度の能力』
『鬼火を落とす程度の能力』
『病気を操る程度の能力』
『嫉妬心を操る程度の能力』
『怪力乱神を持つ程度の能力』
『心を読む程度の能力』
『無意識を操る程度の能力』
『探し物を探し当てる程度の能力』
『人間を驚かす程度の能力』
『入道を使う程度の能力』
『水難事故を引き起こす程度の能力』
『財宝が集まる程度の能力』
『魔法を扱う程度の能力』
『正体を判らなくする程度の能力』

とまあこんなもんです

忍

「こんなに使えるのか？」

作者

「そうだ。現在、47の能力が使えるが、中には相殺されているの

もあるから、実際はこれよりすくないぞ」

火水木金土日月を操る程度の能力↑属性を現します

木↑風

金↑雷

日↑光

月↑闇

他は文字通りです

てか、あとがきでする事じゃねえ!!

第十九話／アタイ知ってるよ。惚れ葉ってマタタビのことでしょ。えゝ違うの。

主人公は大変なことに巻き込まれたようです

第十九話／アタイ知ってるよ。惚れ葉ってマタタビのことでしょ。えゝ違うの。

野菜少年視点

ううゝ

昨日は明日菜さんに酷いことしちゃったな…

許してはもらえたけど

何かお詫びにしなくちゃ！

でもどうしたら…

あ！

そうだ

確か明日菜さんはタカミチの事が好きなんだっけ

だったら…

ネギ少年は何かを企んでいるようです

野菜少年視点終了

「おい、野菜少年、ネギ先生よ。どこだい」

俺は野菜少年を探している。なにやら嫌な予感がしたからだ

「いったいどこに…ん。誰か理科室でも開けたのか？」

皆さん忘れているかも知れませんが、担当科目は理科だから
数学も教えてますけど

『……です。……くれま……して……さい』

野菜少年の声が聞こえる

ガラガラ

「ネギ少年いるか？」

『あ、忍先生』

「ここにいたか。それに明日菜も一緒か」

すると野菜少年は液体の入ったフラスコを渡してきた

「あの！忍先生。ハーブティーを作ってみましたんですけど、どうですか？」

「お！それじゃあ頂くとするよ」

俺は計量カップに煎れて飲む

理科室で飲み物を飲むときはコイツに限る

グビッ　グビッ

「美味しいな。流石は紅茶の本番イギリスから来ただけあるな」

「そ、そうですか」

グビッ　グビッ

「あの、体は大丈夫ですか？」

野菜少年が

いきなり聞いてきたから

「大丈夫だ。問題ない」

つつい

そう答えてしまった

「ぷはゝ。やはりうm『ガラガラ』なんだ木乃香か…」

飲み終わると

木乃香が入ってきて

俺の正面に座った

「ど、どうした」

目のトロンとしていて
なんか色っぽい

「先生…／＼／＼やっぱ格好ええなあ／＼／＼」

木乃香か両手で俺の顔に添えて目を見合わせている

そのまま、お互いの瞳に吸い込まれるように、顔が近づき…

「木乃香…」

「先生…」

唇を重ね――
パン!

「はっ!」

突然の銃声で我に帰った

銃声ということは真名か!
助かっ…

「ハア…ハア…／＼／＼」

息を荒くし
頬を紅く染めながら

「先生……。私を抱い「バックステッポオ」待て！」

カカッ

ヤバいつて！

とてつもなくヤバいつて！

捕まったら確実に死ぬ！

（神は言っている……。ここで死ぬ定めではないと）

ほら！

神だって言っただから！

「薫先生！おとなしく捕まって私と一夜を共にしろ！」

「くそっ！捕まってたまるか！」

とは言っても

こんなところで能力は使えないし、変身するわけにも……

そうだ！

まだ神器が残っている！

コレならば逃げr「薫殿ー！」

「薫先生ー！今すぐ結婚するアル」

「薫先生。私も…」

「ちくしょう！六ツ星神器 電光石火^{ライカ}」

周りからはローラーブレードにしか見えないから大丈夫だろう

でもな…

コレはマジでヤバイ

あれだ

麻帆良武道四天王に

追いかけてられてんだぜ

「先生！止まって下さい」

「刀を抜くな刹那！」

こうなったらしょうがない

俺はライカを解除して

『鈴仙・優曇華院・イナバ』の能力『狂気を操る程度の能力』を発動させる

「狂気の瞳」

すると、俺の目は赤くなる

狂気の瞳は相手の意識に干渉して、認識をずらしたりさせなかったにでき、無い物があるように、ある物を無いように見せることも出

来るのだ！

「フッフ…。先生／＼／捕まえまし…」

ドサッ

俺の目――

狂気の瞳を見た刹那は意識を失い倒れた

「まずは一人…っ!？」

後方やや右から殺気！

『今のを避けるとは、流石は私の媚アル／＼／』

「次は古菲か…」

「私は先生の子を産むアル！絶対アル！だから先生を倒して今すぐ結婚するアル！」

なんてことを言うんだ！
しかも大声で！

「覚悟アル！」

古菲が相手なら…

能力追加

『紅 美鈴』

悪いがさつさと
終わらしてやるよ

『彩光蓮華掌』

古菲は両腕でガードするが
それごとぶっ飛ばす

「流石は私の見込んだ――」

／＼ピチューン／

古菲も狂気の瞳で気絶させる

「古菲殿のやられてしまったでござるか。でもライバルが減ったでござる」

三番手は楓か…

「楓、独り占めはよくないぞ」

「真名殿…。目的が同じならば協力するでござる」

「先生。私たちが今夜、相手をしてあげるよ」

「とても魅力的だが、お断りする」

「」「行くでござる」「」

楓が四人になって襲い掛かる

「分身ですか？やっぱり忍者ですよね」

五対一

どうすっかなあ

「先生。喰らうでござる。『楓忍法！四つ分身 朧十字』」

使ってみるか：

楓は攻撃の上に跳んで避ける

「もらったよ」

空中にいる俺に真名が銃を構え撃つが

『フォースオブアカインド』

「!？」

一瞬、驚いてしまい

外してしまった

「驚いたでござる。忍殿も分身が使えたでござるか？」（忍殿も忍者でござったか。なら父親も認めてくれるでござるな／＼／＼）

「私の魔眼をもっても本物が見つからないとはね」（ますます興味がふえた。なんとしても私の物にしたい）

「」「」「さてと、やりますか」「」「」

俺はいま

四人になっている

それぞれが実体であり
本体でもある

「俺たちで楓を倒すから、お前は真名を頼む」

「」「わかった」「」

「楓、こっちだ」

「待つでござる！」

俺と二人の俺は四人の楓と裏山に入った

「真名、お前の相手は俺だ」

残った俺が真名と向き合った

（裏山）

ここから本体をA

分身をB〓 とします

忍B

「作戦通り頼んだぞ」

忍C

「ああ」

忍D

「……………（コクッ）」

忍B

『オプティカルカモフラージュ』

俺は姿を消した

『オプティカルカモフラージュ』 周りの景色と同化することができる。
正確には光化学迷彩

ザザザッ

楓A〓P

『』『』『忍殿〓。でてくるでござるよ。拙者達が気持ちよくするでござる』『』『』

忍C

「よお楓」

なんだろう

16人に増えてる

楓 A

「おや？ 1人いないでござるが？」

忍 D

「アンタらには2人で充分だからな」

楓 A

「その言葉、捕まえて楽しんだ後に返すでござる」

ザッ

16人の楓は一斉に
襲い掛かったが
いきなり動かなくなった

忍 B 視点

『オプティカルカムフラージュ』

さてと、罨でも仕掛けるか

『キャプチャーウェブ』

すると、見えない糸が
まるで蜘蛛の巣のように
張り巡らされた

そして

楓が登場

1、2、3、4、5…

16人いるわ

楓A

「その言葉、捕まえて楽しんだ後に返すでござる」

そう言って

一斉に忍CとDに襲い掛かるが『キャプチャーウェブ』に捕まって身動きが取れなくなり分身が消える

「忍殿は身動きのとれない拙者を――」

カクン

忍D

「終わったぞ」

忍C

「楓はどうする？」

忍B

「とりあえず女子寮に運ぶぞ」

忍B視点終了

〽麻帆良某所〽

「先生。いくらなんでもこの距離だとなにもできないだろ」

1対1にできたのはいいけど

あの眼が厄介だな。もう掴んだけど

「できることなら無傷でしたいのだが、抵抗するから撃たせてもらうよ。そして看病しながらお楽しみめの時間にしよう」

どいつもこいつも好き勝手言いやがって

俺は攻める方がいいんだよ

「安心してくれ。ただの麻酔……」

ドサッ

真名が倒れる

「ふう〜。バレるかと思ってヒヤヒヤしたわ」

なんで真名が倒れたかって？

それはな

テレメスメリズム

『月兎遠隔催眠術』を使ったからだ

コイツで真名の波長に干渉して気絶させただけだ

「誰だ！」

俺は視線を感じ振り向いた

「わ、私です」

茶々丸がいた

「なんだ驚かすなよ…」

「すみません」

でもどうして茶々丸が？

んゝ。わからない。少なくともコイツら（四天王）とは違う雰囲気だからな

「んで。茶々丸はなんのようだ」

「実は、私にも解らないんです」

「じゃあなんで？」

「何故か、私のA Iが薫先生を追いかけると指示を出しまして気が付いたら薫先生の事を追いかけてました。それに…」

「それに」

「なんだか働却炉が熱くなって苦しかったのが、薫先生と話していると治まったのです」

うーん

きつとアレだな

「茶々丸。あれだ。心っていうやつだ」

「でも、私はガイノイドですのでそのような物は――」

「るせえ！なにが『私はガイノイドです』だ！お前はお前なんだ、茶々丸なんだよ！たとえ周りがガイノイドだのボーカロイドだの言ったとしてもな、俺からすれば一人の女の子と変わりねえんだ！掛け買いのない俺の生徒なんだよ！分かったか！！」

「ですが…」

「いい加減にしろ！今はわかんなくても、少しずつ理解すればいいじゃねえか！返事は！」

「はい」

「いい返事だ。俺はコイツら（麻帆良四天王）を運ばなくちや行けないから規定時間までには帰るようにわかったか」

俺は真名を背負い

女子寮に帰った

「わかりました。これが心というものなのか考えます」

そう茶々丸が言ったが

その場には誰もいなかった

刹那、楓、古菲は
それぞれ B、D が運んだ

作ろうと思えば

惚れ薬くらい作れるので

野菜少年には何も言わなかった

その代わり、明日菜に灸を据えられたようだしな

第二十話／やる気があれば試験の一つや2つ、乗り越えてみんなしゃい（前書き）

次回予告なんて

あつてないような物

第二十話／やる気があれば試験の一つや2つ、乗り越えてみんなしゃい

「忍先生」

「どうしたネギ少年よ。いまにも泣きそうな顔をして」

俺が職員室で紅茶を飲んでいるとネギ少年が涙目で話しかけてきた

「はい、実は…」

〈回想〉

時は少し遡り

場所は学園長室に移る

「あの、学園長先生。お話があると聞いたんですけど…」

「ネギ君。実はお主を正式な教師にするかどうか最終課題が決まってるの」

そう言って

学園長もとい妖怪は一枚の紙を渡した

そこに書かれていたことは

『最終課題 期末試験で二年A組の最下位脱出』

「コレですか…」

「そうじゃ。出来なかったら試練は中止にしすぐさまウェールズに戻ってもらう」

「わかりました。僕、やります！」

「そのいきじゃ。では戻ってよいぞ」

「はい！」

〽回想終了〽

「という訳なんです」

「難しいなあ…。アイツらこの前のテストでも最下位だったし」

もっても、俺が教えた数学はよかったがな

「手は無くはないんだが…」

「あるんですか…!!」

「教師として、使いたくはないんだよ。でも、背に腹は代えられないし…」

ネギ少年は期待の目でこちらを見ている

「例えば、餌で釣る」

「エサですか？」

「確かこの辺に…」

俺は机を探り

紙の束を出す

「それはなんですか？」

「コイツは『麻帆良学園調査書』ってな、麻帆良学園の噂が載
ってる奴だ（新聞部発行）」

おっと

話がズレたな

俺はあるページを開いてネギ少年に見せる

「えーと。読むだけで頭が良くなる魔法の本！そんながあるんで
すか！？」

「もっぱら噂でしかないが、図書館島に伝わる話で実際に見たこと
がある人がいないから、本当かどうかは知らないんだけどね。てか、
あったとしても、んなもんに頼ったら自分の実力じゃないから俺は
嫌いだな」

「……………」

「なんだ。急に黙り込んで…。」

「忍先生は魔法があると思いますか？」

「あるわけないだろ。今は科学は魔法とさほどわかんねえから、どれが魔法でどれが科学なんて誰も知らんだろ」

「じゃあ、もし忍先生が魔法を使えたらどうしますか？」

「さっきからなんだ。まるでネギ少年が実は魔法使いです。なんて言ってるようにきこえるが？」

「もしもですよ」

「そうだなあ。自分の為に使うな」

「!!!」

俺の発言にネギ少年は驚いた

「確かに魔法は魅力的だが、魔法が使えない人にとっては単なる恐怖でしかないし攻撃魔法なんかがあれば簡単に人を殺せてしまうだろう。だったら、自分の為に使って誰も巻き込まないようにする。もし魔法じゃないと救えない命があれば使うかも知れんがな」

「…:そうですか」

「ま、何があったか知らんけど頑張れよ」

「はい！」

返事をして

ネギ少年は職員室を出て行った

「ふう〜。ちとビビったわ」

ネギ少年自身では魔法の本は探さないと思うから、問題は図書館探検部か

図書館探検部とは

未だにその全貌が明らかになっていない図書館島を探索する、とてもデンジャーな部活である

「やれやれ…」

俺はため息をついて教室に向かった

「少しは手伝ってやるか」

〜二年A組前〜

「ネギ少年。俺も少しだがクラスの最下位脱出を手伝ってやるよ」

「ほ、本当ですか!!」

「嘘を言ってどうする」

「ありがとうございます」

キンコーン

俺は手のひらを下に向けてネギ少年に向ける

「なんですか？」

「おまじないさ。ネギ少年も同じようにしたまえ」

「は、はあ」

ネギ少年も同じように手のひらを下に向けて重ねた

「ファイト、オウ！」

「お、オウ！」

「じゃ行くぞ」

ガラガラ

俺、ネギ少年の順に入り教卓の両手を置いた

「えーと。皆さんにお知らせがあります。今度の期末試験でこのクラスが最下位脱出をしなければネギ少年が麻帆良から去ります」

「「「えっ…」」」

「忘れている奴もいると思いますが、ネギ少年は正式な教師ではなく教育自習生です。そこで正式な教師として麻帆良学園に迎えるための課題として、このクラスの最下位脱出が条件となりました。流石に来たばかりのネギ少年を『はい。さようなら』なんて後味が悪いので、皆さんには勉強してもらいます。ではネギ少年、後は任せましたよ」

「はい」

くそっ

真面目な話をする

改まって言う癖が治せない

「という訳で皆さん協力して下さい。お願いします」

「は〜い」

「ではなにかいい勉強法とかありましたら手を「はいは〜い」ではまき絵さん」

「英単語野球拳がいいと思います」

「それいいですね。ではそ「待てやネギ少年」…?」

俺はネギ少年の発言を止めて
まき絵を見た

「まき絵。知ってて言ったよな。俺は三回までは許すから見逃してやる。それとネギ少年」

今度はネギ少年の方を見る

「まだ日本に来て分からないことがあるかもしれないけど、野球拳の意味はわかるか？」

「野球でなにかするんですよね？」

「はあゝ。いいですか…。野球拳というのは――」

少年説明中

「――なんです。わかりましたか？」

「ごめんなさい。何も知らずに決めようとして」

「言っただろ。俺は間違いを三回までは許すってな。そんじゃ、気を取り直して勉強するか」

「はい！」

こうしてネギ少年の
険しい道が始まった

オレにとってはどうでもいいがな…

それなりに見守るとするか

第二十話／やる気があれば試験の一つや2つ、乗り越えてみんなしゃい（後書き）

書くことが無いから

現在、主人公が使えるメモリの紹介。所持数は15本

サイクロン『疾風の記憶』

ジョーカー『切り札の記憶』

ヒート『灼熱の記憶』

メタル『闘志の記憶』

ルナ『幻影の記憶』

トリガー『狙撃者の記憶』

フアング『牙獣の記憶』

アイスエイジ『氷河期の記憶』

アクセル『加速の記憶』

トライアル『挑戦の記憶』

エンジン『始動の記憶』

現在、登場したメモリは11本

登場していないメモリは4本

作者

「やっぱり、あとがきですることじゃねえ！」

第二十一話／鏡の世界のライダー 地下にいるゴーレムと観察処分者の召喚獣は

人は斬っちゃいけないけど

ゴーレムは斬ってもいいんだよ

期末試験にむけて

我が二年A組を勉強を始めた

コレは明日の天気が

大きく崩れることを表しているに違いない

だが、現実と酷く

今日の天気は快晴である

「…という訳なので、忍先生について来てほしいのです」

「夕映吉君。なにが『…という訳なので』なんだ。きちんと読者に
もわかる説明をしてくれ」

「メタ発言は止めて下さい。できれば作者に言うのが普通です」

（ゴメンナサイ）

「そうですね…。なら最初から説明するです。私たちは今回の期末
試験でネギ先生をこの学校に留まらせるために勉強してるわけですが、
時間が無いので図書館島のどこかにある。読むだけで頭が良くなる
と言われている魔法の本を探しに行くのですが、ネギ先生だけでは
不安なので忍先生にも協力してほしいのです」

「説明ありがとう」

馬の耳を付けたら
東から風がFuーFuー
んなわけねえだろおい！

「夕映吉君。悪いな電話だ」

ピッ

俺が電話に出ると
時間が止まる

『なんすか神？』

『実はの、そろそろ新しいライダーに変身してもいいと思っ
てのカバンに転送しといた』

『あんがとよ』

『またのい』

ピッ

電話を切ると
再び時間が動き出す

「あれ？忍先生。電話はいいんですか？」

「無視していい奴だったからな」

「そうですか。さっきの件、よろしければ放課後、図書館探検部の
とこに来て下さい」

「わかったよ」

「失礼します」

そう言い夕映吉君は
職員室から出て行った

「新しく使えるようになったライダーは…」

俺はカバンを探ると
黒い長方形でカードが入っているホルダーを見つけた

「仮面ライダー龍騎か」

『仮面ライダー龍騎』

平成仮面ライダー第三段
鏡の中の世界

ミラーワールドで12人いるライダーで最後の1人になるまで戦う
物語

その劇中に出てくる主人公
城戸真司が変身するライダー

それが龍騎である

「鏡がないと変身できないけど、結構強いからな」

そう仮面ライダー龍騎の必殺技は歴代仮面ライダーのなかでも、トップクラスの破壊力を持っている

変身方法は鏡（姿が写る物）に向かってホルダーを向ける
すると鏡からベルトが現れて装着されるので、そこにホルダーを入れて変身するのである

「個人的に龍騎は好きだったし何かあったら使うか」

俺は放課後

図書館探検を楽しみたかったので
今日の仕事をカカツと終わらせる

昼休み中に片付いたけどな

そして放課後

「うーす。来てやったぞ」

俺は図書館探検部の面子が集まっているところにいる

「か、薫先生。ききき、来てくれたんですか／＼／」

「そうだよ、のどか」

「それじゃ、忍先生も来てくれたことですし速く行くです」

「おい夕映吉」

「なんですか？」

俺は夕映を呼び止める
ツツコミ所が多すぎるからな

「ここは図書館だぞ。なんでそんな重装備なんだ？」

そう

いまの夕映は

登山家のような格好している

俺も人のことが言えないがな

ズボンのポケットにはオーズドライバーとコアメダル
後ろのポケットにはカードホルダー
服の内ポケットにダブルドライバーとガイアメモリを持っている

「付いてくればわかるです」

夕映は俺たちを図書館のある一角に連れて行き本棚に登った

「ここには図書館探検部しか知らない抜け穴があります。そこから地下に行くです」

今更だが麻帆良学園に常識は通じないみたいだ

言い渡していたが

今回の図書館探検のメンバー紹介をしたいと思います

- ・綾瀬夕映
- ・早乙女ハルナ
- ・近衛木乃香
- ・宮崎のどか
- ・神楽坂明日菜
- ・古菲
- ・佐々木まき絵
- ・長瀬楓
- ・ネギ少年

そして俺を含めた10人である

「へー。いろんな本があるんだな」

俺は周りの本棚を見て呟いた

『くそみそテクニク』

『それいけ！ばいきんまん』

『ドラゴンボーズ』

『ミラーモンスター大辞典』

『とある科学の超本気砲』

『狩りに生きる』

などのあった

「こんな珍しい本があるなんて…」

「ネギ少年、ここの本は盗難防止の為に……」

カチッ

ヒュン！

ネギ少年が本を取ろうとしたら矢が飛んできた

「トラップが仕掛けてあるから気をつけろ」

「は…、はい」

ここは不思議なダンジョンですか？ 入る度に本棚の配置が変わって
100回楽しめるシステムなんですか？

てか図書館にこんなダンジョン作るなよ

キングクリムゾン

「ふう。ところで夕映吉君。ここはどこなんだい？」

いろんなことがあったけど、なんとか普通の部屋？には着いたがどこかわからない

まき絵がリボンで
人を支えたり

古菲が本棚を蹴り飛ばしたり

楓が落ちてきた本を表情一つ変えずに全て取ったり

ホントいろんろあったよ

そしていま

「そんなこと。知ってるわけないじゃないですか」

場所は知らないらしい
ですよ

この部屋には本が一冊と石像が一体置いてあった

「あ！皆さん、あの本『メルキセデクの手紙』じゃないですか！？」

ネギ少年、いきなり発言すると驚くんですけど

「あれが読むだけで頭が良くなるという本ですか…」

「僕も初めて見ました」

普通は誰も知らんだろ

すると、ネギ少年が『メルキセデクの書』を取ろうとするが

「フオフオフオ。お主、この本が欲しいのかの」

石像が聞き覚えのある声を出して動き出した

なんか英単語ツイスターで全問正解できたらくれるみたいな流れになってるし…

俺は離れた場所で椅子とテーブルを出し紅茶を啜る

どこから出したって？

そんなの気にしたら負けだよ

ズズッ…

「明日菜のおさるー！ー！」

酷いな

明日菜は？だけど

けして猿ではないぞ

…ってアイツらどこいった？

「フオフオフオ。お主も仲間の所へ送ってやるからの」

学園長ゴーレムはハンマーを振り下ろして床を崩す

俺は『博麗霊夢』の能力『主に空を飛ぶ程度の能力』を発動させて
浮き右手を突き出し

『ランマ!』

「フオ! 右手が剣になったじゃと!?!」

「見てんだろ学園長(妖怪)…。俺の力の一部を見せてやるよ」

『未来永劫斬』

「姿が消え——」

「後ろです」

ズガガガガガガ

サァー…

ゴーレムが後ろを振り向くと
無数の斬撃により
砂と化した

「みんな大丈夫かな」

俺はランマにカードデッキを映してベルトを装着する

「変身!」

俺は赤いボディに鎧を纏った
龍を模した姿になった

作者

（飛び込め！）

「やだ！」

作者

（しょうがない…。そんな装備で大丈夫か？）

「大丈夫だ。問題ない」

俺は皆が落ちた穴に飛び込んだ

「作者テメエエエ！」

作者

（ネタは全てを制す）

少年落下中

「このままでは…」

デッキから一枚のカードをとりだし左腕についているドラグバイザーに装填する

「アドベント」

と電子音が聞こえ、無双龍ドラクレッターが現れた

俺はドラクレッターに跨り

そのまま急降下した

第二十一話／鏡の世界のライダー 地下にいるゴーレムと観察処分者の召喚獣は

作者

「私は炉利魂ではありません」

「いきなりどうした↑作者」

作者

「ロリコン司書が次回あたりに出てくる気がする…」

「それとなんの関係がある」

作者

「この前、『アナタは炉利魂ですか？』なんて質問を受けたからだよ（リアルで）」

「どんまい」

作者

「不幸だああ！」

第二十二話／現れた変態！忍竹、刹那と一夜を過ごす（前書き）

携帯ぶっ壊れて

パソコンの画面が割れて

書けなかったぜ

「スウウウウウウウ」

「噴きますよね普通！」

俺は新しくカードを取り出す

「！？なんでこのカードが！」
でも、今はやるしかねえ！

そのカードをドラグバイザーに装填する

「フリーズベント」

すると

ドラゴンが氷の様に固まり
動きを止めた

さらに、カードを一枚装填する

「ファイナルベント」

「一気に決めるぜ！」

俺は跳び上がり

仮面ライダー龍騎の必殺技

ドラゴンライダーキックのモーションに入った

「でいやあああ！」

「G y a a a a a a a a a a a a a a a a !」

ズドン！

ドラゴンは断末魔のような声を上げて倒れた

パチパチパチパチ

『凄いですね。まさかこの子が倒れているなんて』

今度はフードを被った奴が出てきた

「警戒しなくても大丈夫ですよ。学園長に頼まれて、ここにいる生徒の皆さんを保護しに来ただけですから」

「そう…」

「ところで、アナタは何者なんですか？先程のアレは魔力を感じませんでした」

答えに困る質問だな

てか何を考えてんだ？

学園長（妖怪）がらみなら

俺のことを調べない約束を知っているはず

俺は『古明地 さとり』の能力『心を読む程度の能力』を発動させる

（アナタの半生、収集させて頂きますよ…）

「悪いな。俺の記憶はやらない」

「!？」

心を読まれて驚いてんの

勝手に人の過去を覗こうとするからだ

俺は『古明地 こいし』の能力『無意識を操る程度の能力』を追加して、無意識に収集を止めさせる

「フッフ…。アナタは心が読めるのですか？」（スク水はやはり白ですよね？）

「確かに白だな」

「わかってますね」

「もちろんさ」

なんか話が弾んじゃって
困った困った

くるくる　時計の針　　♪
くるくる　頭回る　　♪

「すまないクウネル」

「いえいえ。構いませんよ」

ピッ

『おお。忍君！今どこにいるのじゃ』

『えーとですね』

俺はフードの男性もとい
クウネル・サンダースの方をみると

【図書館島の地下】

カンペを出してくれた
ありがとうクウネル

『図書館島の地下にいます』

『そうであつたか』

『何かあつたんですか？』

『いやの、実は忍君に木乃香の護衛のためにいてもらおうと思つて
の』

『クウネルさんじゃダメなんですか？』

『お！お主らいつの間にか知り合つたのかの』

『ついさっきです』

『そうであつたか。話を戻すが一応、念には念を入れようと思つと
つたんじゃ』

『ネギ少年がいるんですし、クラスのこともあるので俺は帰っても

良いと思いますよ』

『それもそうじゃな』

『では』

ピッ

「という訳で、出口を教えて貰ってもいいですか？」

「ええ。あちら滝の裏側にエレベーターがありますのでそこから地上にでれます」

「ありがとうございます。ネギ少年とクラスの奴らを頼んだぞ」

「安心してください」

「そんじゃ。また来るわ」

「お待ちしております」

エレベーターに向かう途中

またゴーレムがいたから

『瞬獄殺』で破壊した

次の日

俺は学園長室に向かった

ガチャン

「入りますよ」

そこには包帯で全身を巻かれていた妖怪がいた

昨日のことを聞かれただけで

他はなかった

「でネギ君は大丈夫そいかの？」

「そうですね。腕に線があったぐらいで特には」

「そうであったか。すまんの呼び出したりして」

「こちらも仕事なんで、失礼しました」

俺は学園長室を出た

く二年A組く

ガラガラ

「はいみんな席に着け。HRを始めるぞ」

出席を確認

「えー。みんなに伝えることがあるからよく聞け。ネギ少年を含むバカレンジャーと図書館探検部の9人が居場所のわかる行方不明になった」

「先生！それはどういうことですか！」

「落ち着け雪広委員長。行方不明とはいったが、居場所もわかるし安全も確保されている。お前らは期末試験に向けて勉強しろ」

「ですが――」

「雪広委員長。もお前が今、勉強してないが故にネギ少年が麻帆良を去ってもいいのか？」

「それは…」

「わかってるなら構わない。でだな、お前らがちゃんと勉強しているかどうかをチェックさせてもらう為、テストをしてもらう」

「「「え」」」

「今から喋ったやつ、チョークだぞ」

……………

俺はテストを配る

「制限時間は10分、始め！」

少し時間があるから

まだ紹介してないクラスメイトを教えよう

まずは出席番号一番

相坂さよ

幽霊生活60年

見えてないふりをしてますが本当はしっかり見えていますよ

出席番号五番

和泉亜子

男子中等部

サッカー部マネージャー

出席番号六番

大河内アキラ

水泳部のエース

高等部に声をかけられる程の実力を持っている

出席番号七番

柿崎美砂

コース部

まほらチアリーディング

彼氏がいます

出席番号九番

春日美空

陸上部

キリスト教徒で

登下校時にシスター服を着ている。色は黒い

ベランダに倒れてたりしてないか心配である

出席番号十番

絡繰茶々丸

意外にも紹介してなかった

茶道部 囲碁部

見る限りはロボットだが
俺は立派な人間だと思う

出席番号十一番

釘宮円

まほらチアリーダーイング

まつ屋の牛丼が好物らしい
こんど奢ってやるか

出席番号十三番

こちらも意外

近衛木乃香

占い研究部 図書館探検部

学園長の孫

高校卒業したら、とある理由で俺の結婚相手になるかもしれない

出席番号十四番

早乙女ハルナ

漫画研究部 図書館探検部

毎月締め切りに追われている

そのため修羅場には強い

俺にアシスタントを頼むこともしばしば

おっと、そろそろ時間だな

5…4…3…2…1…

「時間だ。全員ペンを置け！命乞いをしろ」

いけない

遂、ムスカ口調になってしまった

俺はテストを回収し

採点を始める

………

………

…

「んじゃ返すぞ。今回も満点は二人いる。超と葉加瀬だ」

そして

テストを返す

「全員、前より点数は良かったが油断しないように。わからないことがあれば放課後、管理人室に来ていいからな。それから刹那」「はい」

「刹那は今晩、管理人室に来るように」

「な、何故ですか？」

「『麻帆良戦隊バカレンジャー』予備軍…」(ボソツ)

「うう…。わかりました」

「それじゃ、チャイムが鳴るまで静かに自習」

「「「え」」」

「つべこべ言うな。木乃香からの連絡で向こうはだいぶ良くなっているみたいだぞ。このままだとバカレンジャーは交代になるかな？」

「「それは嫌！」」

「なら頑張れ。俺も協力してやるから。では自習開始」

各々、自習を始める

「……………(クイックイックイック)」

出席番号三十一番

ザシ・レイニーデイ

通称ザシさんが手招きしているので向かった

「で、どうした？」

「……………」

「ああ、下線部についての具体例を答える問題は、下線部のある文の前後に答えがある場合が多い。全体を見るより前後で探した方が得策だ」

「……………（コクッ）」

よし、良い子だ

俺は頭を撫でてやった

同時刻

図書館島地下

「ラブ臭キターー！」

「いきなりどうしたんですか？」

「ラブ臭がするわ」

「そうですか。では静かにして欲しいです」

「……夕映が冷たい」

場所は再びA組

キンコーン

「はいみんな。今日の授業はここまで、少ししたらHRを始めるぞ」

俺は教室を出て木乃香に電話をかける

『もしもし?』

『木乃香。俺だ』

『薫先生やったか。どないしたん?』

『いや、そっちの状況が気になってな』

『そうなんや。こっちは大丈夫やで』

『ならよかった。ネギ少年に伝えたい欲しいことがあるんだが』

『ほな、替わるからちよっと待っとつてな』

『もしもし。ネギです』

『おおネギ少年。元気か?』

『はい。元気ですよ』

『そうか。でだな、伝えたいことがあるからよく聞けよ』

『わかりました』

『テストの日は絶対に遅れないように、そっちのメンバーだとありえそうなので』

『ははは…気を付けます』

『じゃ頑張ってね』

ピッ

ガラガラ

「よし、H Rを始めるぞ」

あっちはあっちで良くやってくれてるから負けられんな

放課後

女子寮管理人室

コンコン

『桜咲刹那です』

「いま開けるよ」

ガチャ

「さ、入って入って」

「では」

刹那を部屋に入れて
鍵を閉める

「どどど、どうして鍵を閉めるのですか！」

「決まってるだろ。誰にも邪魔されたくないからな……。もしかして
刹那は——」

俺は刹那の耳元で

「見られていた方が興奮するのか？」

そう囁いた

「あの！その！ええーと……／＼／」

こんなに慌てて可愛いなあ
ちょっと心を見してみるか

（どないしよう／＼／ウチやっぱり断った方がええのかな？でもこのまま先生と2人つきりでしたらへピーー／＼なことされてしまうんか／＼／ウチ初めてやし先生なら優しくしてくれるはず……ってウチは何を考えとるんや！別に初めてが先生だと嫌と言うわけやないし／＼／むしろ嬉しいといえますか——）

ダメだ

早くなんとかしないと

ツ―

「ひゃい！」

俺は刹那の背中をなぞった

「おい刹那。そろそろ羽をもふるぞ」

「それだけは」（してほしいような、そうでもないような）

「それなら早速勉強だ」

刹那をコタツに入れ

ホワイトボードを出し文字を書く

『薫式英単語道場』

もちろんアレだ

「みんなグッモーニング。そこの君も元気」

「誰に言ってるのですか？」

刹那のツツコミ

しかしダメージが与えられない

「今日の単語はこちら『dream』そうdreamは夢。良い言葉だなぁ夢って。夢は君を動かす原動力なんだよ！さあ、いい夢を見よう」

zzz…（刹那）

「だからと言って、授業中寝てる奴があるかぁ！」

「すすすみませんでした！」

「次の単語はこちら『Passion』情熱だよ。この体から溢れる熱い思いだよ！君にもあるよPassionあるよ！情熱持つて探してくれ」

………

………

………

…

とまあこんな具合でやっているうちに時計は01時を指していた

「んー。もう遅いし泊まってけ」

「流石にそこまでしていただくのは…」

「パジャマ姿で言っても説得力はないぞ。むしろ泊まっていくき満々だろ」

刹那はここで寝る気だ

さて、どうするか？

ポクポクポク……チーン！

いいこと考えた！

「そうだな。もう遅いし一緒に寝るか」

「そうですね…って！ええ／＼／＼」

「なにか問題でも？」

「ありますよ／＼／＼一緒に寝るって言うことはその…」

「ええい！問答無用」

「ニャアアアアアアア！」

俺は刹那を抱いて
ベットにINした

抱いてといっても
抱き枕にすることだよ

「おやすみ刹那」

「ちよっ、ちよっと待って下さい。これはその」

「zzz…」(糸目)

「寝てる…」

諦めたのか刹那は声を上げなくなり俺と向かい合った

ギュッ

背中に手を回され抱きつかれ足を絡めてきた

この状態を世間一般では抱き合っていると言うのだろうか？
リア充は毎夜毎夜こんなことしているのか！羨まけしからん

このまま観察するのもいいが寝るか

刹那に1対1でわかりやすく噛み砕いて教えていたから疲れてるんだ

部活と裏の仕事があつて

なかなか勉強できないとは言っているが真名を見習ってみろ

アイツはバイ○ハザード部？などという凄い名前の部活にはいつているのに成績がいいじゃないか

そのうえ…………

駄目だ

マジで眠くなってきた

おやすみなさい

〽次の日〽

目を覚ますと

刹那の顔が入り込んだ

少し近づけばキスできる距離である

（やっちなまえよ！刹那はきっと待ってるぜ）

出てくるな俺の悪魔！

（そうです。ここは耐えるべきですよ）

おお、流石は天使

（いいじゃねえかキスぐらいしたってよ）

（何を言ってるのですか？）

え！？

天使さんこそ何を…

（ここは刹那が起きた時を狙ってキスをするのです）

そういうことなの

（そして、頭が目覚めてないので舌をへピーー〜してから下着を脱がし片手でへピーー〜をもう一方でへピーー〜をさわり充分にへピーー〜したところで自分のへピーー〜をへピーー〜にへピーー〜腰を動かしs）

シエルブリットォ！

（（プギャー））

ひとまず二体とも消せたぜ

さてと、準備するか…

とまあ

こんな具合で期末試験当日

ネギ少年達及び

図書館島地下グループは

俺の言いつけ通り

遅刻せずに来た

「ようネギ少年おはよう」

「忍先生。おはようございます」

うむ。挨拶は一日にしてならず。いい心掛けだな

「ネギ少年、そっちどうだった？」

「みんな頑張って勉強してくれましたよ」「そりゃよかったな」

ネギ少年自身も必死だからな

その熱意が伝わったんだろ

ある人は言った

『諦めようとしてるアナタ。無理だ、諦めようとしてるんじゃないですか？なに言ってんだよ！その崖っぷちが最高のチャンスなんだ。自分の全ての力を出し切れるんだから！崖っぷち…ありがとう！』と

俺はとりあえず期末試験の注意事項を話す

「これから期末試験を始めるが、勿論のことカンニングは即0点にしたうえ教室から出てもらう。まあそんなことはしないと思うから期末試験頑張れよ」

キンコーン

「それじゃ、開始！制限時間は50分」

キングクリムゾン！

「あ、ありのまま起こったことを話すぜ…。期末試験が始まったと思ったら結果発表の日になっていた。既に丸付けも終わらせてあった。タイムスリップとか時間跳躍とかそんなちゃっちなもんじゃねえ…。もっと恐ろしい何かしらの鱗片を味わったぜ」

『最下位 二年A組』

「そ、そんなあ…」

隣でネギ少年が崩れた

無理もないか

必死こいてやったのに

最下位から抜け出せ無かったんだからな

俺は携帯を取り出し

な、に、ぬ『ぬらりひょん』

学園長に電話した

ガチャ

『どうしたんじゃ忍君』

『あんさ、何ヶ所か採点ミスしてるぞ』

『そんな筈は…』

『まあ見てみんしゃい』

そして数分後

未だにorzしているネギ少年

二年A組の生徒も集まってきた時、スピーカーの電源が入る

「ネギ少年。希望は捨てちゃいかんざき」

「それはどういことd」

『学園長のミスにより再計算が行われましたが、やっと結果が出ました。なんと…平均点84.6点で二年A組が優勝!!!』

「だろ」

そして、ネギ少年が正式に教師となった

余談であるが

朝倉ルートでトトカルチャに参加し二年A組に食券を150枚賭けたのでボロ儲けした

第二十二話／現れた変態！忍竹、刹那と一夜を過ごす（後書き）

龍騎でのカード

アドベント

ソードベント

ガードベント

ストライクベント×2（龍騎、タイガ）

フリーズベント

タイムベント

コピーベント

シュートベント

ファイナルベント×3

（龍騎、ナイト、王蛇）

サヴァイブはまだ先になる

第二十三話／春休みに入ると俺の眠気がマッハなんから、事件を起こされると田

春休みに入りましたが、事件発生です

第二十三話／春休みに入ると俺の眠気がマッハなんから、事件を起こされると田

アキラ視点

皆さんこんにちは

大河内アキラです

3月24日 期末試験を終えた二年A組は、それぞれ春休みを過ごしています

私はこの休みを利用して
プールで泳いでます

「ふー。そろそろ帰るか」

最近、日が沈むのが遅くなって長い時間泳いでいると暗くなっていることがある

寮の門限を過ぎないようにしているけど遅くなってしまう

私は帰りの支度をして

寮に戻った

「ん？なんだろうこれ？」

帰っている途中

『O』と書かれた水色のメモリ？にしては少し大きい物を拾った

私はそれを持って帰ってた

アキラ視点終了

三人称視点

3月27日

この日、麻帆良学習二年A組副担任である忍竹薫は学園長室にいた
「で、なんの用ですか？内容によってはその頭を削って新学期最初の麻帆良新聞の一面を飾って貰いますよ」

確かに一面を飾れますね

「そこまで言わなくてもよいじゃろうに、ワシ泣いていい？」

「いい年した爺さんが泣くなよ」

てか内容を話せよ

「そうじゃった！」

「学園長（妖怪）。地の文は聞こえない、コレは暗黙の了解。でも内容は話せ」

そうそう

「うむ。実はの…」

「勿体ぶらずに言っちゃえよ」

「言い難いのじゃが。こういった事件は忍君に頼むのが一番じゃし」

「ドーパントですか？」

学園の裏に関わる人はMDの件でドーパントの存在を知っている。
魔法が効かないのでタカミチに頼む方が多いがMDの時みたいなのは居合い拳を使うと被害が広がるので頼れるのは薫しかないのだ

「そうじゃ。昨夜ガンドルフイーニ君が戦闘を行ったがやられてしまったの、タカミチ君に調査をしてもらっておる」

「で、ガンちゃんは相手のこと、なんて言ってた」

「姿はよう見えなかったみたいだが体型から中学生位らしく、攻撃は水を使うと言っていた」

「そうか。それだけ分かれば充分だ」

「では頼んだぞ」

そして薫は学園長室を出た

「春眠暁を覚えずという名言を知らんのかあの妖怪は」とても眠たそうです

～三人称視点終了～

女子寮管理人室

「まずは犯人の特定から始めるか」

俺は地球の本棚を展開した

「最初のキーワードは『麻帆良』」

ここまでは前回と同じ

「二つ目のキーワード『水』」

本棚が減りはするが

「うーん。やはり『水』ではあまり減らないな」

麻帆良と水に関係するワードはかなりある

「キーワード二つじゃ見つからないか」

俺は地球の本棚を終了しティータイムの準備を始めた

今日は趣向を変え日本茶にしようと思う

忘れている人もいるかと思うので言うしておく

俺は紅茶派である

日本茶や中国茶も飲むが稀なのだ

「今日は日本茶だから餡蜜にしようかな？」

ダッダッダッダッ

バダン

『薫先生！今、餡蜜を食べると言わなかったか！？』

来たよ餡蜜大臣龍宮真名

「言っただけどやらんよ」

すると真名は銃を向けた

「いくら脅してもやれないな。物事には頼み方というものがあるだろ」

真名は銃をしまう

俺は真名の心を読む

面白そうだから

「それはそうだが…」

（あ、餡蜜…）

「ほれほれ、早く言わないと一人で食べちゃうぞ」

「あっ…」

（くっ！何故だ！一言だけ言えばあの餡蜜が食べられるのに、恥ずかしくて言えない／＼／＼）

「どうした？たた『餡蜜を食べさせて下さい』と言えばいいんだがな、なにも言わないのならば…」

「餡蜜を……下さい」

「ん？聞こえんなあ」

プルプル

「餡蜜を食べさせて下さい……グスッ」

（何故か凄く恥ずかしい／＼／＼）

流石にやりすぎたか

少し泣いてるし

そこまでして食べたいのか

「最初から素直にしてればいいものを…、入れ」

俺はコタツに脚を入れる

テーブルの代わりに掘りコタツを置いている

みかんは常にある

真名は向かいに座った

「はい真名。あーん」

「いや…、流石にそれは／＼／」

褐色の肌を赤く染めて恥ずかしがって真名が可愛い

「『食べさせて下さい』って言ったのは誰かな？」

「……………」

俯いてしまった

「それとも、口移しがご希望かな？」

「それは、ムグッ!？」

真名が顔を上げると同時に
スプーンを口に入れる

「美味いだろ」

プルプルプルプル

「……………」 (恥ずかしい／＼／)

「ほら、あーん」

「んんー〇×▽☆Y?@!」

二口目を運んだら

声にならない悲鳴?を上げて出て行ってしまった

真名視点

ハア…ハア…ハア…

わ、私は何を恥ずかしがっているんだいるんだ

たかが餡蜜を…

『口移しがご所望かな？』

………
／／／

あんなこと言われたら誰だってこうなる！そうに決まっている

それにあのスプーンはさっき薫先生が使っていたみたいだし…

それは関節キスではないか！？

何故だ！

普段の私ならどうにもならない筈なのに、どうしてこんなにも恥ずかしいんだ

まさか私は薫先生の事が…

真名視点終了

三人称視点

真名が飛び出した管理入室
一人取り残された薫は

「餡蜜うめー」

餡蜜を食べていた

その時

ふわふわりふわふわる 〴〵
アナタのことを思うそれだけで宙に浮かぶ 〴〵
ふわふわりふわふわる 〴〵
アナタのことを思うそれだけで笑顔になる 〴〵

突如、恋愛サーキュレーションが流れた

ピッ

『はい?』

どうやら薫の着信音みたいだ

『おお忍君』

『なんですか？学園長（妖怪）』

『例の事件、新しい情報が入ったんじゃ』

『へー。で？』

『一つ目は相手の正体が女性だということじゃ』

『一つ目ってことは二つ目もあるのか？』

『あるといえはある。なにやらUSBメモリのような物を使っていたらしい、そのことを踏まえてやはりドーパントじゃろ。その時の姿はシャチのような頭をしていたみたいじゃ』

『そうか、あんがと』

『では引き続き頼んだぞ』

ピッ

電話を切ると

薫は地球の本棚に入った

三人称視点終了

「検索を始めよう」

今回も犯人の正体を探る

『麻帆良』と『水』は既に検索済み

「三つ目のキーワード『女性』」

残った本棚が半分以下になる

「あと一つなんだがな…」

思い出せ…

なにかあるはずだ

『体型は中学生ぐらいらしい』

ふとガンちゃんが言っていたらしい事を思い出した

「まさかね」

俺は最後のキーワードを入れる

「最後のキーワードは『中学生』」

すると、本が一冊だけになったのだが読みたくなかった

読んではいけない気がしたからだ

でも…

俺は本を読んだ

「嘘だ！そんなはずない！アイツがそんなことを！有り得ない！有ってたまるものか！」

最後に残った本

そこに書かれたタイトルは

『Akira Okouchi』

俺の生徒の名前だった

第二十三話／春休みに入ると俺の眠気がマッハなんから、事件を起こされると困

仮契約したとしても

アーティファクトとかどうしよう。（主人公のは決まっています）

てか、誰に従者にするか：

第二十四話／「どうして生徒をドーパントにしたんですか？作者ましでぶっ飛

携帯で書いているから

指が痛い

第二十四話／「どうして生徒をドーパントにしたんですか？作者ましでぶっ飛

.....

.....

.....

...

俺は信じたくなかった

アキラがドーパントだったなんて...

だが地球の本棚の情報は正確であるが故

それが真実だった

「一度話してみるか...」

出来れば避けたかった

話さなければアキラは普段の生活をしていられる

しかし、話してしまうと

コチラ側の人間になってしまう

できることなら

誰一人として裏には関わってほしくない（一部例外を除いて）

和美はMDの時

ショックであまり覚えていなかったから記憶を封印するという形で収まった

でも今回は

アキラの記憶を消すしか方法がない。俺はたとえどんな理由であっても記憶を消したくはない

空白の記憶を作ってほしくないからだ

とはいえ、一つ気になることがあったのを忘れていた

普段のアキラは

コレといって変わったところはない

それは、メモリの毒素にやられていない事と適合率が高いのを示しているのと同時にドーパントになっても自分の意志で行動ができる

だとしても

アキラが自分から人を傷つけることなんてしない

これらの考えから推測すると

操られている可能性がある

「まあ、そうだとしてもアキラがメモリを所持しているのは確かか
…」

俺はアキラに話を聞くため外に出た

野菜少年視点

なんとか最下位を脱出できて
僕は正式に教師になれた

明日菜さんに魔法がバレたけど秘密にしてもらえた

それにしても
最近変な噂があるなあ

シャチの頭をした怪物が出てくるなんて

実際にガンドルフィーニ先生が怪我をしたっていうし…

僕が生徒を守らなくちゃ

そうと決まれば

僕はその怪物を探しに出掛けた

あれは…

忍先生！

確か忍先生は魔法について知らないはず
追いかけないと！

野菜少年視点終了

作者

「二度とないと思うよ」

野菜少年

「ええっ!？」

俺はライドベンダー（次からベンダー）に乗り
水泳部のいると思われるところを向かっている

電話が繋がらないので
おそらく泳いでいるのだろう

となれば…

（麻帆良学園某所）

俺はベンダーをプールまで走らせている途中

世界樹広場のベンチに座っているアキラを見つけた

「よおアキラ。こんなところでどうしたんだ？いつものお前ならプールで泳いでいる筈だろ？」

アキラは顔を上げて

「あ、忍先生……」

素っ気ない返事をした

「隣、いいか？」

「はい……」

俺はベンダーをベンチの後ろを停めて、アキラの隣に座る

「……いい天気だな」

「そうですね」

「にしてもどうしてここにいるんだ？」

「……………」

「そうか、なら話さなくてもいいぞ」

「あの」

「どうした？」

「実は私、水が怖くなったんです…」

「何故」

「信じてくれないかも知れませんが、聞いて下さい」

「ああ」

「最近、噂になっているシャチの頭をした怪物は知ってますよね」

「……………」

「その正体は私なんです」

「…そいつはいきなりだな」

「すみません。でも、体が言うことをきかないんです。意識がはっきりしてるのに、自分が自分じゃ無いみたいにな…」

「で、アキラはどう感じた？」

「心が締め付けられるみたいに苦しくなりました」

「優しいんだな」

「どういう形であっても、私が傷つけてしまったので」

「そうだ！一つ聞いていいか？」

「なんでしょうか？」

「少し大きめなメモリを拾わなかった」

「…はい」

「今、どこにある」

アキラは胸に手を置き
俺を見る

「私の体の中です。、」

コイツは厄介だな
メモリが抜けなくなってる
このままだとアキラの命が…

「よし！俺がなんとかしてやろう！」

「無理ですよ。第一、どうやって——」

俺は人差し指をアキラの口に当て言葉を遮った

「いいか、よく聞くんた。メモリを体から出す事はできる。だが、それは死を意味する」

「!?!?」

「メモリの出し方を説明する。あまり言いたくはないが、アキラに一度死んでもらう」

「そ、そんな…」

「まあ落ち着け、俺は『一度死んでもらう』と言ったんだ」

「えっ!」

「それで、メモリを取り出したら生き返らせる」

「出来るんですか!?!」

「確率としては50%」

「…もし、失敗したら」

「メモリは取り出せるが、アキラは死ぬ」

「怖い…」

「そうだな。でも俺も信じてほしい。絶対に成功させる」

「…わかりました。私、先生を信じます!」

「よし!それじゃ、今から始めるが、絶対に目を開けるなよ」

「はい」

俺はダブルドライバーを装着してメモリを入れる

《サイクロン ジョーカー》

そして、サイクロンメモリを腰の右側に付いている挿入口に差し込む

《ジョーカー マキシマムドライブ》

風の力で宙に浮き

『ジョーカーエクストリーム』（威力最小）

必殺技を打ち込む

（決まった！）

「僕の生徒に手を出すなあ！」

雷を纏った竜巻によって遮られた

野菜少年視点

作者

「よかったな。また出番あって」

「はい」

僕は忍先生を探しています

どこに行っただろう？

ん？あれは大河内さんと…

な、なんだ！あれは！

大河内さんを襲っている！助けなきゃ！

「ラス・テル マ・スキル マギステル 来れ雷精、風の精！！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐 雷の暴風！！！！」

僕は大河内さんと黒と緑の半分この怪物との間に入り『雷の暴風』を放つ

「僕の生徒に手を出すなあ！」

僕は半分この怪物と向かい合う

『うう…』

すると、後ろから声がする

『あ、頭が…』

目測だが

アキラの中にあるメモリは

『オーシャン』

大海原の記憶を内包したメモリだろう

ランクは『マグマ』の上をいく強力なメモリである

「クフフ…」

アキラはネギ少年に水流をぶつけぶっ飛ばす

「ぐ、あ」

「今度はなんだ！」

ネギ少年をぶっ飛ばし俺の方を見ると動きを止め
姿を変えた

その姿はシャチの頭をした青い怪物

仮面ライダー〇〇〇に登場するグリード
メズールの姿をしていた

「…アキラだよな」

「そうですが…。アナタは誰ですか？」

会話ができるが
体をメモリにもってかれてる

「ただの通りすがりだ」

俺はジョーカーメモ리를 트리거 메모리에 変える

《サイクロン 트리거》

黒かった部分、青くなり右手に銃を構えてアキラを撃つ…
今はオーシャンドローパント(OD)だったな

俺は風の弾丸を放つが

ODは水の弾で防ぐ

サイクロントリ거は連射と弾速速いから俺の方が有利

「はああああ！」

ODは波を出し

風の弾丸ごと俺を飲み込もうとする

ODの姿が見えなくなると俺はダブルドライバーを外し、オーズド
ライバーを装着してメ달을 스킴하는

《ライオン 트라 치터》

라트라이터 라트라이터

変身と同時に波に襲われた

アキラ視点

忍先生は目を瞑っていていろいろいったけれど……

「僕の生徒に手を出すなあ！」

私が目を開けると

ネギ先生と左側が黒で右側が緑の人？がいた

その人？を見た途端に

私を激しい頭痛が襲った

「...」

「あ、頭が…」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「あああああああああああああああああああああああ
あああああああ！」

私の体が勝手に動く

駄目！

ネギ先生、早く逃げて

でも、私の声は届かず

私はネギ先生を傷つけた

すると半分こ怪人さんが

「…アキラだよな」

そう聞いてきた。この声は忍先生！

「そうですが…。あなたは誰ですか？」

「ただの通りすがりだ」

半分こ怪人さんは黒かった部分が青くなり銃を私に向け、撃ってきた

私の体は水の弾で防いでいるが、徐々に押されている

「はああああ！」

私の体は波を出して、ネギ先生と半分こ怪人さんを飲み込もうとする

誰か：

私を止めて！

《ライオン　トラ　チーター　ラトラター　ラトラター　ラトラター》

妙な歌が聞こえ波が消えた

アキラ視点終了

三人称視点

波が薫と野菜少年を飲み込もうとする

波を避ければ野菜少年が飲み込まれ野菜少年を助ければ、薫が飲み込まれる

薫はダブルドライバーからオーズドライバーに変えラトラーターコンボに変身し、強力な熱戦『ライオディアス』で波を蒸発させた

ODは『ライオディアス』を喰らい体から灰色のメダルがこぼれ落ちる

「あれはセルメダル！」

薫は驚きを隠せなかった

セルメダルというのは

仮面ライダー○○○の劇中にてヤミーというものを作り出すために使われる灰色のメダルである

グリードの体を構成しているのもセルメダルである

劇中でもメズールは『ライオディアス』には弱かった

薫は一つの結論をだした

セルメダルを削ればメモリが出るかもしれない

ODは動きを止め

「忍…先生…」

そう言った

「アキラ！」

「！？何故だ！何故話せる！」

ODは驚いている

「忍先生…。早く私を「辞めろ！この体がどうなっても」私を倒して下さ「アンタはすっこんでろ！」早く！」

まるでアキラの中に二人の人格があるような光景であった

「アキラ…。痛いけどちょっと我慢しろよ」

《スキャニングチャージ》

ラトラーターの前に三つのリングが現れる
それを潜り抜けODをトラクローでX字に切り裂いた

「ぐあああ！」

ODは大量のセルメダルを出して爆発した

ラトラーターはアキラの体から飛び出したメモリは切り裂いた

三人称視点終了

俺は変身を解除しアキラの脈を見るが…

「止まってるな、無理もないか」

俺はエンジンブレードを取り出しメモリを差し込む

《エレクトリック》

アキラに電撃を当てる

「うっ…」

「目が覚めたか」

「先生…」

俺はアキラを抱きしめた

「良かった…。良かった」

「私…、私…」

「何も言うな。もう終わったんだ」

「うわああああん」

アキラは俺の胸で泣いた

「もう大丈夫か？」

「はい」

俺はアキラに向き合った

「落ち着いて聞いてくれ。今、アキラはこの事件で選択をする事になった」

「それは」

「一つは魔法を知り裏の人間になるか。もう一つは記憶を消すか封印して普段の生活に戻るか」

「裏の人間になるって？」

「そうだな。簡単に言うと、いつ死ぬかわからなくなる。それに普段の生活に戻れなくなる」

「…私は、みんなと離れたくない」

「そうか…」

俺は記憶の境界を開いてアキラのODに関する記憶を封印し始める

「忍先生。ありがとうございました」

「これから薫先生と呼ぶんだな」

「はい。薫先生」

記憶を封印するとアキラは倒れた

俺はアキラとネギ少年を担いで女子寮に帰った

第二十四話／「どうして生徒をドーパントにしたんですか？作者ましでぶっ飛ば

遂に始まった新学期

新たなる事件発生

桜通りに現れし吸血鬼

副担任はどう動くか

次回！

新学期！桜通りにご注意を

但し、タイトルは変更される場合があります

第二十五話／いろいろぶち込んだ結果、長くなってしまった。今更だがどうして

いろいろぶち込んだ結果がコレだよ。gdgdになりました

作者『観覧注意報を発令します』

第二十五話／いろいろぶち込んだ結果、長くなってしまった。今更だがどうして

（麻帆良某所）

そこには黒髪の男性と金髪と緑色の髪をした女性の三人いた

「……………」

「……………！」

「！？……………」

何かを話していた

「……………というわけなのだが、一枚噛んでもらえないか？」

「楽しそうだな。あの妖怪の事だから、十中八九ネギ少年に俺の正体を暴かせようとしているに違いない」

「今度の大停電を時に、実行する予定だ」

「その日じゃないといけない理由でもあるのか？」

「ああ。私には忌まわしき呪いがかかっていてな、この麻帆良を覆っている結界のせいで魔力が抑えられているんだ。大停電の日は結界が消えるからな」

「で、その呪いとネギ少年にはなんの関わりがあるだ？」

「そうだったな…。実はこの呪いは坊やの父親がかけた呪いでな、そやつは十年前に死んでしまったの。その血縁である坊やの血で呪

いが解けるのだ」

すると、これまで喋らなかった一人が口を開けた

「マスターはその呪いのせいで何回も中学生を繰り返しているのです」

「それはお気の毒に…」

「他人事みたいに言うではない！」

「マスター、他人事ですよ」

「そうだぞ。俺には関係ないんだからな。それと、お茶のおかわり」

「少々お待ち下さい」

緑色の髪をした女性に席を外した

「あのさ」

「なんだ？」

「こういう雰囲気も大事だと思うんだが、なんか堅苦しいからやめるは。疲れるし」

「うおい！雰囲気は大事だろ！さっきまで悪役みたいな感じだったのに貴様のせいで台無しになったではないか！？」

「ええー。だってこの作品の主人公は俺だし…。読者も既に気づい

てるから」

「メタ発言は自重しろ！」

「五月蠅いぞ。エヴァ」

「名前を出すなあ！」

そう

この場にいる金髪の女性は
エヴァンジェイン・A・K・マクダウエルである

「薫先生。お持ちしました」

「ありがとな茶々丸。結婚してくれ」

「え！？その、私／＼／」

「なに茶々丸を口説いているんだ」

そして…

説明はいらないと思うが

黒髪の男性は忍竹薫

緑色の髪の女性は絡繰茶々丸

「か、薫先生／＼／」

茶々丸は顔を赤くして忍竹を見つめた

「不束者ですが、よろしくお願いします／＼／」

「エヴァ、俺は茶々丸を幸せにする。絶対にだ」

「ウガアアアア！」

いきなりキレた幼女↑最近の子供はよくキレる。キレやすい

「茶々丸はやらん！それより今は、別の話をしている筈だ！」

「そうだったな」

忍竹は呑気だった

そもそも事の発端は30分前…

忍竹視点

俺は新学期の準備をしている

ネギ少年はクラスの最下位脱出どころか第一位にして、文句なしで
正式な教師になった

そんな時

げ、げ、ゲゲゲのゲ

朝一は寢床でぐうぐうぐ

某妖怪アニメの曲が流れた

てか、俺の携帯である

相手は学園長だろう（曲的な意味で）

ピッ

『もしもし？』

『忍君。その曲をワシ専用の着信にするのは、やめてくれんかのお』

『うん。それ無理』

学園長（妖怪）を

どこぞの対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェイスの彼女並みの笑顔で拒否をした。個人的ではあるが、作者は彼女とめがっさの人と機関のメイドさんが好みらしい

サブキャラが好きなようだ
どうでもいいがな

『それより話があるから、今すぐに来てもらえんかの？』

『へいへい』

ピッ

俺は電話を切ると

灰色のオーロラで学園長室に移動する

忍竹視点終了

「伏せろ！」

学園長室に入るやいなや
そう忍竹は叫んだ

学園長は机の下に隠れるが
頭が飛び出している
間違いなく一発だろう

「心臓に悪いのお」

学園長室は机の下から出ながらそう言うが

「お話しようか？」

忍竹は無視する

キングクリムゾン

話を纏めると

新学期に入ったら本格的にネギ少年のサポートをしてほしい
とのこと

その代わりに広域指導員の仕事を無くしてもらったようだ

忍竹は

「仕事が減ったぜよ」と内心喜んでいた

話をおえると

エヴァと茶々丸が学園長室に入ってきた

盗み聞きは野暮なので灰色のオーロラで管理人室に忍竹は戻った

その一時間後

コンコン

「開いてますよ」

ガチャン

「失礼します。薫先生」

「いらっしやい。茶々丸」

茶々丸が管理人室に来た

「マスターが来てほしいとのことなのですが、お時間よろしいですか？」

エヴァ：

自分で来なさいよ

「可愛い茶々丸の頼みだからな、今から行くか」

「か、かわい：い／／／」

茶々丸は頭から蒸気を出す

「ほら。行くぞ」

忍竹が茶々丸の手を掴むと

「先に行ってます／／／」

猛スピードでログハウスに帰ってしまった

「速いなあ…」

取り残された忍竹は
そう呟いていた

くエヴァのログハウスく

ピンポーン

「エヴァよ。茶々丸に呼ばれたから来てやったぞ」

「入れ」

最近素直なエヴァがいた
普段なら居留守を使ってでも
客を追い払う筈だが、そうしなかった
このことから忍竹に用があるのは確定的に明らかになった

「薫先生どうぞ／＼／」

茶々丸は照れながらお茶を出した

「きさま…。茶々丸に何をしたんだ？」

エヴァは若干、怒りを宿した笑みを浮かべて忍竹に聞いた

「なにつてそりゃ、ナニだろ」

「ええい！そこになおれ！氷漬けにしてやる！？」

「マスター。落ち着いて下さい。薫先生はなにもしていませんよ」

茶々丸はエヴァを落ち着かせようとする

「そうなのか！？」

「ええ。私はその……（男性の方と手を繋ぐのは）初めてでしたので……」

「やはり手を出してるではないか！しかも茶々丸の初めてだと！ふざけるなあ！！」

茶々丸の勘違いを招く発言でエヴァの怒りは加速した

「ふむ。確かに茶々丸は綺麗だし、料理ができて、優しくて、質素な感じで俺は好きだぞ」

「／／／」（ポツ…）

茶々丸は頬を赤く染め、手を前で組み、腿をモジモジさせる

「ダッシャアアア！茶々丸はやらんぞ！来い！貴様はこの私がぐちゃぐちゃにしてやる！茶々丸、持ってこい」

エヴァが噴火した

茶々丸は魔法球を持ってきて机に置いた

エヴァが指を鳴らして三人は姿を消した

魔法球内部

「さて、何か言い残すことはないか？」

エヴァは忍竹に聞くと

「茶々丸をくれ！」と答えた

ブチッ

「魔法の射手、連弾・氷の52矢!!」

無詠唱で魔法の射手を撃ってきた

忍竹視点

勘違いが勘違いを生み
エヴァがご乱心である

そもそも俺は教師の前に
18歳の男である

茶々丸がタイプで何が悪い！

そんでもって今は
以前、エヴァと戦闘をした
なんたら魔法球の中にいる

戦いたくはないんだよね：

この際、新しいメモリを試すことにしよう

するとエヴァは

「さて、何か言い残すことはないか？」

なんてきいてきたから

「茶々丸をくれ！」って言っちゃったよ

そしたら

「魔法の射手、連弾・氷の52矢！！」

確か無詠唱だったか

まじでsyれにならんでしょ！

俺はダブルドライバーを装着する

エヴァには悪いがネタで作った対氷結系魔法使いメモリがあるんだよ

俺は両方に赤いメモリを入れる

右側はヒート

左側は：

「変身」

「ヒート ZO」

左右共に赤くなり

エヴァの撃った魔法の射手は蒸発した

それからテニスラケット（パッションネット）を出し構える

「行くぜエヴァ！」

ラケットに黄色のメモリを入れる

「ルナ」

俺は火の玉を打つ

速度は時速120？

普通は避けられないが
流石はエヴァ
簡単に避けてくれる

「ふっ…。そんなのが当たるわけないだろ」

浅はかさは愚かしい…

「リック・ラク・ラ・ラック・ライr…!?!」

俺は詠唱中のエヴァに火の玉（次から炎弾）を打つ

やはり避けられるが

「ガッ！」

背後から炎弾が当たった

コイツはルナメモリの追尾効果が付いてるから避けても意味ないんだよね

つまりエヴァは前後左右からくる高熱の追尾性能付きの炎弾を避けないといけないのだ

「なめるなあ！」

『リック・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ氷精、大気に満ちよ。
白夜の国の凍土と氷河を…。こおる大地…!!』

こりゃ拙いな…

俺はルナメモリをZＯメモリに換える

〔ZＯマキシマムドライブ〕

ヒートメモリを腰のマキシマムスロットに入れる

〔ヒートマキシマムドライブ〕

「ウオオオオオオオ！」

俺の体から炎が燃え盛り

『こおる大地』が届かない

ZＯメモリは遊びで作ってしまったが、その力は本物である

炎はやがて左手の上で球状になり、まるで小さい太陽となった

俺は小さい太陽を上空に投げてジャンプし、エヴァ目掛けてぶっ放した

「メテオプロミネンス！」

小さい太陽は

その大きさを増し

最終的にはまさしく太陽のようになりエヴァに直撃した

「エヴァ！大丈夫か？」

俺は変身を解きエヴァに近づいた

「マスター！」

茶々丸も心配そうだ

「うっ…」

「おい！しっかりしろ！」

「ん…。先生…」

エヴァが目を覚ました

「死ぬかと…」

「ん？」

「死ぬかと思ったではないか！？」

案外平気そうだ

「でさ、茶々丸よ。誤解を生むような発言はよしてくれ」

「なんのはなしだ」

「さっきの原因」

「そうなのか？」

「そうなります…」

「「「……………」」」

「巻いてやる」

エヴァは徐にネジを巻いた

「ああっ／＼／＼ダメですマスター／＼／＼薫先生が見て…、見ないで下さい／＼／＼」

「ええい！こうしてやる」

「先生／＼／＼薫先生ー／＼／＼あああああああ！」

茶々丸は地面にうなだれて恍惚とした表情で、俺の名前を言いながらピクピクしていた

「なあ。エヴァは何か話があって俺を呼んだんじゃないか？」

「おお。そうであったな」

忘れたのか…

「実は、ジジイから頼まれたことがあるんだ」

「手伝ってほしいの？」

「できたらな」

「そんで、なにを頼まれた？」

「今度の満月の日に、あの坊主を襲えだとか」

「ふうん」

「あのジジイのことだ。私を踏み台にして成長させようとしてるんだろな」

「そういえば、『ネギ少年をサポートしてほしい』とか頼まれたな」

「なにっ！」

「多分、こうだと思う。ネギ少年は俺の正体を知らない↓エヴァが襲う↓俺が助ける↓戦闘開始↓正体がバレる↓弱ったエヴァを倒す↓流石は英雄の息子。って流れになるかもな。それに俺との契約は学園側は俺の正体を教えない事と、調査をしない事が含まれているけど、ネギ少年自身が俺の正体を知っても契約違反じゃないし、俺の正体を知る↓「忍先生も関係者なんですね」↓「手伝って下さい」↓正義の魔法使い（ネギ少年の考え）。という構造になりかねないのは回避するべき、そうするべき」

「そうだったのか。でだ、坊主を誘い出すにはどうすればいいと思う？」

「そうだなあ…」

ポクポクポク チーン

「クラスの人の血を吸う」

「お前、ホントに教師か？」

失礼な

それでも一応は教師だからな

「俺としては、コレが手っ取り早いと思う。『桜通りの吸血鬼』なんてどうだい」

「！？それはいいな。というわけなのだが、一枚咬んでももらえないか？」

そして冒頭に至る

「なあ…」

「どうしたんだエヴァ？」

「回想が長すぎるだろ！」

「別にいいだろ。そんなん」「投げ出した！自分から主人公を名乗った奴が投げ出したよ！」

「マスターがあんなにも楽しそうに。録画、録画…」

茶々丸はエヴァの行動を一通り録画している

エヴァも律儀だよ

あの回想をずっと話を聞いていたんだからな

生徒を襲うのは心が痛む

教師にとって生徒は大切な物だから

「エヴァよ。先ずは作戦会議を始めようではないか」

「そうであつたな」

～忍竹視点終了～

～その日の夜～

ハア…ハア…

佐々木まき絵は桜通りを走っていた

その姿はまるで怪物から逃げているようである

「もう鬼ごっこはお終いか？」

「!？」

背後から声がし、まき絵は振り向いたが

「貴様の血を貰うぞ」

首に一瞬、痛みを感じ気を失ってしまった

忍竹視点

『『『三年A組!』』』

『『『ネギ先生&薫先生!』』』

それにしても新学期早々騒がしい奴らだな
そこがいいんだよ

千雨と夕映を含む他数名は呆れていた

「皆さん。おはようございます。クラスメイトもネギ少年も俺も変

わりませんがよろしく…。さて、硬っ苦しい挨拶はこれまでにして、改めておはよう」

『『おはようございます！』『』』

「それじゃ、出席を取るぞ」

亜子とまき絵がない

にしても、ネギ少年はさっきからエヴァのことをみているが、関係ないか

俺の仕事は終わったしな

「ネギ少年よ。今後の予定を話してくれ」

「あっ、はい。では――」

ガラガラ

「薫先生。今日は身体測定ですよ。3－Aのみんなもすぐ準備してくださいね。」

いきなり現れた↑しずなさん

用件は身体測定である

今朝のミーティングでも話されたようだが：

「了解です。ありがとうございます、しずなさん」

「で、では皆さん！身体測定ですので…えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください！」

ネギ少年の発言に頬を染めながら見つめる三年A組の生徒：自らの言葉の危険性に気づいたネギ少年は動転してしまった

『ネギ先生と薫先生のエッチ〜ッ♪』

俺はネギ少年の襟首を掴み教室の外に連れ出した

その後

まき絵が桜通りで倒れているのを伝えに来た亜子の声により、下着姿で出てくる彼女達に対してネギ少年は慌てる

すると刹那が俺の耳元で

「見たかったらいつでも言っして下さい／＼私、薫先生なら見られてもいいので／＼／」と

囁いた

だがその囁きは哀しくも真名と楓に聞こえてしまっていたようだ

なんで分かるかって？

刹那が二種類の殺気が籠もりすぎている視線を受けているからだ

！？

結界に何か反応した

説明していないが、俺は『博麗大結界』に似たオリジナルの結界を麻帆良学園に張っている

「薫先生。お願いします」

しずなさんは確か教諭なので
昼間は動けないし、ネギ少年は担任なので引率しなければならない
ため任されてしまった

「ネギ少年。後は任せた」

「えっ！忍先生、どこに――」

「便所だ」

ネギ少年にそう伝え
俺は侵入者……。 (大きさからして動物) のところへ向かう

その頃、一匹の白い動物が麻帆良に侵入していた

つくなんなんだい

結界は一つの筈だぜ

早いところアニキのどこに行かねえと…

てか広すぎるだろ！

「アニキィ。どこですかい…」

『へー。人語を話す動物か、（表の話）裏で高く売れるな』

「誰でい！」

そこには黒と緑の半分半分の怪人がいた

「デメエに名乗る名前は無い『マツシュツ』」

怪人は黒い方の腕を白い動物に向けると、地面に巨大な口が現れ白い動物を飲み込んだ

口が閉じられると元の平らな地面に戻る

「さてと、戻るか」

半分半分の怪人は校舎の方に足を進めた

俺は侵入してきた生物のいるところに向かっている

ついでにいうと生物って『なまもの』って読んでしまう

「たしかこの辺に…」

下を見ると白くて細長い生物が動いているのを見つけた

一応、変身しとくか

〔サイクロン ジョーカー〕

『アニキイ。どこですかい…』

ろっ！？

あの生物、人語を話したぞ

俺は聞き逃さない

何故かって？私の聴力はザジが何を言ったのかを聞き漏らさない程である

「へー。人語を話す動物か、（表の話）裏では高く売れるな」

すると、白い生物がこちらを向いた

いけない

口に出ていたのか

「誰でい！」

「テメエに名乗る名前は無い『マッシュュッ』」

俺が白い生物に右手を向けると、地面に口が現れて白い生物の飲み込み元の地面に戻った

「さてと、戻るか」

俺は校舎に戻った

〽校舎内〽

「ネギ少年。今戻った」

俺はしずなさんに先ほどの出来事を伝え。ネギ少年のいる保険室にいる

「そういや、まき絵はどうした？」

「あ。まき絵さんなら大丈夫ですよ。どうやら貧血で倒れてしまっ
たみたいですが…」

ネギ少年は心配する表情はせずに、何か考えている様な表情をして
いた

「ま、直に目が覚めるだろうから先に教室に戻っていてくれないか
？次の授業は英語だろ」

「そうでした。それではまき絵さんをお願いします」

「任された」

ガラガラ

「…で、アンタらはいつまでいるつもりだ？」

ネギ少年が出て行った保険室には俺とまき絵しかいない筈なのだが…

「いやゝ。バレていたでござるか。気配は完全に消していた筈でござるが」

楓が現れた

いくら気配を消したとはいえ

それは生き物が相手での話であるため、俺の『生き物の動きを補足する程度の能力』は適応される

どんなに速く移動しても

居場所が割れる能力なのだ

「なあ楓」

「なんでござるか？」

「ネギ少年は貧血だと言っていたが、お前から見てどう思う」

「それはどういう意味でござるか？」

「俺はまき絵から二種類の力が感じられる。コイツは誰かに襲われた可能性が高い」

誰がやったかは知ってるけど

「薫先生もそうでごさるか」

「まあな。てか早く教室に戻れよ、授業が始まるぞ」

「そうでござったか。では拙者はコレで。いくら寝ているとはいえ、まき絵殿に手を出したらいけないでござるよ」

「お前は俺が隣で寝ていたら襲うだろ」

「そそそ、そんな訳ないでござるよ／＼／＼」

動揺しすぎ

それから暫くして

「んっ…。ここは…」

「保険室ですよ。まき絵」

「薫先生…」

「亜子に感謝して下さい。桜通りで倒れているのを見つけてくれたのですから」

「桜通り…。あっ！私、誰かに襲われてから……。どうしたんだっけ？」

「怪我がなくてよかった。何かあったら連絡しろよ。コレ、俺のメアドで携帯の番号」

「うん。わかった」「そんじゃ」

俺は保険室を出た

正直、心が痛む

どんな形であつても

生徒を傷付けてしまっているからである

「さて、どうするか…」

くその日の夜く

俺は何故だか大浴場に来ている。この時間なら誰も入ってこないだろう

万が一に備えて水着は着用している

「はあゝ。こんな広い風呂を独り占め出来るとは…」

俺は大浴場で浮いている

『河白にとり』の能力『水を操る程度の能力』を使い、下から水流を当てている

「癒される」

『……………』

「そうだな」

『……………』

「風呂は体の洗濯機だから、そんなことはしない」

「……………」

「おいおい。嫁入り前の女の子が、そんな事を言うんじゃない」

「……………」

「俺ならいいってか。嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

いつの間にか隣にザジがいた

勿論、水着着用である

大浴場の扉の前に『現在、副担任入浴中』と書いた紙が貼ってあるからだ

「まあ。木乃香にも言ったが、お前が高校を卒業して、それでも俺でよかったら考えてやる」

「……………（コクリ）」

俺は風呂から出て髪を洗っているとザジが隣に座り頭をこちらに向

けた

「洗ってほしいのか？」

「……………（コクリ）」

意外と甘えん坊である

ワシャワシャ

「こんな感じでいいか？」

「……………いい」

おお…

ザジがまともに喋った

「……………」

「『今のはまぐれ』ってか」

「……………（コクリ）」

「そうかい」

「……………」

「お礼に背中を流す？」

「……………」(コクリ)

「それじゃ頼む」

……………

ザジ

あんた絶対に誘ってるだろ!?

背中に膨らみが感じる

腕を洗うにしても

わざわざ絡めながら洗う

手にいたっては

もはや指を必要以上に絡めてくる

(このままやっちゃえよ)

引っ込め俺の悪魔

(ザジは誘っているんだ、男なら応えてやれよ)

助ける天使

(そうですよ。悪魔、アナタは間違っています)

流石は天使

（ザジに全身を洗って貰いなさい）

……………はい？

（／ピチューン／を口で（ギッコンバッタン）してもr『魔貫光殺法！』グフツ）

どうしてロクな奴がない…

横を見れば

風呂に入っているからなのか、恥ずかしいからなのか分からないが、若干、頬を紅潮とさせたザジがいる

「……………」

「前は洗わなくていい。自分でやる」

「……………」

「ちよっ！おまっ！」

ガラガラ

「うわあゝ」

バsshャーン

ザジが男のアレを触ろうとした時、ネギ少年と明日菜（水着着用）が入ってきた

「……………チッ」

ザジが舌打ちした！

なんなの

誰も来なかったら絶対に【見せられないよ】な事が起きたんですか！

「なっ！アンタ、ザジさんになにしてるのよ！」

明日菜がこちらを向いて怒鳴る

今の体勢はザジが俺を押し倒しているような形になっているので、俺は被害者なのだが…

明日菜には加害者に見えているらしい

『明日菜〴〵。入るで〴〵』

この間延びた声は…

ガラガラ

「あ！薫先生。いたんやね」

木乃香（こちら水着着用）であった

「どお？ 似合う？」

「ああ」

ツンツン

「どうしたザジ」

「……………」

「ザジも似合ってるよ」

「……………／／／」

俺は再び風呂に入ると天井から視線を感じた

「くせ者！」

ドスッ

俺は灰色のオーロラから如意笛を出して天井を刺した

（手応えあり…）

パラパラ…

崩れた天井から

白い物体が落ちてくる

コイツは…

マッシュュツでぶっ潰した奴

これ以上関わるのは面倒くさいから出るか

「じゃ、俺は先に上がるわ」

トテトテ

ザジも付いてきた

扉の貼り紙は『副担任入浴中』から『担任入浴中』に替えとく

「それじゃ。お休みザジ」

「……………（コクリ）」

帰りは同じ女子寮だから部屋の前までお送りした

ザジの表情が少しずつだが分かるようになった

コンコン

『忍先生。ネギです』

管理人室に戻り30分くらいしてからか、ネギ少年が扉を叩く

ガチャ

「いらっしやい。ネギ少年から訪ねるなんて珍しいな」

「私もいるわよ」

「ウチもいるで〜」

「二人ともいらっしやい」

明日菜と木乃香も一緒ってことは、さっきの白い物体関係か？

「まあ、立ち話もなんだから入れ」

俺は三人を部屋に招いた

「で、なにか用？」

「そうよ聞いて！ネギったらこのオコジヨを飼いたいとか言ってるのよ。女子寮は動物厳禁でしょ」

明日菜は嫌らしい

「そうだな…。俺としては構わないのだが、条件がある。それが守れるなら学園長に言って許可を取ってやる」

「わかりました」

「一つ、キッチンと世話をする事。飼い主として当たり前のことだからな。二つ、カゴに入れておく事。逃げ出して他の奴の迷惑になっちゃ悪いからな。そして三つ、良い餌をやれよ」

「はい！」

「学園長には明日、伝えとくから」

「わかりました。では、僕はこれで。お休みなさい」

「ほな、薫先生。明日菜、行こか」

「ふん」

三人は部屋を出て行った

白い生物視点

なんなんだいここは：

あの嬢ちゃんとい

さっきの忍とかいう奴とい

なんつう魔力なんだ

にしてもアニキにとつて

ここは宝の山だぜ

アニキの契約相手を見つけて金をがっばがっゝ、アニキの役に立ってやるぜ

白い生物視点終了

ゝ次の日ゝ

「――という訳だから、ネギ少年にペットを許可した」

「そういうことならいいじゃろ」

俺は約束通り、学園長に昨夜の出来事をはなした

最初は反対していたが

人語を話す事をいったら許可した。どうやら、あの白い生物はオコジョ妖精といい魔法使いが犯罪を犯すと、あの姿になるらしい、野生の奴もいるみたいだな

さて：

この後はどうするか

特に仕事はないし

適当にぶらぶらしよう

という訳で

現在進行形で散歩をしています。いやゝ、やっぱり広いわ

「ん？アレは茶々丸ではないか…」

俺は茶々丸に近づき挨拶をする

「よお！茶々丸」

「あ、こんにちは薫先生」

「今日はエヴァと一緒にじゃないんだな」

「はい。ここ最近、調子が悪いみたいで葉加瀬さんにメンテナンスをお願いしたのです」

「そうなの」

「よろしければ、薫先生もご一緒しませんか？」

「行っているの？」

「見学自由なので」

「なら行く」

「わかりました。こちらです」

俺は茶々丸について行き

『ロボット工学研究会』というところに向かった

ウィーン

「葉加瀬さん。失礼します」

「葉加瀬。入るぞ」

「おや？薫先生、どうしました？」

「茶々丸の付き添い」

「そうですか。それじゃ、早速メンテナンスを始めるから準備して」

「わかりました」

「なあ葉加瀬？」

「どうしましたか？」

「どっかに空いている部屋はないか？」

「ありますよ」

「使ってもいいか？」

「はい」

「んじゃ、俺はそこにいるわ」

「あ！何か作るようでしたら、遠慮しないでいいですよ」
俺は右手を振って空き部屋に向かった

（空き部屋）

「茶々丸のメンテナンスが終わるまで何を作るか」

ロボット…

ガンダム、グレンラガン

エヴァンゲリオン

ガオガイガー、戦隊物の巨大ロボット…

いやいや

流石に拙いだろ

そうだなあ（

.....

.....

.....

.....

.....！？

そうだ！

非想天則を作ろう！

勿論、動く奴を！

PV版で使われていたのを！

灰色のオーロラから材料を出現させて、作業を始める

とはいえ、流石に時間が掛かるから時を操るか

俺は『十六夜咲夜』の能力『時を操る程度の能力』と『蓬莱山輝夜』の能力『永遠と須臾を操る程度の能力』を発動させる

作者

（畜生！すきゅうが変換出来ねえ！）

それから『十六夜咲夜』の能力で時間の流れを遅くして、『蓬莱山輝夜』の能力で自分の時間を速くする

この方が効率がいいんでね

それから灰色のオーロラを使い異世界から非想天則の設計図を拝借する

「いたたたた。ここは…」

大きな鞆を背負った、緑の髪と青い服を着た少女。河白にとりを連れて…

「あの、すみません。お願いがあるのですけど。非想天則を作っていただけませんか？材料はそこにあるので」

すると、俺の名前や、ここがどこなのかを聞かずに作業を始めた

現実の時間で一時間後（俺に取っては24時間）

なんていうことでしょう

匠の手により^{にとり}

あの機械の山が見事なロボットになりました

「ありがとう」

「いいっていいって」

そう言い残すにとりは非想天則の設計図を持って灰色のオーロラの中に消えた

「コイツ、どうしよう」

非想天則は作ったのはいいが
置くところがない

ひとまずスキマに入れることにした

「そろそろ終わったかな？」

俺は空き部屋からメンテナンスルームに向かった

「もう少しのところなのですが、一箇所だけロックが何十にもさ
れていて難航しています。それと、時々急な体温の上昇が確認しまし
た」

「へー。でさ、ロックなんか無理やり解けば？」

「やりましょう（ニヤリ）」

カタカタカタカタカタ

葉加瀬は素早い手つきでロックを解除していく

「コレで最後！」

葉加瀬がエンターキーを押して最後のロックを解くが

「だ、ダメエエエエ！」

茶々丸は配線が外れる勢いで飛んでしまい画面が切れる

「茶々丸を止めてええ！」

葉加瀬が叫ぶが茶々丸が速すぎる為、捕まえることができない

「葉加瀬。どうやったら止められるんだ？」

「左の胸を押せば緊急停止機能が発動します」

「わかった」

茶々丸は、この時代にとってはオーバーテクノロジー過ぎるのである

開発に超が関わっているのは確かだろう

茶々丸を作る程だから

魔法について知ってるだろう

安心して変身できる

「今から見る物は他言無用の不干渉でお願いします」

俺は葉加瀬にそう言い

オーブドライバーを装着する

「変身」

「タカ ゴリラ チーター」

「その姿は…」

葉加瀬が一瞬驚いたが
気にせず茶々丸を追いかけた

第三研究室の角を曲がると茶々丸がいた

一言だけ言ってやろう

『速さが足りない!』

俺は茶々丸を抜き角を曲がり長い直線の通路向き合う

タカヘッドの超視力で茶々丸の動きを把握する

今だ!

カウンターで茶々丸の左胸の押す

すると、糸の切れた人形のように崩れ落ちた

「コレにて一見………」

カカカッカッ

「あ、らくちやく」

カッ

！？

何がどうなっている

落ち着け、まず落ち着け

茶々丸の暴走を止めたら

歌舞伎風に締めくくっていた

いつの間にか着物を着ていて、隣では葉加瀬が浴衣で火の用心とかに使う木の棒で効果音を出していた
本当にどうなってんだ：

「フッフ…」

葉加瀬が不気味に笑う

「どうして、こんな状況になったのか驚いてますね」

読まれてるだと

「そんなの、決まってますよ」

ゴクリ：

葉加瀬は息を吸い込み

『麻帆良の科学は、世界一いいいい！！』

「なっ！なんだってー！」

これが科学の力だということのか

「薫先生。茶々丸を止めるのに協力していただきありがとうございます。それから一つ、お願いをしたいのですが？」

「いいけど」

「この場所にいる猫にコレを…」

葉加瀬はツナ缶を入った袋を俺に渡した

「茶々丸は優しい子ですから、捨て猫に餌をやっています」

「代わりに行ってほしいということですね」

「そうです」

猫缶を受け取り歩くこと約10分

エヴァの家から少し離れた場所に來ている

にゃーにゃー

そこには沢山の猫がいた。お魚をくわえたどら猫やペルシアン。ん？あれは、三毛猫の雄じゃないか！こっちには猫又が、さらにはア
○ルー（勿論、二足歩行）まで！

ここは猫の国ですか！？

恩返しを受けた女子高生もビックリしますよ

そんな事をしていると

俺の足元を猫が集まって來た

マタタビでも付いてんね？って、言っていないくらい集まってるんですけど…

ひとまず、ツナ缶を開けて猫にやる

にゃーにゃー

猫の食事中に俺は何か動く物を感知した

ガサガサ

「あ、先生」

茶々丸だった

「なんだ茶々丸か…。検査の方はもういいのか？」

「はい。ご迷惑をお掛けしたようですみませんでした」

「いや。いくら止めるためとはいえ。胸を触ったから…その／＼」

正直、恥ずかしい

「いえ／＼薫先生になら、触っていただいても／＼」

端から見れば桃色の空間があるだろう。絶対にそうだ

「そういえば、この猫は茶々丸が世話をしているのか？」

茶々丸は一匹抱きかかえる

「はい。この子達には身寄りがありません。なので私が世話をしているのです」

「優しいんだな」

「いえ／＼それほどではないです」

「今日はありがとうございました」

日が沈みそうなので、俺は茶々丸をエヴァのどこまで送っていると礼を言われた

「いやいや、自分は頼まれてやっただけだしさ。お礼なんてもったいないよ」

やっぱり

礼を言われると照れるな

こう見えて

精神年齢は100歳を超えているが、どうにも照れてしまう

人間、馴れないことの一つや二つはあるものだしさ

「そういう訳にもいきませんので、せめてお礼を言いたかったのです」

「まあ、受け取っておくよ」

「ありがとうございます。では、私はこれで」

「……………あ、ああ。また明日な」

「はい」

夕焼けに映える茶々丸の笑顔にちよっぴり見とれてしまった

おまけ

緊急停止機能を使ったあと

葉加瀬は茶々丸のメンテナンスをすると同時に、何重にもロックさ
れているファイルの中身をみた

「さて、なにが入っているのかなあ」

カチッ

葉加瀬がファイルを開くと
そこには…

「薫先生の写真が一杯…」

忍竹薫の写真が沢山あった

授業中や私生活の姿は勿論

仮面ライダーW、オーズになった時の姿まで

「実に興味深い写真ばっか…ん？」

葉加瀬はファイルの一番下に

もう一つファイルを見つけた

例によって開けられた

「え!？こ、これって／／／」

そこには、入浴中の忍竹薫の姿があった

いくら科学に魂を売った葉加瀬でも、男性の裸は見たことが無いらしく耐性を持ち合わせてはいないようだ

その写真を10分間見ていたのは秘密である

第二十五話／いろいろぶち込んだ結果、長くなってしまった。今更だがどうして

話がいつかないことが、稀によくあるらしい

番外編その1／おい…。決闘《デュエル》しろよ（前書き）

な～になか？な～にかな？
今週はこれ

『アドベントチルノ』LV？

水属性、幻想族、効果

攻撃力2700

守備力2500

「えっ！？なに、このカード？」

「幻想族ってのも気になるわね」

話が思いつかない為、番外編を書きました

番外編その1／おい…。決闘《デュエル》しろよ

おっす！

オラ！忍竹！

別にワクワクはしてねえぞ！

『魔法先生ネギま！』の世界の役目を終えて本来ならば、あの驚きの白さを誇る神（自称）のところに連れていかれる筈なのだが…

「行けえ！フレイムウィングマン！スカイスクレイパーシュート！」

あの有名なガッチャマンが目の前でアンティークギア・ゴーレムをぶっ壊す第一話のシーンが繰り広げられている

因みに左腕にはデュエルディスクが付いている
デッキは八個あった

作者は『インフェルニティー』『六武衆』『エイリアン』の三つを
持っているみたい

そんなことを説明しているうちに勝負がついたようだ

「受験番号120番、上がりなさい」

アレ？　そういえば俺、何番なの？

俺はポケットに手を入れると一枚の紙が入っていた例によって120番と書いてあったから、デュエル場上がった

相手はガツチャマンに引き続きクロノス先生となった汚名返上したいの？

入学前の人に勝って汚名返上とか恥ずかしくないの？

デッキについてはデュエルしながら説明する

「デュエル！」

「先攻は譲るノーネ」

「では遠慮なく。俺の先攻、ドロー。俺は『紅魔の氷精―チルノ』を守備表示で召喚。カードを二枚伏せてターンエンド」

紅魔の氷精―チルノLV3

攻撃力900

俺のフィールドに六枚の水色の羽の生えた、水色の少女が現れた

分かった人もいるかも知れないが幻想デッキである

それも紅魔郷…

「ワタシのターン。ドロー。ワタシは『トロイホース』を召喚。さらにマジックカード『二重召喚』（デュアルサモン）を発動。このカードの効果でもう一度、通常召喚を行えるノーネ。ワタシはトロ

イホースを生け贄に『アンティークギア・ゴーレム』を召喚。そして攻撃！アルティメットパウンド！」

「紅魔の氷精―チルノの効果発動！このカードは1ターンに一度、戦闘では破壊されない」

「アンティークギア・ゴーレムの効果発動！このカードが守備表示モンスターを攻撃したとき、攻撃したモンスターの守備力を超えていれば、その数値分だけ貫通ダメージを与えるノーネ」

勿論、知ってるよ

アンティークギア・ゴーレム
攻撃力3000

紅魔の氷精―チルノ
守備力900

その差、2100のダメージを受けた

忍竹薫
残りライフ1900

クロノス
残りライフ4000

「ワタシはカードを二枚伏せてターンエンドナノーネ」（グフフ、伏せカードは聖なるバリアーミラーフォースと攻撃の無力化。コレでワタシの勝ちが決まりナノーネ）

「俺のターンドロー。俺は装備魔法、『氷精剣士の剣』をチルノに装備。このカードは『チルノ』にのみ装備可能。装備したチルノの攻撃力を1000ポイントアップする」

紅魔の氷精―チルノ
攻撃力900↓1900

チルノの右手にスイカバーが現れ、装備された

「攻撃力が1000ポイント上がったぐらいではアンティークギア・ゴーレムの足下にも及ばないノーネ」

「まあ、そう焦るな。伏せカードオープン。速攻魔法『氷精剣士の目覚め』を発動。このカードは『チルノ』と名のつくモンスターを一体生け贄にし、デッキ、手札、墓地から『アドベントチルノ』を特殊召喚する」

アドベントチルノLV?
攻撃力2700

チルノに変わり右腕が機械のようになったチルノが現れた

「さらに墓地の『氷精剣士の剣』の効果を発動。このカードが『チルノ』に装備された状態で『氷精剣士の目覚め』により、墓地に送られた場合、このカードを『アドベントチルノ』に装備する事ができる。そうした場合、攻撃力が1500ポイントアップする」

アドベントチルノの右手にはスイカバー、左手に当たり棒が装備される

アドベントチルノ

攻撃力2700↓4200

「こ、攻撃力4200!」

「アドベントチルノでアンティークギア・ゴーレムを攻撃! アイスクルソード」

「フッ、トラップ発動! 無駄だ! アドベントチルノの効果発動! このカードが攻撃するとき、相手は魔法、トラップを発動できない! なに!?!」

「行っけえええ!」

アドベントチルノはスイカバーと当たり棒でアンティークギア・ゴーレムを破壊した

アンティークギア・ゴーレム

攻撃力3000

アドベントチルノ (氷精剣士の剣装備)

攻撃力4200

クロノス

残りライフ2800

「さらに速攻魔法『常闇の襲来』を発動! このカードはバトルフェ

イズのみに発動可能。デッキまたは墓地から『紅魔の常闇―ルーミア』を特殊召喚する」

今度は金髪にYシャツのような物を着て、その上に黒のノースリーブとスカートを履いた少女が現れる

紅魔の常闇―ルーミアLV3

攻撃力1500

「ルーミアの効果発動！1ターンに一度、手札のカードを任意の枚数墓地に送ることとでその枚数分、相手フィールド上のカードを破壊する。俺は『紅魔の司書―小悪魔』と『紅魔の門番―紅 美鈴』を墓地に送る。俺はルーミアの効果にチェーンして伏せカードオーブン『EX化』」

「い、EX化？なんナノーネ？」

「『EX化』は、フィールド上の幻想族モンスターを一体生け贄にし、生け贄にしたモンスター名に『EX・』と名のついたモンスターを融合デッキから特殊召喚する。俺は『紅魔の常闇―ルーミア』を生け贄に『EX・ルーミア』を特殊召喚」

EX・ルーミアLV8

攻撃力2600

ルーミアは少女から女性へと成長した

「『EX・ルーミア』でダイレクトアタック！この瞬間、『EX・ルーミア』の効果発動！このカードが戦闘を行う場合、手札の幻想

族モンスターを一枚墓地に送ることができる。そうした場合、墓地に送ったモンスターの攻撃力分の、このカードの攻撃力を上げる。
俺は『紅魔の光虫―リグル・ナイトバグ』を墓地に送り、その攻撃力分、『EX・ルーミア』の攻撃力はあげる。『リグル・ナイトバグ』の攻撃力は1200、よって『EX・ルーミア』の攻撃力は3800になる。戦闘続行！『EX・ルーミア』でダイレクトアタック！ダークサイドオブザムーン！」

EX・ルーミアの右手を挙げると黒い球体ができ、そこから漆黒の光線が放たれてクロノスに直撃した

クロノス
残りライフ0

「ぺ、ペペロンチーノ！」

『勝者、受験番号120番』

俺に勝者判定が下った

ギャラリーは

『1ターンキルかよ…』

『今年の一年は楽しそうね』

『アイツとデュエルしてえ！』

『幻想族…、興味深いな』
など

様々な声が聞こえた

オリカの説明

『紅魔の氷精―チルノ』LV2

水属性、幻想族、効果

攻撃力900

守備力900

このカードは水族としても扱う。このカードは1ターンに一度、戦闘では破壊されない

『氷精剣士の剣』

装備魔法

このカードは『チルノ』と名のついたモンスターにのみ装備可能。攻撃力を1000ポイントアップする。このカードが『チルノ』に装備された状態で『氷精剣士の目覚め』により墓地に送られた場合、このカードを『アドベントチルノ』に装備する事ができる。そうした場合、攻撃力は1500ポイントアップする

『アドベントチルノ』LV?

攻撃力2700

守備力2500

このカードは『氷精剣士の目覚め』の効果でしか、特殊召喚できない。このカードの召喚、特殊召喚に成功した場合、デッキから『氷精剣士の剣』を手札に加えることができる。このカードが戦闘を行うとき、相手は魔法、トラップを発動できない

『氷精剣士の目覚め』

速攻魔法

フィールド上の『チルノ』と名のつくモンスターを一体生け贄にし発動。手札、デッキ、墓地から『アドベントチルノ』を特殊召喚する。このカードの効果は無効化されない

『紅魔の常闇ルーミア』LV3

闇属性、幻想族、効果

攻撃力1500

守備力1300

このカードは悪魔族としても扱う。1ターンに一度、自分手札のカードを任意の枚数墓地に送ることとその枚数分、相手フィールド上のカードを破壊する

『EX化』

速攻魔法

フィールド上の幻想族モンスターを一体生け贄にし、生け贄にしたモンスター名に『EX・』と名のついたモンスターを融合デッキから特殊召喚する。このカードは手札の魔法カードを二枚墓地に捨てることで、墓地から手札に加えることができる

『EX・ルーミア』LV8

闇属性、幻想族、効果

攻撃力2800

守備力2500

このカードは『EX化』の効果でしか特殊召喚できない。このカードは悪魔族としても扱うことができる。このカードの攻撃宣言時、手札の幻想族モンスターを一枚墓地に送ることで、その攻撃力分の攻撃力をえる。このカードは対象をとる魔法、罠、効果モンスターの効果の対象にはならない

『常闇の襲来』

速攻魔法

このカードはバトルフェイズのみに発動可能。デッキまたは墓地から『紅魔の常闇―ルーミア』を特殊召喚する

番外編その1／おい…。決闘《デュエル》しろよ（後書き）

5D'sかと思ったの？

GXだよ

要望が多ければ

遊戯王も書いてみようと思ったりします

番外編その2／元々、主人公のいた世界での話（前書き）

これは語られ無かった物語

1つ目の世界は、ちよつと変わった楽しい日々

2つ目の世界は、才能を超えようとしたバカ達の世界

3つ目の世界は、生徒を守るために矛盾した考えを取らなくてはならない教師としての世界

そんな世界を渡る主人公…忍竹薫

彼の手に入れた幸ちよつと変わった楽しい日々

今回はその話

番外編その2／元々、主人公のいた世界での話

やあ、みんな

俺の名は忍竹薫

どこにでもいる普通？の高校生だ

ん？

なんで、『普通？』と疑問系になるかだって？

正直、俺は普通だ

居候がいて、ソイツが異常だから俺まで『普通』という枠組みから外れそうなのだ

『…薫。誰と話してるの？』

そう、今まさに話かけてきたコイツこそ『コイツじゃない、クー子って呼んで』地の文に語りかけないこと

話を戻そう

結論を言うと、クー子は宇宙人である。クトウグア星人という生命体の一個体らしい

宇宙人とは言っても、見た目は普通の女の子なのだ。見た目の年齢は俺と同じくらいで無表情だが、普通に笑ったり喜んでくれたりする表情が俺の前だけだがちょっとだけ豊かになった

髪は炎のように赤く長い

瞳はなお一層煌々と輝いている

別に宇宙人だからって驚くことはない

俺は中学時代の同級生に、こんな事を言う奴がいた

『ただの人間には興味はありません。もし、この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら私のところに来なさい!』

あの時はホント、参ったよ…

中学を卒業すると同時に俺は引っ越して、連絡先は知らないの何をしてるか分からない

恐らく、誰かを巻き込んで『SOS団』なんてものを作ってるんだろう

そんなことはどうでもいい

俺は基本的に一人で暮らしている。家族が揃うのは、年に1、2回である

なんか、世界を飛び回っているらしい。あまり詳しくは知らない

おっと! また話がズレた

そうだなあゝ

なについて話すか…

『薫とクー子のお会ひ…』

だから地の文に割り込まない『うん』

俺とクー子の出会いは
忘れもしない、てかある意味忘れたら凄い

200X年

某月某日某所

俺は『モンスターハンターフロンティア』という。有名なゲームをしていた

いつものように顎を討伐して金稼ぎをしていたら、一通のメールが届いた

『アナタは112568470番目に選ばれた幸運な人です。巻きますか？巻きませんか？もし巻くのであれば左をクリックし、巻かないのであれば右をクリックして下さい。もし左をクリックしたのであれば、このメールを人工精霊が回収いたします』

左をクリックした

むしろしちゃった

だって右クリックとかやりにくいじゃん！

それから約1ヶ月後：

この日も狩りに勤しんでいた

「さてと、今日はこの辺で終わりにするか」

俺は『MHF』を終了させると一通のメールが届いていたのに気が付いた

『巻きますと確認しましたので回収を完了しました。人工精霊』

内容はそう書いてあった
因みに受信日はちょうど1ヶ月前なので、左クリックのやつだと理解した

ん？

1ヶ月前？

確かあのメールが送られてきた次の日だったか
箱というかカバンというかアンティークドールとかを入れる奴が届いたな

「確かこの辺に…」

ガサゴソ

「あったあった」

俺はカバンを開けると
そこにはシルクハットを被り、白いブラウスと青いケープを着た半ズボンの人形？とネジが入っていた

「回すか」

キリキリキリキリ

俺が人形にネジを挿して回すと人形が動き出して泣いた

「グスッ…、や…っど巻いてぐれグスッ…」

それから暫く泣いた後、人形は自己紹介を始めた

「初めましてマスター。僕はローゼンメイデン第4ドール、蒼星石」

「どうもご丁寧に、自分は忍竹薫と申します」

「わかりました。宜しくマスター」

コレが俺と蒼星石との出会いであった…

「へへッ／＼／覚えてくれたんだマスター」

蒼星石が俺のいつの間にか膝に座っていた

「あの時は、1ヶ月も放置して悪かったな」

「もう気にしなくていいよマスター」

俺は蒼星石の頭を撫でる

「…薫。クー子との出会いは？」

そうだったな

俺とクー子との出会いは

蒼星石が動き始めてから半年程たった頃…

『さあ、アリスゲームでもはじめましょう』

俺が家に帰ると黒い羽の生えた少女がパソコンから出てきた

「水銀燈…」

「蒼。この方は誰だい？」

『あら。そういえば自己紹介をしてなかったわね。私はローゼンメイデン第一ドール水銀燈よお』

「俺は蒼星石のマスター。忍竹薫、忍でいい宜しく」

「そう、アナタが…なら——」

水銀燈は羽を広げて、こう続けた

「——死になさい」

まあ、デコピンで返り討ちにしたよ

で、その日の夜

今日は冷えるから

おでんでも買ってこようと思って出かけました

蒼星石も一緒です

「うう…。マスター、寒いよお…」

俺は蒼星を持ち上げると抱えた

コンビニに行く途中で、公園を通るのだがそこには赤い髪の子
がいた

「マスター…あの子」

「心配か？」

「今日は雪が降るみたいだし」

「分かったよ」

俺は女の子に近寄る

「どうしたんだい？こんな夜遅くに」

『ニャル子？』

女の子はそう言い顔を上げる

「残念ながら、自分は『ニャル子』さんではないぞ。もしかして、その『ニャル子』さんを探しているのか？」

「…そう」

「そうか、今日はもう暗いし、今夜は冷えるから早く帰りなさい」

「…ない」

「なにが？」

「家…」

「ホントにか？」

「……………（コクリ）」

「そんじゃ、家に来るか？」

「…いいの」

「構わないさ。な、蒼」

「うん。僕もいいよマスター」

「そういえば名前は？」

「クー子……」

「クー子か、俺は忍竹薫。忍でいい」

「僕はローゼンメイデン第四ドール蒼星石」

コレが俺達の出会いである

「いやゝ。クー子が宇宙人だって知った時は驚いたよ」

「薫はあんまり驚いてなかった…」

「マスターは僕と会った時もそんなに驚いてなかったよね」

「そうだったっけ？」

「…うん」

俺とクー子と蒼星石とで、そんなことを話していると…

『相変わらずイチャツキやがって目障りですう』

「翠星石、いらっしやい」

鏡から人形が現れた

彼女は翠星石と言って

ローゼンメイデン第三ドールであり、蒼星石の姉である

名前の通り翠服を着ている

それとローゼンメイデンは全員が姉妹なのだ

「はい翠星石」

俺は紅茶を翠星石に渡す

俺のオリジナルブレンドの紅茶は、そのつと少しずつ変わるから味の保証は出来ない

だけど、深紅曰わく…

ああ、深紅ってのは紅茶が好きなローゼンメイデンの第五ドールで紅い服を着ている

その深紅が美味しいと言ったほどだから、美味しいんだな

深紅と翠星石のマスターは桜田ジュンといい引きこもり（進行形）らしい

「薫。茶菓子ぐれえ出すですう」

「毎度毎度、不貞不貞しいな。ほれ、コレでも食ってけ」

俺は翠星石にロールケーキを一本渡す

「ありがたく頂いてやるから、翠星石の優しさに感謝しやがれです」

ピンポーン

「マスター、お客さんだよ」

「ん？分かった。ちと待っとけ」

俺は玄関に向かった

ピンポーン

「はいはい。どちら様で——」

ガチャ

「あ、薫さん。いつもニコニコアナタのそばに這いよる混と——」
ボタン！

俺は鍵を全部閉める

その動作には、0.1秒とかからなかった

「…薫。だれ？」

「ニヤル子が来た」

俺がニヤル子と言うとクー子は顔を上げた

「入れてあげて」

「クー子、入れてもいいがな、この小説はKENZENだから誌面に載せられないことはするなよ」

「うん」

「蒼」

「マスター呼んだ？」

「nのフィールド経由で真尋を連れてきてくれ」

「わかった」

蒼星石は鏡からnのフィールドに入って行った

『薫さ〜ん』

「今開ける」

ガチャ

「お邪魔します」

一応、説明をしておく

ニヤル子は宇宙人である

ニヤルラトホテプという種族の一個体で八坂真尋の暮らしている。
親公認らしい

ニヤル子の髪は長い銀髪でアホ毛が生えている
背は低く胸もない：

ここはお淑やかな胸に訂正しておこう

それと八坂真尋とは
ニヤル子の飼い主で、話のわかる奴
クトゥルー神話についてやたら詳しい。俺は神話とか聖書とか興味
ないから知らん

一言でまとめるなら

『ニヤル子抑制人間』とでも名付けよう

一段落ついたところで俺は翠星石がいる部屋に戻る
人形とはいえ客人だから、いつまでも待ってもらうのも悪いし

「悪いな翠星石。待たせて――」

『邪魔しているわよ薫』

『薫。うにゅくない』

『お久しぶりなのかしら』

『来てあげたわよお』

なんということでしょう

ローゼンメイデンの方々がお越しになられてる

因みに上から

第五ドール深紅

第六ドール雛苺

第二ドール金糸雀

第一ドール水銀燈である

面倒だから雛苺と金糸雀の説明はしない！
知りたい人は後でググるように

「マスター、ただいま」

蒼星石が真尋を連れて帰ってきた

「真尋、早速だが頼みがある。ニヤル子をお願いしたい」

「話は聞いたけどなんとなくならわかった」

俺は真尋にフォークを渡す

「コイツは純銀製だが、お前なら使いこなせるだろ」

真尋は数少ない予備動作無し（ゼロフォーム）からの攻撃ができる人間である

俺もその一人だ

何で純銀製のフォークがあるのかだって？
聞くだけ野暮ってもんだ

俺は真尋をクー子とニヤル子のいる部屋に送りローゼンメイデン達と戯れることにする

キングクリムゾン

「ジュンが心配するから、そろそろ帰るわ」

「そうか。んじゃ、よろしく言っといてくれ」

「ええ」

深紅が鏡に入ると

「それじゃ、私も帰らせてもらうわあ」

「銀もか…。そうだ、コレをメグに渡してくれ。俺特製のケーキだ」

「きちんと届けるわ」

それから、次々とそれぞれの家に帰っていった

「次はクー子達か…」

「頑張ってマスター」

「蒼。もし無事に戻れたら一緒に寝ような」

「う、うん／＼」

俺は意を決して扉を開くと

「ごめんなさい、ごめんなさい。だからフォークは止めて下さい」

見事なまでの土下座を決めるニャル子と、先端が赤に染まったフォークを持った真尋がいた

「クー子。説明を求む」

「うん」

(´Д`) ヒソヒソ (´Д`)

「なる程ねえ」

簡単に説明しよう

クー子がニャル子を襲う↓ニャル子のフォームチェンジ↓戦闘続行
↓クー子が家のルールを思い出す↓ニャル子の攻撃↓しかしかわされた↓真尋のフォーク滅多刺し↓ニャル子は力尽きた

こんな感じだ

ルールはいくつかあって

1. 室内での戦闘は禁止
2. ご飯は残さず食べる
3. 無闇に炎を出さない

基本はこの三つ

クー子はたまに暴走するけど

きちんと言い付けを守ってくれてる

俺はクー子のそういうところは好きだぞ」

「クー子は薫に攻略されそう／＼／」

「ナニッテンデスカクー子さん？」

「薫さん。声に出てましたよ『俺はクー子のそういうところは好きだぞ』から」

ホントか！

そりゃクー子は照れるよな

「おっと、そうだった。真尋よ。今日は遅いから飯でもって食ってくか？」

「真尋さん！ご飯ですよ！薫さんのごはん！」

「そうだな。それじゃもうよ」

「わかった。んじゃ、できたら呼ぶから待っててK『ただいま、マスター…』お帰りきらき、薔薇水晶は？」

「もうくる」

「マスター、ただいま…」

「お帰り薔薇水晶」

この二人も家族だから紹介しよう

先ずはきらき

本当は雪華綺晶せいかしやうといって、ローゼンメイデン第七ドール。実体が無かったけど、ローゼンだっけ？まあいいや、とにかくナンヤカンダで体がある

髪はホワイトロングで、ツーサイドアップ、服装は白い薔薇の髪飾りに白いミニスカートと編み上げのロングブーツ、瞳は金色にした名前は長いから『きらき』と呼んでいる。俺ならそう呼んでもいいらしい

次に薔薇水晶

ローゼンメイデン第八ドール

見た目や服装はきらきにそっくりだが、色が紫である
舌足らずな話し方で相手の言葉を真似る癖があったりする
でも、意外と甘えん坊な一面もある

つまり、今いる俺の家族は

自分、クー子、蒼星石、雪華綺晶、薔薇水晶の五人

飯作らなきや

「きらき、薔薇水晶、帰ってきて早々に悪いが食事の準備をしておいてくれ」

「うん」

タッタッタッタ

すると薔薇水晶は俺の肩に乗って

ボソボソ

「ただいま／＼／」

タッタッタッタ

そう囁いてきらきの後を追った

お気付きの方もいるかもしれないが、薔薇水晶は恥ずかしがり屋なのだ

場所は台所に移る

「薫さ〜ん。まだですか〜」

「もう少し待ってね」

真尋が台所に入ってきた

「薰ごめん。ニャル子があんなので」

「別に構わないさ。それだけ俺の料理が楽しみっていう証なんだから」

「それもそうかって！薰！まさかそれは！？」

「気づいたか、そうこいつは『鉄鍋の調律』」

「鉄鍋の調律…、カレーを焦げる寸前で保ち、煮崩れしないようにかき回し続けるという高度なテクニク。まさかここで見られるとは…」

「真尋、説明乙」

だが、端から見ればこの光景はまるで

「練れば練るほど、色が変わって…」

パクッ

「美味い！」

テーテッテレーン

という風に見えなくもない

「そろそろかな」

俺は火を止めてからも暫くかき回した

余熱でも焦げるからな

それから盛り付けてテーブルに運ぶ

「それじゃ…」

『『いただきます!』『』』

パクッ

ニヤル子はカレーの乗ったスプーンを口に運ぶ

パクッ

「美味い!上手いぞおおお!!」

あまりの美味さに口からビームを出したが

ザクッ

「ピギャア!」

真尋のフォークがニヤル子の手を捉えた

この事から真尋はSであることが分かる

「…薫。おかわり」

「はいよ」

俺はクー子からお皿を貰い、二杯目をよそう

「クー子、米が付いてるぞ」

「ん…」

「じっとしてろ」

俺はクー子の口に付いていた米粒を取って食べた

（（なんて羨ましい！））

「ほら真尋さん。私のも取って下さい。できればそのままマウス
ウマウスで」

グサッ

「フッフ、いつも同じ技を喰らうと思って——」

真尋のフォークをかわしたニャル子はまだ気が付いてなかった…

グサッ

「によぼおおお！」

真尋はニャル子の手を刺すと同時に上に投げたフォークを掴みニャル子の手を刺した

「時間差を使った攻撃か。さらにできるようになったな」

やはり、扱い馴れているだけはあるな

俺はきらきと薔薇水晶の方を見ると、無表情な顔が少し綻んでいた

「薔薇水晶、口の周りにカレーが…」

俺は薔薇水晶の口をティッシュで拭く

「まるで親子ですね」

ニヤル子のこの一言で

平和だった空間が壊れた

「違う…。マスターは私の夫」

「何を言っているんです？それは私ですよ」

「駄目…。薫は私の」

「みんな、その発言は聞き流せないな」

上から薔薇水晶、きらき、クー子、蒼である

なにこれ？

修羅場なの？

「「「マスター！（薫…）」」」

四人は俺を一斉に見て

クイックイッ

「どうした薔薇水晶？」

「関節、掃除して／／／」

「いいぞ」

――

忍竹入浴中

「癒されるわ」

「そうねえ／／／」

「うん／／／」

「でさ薔薇水晶はわかるが、何できらきがある」

「私も掃除してほしいのよ」

とりあえず風呂から洗面所兼脱衣場に出ると

「マ、マスター！！？／／／」

蒼が俺の服（脱いだ方）にくるまっていた

「もう馴れたからいい」

蒼はちよつと変態さんになってきている

（忍竹の部屋）

「よし、コレで終わりだ」

「ありがとう／＼／＼」

「…………（ペコリ／＼／＼）」

やべえ、俺の眠気が有頂天になりそう

「もう遅いし、寝るか…」

「一緒に寝る…／＼／＼」

「いいぞ」

「あら、私は？」

「きらきもいいぞ」

俺は二人を布団に招いた

ガチャ

「マスター、約束だよ」

「分かってる。おいで蒼」

蒼星石が布団に飛び込んだ

ガチャ

「薫。クー子も…」

「みんな一緒だな」

クー子が入ったのを確認し電気を消す

布団の左にクー子、右にきらきと薔薇水晶、俺の上に蒼星石となっている

「お休み、みんな」

「」「お休み、マスター（薫…）」」「」

こうして俺の1日は過ぎていく…

番外編その2／元々、主人公のいた世界での話（後書き）

書かれてませんが

蒼星石達とは夢の中で会えるが、世界が違うため現実では会えないのです

またいつか

続きでも書こうかな？

第二十六話／桜通りの少女ってなんぞ？

「はあゝ」

窓の縁にもたれて溜め息を吐く、我らが主人公『忍竹 薫』

溜め息をついたのはとある理由がある

麻帆良学園新聞部が発行している麻帆良新聞の一面を飾る記事

『桜通りの吸血鬼！？』

内容はこうである

満開の桜で有名な桜通り

最近、その近辺にて不可思議な事件が起きているもよう

目撃情報は無く、被害者には外傷が見当たらないところから

極めて謎に包まれた事件である

被害者の話

「いつもの様に桜通りを歩いていたら突然、後ろから声をかけられたので振り向いたら、首筋に一瞬だけ痛みがあってから記憶が無いんです」

被害者の首には何かに噛まれたような跡が残っていてまるで、吸血鬼に噛まれたようだった

麻帆良学園新聞部

朝倉 和美

「ホントに何者なんだよアイツは…」

吸血鬼より朝倉の情報網の凄さに驚きと呆れを交えて溜め息をついていたのである

エヴァがしているのは黙認している

ネギ少年に至っては変にやる気を出している

多分、エヴァのことを倒そうとしているに違いない

『桜通りの吸血鬼を倒そうとしている』に訂正しよう

俺はエヴァと手を組み、ネギ少年をフルボッコにしようと企んでいる呪いを解く最終手段らしいから凍らせてサヨウナラはしないだろう。エヴァにかかれば血液も凍らせるから血が吸えなくなってしまう

一番嫌なパターンは

ネギ少年がエヴァと会う↓ネギ少年の攻撃↓俺！参上！↓矛先がこちらに向く

これは回避したいなあ…

はあゝ

再び溜め息をつく

忍竹の朝

（忍竹視点）

「よしお前ら、今日の授業はここまでだが帰る前に言わなきゃいけない事がある」

「なに薫にい？」

「そう急かすな。風香よ」

俺は懷から麻帆良学園新聞を取り出す

「知ってるだろうが、ここ最近、桜通りで謎の襲撃事件が起きている。被害者に怪我はないようだが、気を付けるように。出来れば桜通里には近づかないようにしてほしいのだけど、それは無理だから、必ず複数人で帰るように、何かあれば連絡すること以上！」

時は放課後

図書館探検部のメンバー

夕映、ハルナ、のどかは三人で桜通りを歩いていた

「夕映、私、ちょっと本屋で買いたい本があるんだ」

「そうですか？では暗くならないうちに帰ってくるですよ」

「うん」

同時刻、職員室

「あ、そういえば今日から桜通りの警備だったな」

麻帆良新聞を読んでいた忍竹が思い出したかのように呟いた

「瀬流彦よ。俺、桜通りの担当になっちゃったよ」

「最近ぶっそうですから…」

「俺よりタカミチの方がいい気がする」

忍竹は面倒な事が嫌いだから

犯人を捕まえても
エヴァ

フルボッコにして逃がしてしまうのだ

記憶消去ではなく

神隠しで妖怪の巣に落とすのである

仕事をして、妖怪のお腹を膨らますので両得でなのだ

「いいじゃないですか。忍先生の方が強いですし…」

あれはまぐれだったし
こうみえて不真面目かもしれないぞ

「まあ、やってみる。そろそろ下校時間だな行ってくる」

「頑張って下さいよ」

〳桜通り〳

用事を済ませた宮崎のどか

辺りが少し暗くなり

気の弱い彼女は女子寮に戻るため桜通りを通っている

少し暗くなったとはいえ

まだ明るい方なので、最近噂になっている吸血鬼は出ないだろうと
思っていた

そこへ――

「27番、宮崎のどかか…悪いが、少しだけ血を分けてもらおう」

「ひっ…キャアアアッ!!」

しかし、のどかの叫び声は誰にもきこえて…ん？

？「待てー！」

僕らのネギ少年の登場

だが、のどかは既に気を失っていた

――

忍竹視点に戻る

「ひっ…キャアアアッ…！」

俺は桜通りにつくと

のどかの叫び声が聞こえた方へ向かった

おっと！？

ネギ少年がいるよ

変身しとこ

〔サイクロン ジョーカー〕

決め台詞はなしだ

今回の目的はネギ少年の牽制

それから、新しいメモリのテストの2つである

忘れていた人の為に教えよう

俺はオリジナルのメモリを作れるのである

例として『Z O』メモリ

熱血の記憶を内包したメモリ

ヒートとの相性がメタルと同じくらいいい

アレはネタで作ったが強かった

そうこうしているうちに茶々丸も出てきてるな

よし、俺も行くか

俺はエヴァの近くの木に立った

「よおエヴァ。なに一人で面白いことでもしてるんだ？」

「もう一人！？」

「て、テメェ！」

「おっと、いつぞやの白い生命体ではないか」

「あん時はよくもやってくれたな！」

「カモ君。知ってるの」

「ああ、あの半分こ野郎。妙な技でオレっちを埋めやがった奴だ」

「よくもカモ君を…」

俺は右手を向ける

「!? アニキ、アレはやベエ」

「えっ? な「ガリバー」! ?」

「なにこれ!」

「早いとこ逃げっ「無駄だよ」

俺はネギ少年とカモをガリバーに閉じ込めた

俺はネギ少年とカモをガリバーに閉じ込めた

中から音が聞こえるがガリバーはびくともしない

「無駄無駄。コイツは中からは絶対に壊せないから」

新しいメモリのテストの為ジョーカーメモリを別のメモリに換える

「サイクロン デス」

Wの色は変わらないが

代わりに死神の持つような大きな鎌デススラッシュが現れる。形としてはソウルイーターのソウルの鎌状態と思ってくれていいだろう

オレはデススラッシュで鎌鼬を起こしガリバーを壊す

「うわああああ!」

鎌鼬はさらにネギ少年に少し斬り傷を負わせる

デススラッシュはメタルシャフトのような感覚で使えるのがいいな

「それじゃ、血を貰うとする」

エヴァはネギ少年の首筋に噛みつか――

「ウチの居候に何してるのよー！」

明日菜がエヴァに向かって跳び蹴りをする

「フッ、氷盾」

エヴァは氷の盾を出して跳び蹴りを防ぐが

「へむりべっ！」

なんの因果か、氷の盾は役目を果たさず消えてしまい。エヴァに顔面に靴の後が付いた

「あ、明日菜さん！」

「ちょっとネギ。なんなのあの半分こ！？」

明日菜は俺を…

Wを指差してネギに聞く

「少年に少女よ。自己紹介がまだだった。俺は仮面ライダーW、エヴァの古い友人さ。以後宜しく」

「ど、どうも」

「さてエヴァよ。本日はこの辺でお暇しようか」

「そうだな。帰るぞ茶々丸」

「はい、マスター」

俺はサイクロンメモリの能力で強烈な風を起こし桜の竜巻を作り上げて木の影に隠れた

それから変身を解いてネギ少年の所に向かう

反対側から木乃香が来た

「まさか、ネギ先生が吸血鬼やったんか！」

「ち、違いますよ」

「何があつたんだネギ少年よ。そうじゃなくて、どうしてものがが倒れてるんだ？」

「そ、それはですね（焦）」

「恐らく最近噂の吸血鬼かもな」

「どうして、わかるんですか!？」

「確証ではないが、被害者は決まってここ…、桜通りで気を失っているから、恐らく――、いや！ここはもうネギ少年が吸血鬼だったってことにして事件は解決としよう！」

「僕は吸血鬼じゃありませんよ」

「冗談冗談www」（全部知ってんだけどね）

俺はのどかの具合を確認する

「外傷は特になし、脈拍、呼吸共に正常。たぶん何かしらのショックによる気絶だろう。ほら、のどかってさ気が小さいでしょ」

「それもそうね」

明日菜に納得された

そんな事は気にせず、俺はベンダーに乗り、のどかを後ろに乗せる。落ちないようにベルトで固定する

どこからベンダーを出したがって？学園から乗ってきたんだよ

「そんじゃ、俺はのどかを送ってくるから。お前等も早く帰れよ。そんじゃ」

俺はベンダーを走らせて女子寮に向かっていると…

「ん…、んん」

「おっ！目が覚めたか」

「かかか、薫先S…………へう」

「えっ！？のどか…。のどかああああ！」

のどかが気絶した
まただよwww

くおまけく

『這い寄る混沌』としてブログを始めて、既に半年が過ぎた。千雨のサイトとリンクを繋いだお陰でかなりの人気が出ている

ある日、コラボ企画として写真^{コスプレ}を取ってupしたら、『ちoux×混』なんてカップリングが出来ていた

写真はちoux（お嬢様姿）と、這い寄る混沌（執事服姿）の為として

ブログを始めて、既に半年が過ぎた。千雨のサイトとリンクを繋いだお陰でかなりの人気が出ている

ある日、コラボ企画として写真コスプレを取ってupしたら、『ちoux混』なんてカップリングが出来き、それがかなりの人気になっていたのだ！

いつの間にか同人誌が作られていて、高い値段で取引されている

俺は偶然にも

亜子を持っていたファッション雑誌で、その事を知った

千雨曰わく

「あの写真。かなりヤベェことになったぞ」らしく記事には

『現在、ネットで大人気！あのNO.1ネットアイドルちouxと人気急上昇中の這い寄る混沌のコラボ写真！？』と見出しがあった

後にこの写真が

ある事件を起こすことは誰も知らない。知られにくい

薫「えっ！？なにこれ？なんのフラグ…」

第二十七話／ゴウカイジャーがディケイドの戦隊版にしか見えなくてしょうもな

俺は平成ライダーが…

特に龍騎が好きなんだ！

第二十七話／ゴウカイジャーがディケイドの戦隊版にしか見えなくてしょうもな

ボタン！

「薫先生！手伝って！」

「はい？」

たまにはゆっくりしてから向かおうと思っていたら、明日菜が来た

「んで、なにがどうした？」

「実はネギが――」

「はあ！？登校拒否だあ？」

「そうなのよ。ネギったら何を言っても『絶対に行くもんか』の一点張りで……」

「そこで、同じ教師の俺になんとかして欲しいと」

「そう！お願い。この通り！」

明日菜に手を合わせて、頭まで下げられちゃったよ

「分かった分かった。だから頭を上げてよ」

「ホントに！ありがとう！薫先生」

俺は明日菜と木乃香、ネギ少年の生活している部屋に向かった

コンコン

「木乃香。薫先生を連れてきたわよ」

「ホンマか！」

ガチャ

部屋に入るとネギ少年を負のオーラが充満していた

「ネギ少年」

「（ぶつぶつ）」

何言ってるんだ？

そう思って耳を近付けると

「僕じゃどうせ駄目なんだ。吸血鬼なんて倒せるわけない。もう嫌、学校なんてエヴァンジェインさんになんか会いたくない……………」

……ブチッ

「ぐだぐだ言ってるじゃねえ！この温室育ちが！！！」

「グハッ」

俺はネギ少年を蹴り飛ばした

「何があったかは知らねえが、教師が登校拒否するとは言語道断不可能奇妙の得手不得手。男ならめげずに行け！玉はちゃんと2つ付いてんだろ！」

「忍先生……」

「早く支度しろよ。学園に行くぞ」

「うう……」

「コレで少しはマシになっただろ」

「やり過ぎかと思うけど…、一応礼を言うわ。ありがとう」

「別にいいって、今日は俺の担当授業が無いしさ」

暇なので一緒に登校し――
俺とネギ少年は出勤した

学園に着くや、キヨロキヨロしだしたネギ少年まるでスカートが風でふわりとしたところを見たがっているみたく見える

そんな時…

「おはよう、ネギ先生」

「！」

「おはようエヴァ、茶々丸」

おいおい、どうしたネギ少年
挨拶は朝の基本だろ

そんな君には、この言葉を贈ろ『挨拶するたび、友達、増えるね。
ポポポポーン』

そんな事を考えていたらエヴァはネギ少年にこう言った

「今日もまったりサボらせてもらうよ。フフ、ネギ先生が英語の担当になってからいろいろ楽になった」

「エ、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん!!」

「エヴァよ。ちゃっかりサボタージュ宣言はするなよ」

「薫先生。マスターは薫先生の授業を楽しみにしているので出ますよ」

「おい！何を言っている！ほら、さっさと行くぞ」

エヴァはそそくさと教室に向かおうとするが

「エヴァンジェインさん！」

ネギ少年がそれを引き止めた
だが：

「言っておくが、勝ち目はあるのか？校内ではおとなしくしていた方がお互いのためだと思うのだがな。おっと、タカミチや学園長に助けを求めようなどと思わない方がいいぞ。また生徒を襲われたりしたくはないだろ？それに、もう一人いただろ。アイツはこの学園を敵に回しても、勝てるだろうな」

エヴァは振り向かずになんとも言わず。教室へ歩いていった

ネギ少年は泣きながら逃げ出してしまおうし、明日菜はネギ少年を追いかけるし面倒だな

俺は『オペティカルカモフラージュ』で2人のあとをこっそりついて行った

＼廊下の隅＼

「あの二人っスね！？あの二人が兄貴を困らせてるっスね！？許せねえ！兄貴をこんな悩ませるなんて！！舎弟の俺っちがぶっちめてきて――」

「カモくん…、あのエヴァンジェリンさんは実は吸血鬼なんだ…しかも真祖の――」

「故郷へ帰らせていただきます…」

「コラ」

廊下の隅に來ると、どこからかあの生物が出てきてしゃべり出したエヴァが真祖だと知ると逃げようとしたが、明日菜に尻尾を捕まれて失敗に終わる

「茶々丸さんがエヴァさんのパートナーで、せれてあともう一人いるんだけど、僕はその三人に惨敗して今も狙われてるんだよ」

「にしても、よく生き残れやしたね兄貴…吸血鬼の真祖ってこたあ、最強クラスの化け物じゃありやせんか」

「そ、そうなの」

明日菜は驚いたような顔で生物に聞いた

俺は「詳しいなあ」

と感心しながら曲がり角に、ネギ少年達の死角になる所までいき『

オプティカルカモフラージュ』を解除して、ネギ少年達のところに向かう

「――2人でパートナーの方をボッコボコにしと」

「オイ、misu、ミス、oi、授業中だろ。なに廊下にいるんですか？おいィ？」

「し、忍先生！ゴメンナサイ。すぐ戻ります」

「ネギ少年」

俺はネギ少年を呼び止める

「校内にペットの持ち込みは禁止だよ。キチンと守ろうね」

「は、はい！」

ネギ少年は教室に戻って行った。言い忘れたけど、ネギ少年、君の仏ヶージはもう0だから

〽時は放課後〽

俺は茶々丸を少し離れた場所から『千里眼を扱う程度の能力』でみている

説明するのが難しいが
俺と茶々丸の間にはネギ少年と明日菜、生物の二人と一匹がいる。
尾行っていうやつだな

茶々丸を見ていてわかったが
やっぱり優しいね

木に引っ掛かった風船を取ったり、おばあさんを手助けしたり、途
中であつた少年と話したりと、人気がある

ちょうど橋に差し掛かったところで様子が変わった

川の方を見ると、流れに揺られながら小さな箱に入った子猫がいた
茶々丸は、川に入って流れて行く箱を抱え岸に戻った

茶々丸が川から上がると見ていた人達から拍手が湧き上がった
箱に入っていた猫を頭に乗せて早足で、どこかに向かった

（麻帆良のどこか）

茶々丸の後を追っかけいたら
猫の溜まり場に到着した

以前、葉加瀬に頼まれて茶々丸の代わりに餌やりに来た事がある

ゴーン…

ゴーン…

鐘がなり茶々丸は後ろを向きこう言った

「…こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん。…油断しましたが、お相手はします」

それを聞き

物陰からネギ少年と明日菜が出てくる

「茶々丸さん。あの…僕を狙うのは止めてくれませんか？」

「…申し訳ありませんがネギ先生。マスターの命令は絶対なので」

この時点で話し合いは決裂
残るは実力行使になったな

俺はWドライバーを着ける

「変身」

「ルナ トリガー」

仮面ライダーWルナトリガーに変身する

「ラス・キル、マ・スキル、マギステル」

ネギ少年の詠唱とともに前へ駆ける神楽坂

常人より優れた身体能力で茶々丸に迫って行く

茶々丸は明日菜の右手を左手で弾く

続け様に顔に目がけて、左手が伸びる

予想以上の動きにより、茶々丸の体勢が体勢が崩れるが、無理やり体勢を立て直し明日菜を蹴り飛ばす

そこにネギ少年が近づき…

「光の精霊11柱。集い来りて敵を射て『魔法の射手・連弾・光の11矢』」

「追尾型魔法至近弾多数。よけきれません」

「すみませんマスター、薫先生…もし、私が動かなくなったらネコのエサを…」

「諦めんじゃねえよ」

「えっ？」

俺はネギ少年を飛び越え茶々丸にトリガーマグナムに向けて引き金を引いた

第二十八話／仮面ライダーVSネギ少年&神楽坂明日葉……………「えっ!？」

(前)

茶々丸襲撃事件の後半だったりする

第二十八話／仮面ライダーVSネギ少年&神楽坂明日葉……………「えっ!？」

俺は茶々丸に向けて引き金を引いた

ズガガガガガッ!!

だが、そこから出た弾丸は
ネギ少年の放った『魔法の射手』を打ち消した

「か、薫…先生……………」

「茶々丸。今日は帰れ」

「わかりました」

「待ちやがれ!」

「五月蠅いぞ生物」
なまもの

俺はネギ少年の方を向く

「テメエは…」

「昨日ぶりですね。魔法少年と少女」

「確か…、ダブル」

「覚えていてくれましたか、ありがとうございます…、と言いたいところですが、今回は少し痛い目を見てもらいましょう」

俺はネギ少年に向かって撃つ

明日菜がネギ少年の前に立つが、トリガーマグナムから出た弾丸は明日菜の避けてネギ少年に当たる

「ど、どうして!？」

「それは秘密」

本来、弾丸は直線の運動しか出来ないはずだが、『ルナメモリ』による追尾性能により目標を的確に命中する。その動きは意志を持っているようにも見える

俺はトリガーマモリを抜いて別のメモリを入れる

「ルナ ファルコン」

トリガーマモリで青かった部分が、橙色になる

それから左手が猛禽類の様な鋭い爪のある手になる

「!?!? 色が変わった!?!」

「明日菜さん。僕が詠唱し終わるまでの時間を…」

「わかったわ」

話終わると明日菜が殴りかかって来た

残念ながらリーチが足りない

俺は回し蹴りをすると右足が伸び明日菜の横っ腹に決まる

「集え雷S——」

「遅すぎなんだよ餓鬼が」

俺は左手でネギ少年の頭を鷲掴みにして持ち上げる

「そういえば、（この姿で）会うのは三度目だな少年よ。初めて会った時は人助けを邪魔したな、二回目は桜通り、んで…、今回は殺人未遂か…」

「それって…」

「分からないのか。魔法ってのは簡単に人を殺せるんだぞ」

「でも、僕は誰かを助けた「自分の為だろうが」！？」

「お前はただ、自分が狙われたくないから茶々丸を殺そうとしたんだろ？」

「ちょっとアンタ！さっきから好き勝手言っ——」

「茶々丸がロボットだから…、ロボットだから壊れても直せばいいと思っただろ？」

「そ、それは…」

「たしかに茶々丸はロボットだろうな。壊れたら直せばいい。だがな、記憶するところが壊れたらどうすんだ。見た目は変わんねえが、そいつはもう茶々丸じゃねえんだよ！ なにも分からない、何にも知らない、何にも覚えてない別人になっちまうんだよ！」

「ううっ…」

「それにな、魔法を使っているのは殺される覚悟ができていますやつだ…、と言っても聞こえちゃいないか」

俺は気絶したネギ少年を明日菜目掛けて投げた

「もう一つ言い忘れた。嬢ちゃん、魔法を知る…、つまりコチラ側の世界に足を踏み入れるつもりだったら覚悟するんだな。誰も殺せないような甘っちょろい気持ちだったら、一瞬であの世逝きだぜ」

俺はファルコンメモリの能力で羽を出現させて、飛んで行った

（学園長室）

「オイ、学園長」

「ななな、なんじゃ」

「悪いがネギ少年のサポート、辞めるわ。アイツには失望した」

「いったいどうしたのじゃ？一応、説明をする義務はあるじゃろう」

「そうだな。主な原因を一つ一つ説明しよう。まずは惚れ薬の件、聞いた話じゃありゃ、やっちゃいけない物だろ。2つ目は魔法を秘密にしようとしなくて、バンバン使うこと。最後に、つい先ほどネギ少年は茶々丸を壊そうとした。三つ目が一番の原因だな」

「ネギ君がそこまで正義に執着していたとは…」

「伝えたからな、もうネギ少年のサポートはしねえぞ」

「女子寮管理人室…忍竹薫の部屋」

「あゝ、疲れたわ。なにが『覚悟するんだな』だよ。無理だわ、シリ阿斯とかマジでできない。やれない、やりにくい」

俺はシリ阿斯とかシリアルとかどうでもいいんだし

本当はあのままネギ少年をハイスラでボコボコにしたかった

そう思い返すがすぐやめた
過去を引きずるのは効率的じゃないし、今を楽しめればそれでいいんじゃないか

P r r r r r r r !

ロット、電話だ

ピッ

「もしもし」

『元氣してるかの?』

「神^{リアル}いったい何のようだ? 意味なく電話するのは余程の暇人かドツキリ。いきなり電話をかけるとか、かけられる方の気持ちとか分かってんの? マジでボコりたいんですけど? お?」

『ごめんなしあ』

「で、なんのようだ」

『能力に規制をかけようと思っただけ』

「やっぱり東方?」

『そうじゃ。使えるのだけ後で送る』

「わーた」

『ではの』

ピッ

電話を止めるとメールが来た

早い！もう来たのか！

『博麗霊夢、霧雨魔理沙

アリス・マーガトロイト

パチュリー・ノーレッジ

聖白蓮、紅美鈴、十六夜咲夜

チルノ、水橋パルスイ

プリズムリバー三姉妹

魂魄妖夢、伊吹萃香

八意永淋、藤原妹紅

蓬莱山輝夜

鈴仙・優曇華院・イナバ

射命丸文、犬走椋

八雲紫、星熊勇儀

霊烏路空、古明地姉妹

封獣ぬえ、多々良小傘

プロント、汚い忍者

以上の者の能力を扱える

それでは君に幸あれ』

殆ど変わらないな
使えるのはいいことだな

なんで、『東方有頂天』
：

もうじき

物語は本格的に動き出す

それは逆らえない決定事項

第二十八話／仮面ライダーV S ネギ少年 & 神楽坂明日葉……………「えっ!？」

(後

今回、登場しました

ファルコンメモリ

White Sealの案により登場しました

これからも皆様から寄せられたメモリを使用する予定です

そろそろメモリの募集を止めようと思います

あくまで予定…

第二十九話／花粉症になったらおしゃみの一発くらいはかましとけ（前書き）

コレは6月に掲載されるが

実際はテスト期間に投稿しているものである

第二十九話／花粉症になったらおしゃみの一発くらいはかましとけ

茶々丸襲撃事件から数日

俺は今日

担当授業が午前中だけなのを利用して、エヴァの家
林の中のログハウスに來ています

体調が悪いみたいだから
お見舞いになる

high island shopのフルーツの盛り合わせ持参でな

「エヴァく、見舞いに來たぞく」

返事がない
ただの屍の――

ガチャ

「薫先生。どうぞ」

――ようではなかった

出迎えてくれたのは茶々丸
なんともなくてよかった

「マスター、薫先生がいらっしやいました」

「よおエヴァ」

「なんのようだ」

エヴァは布団で寝ている

鼻が赤くなっている

丸めたティッシュが部屋に散らばっている

「あ、ごめん…、覗く気は無かったんだ。せめて、誰もいなくなつてからそういうこ「何もしとらんわ」そうか」

てつきりエヴァが欲求不満で一人で慰めていると思ってしまった

こいつは失敬

「で、なにしに来た」

「お見舞い」

「嘘だ！」

「そうですか。せっかくhigh island shopのフルーツ盛り合わせを持ってきたというのに、残念だなあ…」

「あうっ」

「しょうがない。エヴァにとって見舞いにきたのが地獄の宴というのなら、コイツはネギ少年に渡すしかない」

俺は立ち上がり、エヴァの寝ている部屋を出ようとする

「ま、待ってくれ」

「どうしたんだい？」

「い、いや。そのだな…、貴様がどうしてもって言うのなら貰ってもいいぞ」

「…別にそこまでして、食べて欲しいとは思ってないし」

「しかしだ、あのぼーやには勿体なさすぎだろ」

「あのさ、もしかして――」

「食べたいのか？」

「ば、ばが！そんなわけ…」

「素直に言えばいいのに」

「だが…、その…、恥ずかしいじゃないか」

ブハッΣ

（忍竹脳内司令室）

「司令官！第三防衛ラインを突破されました！」

「慌てるな。第四、第五防衛ラインを強化しろ」

「ダメです！メインシステムがやられています」

「おいィ！ちよとSYレならんしょ！！」

「司令官！第四防衛ライン、突破されました！」 「総員に告ぐ！現在、使用可能である武器を持って、第五防衛ラインの後ろまで集まれ！このままだと第五防衛ラインが突破される。だが、突破されたと同時に一斉射撃を開始する」

「第五防衛ライン、突破されます」

「構え！」

「第五防衛ライン、突破されました！」

「撃てええええええええええ！」

（脑内終了）

ふう。なんとか勝てたか…
危なかったぜ

ま、蒼よりは楽だったな

蒼は一瞬で俺の脳内を侵略したからな

蒼ってのは蒼星石のことだよ
詳しくは『番外編その2』を読んでね

エヴァにリンゴを剥いてやったり、チャチャゼロを頭に乗つけて腹話術をしたりした

「ん？エヴァ、誰か来てるぞ」

「誰だ」

「ちよい待ち、今見てみる」

千里眼発動

……
……
……

「ネギ少年だ」

「構わん。無視しろ」

「せっかく来てくれたんだから、それは失礼ではないか」

「まあ、話しくらいは聞いてやるか」

『エヴァンジェインさん。いますか？』

「よお、ネギ少年。見舞いか？」

「し、忍先生！どうしてここに！」

「だからエヴァの見舞いだよ」

「そ、そうですか」

「やあ、ぼーや…」

「エヴァンジェインさん…」

え？なにこの雰囲気

自分、聞いてないっすよ！

「で、なんのようだ」

「エヴァはもう少し優しく言えないのか？」

「うるさい！私はこんなヤツに時間を掛けるより、早く残りのフルーツが食べたいんだ…って！何を言わせる！」

「そう怒るな」

「誰のせいだ！」

「俺のせいですね。分かります」

「殴りたい。自覚があるぶん余計に殴りたい」

「ネギ少年。謝って！早くあやマツて！」

「僕ですか！？えっと、あの……。ごめんなさい」

「まあいいだろう」

「お許しが出た」

やはりエヴァの心は寛大だと思う。今回のことでそれがよく分かった》》ネギ少年感謝

「あ、そうでした！エヴァンジェインさん。コレを」

ネギ少年はエヴァに折り畳まれた紙を渡し

「それじゃ、僕はこれで」

帰って行った

ああ、フルーツ食べてけば良かったのに…

「なあエヴァ。俺もそんなのを持っているぞ」

俺は懷から一枚の紙を取り出す。まだ読んでなかったからこの機会にいいだろう

「お前も持っていたか、なんて書いてある」

「えーと…『残りの巻物を手土産にカクレン〇ヤーの仲間入りを果たす。楽しみに待て 地来也』…これは違うな」

「貴様はカク〇ンジャーなのか！？カ〇レンジャーなんだな！」

「どちらかというとし〇ケンジャー」

「そうなのか…」

何故しょぼーんとする

「そんな話はどうでもいいから、ネギ少年の手紙でも見てみる」

「そうであつたな」

エヴァが手紙を開くと『果たし状』と書かれていた
いつの時代だよ

「…………ふっ、面白い。受けてやろうじゃないか」

エヴァは手紙を握り潰して
呟いた

「なあエヴァ…」

「どうしたんだ？」

「バナナは花粉症に効くという噂を耳にしたことがあるぞ」

「それは本当か!？」

「火が無いところに煙は立たんだろ」

その後、バナナを一生懸命に頬張るエヴァを撮影して
崖下の紳士達に高額で売りさばいた

茶々丸は「永久保存、永久保存」と鼻から何かを垂らしながら、エヴァの姿を録画していた

第二十九話／花粉症になったらおしゃみの一発くらいはかましとけ（後書き）

「薰と」「エヴァの」

「「麻帆良通信」」

「始まりました。麻帆良通信。進行は麻帆良学園3－A副担任、忍竹薰と…」

「この私、エヴァンジェイン・A・K・マクダウエルだ」

「エヴァ、花粉症は大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない」

「フラグですね。分かります」

「というより、写真はこうした」

「はて、なんのことだい」

「私がバナナを食べている写真だ」

「売ったわ」

「なに！」

「逃げろ」カカカッ

「待てー！」

「今回の麻帆良通信はここまで、それじゃあ。バックステッポオ！」

「勝手に終わらすなあ！」

第三十話／今さらだけど、『東方Project』の能力だけでも反則だろうと

エヴァVSネギ少年となります

なんで最後あんな展開にした

第三十話／今さらだけど、『東方project』の能力だけでも反則だろうと

今日は麻帆良で大停電がある

正式には麻帆良学園都市定期メンテナンスがある

この日は、エヴァ曰わく

「あの忌まわしき呪いが解けるぞ！我が世の春が来た！」らしい

表向きはメンテナンスいい

実際は学園を覆っている結界の修復なのだ

つまり、エヴァの呪いは学園の結界とリンクしているため
テンションが異様である

「あのさエヴァ」

「どうした？なにか不満でもあるのか？」

「さっきから思ってたんだけどさ。エヴァの呪いは『登校地獄』だよな」

「そうだ」

「俺の予想だけど、『登校地獄』と学園結界は関係ないと思うよ。
よお考えてみ『登校地獄』は強制的に学校に行かせる呪いだけど、
結界にはたぶん、エヴァの魔力が使われていると思う」

つまりこういうことだ

登校地獄は魔力を奪わないから、結界にエヴァの魔力を回している、
ついでに結界と呪いをリンクさせちゃえ

「ということなんじゃないの？」

「確かに考えてみればそうだな…」

まさかのエヴァさんの？疑惑ですか！？

先生はがっかりです

スキマで呪いの境界を弄れば
解呪ぐらいできるけど…
今じゃなくてもいいか

「それじゃ、手筈通り頼むぞ」

「大丈夫だ。問題ない」

エヴァは俺に確認をとり
世界樹前広場に向かった

ネギ少年を誘き出すのに
誰かの邪魔が入らないようにするのが、今回の役目

明日菜が来たら
抗戦してほしいと

『まもなく麻帆良学園都市定期メンテナンスを始めます。皆さん、

早くお家に帰りましょう』

アナウンスが入り

辺りが真っ暗になる

明かりは非常灯しか点いていない

「変身」

《サイクロン ジョーカー》

暗闇の中、俺は変身した

今日は学園結界が消えるから

侵入者が沢山来る

いつもより魔法先生や魔法生徒の警備を強くする

そのため、エヴァが自由に動ける。最も妖怪（学園長）がどこかで
見てるかも知れんがな

「エヴァンジェリンさん!!」

ネギ少年が杖に乗りながら空から降りてきた
風でローブがめくれ、いろんな道具がチラリズムする

「ようやく来たか」

「あ、あなたは……、どなたですか!？」

ネギ少年は自分の目の前にいる女性をエヴァと知らずに、問いかけた
挑戦状を渡したのに、どうしてわからないのだと思いつつ幻術を解く

「私だ。私!」

「あー!」

エヴァが幻術を解くと、ネギ少年は驚きの声を上げた

「一人で来るとは見上げた勇氣だな。さあ、魔法使い同士での決闘
を始めようじゃないか」

「いいでしょう。でもこの勝負は僕が勝たせてもらいます。」

「雑魚がキャンキャンと吠えおって。茶々丸!」

「ハイ」

エヴァに呼ばれた茶々丸は、何をすべきか瞬時に理解し、ネギ少年
に向かって動いた

後ろではエヴァが呪文を詠唱し始める

「失礼します。ネギ先生」

優先すべきことはネギ少年の持つマジックアイテムの無力化

茶々丸はネギ少年の顎目掛けて下から殴り掛かりつつが避けられる
その時、ローブの中のアイテムを片方でもぎ取り、捨てた

「ああっ!?! 僕のコレクションg『魔法の射手 連弾・氷の17
矢!!!』」

『風障壁!』

ネギ少年は懷から液体を取り出し、それを媒体として魔法の射手を
防ぐ

だが、戦歴が違いすぎる

エヴァは魔法使いに幼い時から追われていて、身を護るために魔法
を覚えた。言わば正当防衛。結果として人を殺めてしまい、賞金首
にもなる始末

当然、賞金稼ぎにも狙われるようになり、多くの場を踏むことにな
ったのだ

「さっきまでの威勢はどうした! 『氷爆!』」

ネギ少年に氷が飛んでいき、爆発する
ネギ少年は杖に乗り、空へと回避する

「ほう、やるではないか」

ネギ少年は杖に乗ったままエヴァ達に向けて魔法銃を放つ
それは障壁によって簡単に弾かれた

「ふはははっ。どこに逃げるといふのかね？」

エヴァがムスカ口調になった

一方、忍竹薫は…

ああ

暇だなあ

明日菜は来ないし

侵入者は他の奴らにボコされてるし

とにかく暇だ…

おや？

あの人影は…

おお！明日菜じゃないか

よし、俺も行くか！

カカカッカカッ

俺は明日菜の後ろに続いて橋の方に向かう

明日菜が参戦したら、抗戦しろとのことだから
今はエヴァとネギ少年の戦闘を見守るか…

忍竹が明日菜を見つける少し前

橋の方へ逃げたネギ少年を、エヴァは追っていた

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、来れ氷精、大気に満ちよ。』

白夜の国の凍土と氷河を…こおる大地…!!』

「わー!」

エヴァの攻撃から逃げるネギ少年は『こおる大地』で右腕を怪我して、橋の上へと落ちた

するとエヴァはネギ少年が用意していた捕縛結界に捕まってしまった

正々堂々とか言ってたのに
罠を張ったとか可笑しいでしょ

「や…やったー! エヘヘ、ひっかかりましたね。これで、もう動けませんよ。エヴァンジェリンさん、これで僕の勝ちです! おとなしく観念して悪いことをするのはもうやめて下さい!」

もちろんエヴァがネギ少年の捕縛結界程度で動けなくなるはずもなく
エヴァは簡単に結界を破りネギ少年の杖を奪い取り橋の下へとポイする

相手に武器を使えなくするのは当然だろう

ネギ少年はズルい、酷い、もう一度勝負だ、この合法ロリだの喚いていた

「いや…今日はよくやった、ぼーや。一人で来たのは無謀だったがな…。さて、血を吸わせてもらおうか」

「うううっ…」

明日菜と俺（俺は尾行）が橋に着くと
エヴァがネギ少年の血を吸おうとしていた

「コラー！待ちなさい！」

「ふん、来たか…。神楽坂明日菜…って、人間がそんなもの投げるな！」

わーお

明日菜がボートを投げてるよ

明日菜が投擲したボートは障壁ではじかれる

「フン…たかが人間が私に触れることすらd——ルネサンス！」

ボートの陰になっていた明日菜の跳び蹴りかエヴァの顔面に直撃した

見事な蹴りだ

捨て身キックなのが残念だが

すると橋の一角が光り出す

「ふふっ…どうした？お姉ちゃんが助けに来て安心したか？」

「何言ってるのよ！2対2の勝負でしょ！？」

「それじゃ選手交代といこうか」

俺はわざわざ橋の下をくぐり抜けエヴァの横に立つ

「茶々丸、下がれ。交代だ」

「はい」

俺の相手は明日菜だったな
今回は特別に武器なしで戦ってやろう

ネギ少年は契約執行で明日菜に魔力供給をし、身体能力を引き上げさせる

同時に明日菜は俺に向かって駆け出してた

確かに速さ、威力共に良くなっているがまだまだ

俺は明日菜の額に狙いを定めてデコピンをする

ライダーデコピンだ

いくら力を弱めにしても

流石は仮面ライダー

明日菜が少しよろめく

「やってくれるわね」

今度は明日菜がデコピンを仕掛けるが余裕で回避

そろそろ終わらせるか

〔サイクロン デス〕

俺はデススラッシュの柄で明日菜の足を引っ掛けて転ばし、刃を首に当てる

「安心しろ。命までは奪わんよ…。大人しくしてればな」

さて、エヴァの方はどうかな？

「フハハハ、いいぞ！やるじゃないか、ぼーや！」

「まだです、エヴァンジェリンさん！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！来れ雷精、風の精——」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来れ氷霊、闇の精——」

「えっ？」

「フフッ」

エヴァが同種の魔力で正面から打ち破ろうとしているのに、ネギ少年は少し驚くが詠唱に集中した

「雷を纏いて吹きすさべ、南洋の風！」

「闇に従え吹け、常夜の吹雪！」

「くるがいい、ぼーや！『闇の吹雪』！！」

「『雷の暴風』！！」

双方の魔法がぶつかり合う

エヴァが手加減しているのは確定的に明らか

その為、威力は互角

「クシュン！」

その場に似合わないようなネギ少年のくしゃみ
それが引き金となり、エヴァの『闇の吹雪』を『雷の暴風』が撃ち破った

『雷の暴風』が消えるとエヴァはスッポンポンで多分、いろんな感

情がごちゃ混ぜになり引き攣った笑顔をしていた

安心しろエヴァ。お前の裸を見たぐらいで欲情することはない

「…やりおったな小僧。フフッ、フフフ、期待どおりだよ。さすがは奴の息子…」

そんな様子を俺とアスナと茶々丸が見ていたが突然茶々丸が叫ぶ

「いけない、マスター！戻って！」

「な、何っ!？」

「予定より7分27秒も電源の復旧が早いです！マスター!!」

学園の方から電力供給が始まり、橋の明かりが点くと電気がエヴァを襲った

「きゃんっ！」

「ヤベッ、悪いな嬢ちゃん。これで終わりだ」

俺は明日菜の首からデススラッシュを離しメモリを代える

「ルナ ジョーカー」

右腕を伸ばして落下するエヴァを救出する

「む、すまない」

「いえいえ」

ドカーン！

突然、爆発音が響き

ぞろぞろと変な奴が現れる

「もお！今度は何よ」

明日菜が文句を垂れる

さっきの爆発音は警備が抜かれたんだろう
畜生！

結界が戻ったからって油断しやがって！

数は三人

だが、いつもの侵入者とは何かが違う雰囲気がある

『闇の福音だ…』

『倒せ、したら俺達が英雄になれる』

『殺せ…殺せ…』

なんか変だよ

「エヴァ、茶々丸。その二人を連れて行け」

「なっ！バカをいうな」

「そうですよ！僕はまだ——」

「坊主、お前は魔力が尽きてるだろ。無理するな。それにここから

は俺の独壇場だ、邪魔はさせないぜ」

「わかりました。行きましょう。マスター」

「おい茶々丸! どうして!」

「でも、絶対に戻って来て下さい」

「ああ」

茶々丸は明日菜を、エヴァはネギ少年を抱えて寮の方に行った

さあ!

行くぜ! 行くぜ! 行くぜ!!

第三十話／今さらだけど、『東方project』の能力だけでも反則だろう

（裏話のコーナー）

薫「なにこのコーナー」

作「裏話やボツネタを載せる恥曝しの場所だよ」

薫「自虐じゃねーか」

作「なにが悪いんだよ（怒）」

薫「逆ギレしたよ！」

作「まあいい、まず最初はこちら、第四話のタカミチ戦の裏話」

薫「あの話しになにか会ったのかい？」

作「あの時は『サゴーズ』じゃなくて『ミッシング・パワー』を使う予定だったんだよ」

薫「そうだったのか」

作「よくよく考えてみたら、『ミッシング・パワー』をつかったら、世界樹ごとタカミチが折れる（物理的な意味で）かも知れなかったんだよ」

薫「あんなもん使ったら世界樹どころか、麻帆良学園までおじゃん

になるな」

作「それもそうだな」

薫「他には何かあるのか？」

作「あることはあるんだが…」

薫「何を渋ってんだい？作者？」

作「これ言ったらアレな気がしてな」

薫「言えばいいじゃん」

作「まあいいか。元々、この作品の舞台は『魔法先生ネギま！』じゃなくて『遊戯王GX』か、『リリカルなのは』にしようと思ったんだよ」

薫「『リリカルなのは』にすればよかったんじゃない？」

作「自分さ、シグナムとスバルが好きなんだよね。だからヒロインはどっちかにしなくちゃいけないんだよ」

薫「両方でいいんじゃないのかい？」

作「それ以前に、ナンバーズの方々と過ごす日々も魅力的だし、マテリアルズとの日常もいいなあ。とか思うんだよ」

薫「意外と考えてんだ」

作「考えてないよ」

薫「俺の感動を返せ」

作「いや」

薫「わかった」

作「そんじゃ、今回はこの辺にしときますか」

薫「いい判断だ。ジュースをやろう」

作「九本でいい」

薫「謙虚だ。流石作者謙虚」

てな訳で、本日はここまで
また次回

再見

第三十一話／喧嘩はタイマンに決まってる（前書き）

前回までの、三つの出来事

一つ、エヴァとネギの対決が終わる

二つ、明日菜が裏の関係者にある

三つ、謎の三人組が現る

後書きにアンケートがあったりします
よければ見て下さい

ネタバレを含むので、嫌な方は後書きを見ない方がいいです

第三十一話／喧嘩はタイマンに決まってるだろ

俺は怪しげな魔法使い三人（次から三魔）を視界に入れ、構えた

三魔は懷から何かを取り出し
腕、横腹、肩に挿した

「メガネウラ」

「アースロプレウラ」

「アロマノカリス」

「ダリー！コイツらもかよ！」

『メガネウラ』（MGD）はバカデカイトンボ

『アースロプレウス』（ED）は上半身が人型の下半身がムカデで
腹から触角が生えている。そしてこちらでもデカイ

『アロマノカリス』（AD）は伊勢エビみたいな姿のデカイエビ

大きけりゃいいもんじゃ無いぜ

MGDは空中に飛び

ADは川に潜った

「まずは様子見だ」

「サイクロン ジョーカー」

俺がフォームを変えると

EDは触角を伸ばしてくる

「危なっ」

バゴン！

触角は橋の手すりを簡単にぶっ壊す

「おいおい、強烈過ぎだろ」

俺は触角を避けながらEDに近づき殴る

「~~~~~ッ！」

硬え！

堅すぎるだよ！

マジ、修正されて

バチンッ

「グハッ！」

悶えていたら

触角で飛ばされた

「痛ってえな！」

ったく。こりゃちと本気でやんなきゃな

三人称視点

忍竹は三体の攻撃を避けている

EDの触角を避ければ橋の下からADの針みたいな物で攻撃され、
空中に避ければMGDの餌食になる

いくら避けようが

少しずつダメージは溜まっていくもの

忍竹は少しずつだが、動きが鈍くなっていく

「三対一じゃしゃーない。使うか」

忍竹はそういい

サイクロンメモリをGと書かれた黒のメモリに代える

「グラビティ ジョーカー」

両方の色が黒になる

「勝負はここからだ」

三人称視点終了

「グラビティ ジョーカー」

「勝負はここからだ」

…とは言っただものの
大変だよ。ホント

ブウウウウウン！

「ハアッ！」

ズドン

俺は空中から攻撃してきたMGDを重力波を放ち背中から落とす

「まずは一匹！」

「ジョーカー マキシマム・ドライブ」

『ジョーカー・グラビ・クラッシュ』

俺は跳び上がりライダーキックの構えに入ると、足に重力が集まり、MGDを一気に引き寄せ、『ジョーカー・グラビ・クラッシュ』が決まり、MGDは爆発する

「がっ…」

三魔のひとりが倒れる

俺はダブルドライバーを外し、龍騎のカードデッキを手すりに移し、ベルトを出現させる

「変身」

俺が龍騎に変身になると
エヴァが再び来た

「喜べ薰。来てやったぞ」

「ちょうどいい。エヴァ、あのエビの相手をしてくれ」

「おい、ちょっと待て！いきなり何を――」

「頼んだぞ」

俺はEDごと、ミラーワールドに引きずり込んだ

くミラーワールドく

「ここなら邪魔を入らん。きっちりタイマンで勝負しよや」

するとEDは地面に潜った

俺はカードをドラグバイザーに入れる

「ストライクベント」

右手に大きなトラの爪のような物が装備される

イメージとしては『タイガ』のストライクベントの青のラインを赤くした感じ

足元のアスファルトが盛り上がるので後ろに下がると
EDが飛び出した

「潜らせるかよ！」

俺は再び地面に潜ろうとしたEDの腹を突き刺した

いくら装甲が硬くても

節足動物の腹は柔いんだよ

（三人称視点）

忍竹はEDの腹を突き刺すが、それが仇となり触角に締め付けられ、
ストライクベントが消えた

「ぐっ…、ガッ…」

EDはさらに締め付けを強くし、忍竹を地面に叩きつける

地面に叩きつけられながら、カードを入れる

「アドベント」

川からドラクレッターが現れ、EDの触角を食いちぎり、尻尾でEDを締め上げる

触角から脱出した忍竹はさらにカードを入れる

「ファイナルベント」

「シャアアアア…」

今度は紫色の巨大コブラ
ベノスネーカーが背後に現れると、忍竹は両手を横に広げて
EDに向かい走り出した

「これで二体目」

忍竹はEDを蹴り、サマーソルトの要領でベノスネーカーに乗り、
押し出される

ダン！ダン！ダン！

ドラクレッターに拘束されて動けないEDにベノムクラッシュを決

める

「ガガガガ」

ドガン！！

EDが爆発し、三魔の一人が現れる。忍竹はそいつを連れてミラーワールドを出た

一方、エヴァは…

「さっきからちょこまかと（怒）」

少々、ご立腹のようだった

「ちっ、やはり茶々丸を置いてきたのは間違いだったか…」

エヴァは魔力切れのネギ少年が、無理して来られては困るらしいので、茶々丸に止めさせている

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 氷の精52頭、集いで来て敵を切り裂け、魔法の射手連弾・氷の52矢！！』

エヴァは魔法の射手を放つが、A Dは吐き出す針のような物で、自身に当たりそうなのを防いでいる

他の魔法の射手は川に当たり
氷を作る

「捉えた！喰らえ『氷神の戦鎚』」

A Dの頭上に
これまた大きな氷の塊ができ
落下した

「よし」

エヴァがガッツポーズをすると…

「待たせたなエヴァ」

鏡に入っていた奴の声がした

三人称視点終了

「待たせたなエヴァ」

俺は三魔の一人を連れてミラーワールドから戻ってきた。と、同時に変身が解ける

「ふん。貴様があまりにも遅いから既に決着はついてるぞ」

「そう？ んじゃ、あれはなに？」

「そんな嘘で、この私が騙せると思ってるのか？ 奴なら今頃、氷の下敷き…に…」

エヴァは俺の指差した方を見るや、声量をなくした

恐らく、エヴァが出したであろう氷の塊はある
あのエヴァが、これほどの攻撃を外すとは考えにくい

つまり、ADは氷の下をくぐり抜けたに違いない

「なにを冷静に考えてるんだ」

「いや、ちよつとね…」

今の状態じゃ危ないし
変身するか

ティン ティン ティン

「変身」

「タカ トラ バット タトバ タトバタトバ」

「この前とは違うな」

「まあな、そんじゃエヴァよ。魔法の射手で誘導してくれ。俺がアイツを叩く」

「もう勝手にしろ」

そう言いながら魔法の射手を撃つエヴァ

そういうところがいい

俺はタカヘッドの超視力能力で川の中を移動するADが、出てくるのを見る

.....

.....

.....

今だ！

「スガヤニングチャージ」

足に力を入れて跳ぶと赤、黄色、緑の輪が現れた

輪をくぐり抜け、ADに『タトバダイナミックスリー』を決める

ドガン！

「ちっ、メモリブレイクできなかったか」

『ぐっ…』

爆発の後から三魔の一人が現れて再びメモリを挿した

「アゝロゝマゝノゝカリゝス」

「おい薫。さっきと様子が違うぞ」

「多分メモリの暴走だ」

「暴走だと!?!」

『ギアアアアアアアアアアアアアアアア!』

「来るぞエヴァ!」

ADが叫ぶと水が集まり、吸収されていく

「あ、メモリ！」

水と一緒に『アースロプレイア』のメモリが吸収された

『ウオオオオオ！！』

その姿はまるでエイの怪物

「デカいなあ」

「そうだな」

『ギヤアアアアアアアアアアア！！』

「危ねっ」

ザシュツ

エイの怪物（AD）が水の塊を投げてきたのでトラクローで引き裂く

ザッパッーン！

「アイツ、潜りやがったな」

「どうする。流石にあの速さだと当たらないぞ」

「そんじゃ、コイツの出番かな」

俺は三枚の青にメダルを入れる

ティン ティン ティン

「シャチ ウナギ タコ シャシャシャーウータ シャシャシャウ
タ」

『ニイイイイイイイイイイイイイイイ』

A Dが飛び出して
その巨体で体当たりをしてくるが、俺はシャウタの能力の、液状化
で回避し川に入る

ザッパッーン！
ザブン！

川に入ると上半身の液状化を解き、液状化している下半身から水流
を出して移動する

A Dは腹から
アースロプレイアの触手を六本だし、攻撃してくる

それをウナギアームの電気鞭ウナギウィップで弾きながらA Dの懷に潜り込み、下
半身の液状化も解く

「行くぜ！」

次にタコレッグを八本の触腕状にし、触手を絡め取り

「オンドリャア！」

俺は体を回転させ、触手を引きちぎる

『ギャアアアアアアアアアアアアアア！！』

「逃がさねえ」

逃げようとするADの背中にタコレッグの吸盤で張り付き、ウナギウィップをヒレに巻きつける

ザッパーン！

「どっせい！」

バゴン

俺は川から出たADを橋の上に落として、ADを挟んでエヴァの正面に降り立つ

「決めるぞエヴァ」

「ああ」

ティン ティン ティン
「スキヤニングチャージ」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来れ氷霊、闇の精――」

俺は液状化し跳躍する

「闇に従え吹け、常夜の吹雪！――」

ウナギウィップでADを引きつける

『闇の吹雪！！』

パキパキパキパキ

闇の吹雪を受けADは凍る

「でい　　や　　や　　あ　　！」

八本のタコレッグをドリル状にして、凍ったADを貫く

ドガン！

ヒュンヒュン

三魔から出てきたメモリはちゃんと破壊する

「うー、終わった」

俺は変身を解いた

「そうだな」

ん？いつもと反応が違うぞ

「あれあれ？どうしたのかなエヴァ？」

「フツ、何でもない」

「そっか。そんじゃ、アイツらを迎えに行くか」

「私は行かんぞ」

「そう言わずにさ」

俺はエヴァを持ち上げる

「降ろせ、降ろせー！ー！」

「ハハハハ、エヴァは軽いなあ」

「降ろせー！ー！うがああ！」

朝倉視点

あ、ありのまま起こった話を話すわ

停電にのっかって

何かスクープが無いかと出てみたら、怪物と仮面の人が戦っていた

特撮とか、ワイヤーアクションとか、そんなちゃっちなもんじゃない

もっと恐ろしい、私の勘に驚いたわ

そんなことより

コレはスクープよ！

証拠写真は撮った

ビデオ録画もした

コレで完璧

明日の麻帆良新聞の見出しは決まりね

それにしても、どこかで見たような…

（朝倉視点終了）

〽次の日〽

「さてと、今日の麻帆良新b——」

『暗闇の麻帆良に怪物現る!』

昨夜の大停電時

街の外に繋がる橋にて

巨大なエイの怪物と青の仮面の戦士が戦っていた

今まで、仮面の戦士に関する情報は麻帆良学園新聞部に数多く寄せられているが、今回、その写真を撮ることに成功。我々はそれを仮面ライダーと名付け——

——コレからも仮面ライダーについて調べていく方針である

『麻帆良学園新聞部 朝倉和美』

「これ以上、隠すのは難しいな…」

俺はふと、呟いていた

第三十一話／喧嘩はタイマンに決まってるだろ（後書き）

アンケート

まあ、アンケートっていうよりは仮契約相手のことです

現在のところ

相坂さよ、朝倉和美の二名は忍竹パーティーに入るので除いて下さい

その他で、『この人と仮契約して欲しい』とか『こんなアーティファクトを使って欲しい』とかがあれば感想の一言にお願いします

アーティファクトの場合、『効果』『形状』『能力』『名称』を書いて頂くとありがたいです

番外編その3―Shinobu／steynighthってなんぞ？（前書き）

薫先生が聖杯戦争に参加したみたいです

あとがきにステータスがあります

てか、あのステータスはチートだろWWW

番外編その3―Shinobu／steynightってなんぞ？

とある街中のところ学校

そこには青い全身タイツを身に着け赤の槍を持った男と、赤い髪
の青年がいた

「ハア…ハア…」

「よお。アンタ、人間にしてはもった方だ。だが、これで終わりだ」

青タイツの槍が赤い髪の青年の命を刈り取ろうとした

その時――

青年の左腕が輝きだす

それと同時に、まるで太陽を思わせるような輝きが溢れる

カッ！

パアアアアアア

いまここに居る者が光りに包まれる

光が収まると青タイツが離れていた

「バカな！？7人目のサーヴァント…、いや二体のサーヴァントを
召喚するだど！」

そう、青年の目の前には凜とした表情で鎧を身に纏っている女性と白衣を着た男性がいた

「サーヴァント・セイバー、召還に従い参上した。マスター、指示を――」

青年は突如、左腕をおさえる

「――これより我が剣は貴方と共にあり…、貴方の運命は私と共にある。ここに契約は完了した」

すると、青年の左腕の紋様が光る

今度は白衣の男性が

「サーヴァント、ランク『ティーチャー』の召喚に応じて俺！参上！」

男性は赤い髪青年を見る

「アンタがオレのマスターか。よく分かんが宜しくな」

「あ、ああ」

次に男性は鎧の女性と向き合う

「セイバー、その青年は任せた。あのタイツは俺にやらせて貰うよ」

「心配は不要です。あのような者、私だけでも――」

男性はセイバーと呼ばれる女性の言葉を遮るようにこう言った

「まあまあ、セイバーはあんましょく動けないでしょ。だから今回はお預け」

「くっ…、わかりました」

セイバーは若干、悔しそうな顔を見せて下がった

白衣の男性は青タイツに向かい合う

「おい。青タイツ！俺は最初からクライマックスだからな、途中で泣き言っても知らねえぞ！」

「チツ、イレギュラーか。全く、どうなってやがる」

「さて、授業の開始だ！行くぜ！！行くぜ！！行くぜえええ！！！！」

白衣の男性はポケットから、短い棒状の物を取り出した

それは、白、緑、黄色と、様々な色がある

チョークだ

教師が黒板に文字を書く時に使う、あのチョークである

白衣の男性はチョークを青タイツに投げつける

「ケツ、そんなもん。当たったってどうにもならんアビバツ！」

チョークは青タイツは額にぶつかり粉になった

チョークが脆いのではない

威力が高すぎるのだ

「とんだバクキャラだな…」

「それ程でもない（キリッ）」

白衣の男性は左右の手に三本、計六本のチョークを投げる

そのチョークは上下左右と動き青タイツに飛んでいく

「あ、あれは！『丘の上のホームイングチョーク！！』」と赤い髪の青年は言っていた

青タイツはチョークを槍で弾き後ろに下がる

「こんなところで使うの勿体ねえが…」

青タイツは叫びながら槍を引き白衣の男性に投擲する

「その心臓。貫いうける！『突き穿つ死翔の槍！』」
ゲイ・ボルク

その槍は白衣の男性の心臓に突き刺さる

「まず1人」

青タイツは赤い髪 of 青年の方に歩き出すが

「何が『まず1人』だって？」

「――ッ!？」

青タイツは驚いた表情で振り返った

「テメエ…、どうしてだ…」

そこには、心臓に槍が刺さり死んだ筈のサーヴァント

ティーチャーが立っていた

「悪いな。死ねないんだ」

ティーチャーは胸に刺さった槍を引き抜き、青タイツに投げ返した

ティーチャーは懷からカードを取り出しす

青タイツは突然

「悪いな。そろそろ引き上げさせてもらうぜ。今回は偵察なんだな」

「まあいい。授業終了でしょう」

「ティーチャー、決着はまた今度な。それと、俺はランサーだ」

「いつでも来いよ。ランサー」

ランサーは夜の町に消えていった

聖杯戦争は始まった

七人のマスターと八人の英霊が殺し合う戦争が…

戦わなければ

生き残れない!!!

ここからはダイジェストでお送りします

「こんにちは、お兄さん」

「コイツがバーサーカーか…、デカいな」

「■■■■■■■■■■」

「嘘…、素手でバーサーカーの攻撃を防ぐなんて」

「クシャル！ ナルガ！ グラビ！ ク、ク、クシヤナ クシヤナ
ガビ」

「ウオオオオオオオオオ！」

「なんだこんな所に呼び出しておいで、しかも邪魔者を交えて決着をつけようとはな」

「ギルガメツシュ…」

「まあいい、その雑種。我が一撃で死ねるのだから光栄だと思え」

「だったら全力で抵抗させてもらう。流派、東方不敗の名にかけて

——」

「行くぞ、エア！」

「俺の右手が真っ赤に燃える！勝利を掴めと轟き叫ぶ！石破！てえええん！ぎよおおおけえええん！」

「エヌマ…」

「爆裂！ゴット…」

「エリツシュ！！／フィンガー！！」

「士朗、凜と幸せにな」

「ああ」

「イリヤ、ちゃんという子でいろよ」

「うん………（グスッ）」

「凜、士朗は頼りになるから大丈夫だ」

「わかってるわ」

「そうだ士朗。言い忘れた事があった」

「なんだ？」

「俺、セイバーを幸せにするよ」

「当たり前だろ」

「そうだったな……」

「それじゃセイバー、行こうか」

「ええ、薫／＼／」

番外編その3―Shinobu／steynightってなんぞ？（後書き）

マスター…衛宮士朗

ランク…ティーチャー

真名…忍竹薫

筋力 星熊の姉さん級

魔力 魔理沙とアリスとパチュリーと聖を合わせた位のふざけた量

耐久 堅い

幸運 奇跡が起こせますが何か？

敏捷 射命丸／

宝具 C／EX

クラススキル

放任主義 B

マスターがいなくても数日間の現界が可能

教育的戦闘 A

教材が宝具化する程度のスキル

魔法先生

魔法が使える程度のスキル

欲望の塊

仮面ライダーオーズになれる

固有スキル

生徒との繋がり A

仮契約した相手のアーティファクトを使用できる

幻想の有頂天 A

幻想になった力が使える

(魔理沙、パチュリー、妖夢、萃香の能力とスペルが使える)

宝具

薔薇乙女との約束 ローゼン・ストライク

クラス EX

レンジ 1人

蒼星石、雪華綺晶、薔薇水晶の力が使える

蓬莱の体 (永遠の時を刻む者)

クラス EX

レンジ 1人

常時発動の宝具

死ぬことも老いることも無い

体の一部が残っていれば再生する。損傷状態によって再生時間が変化
体を消し飛ばされれば死ぬ

禁断のメダル

クラス EX

レンジ 1人

体の中に紫、黒、白のコアメダルを各三種類ずつ、合計九枚取り込

んでいる

”n”のフィールド

クラス EX

レンジ 1人

自分と相手を”n”のフィールドに引きずり込む

”n”のフィールドの特徴

毎回変わるが、共通して巨大な木が一本立っている

アンリミテッド・ソード・ワークスの”n”のフィールド版

ゴットフィンガー

皆さんの想像する。あの『ゴットフィンガー』です

その他

麻帆良学園女子中等部3-A副担任であり、異世界人

蒼星石、雪華綺晶、薔薇水晶のマスター

参加理由

『魔法先生ネギま!』の世界で役目を終えると真っ白な世界に三度呼び寄せられる

神からの頼みで聖杯の破壊を頼まれた為に参加

第三十二話／京都に行きたくなることは稀によくあるらしい（前書き）

やっと書けた

今回の薫先生は忙しいです

そして、仮契約したりしなかったり…

前回の後書きでの募集は継続中です

もうすぐ修学旅行編

第三十二話／京都に行きたくなることは稀によくあるらしい

三魔を倒した次の日

俺は耐え難い睡魔と戦いながら、朝早く3－Aに向かう

教師に休みは無いのだ

ガラガラ

「ういゝす」

（あ、薫先生。おはようございます）

「おはよー。さよ」

（え…!?!）

「ゴメンね。今まで話せなくて、声も聞こえるし、姿も見えてるよ」

（うう…、グスッ…）

「おいおい、泣くなよ」

（すみません。うれじぐで、づい）

「そうか」

（あの…）

「ん？」

（私と友達になって下さい）

「えゝ」

（そう言わずにお願いします）

「わかったよ」

（ありがとうg「但し」？）

「今晚、女子寮の管理人室に来ること」

（は、はい！）

「そろそろ誰か来るから、今回はここまでな」

（仕方ないですね…）

さよは少し寂しげな表情を浮かべて、自分の席に戻った

ガラガラ

「今日も一b——じゃねえか」

「おはよー。ちうちゃん」

「な、ここでそれは止めろ／／／」

「どうして？」

「だって…、その…、恥ずかしいじゃないか…／／／」

「わかったよ。ちうちゃん」

「わかったらないい——って！ちうは止めろ」

「ゴメンゴメン、可愛かったからつい」

「か、可愛／／／／／」

ダツタツタツタツ

千雨が走ってどこかに行った

「なあさよ。俺、何かしたか？」

（薫先生は酷いです。鬼畜です）

「お前も酷いな」

結局、千雨が戻って来たのは、それから30分くらい後だった

く授業中く

「——と、いう風に。コイルの中の磁界を変化させることで、電圧が生じ、電流が流れるんだ。この現象を電磁誘導という。この現象を使うことで、電気を流さずに電流を生み出せる。ここ、テストに出るから『えく』んじゃ、ここまでで分からない事がある奴は手を挙げろ」

「はい！」

何人か手を挙げた

「授業に関係ない事を言ったら成績を下げるぞ」

そして、手が下がる

「はあく。個人的な話は休み時間か放課後にしてほしい」

キンコーン

「時間か、じゃ今日の授業はここm」ガタツ！

ピンポーン

パンポーン

『ネギ先生。忍先生。至急、学園長室にくるように』

「と、言うわけだ。またな、古菲、楓」

俺は、すぐ後ろに迫っていた二人にそう言い。学園長室に向かった

『うう…。勝負アル…』

『学園長。恨むでござる…』

そんな声が聞こえたがスルー

（学園長室）

「ええ！修学旅行は中止！？」

俺は学園長に呼ばれので来てみたら、ネギ少年が落ち込んでいた
ネギ少年の言葉から推測すると、修学旅行で京都にはいけなくなる
かもしれない

「うむ、京都がダメだった場合はハワイに…」

「どちらかという大反対」

「それがの、先方がかなり嫌がっておってのう…」

「それって…」

「関西呪術協会のことじゃ」

うむ、わからん

「ワシとしては西と仲良くしたいんじゃない。そのための特使として西へ行ってもらいたい。そこで、この親書を向こうの長に渡してほしいのじゃ」

ほお、手紙を渡すだけの簡単なお仕事ですね

「今のネギ君には大変な仕事になるじゃろ…どうじゃな？」

「分かりました。任せてください学園長先生！」

「では修学旅行は予定通り行う。忍君は少し残ってくれ」

ネギ少年は学園長室を出て行く

「んで何の用だ？」

「向こうでも、木乃香の護衛とネギ君のサポートを頼みたいんじゃないよ」

「護衛はするけど、ネギ少年のサポートはやだ」

「フオ！どうしてじゃ？」

「ネギ少年は魔法使いだろ。自分の身ぐらい自分で守れるだろ。ま、生徒になにかあれば動くけどな」

「わかった。それでいいじゃろ」

「それと、言い忘れていたことがあったな」

「はて、なんじゃ？」

「俺の予想なんだが、この修学旅行…、ヤバい気がする。それに、木乃香は魔法に触れると思う」

「……………」

「あと、エヴァの呪いなんだけどさ。ちょっと緩くするよ」

「ど、どうということじゃ！」

「いや、あのさ、あのままだとエヴァが京都に行けないだろ。なんかさ、可哀想じゃん。何回も中学生やってるのに、一回も修学旅行に行けないなんて」

「そういうことならいいじゃろ」

「ありがとよ。学園長」俺も学園長室を出る

↓麻帆良学園某所↓

さて、早速エヴァの所に行こうかな？

俺がエヴァの家に向かっているといきなり

『いたぞ！アイツだ！』

なんて声と共に

暑苦しい奴らに囲まれてしまった。やれやれ

「どうした？俺のファンか？サインならやらんぞ」

『フツ、ここで会ったが百年目、古部長の仇と、俺らの怨みを受けるがいい。忍竹薫！』

「先生をつけろ」

『うっせー！野郎共、かかれ！』 『ウオオオオオオ！』

「教師に集るとは、全員まとめて補修室送りにしてやる」

『古部長の仇だ！』

『俺らのオアシスを奪った罪』 『その上、桜咲さんとイチャついてやがった！』

『なっ！なんだってー！』

剣道部まで来ちゃったよ

『こうなったら殺るしかないな』 『手を貸すぜ中拳部』

このままでは

白衣で戦う先生になっちゃうよ

さっき、理科を教えていたから着替えてないんだよ

『そんじゃ、改めて…』

『くたばれええ、忍竹！』

「メガトンパンチ！」

『オウフ』

とりあえず雷属性の左で一発だろ

俺はこの左で

大量のバカ共をか殴り捨ててきた（Fクラスの奴ら）

「オイオイオイオイオイオイオイオイオイ！オイイー！」

俺のラッシュでダメージはさらに加速した

「追撃のグラットンワイパー！」

剣道部の奴が落とした竹刀を降る

「ダークパワー！」

何かを投げる

その何かが爆発した

「教師が持つ光と闇が交わり最強に見える。また暗黒が持つと頭がおかしくなって死ぬ」

『チクシヨウ！覚えてろよ』

『勝ったと思うなよお』

捨て台詞を言い倒れた奴らに一言だけ言ってやった

「もう勝負ついてるから」

俺は残った奴らの方を向く

「俺はこのまま、タイムアップでもいいんだが…」

『まだ俺たちは負けてねえ』

「そのやる気は感心するがどこも可笑しくはなかった」

そんな時！

『この試合！待ったアル！』

「古菲…」

『古部長…』

その一言で場が落ち着く

「薫先生。ゴメンナサイアル！」

『!?!』

古菲が頭を下げた

「私が悪いアル！きちんと伝えるアル！だから今回は見逃してほし

いアル！」

「……………今回だけだぞ」

「ホントアルカ！」

「勿論」

「よし、みんな部室に戻るアル。それと、先生には今後手出しは無用アル」

『『『は、はい』』』

中拳部の人達は散っていった

剣道部はいつの間にかいなくなっていた

「ワタシこれから部活アル。薫先生。またこんど勝負アルヨ！」

「ハイハイ」

古菲は「また明日アル」と手を振りながら部室に走って行った

俺は俺の用事を済ませるか

くエヴァのログハウスく

「エヴァー。良い知らせと良い知らせがあるよ。どっちが聞きたい」

ダッタッタッタ

ボタン！

「どっちも良い話なのか！」

ツツコミ要員は必要ですね

「なあ、京都行きたい？」

「別に行きたくはないが、この呪いのせいで、どの道行けないがな」

「そんじゃ、解呪しましょう」

「はあ！？できるのか！」

「まあ、やってみます」

俺は呪いの境界を弄る

「む、コイツは解呪は無理だな…。できるだけ、緩くしてみる」

まずは結界とのリンクに境界を作り、リンクを断ち切る

次に、登校地獄の呪いを正常の形にする

「こんなもんだろ」

「おお！体に魔力が漲る…。漲るぞ！礼を言う薰よ」

「登校地獄は解呪できなかったけど、休みの日や、修学旅行とかでは機能しないようにした」

「それだけでも、十分だ」

「んじゃ、俺は戻るよ」

「待て…、えっとな…、ありがとな／＼／＼」

「どう致しまして」

俺は管理人室に戻る

〈管理人室〉

「第1回、さよの体をプレゼント大作戦」

ドンドンパフパフ

「まずは、専門の人の所に行こうとおもう」

俺は灰色のオーロラで世界を越える

〈某死神漫画の世界〉

ストン

「やって来ました。浦原商店！早速、お邪魔しましょう」

ガラガラ

「すみませ〜ん」

「はい。何の御用でしょうか」

出迎えてくれたのは
メガネをかけたゴツい男性

「あの〜。浦原さんはいらっしゃいますか？」

「少々、お待ち下さい」

ゴツい男性は奥に入っていった

「はいはい。私が浦原です」

変わりに帽子を被った

遊び人みたいな人が出てきた

「擬骸を作ってほしい」

「ほお、それはまた変わったお願いですね。見たところ、死神ではないようですが、どここの情報ですか」

「それは秘密だけど、悪用する気は無いから安心して下さい」

「そうですか。ではどの様なデザインに致しやしょうか」

「こんなのを頼む」

俺はさよの写真を渡す

「わかりました。ではカカツと作りますので、明日また来てくださ
い」

「ありがとうございます。ではまた明日」

俺は浦原商店を出て

灰色のオーロラで再び世界を越える

く魔法先生の世界・女子寮管理入室く

戻ってきました

下調べでは、こっちの三時間は向こうの1日だったから
三時間後に行けばミッションクリア

現在の時刻は午後5時

次は和美に真実を告げよう

く新聞部く

「和美、いるか？」

「薫先生。どうしたの？」

幸い、和美だけだった

「和美…、少し話がある」

「ん。なに」

俺は扉の鍵を閉める

「お前の新聞、読んだよ」

「え！？ホント！どうだった？感想聞かせて！」

「その前に約束してほしいことがある」

「なに」

「今から言うこと見るものは絶対に話すなよ」

「いいよ」

「この仮面の正体は俺だ」

「先生。冗談がきついで「それともう一つ」？」

「和美…、お前はこのての怪物に襲われたことがある」

「えっ！？ いったい何の…」

「覚えてないのは、俺が記憶を封印してるからな」

「か、薫先生。話が分からないんですけど…」

「そうだな…、こうした方が理解できるか」

俺は記憶の和美の封印を解いた

「ウソ…、そんな…」

「思い出したか」

和美は体は少し震えていた

無理もない

あの時は大変だったからな

「安心しろ。俺が守ってやる」

俺は和美を抱きしめ耳元でそう言う

次第に震えるのが止み

落ち着いた表情に戻る

「大丈夫か？」

「はい…」

「いいか、よく聞け。和美は魔法を…、つまりだ。知らない方がいいことを知ってしまった。もしも、国家機密を一般人が知ったらどうなると思う？」

「そ、それは…」

「間違いなく消される。今の和美は正にその一般人と大差ない状況にある」

「じゃ、どうすればいいの！」

「落ち着け。助かる方法はある」

「なんだ。よかった」

「でだな、問題はその方法なんだよ」

「はあ」

「一つは、和美が俺と仮契約バクティオーする方法。あと、記憶を消すこと」

「その仮契約したらどうなるんですか？」

「そうだな、二度と平穏な生活には戻れないな」

「それじゃ、記憶を消すと？」

「魔法関係の事は完全な消える。だが、和美のことだ。また魔法について触れるだろ」

「うう…、どの道選択肢がないよ」

「諦めろ」

「はい。決めました。私、朝倉和美は本日をもちまして魔法に触れます」

「改めていらっしゃい。裏の世界に」

「それじゃ早速、仮契約してください」

「構わないが、これにも方法がある。お互いの血を交換するのと、キスするのとどっちがいい？」

「キ、キ、キ、キスですか／＼／」

「そうだぞ」

俺は床に魔法陣を書きながら答える

「キス…、薫先生と…キス…／＼／」

「よし！書き終わった。それじゃ仮契約するか」

「は、hai！」

「どの方法がいい？」

「キ、キスで／＼／」

「わかった。んじゃ、この魔法陣の中に入って」

「／／／」

「それじゃ和美…、いくぞ」

「はい／／／」

俺は目を瞑り和美と唇を重ねた

光が俺たちを包み

一枚のカードが出現する

すると、和美は舌が口の中に入ってきた

俺はちよつとだけ絡ませて、唇を離す

和美は目がトロンとして

少々、色っぽかった

「続きがしたかったら、高校を卒業して俺のところにすることだな／＼」

「はい…／／／」

「んで、コレは肌身離さず持つておくこと。そして、誰にも見せないように」

俺は和美のカードをコピーして渡す

和美はしばし、カードを見ては顔を赤くしたり2828したりしていた

「来たれ（アデアット）って言ってみな」

「はい。『来れ！』（アデアット！）」

カードが光り出し手帳とカメラが現れる

「戻したい時は去れ（アベアット）と言うんだ」

「『去れ』（アベアット）」

カメラと手帳はカードに戻る

「いいか、コイツは使わないのに越したことはない。本当にマズくなったら使え」

「わかりました」

「伝えたからな。誰かに言ったり見せたりしたら…、フフ……………」

「は、はい」

「そんじゃ」

俺は新聞部を出た

擬骸を取りに行くまで

後、一時間三十分はある

一旦、部屋に戻るか

（女子寮管理入室）

「和美のカードは、えーっと、『徳性・知恵』『方位・東』『色調・青』『星辰性・海王星』で、アーティファクトは『天狗の特ダネ帳』『称号・幻想最速新聞社』か…」

なんだろう？

明らかアレな気がする

俺はわかったぞ

和美のアーティファクトがどんなやつなのかな！

そういや、アキラはどうするか？記憶を封印しているとはいえ、長時間ドーパントになっていたから、何かの拍子に解ける可能性がある

本人は今の生活が良いって言ってたから、そのままでもいいか

ここは自主性に任せるとしようじゃないか
本人の意志は大事だからな

そうこうしてる内に後、一時間となった

『もっと！熱くなれよ！』

『もっと！熱くなれよ！』

『もっと！熱くn』ピッ

「はい」

（神です）

「なんすか？」

（朗報である）

「へえ」

（本来ならばもう少ししたら渡そうと思っていたが、お主が余りにも遅いからこうなった）

「で、なにくれるんだい？」

（破壊の力…）

「来た！ライダー来た！メインライダー来た！これで勝つる」

（んじゃ転送）

俺の目の前にバックルとディケイドライバーが現れた

「確かに受け取った」

（それと、各ライダーでの戦い方の頭に叩き込むから覚悟せい）

「わーかりましたー」

ピッ

電話を切ると

頭の中に情報が少しずつ入ってくる↑神の気遣いに感謝

その上、ポケットがライダーツール専用の倉庫になっていた
ガイアメモリとコアメダルの収納にした

時は流れて午後7時58分

俺は世界を二度越える

（浦原商店前）

5…4…3…2…1…

ガラガラ

「いらっしやい…」

今日はさっきと違い

黒髪の女の子が迎えてくれた

「嬢ちゃん。自分は浦原さんに頼みごとをしていたから来たんだけど、今いるかな？」

「ちょっと待ってて…」

女の子の奥に入っていく

そんで出てくるのは勿論…

「おお！時間ぴったりじゃないですか」

「時間厳守は当たり前です。それで、頼んでおいた物はできましたか？」

「ええ。コレは完璧な仕上がりですよ」

浦原さんは俺の耳元でこう続けた

「この擬骸はあんな事や、こんな事もできる特別製ですよ。どうです」

「経験が活きたな。ジュースをやろう」

「ではいただきますよう」

俺は懷から光り輝くgoldenstickを渡す

「これでどうすか」

「大丈夫ですよ」

さよの擬骸を背負い、扉に手をかける

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております
んで」

「へいへい」

店から出で世界を越える

く女子寮管（ry）

「世界を越えるの、案外疲れるな」

俺はソファーにもたれながら、ダレた

それにしても、さよが来ない。どうしたのだろうか？

—さよ視点—

はわわわ

どうでしょう！

私は薫先生の部屋の前に来てます

先生の部屋は教室で話していたからわかりますけど
男の人の部屋に入るのなんて初めてだから、つい意識しちゃう／＼／

いや、意識するから恥ずかしいんだ！相坂さよ！

そう、私は生徒

薫先生は教師

間違ってもそんなことは起きるはずがないじゃない

でもでも、薫先生になら

何をされてもいいかも…／／／

って！違う！違うよ！

どどど、どうしよう

—さよ視点終了—

「探しに行くか」

俺は軽くはない腰を上げて
扉に手をかける

ガチャ

「……………さよ、ここでないしてる?」

（そ、そこはらめえ／＼／＼）

「さよ」

（はっ！か、薫先生。いつからそこに）

「いまさつき。てか、部屋の前」

（そうでしたね）

「何を考えてたかは知らないが、とにかく入れや」

（お邪魔します）

「今日はさよにプレゼント」

（わ！ホントですか）

「嘘をつく理由はない」

（うう…、地縛霊生活六十年。こんなに嬉しい日は初めてです）

「そうか。では、これなーんだ?」

俺は擬骸をソファーに寝かせる

（えっ！？これ…、私だ…）

「正解。では、この中に入って下さい。魂はないですから、安心です」

（では、いきます！）

さよはルパンダイブで擬骸に入る

「んっ…」

「成功のようだな」

世界が違うから

どうなるかわからなかった

「手が…、脚もある」

さよはソファーから降りる

「どう、六十年ぶりの感触は」

「何か変なK…おっと！」

さよが俺に倒れてきた

「大丈夫か？」

「いっ、ごめんなさい／＼／」

「馴れるまで、練習していいぞ」

「あの、薫先生。一つお願いがあります」

「为什么呢？」

「私と仮契約して下さい！」

「意味はわかってる」

「はい。私は魔法を知ってます。勿論、刹那さんや真名さんのことも知ってます。薫先生が変身しているのを見ました。だから…」

「全部知ってたんだ」

「これでも地縛霊生活六十年ですよ」

「それもそうだな。じゃ、今から『相坂さよ』を『相坂沙代』としよう」

「わかりました！」

沙代は敬礼して返事をする

「いい返事だ！」

俺は魔法陣を床に書く

今日だけで二回も書くのは辛いよ

「さて、仮契約しましょうか」

「はい／＼／＼」

「沙代…」

「薫先生…」

——チュッ

魔法陣が発光して、カードが現れる

例によってコピーし、一枚渡す

「大事にするんだぞ」

「エヘヘ／＼／＼はい」

「あ！」

「どうしました、薫先生？」

「沙代の部屋、どうするか決めてなかった」

「な、なんだってー！」

「まあいいや、今日はここで寝ていいぞ」

「い、一緒にですか／＼！」

「なんだ？添い寝がいいのか？」

「お願いします／＼／」

「お風呂、気持ちよかったですね／＼／」

「あ、ありのまま起きたこと説明するぜ。沙代の寝床を考えていたら風呂からあがっていた、催眠術とか、時間跳躍とか、そんなやつちなもんじゃ断じてねえ…。もっと恐ろしい力の鱗片を味わったぜ…」

「薫先生？さっきからぼーっとしてますよ。大丈夫ですか」

「大丈夫だ」

そんなこんなで時間は００時００分

「寝るか沙代」

「そうですね」

俺と沙代は布団に入る

「お休み沙…ZZZ」

「お休みなさい薫先って早っ！」

………

………

………

……

…

「……………寝たか」

俺は布団から出て、学園長に電話をする

『フォッフォッフォッ、こんな時間に何かようかのう忍君』

「報告したいことがある」

『何かの』

「まず、朝倉和美と相坂さよは俺と仮契約した」

『確かに和美君は、遅くないうちに魔法を知ってしまうかもしれないかった。それはよい判断だとワシは思うぞ。それと、相坂さよ君は死んでいるのではなかったかの？』

「今は生きてる。それでさよの分の修学旅行費をどうにかできないですか」

『それくらいならよいが、では明日の朝、さよ君を連れてこちらに来てはくれんかの』

「構いません。ではこの辺で」

『うむ』

俺は電話を切り

沙代のカードを見る

『徳性・愛』

『方位・北』

『色調・藍』

『星辰性・金星』

『称号・悲劇の亡霊少女』

『アーティファクト・冥界への約束手形』

うわぁ…

えげつねえー

今は寝るか…

俺は再び布団に潜り

今度は沙代を抱き枕にして寝る

——次の日の朝——

ユサユサ

「沙代、起きて」

「うみゅう…、あれ？薫先生…」

「そうだが」

沙代は瞼をこすって、目を開けた

「おはようございます」

「おはよう。朝ご飯は出来てるから早く食べてね。今日は忙しいかな」

「はい」

「ご馳走さまでした」

「わかった。そのままでもいいから学園長室に行くぞ」

「どうしてでしょうか？」

「形としては転入生だから、一応ね」

「そうでしたか」

「もう行くよ」

～学園長室～

コンコン

『開いておる』

「失礼する」

「失礼しまゝす」

『話は忍君から聞いておるぞ。君が相坂さよ君かね』

「教頭、今は『相坂沙代』です」

『おお、すまなかった。てかなんでランクを下げる？』

「あ、はい！私、相坂沙代と申します」

『だが、確認は取れたからよしとするかの』

「主任、制服と教材は？」

『まだ用意できておらん。忍君、さらにランクが下がったのじゃが』

「あの〜」

「どうした沙代」

「そろそろ朝のHRが始まる時間なんですけど」

『もうそんな時間じゃったとは…』

「では学園長。俺たちはこの辺でとんずらさせて頂きます。行こ沙代」

「は、はい！」

カカカカッ

＼女子中等部・3－A教室前廊下＼

「呼んだら入ってきて」

俺は沙代にそう言って、教室の扉に手をかける

ガラガラ

「おはよーみんな」

『』『おはようございます。薫先生!』『』

「ネギ少年は職員室で作業をしているため、遅れている。あと、今日から新しく3－Aに入ってくる人がいます。どうぞ」

ガラガラ

「は、初めまして!相坂沙代と申します」

『可愛い』

『制服が違う…』とか

声上がる

「相坂さんの制服は、まだ届いていないので前の制服になっている。席は…、和美の横でいいか」

ガラガラ

「すみません。遅れまし…た…あれ？どなたですか？」

「悪いな、ネギ少年には知らせてなかったな。彼女は相坂沙代。今日から3－Aの一員である」

「初めましてネギ先生」

「初めまして。3－A担任のネギ・スプリングフィールドといいます」

「はいはい、挨拶もし終わったところで全員、注目」

「実は、沙代の部屋が決まっていなかった。そこで、相部屋でもいいよって人はいますか」

『私、相部屋でもいいですよ』

和美が手を挙げる

『はあ！？私は反対だぞ』

和美と同室の千雨は拒否る

「そうか、んじゃ頼んだぞ和美」

「任せて下さい」

『無視するなよ』

「よかったな沙代」

『マジ、ウチのシマじゃノーカンだからな…』

スルーされた千雨は、諦め状態だった

「沙代への質問は休み時間に聞くようにしろよ」

そこで、休み時間に沙代が質問責めにあったのは言うまでもない

第三十二話／京都に行きたくなることは稀によくあるらしい（後書き）

アーティファクトは修学旅行編が終わったら
設定をまとめておきます

薫先生のアーティファクトどうしよう
二択で迷ってます

一つは『最高の人形技師』
蒼星石、雪華綺晶、薔薇水晶の力が使える

もう一つは『神の作り出した知恵』
アーチ、ベイル、ガールのが使える

他人のアーティファクトを浄化して使用する事ができる

さて、どっちにするか…

あと

一緒に戦ってくれる人を募集します

別の世界の主人公の皆様

どうか私に力を貸して下さい

できれば『ネギま！』関係の方でお願いします！

第三十三話／木乃香とデート？いいえ、買い物です（前書き）

現在、皆様から送られた
仮契約候補者を発表

桜咲刹那

龍宮真名

明石裕奈

和泉亜子

ザジ・レイニーデイ

古菲

近衛木乃香

大河内アキラ

以上、8名となりました

真名と刹那は確定だな

古菲も候補に挙がってるから

武道四天王全員を仮契約候補者にするのもありか…

第三十三話／木乃香とデート？いいえ、買い物です

沙代と和美と仮契約して
数日が過ぎる

沙代はクラスのみんなと既に打ち解けた

特にこれといった事件は無いが、3－Aにしていると退屈しない
ことを改めて認知した

そこで、修学旅行が間近に迫ってきたある日のこと…

「~~~~♪」

俺は今、木乃香とデパートに向かっている。明日菜の誕生日にプレゼントを渡したいらしく、その付き添いだ

にしても、何故か尾行されている。怪しまれないようにしているかもしれないが、逆に怪しさを醸し出している

「薫先生。どうしたん？」

「あ、いや…、なんでもない」

「？」

木乃香は気付いてない
後ろにいるから分からないのも当然か…

今回ストーキングしてるのは

椎名桜子

柿崎美砂

釘宮円の3人

円は二回目だな

〈ストーキング三人娘視点〉

「美砂、やっぱりアレだよね」

「うん。きつとデートだよ」

「生徒に手を出したら薫先生が退職しちゃうよ！」

「そしたら薫先生が私たちに仕返ししに来て…」

「もしかしたら、あんな事やこんな事されちゃって…」

「「キヤアアアア／／／」」

「はあ…（でも、そうになったら、きっと私も…／＼／＼）」

円は桜子と美砂の暴走に呆れつつ、内心暴走していた

「そういえばさ、美砂は彼氏がいたよね？」「……………れたのよ」

「えっ!？」

「別れたのよ（泣）」

「ゴメン…」

「大丈夫だよ。私は新しい愛に進むよ、くぎみー」

「くぎみー、言わないで…」

美砂はさらにこう続けた

「それでさ…、どうやったら薫先生を落とせるかな？」

「「Σブツ」」

円と桜子が同時に吹いた

「まさか、美砂も薫先生を…」

「『美砂も』ってことは桜子も薫先生のこと…」

「はっ!?!しまった!粉バナナ!」

（2人とも、薫先生のことが…。これは負けられない！）

今まさに

友と書いてライバルと読む関係が生まれた

だが、そんなさなか…

『その姉ちゃん達、今、時間ある？どこか遊びに行こうよ』

ナンパされた

そしてこの後、ナンパ男は見事な変身を遂げる

（ストーリーキング三人娘視点終了）

『その姉ちゃん達、今時間ある？どこか遊びに行こうよ』

男と木乃香は現在、スタブで休んでいる
そんな時、ナンパする男の声が聞こえた

「なあ、薫先生」

「どうした木乃香？」

「あれ、桜子達ちゃう？」

俺は木乃香の指差した方を見ると、ストーキング三人娘がナンパされてた

「そうだな」

その時、ナンパ男は円の腕を掴んだ

「木乃香、ちょっと顔の整形を手伝いに行くわ」

「程々にしといてや」

木乃香の同意をもらい
席を立った

「は、離して下さい」

『うっせーな！さっさと来いっつってんだよ！』

「キャッ！」

ガシッ

俺は円を掴んだ腕を掴む

「悪いが、俺の連れに手を出すんじゃない」

『だったら、俺に貸してくれねえかな！』

「危ない！」

俺はナンパ男の拳を払いのけ

両肩の関節を外し、壁にぶつける

そこから壁ハメで整形タイムに突入

ワイユネジュプーシユダンマントン
「目鼻頬口歯顎」

顔面に蹴りを連打でいれ
壁に埋めながら整形する

ナンパ男は某海賊漫画のコックの技でイケメンになったが、壁に埋まっているうえ、鼻血を出しているから格好悪い

「顔に蹴りを入れて悪かった。家に帰って鏡を見な…、ナンパなんかしくていい充実した生活を約束する」

ま、聞こえちゃいねえか…

「あの、薫先生！ありがとうございます」

「なに、ウチの生徒が困ってたんだ。助けない筈はない。それより木乃香を待たせてるから、俺はこの辺でとんずらさせてもらう。尾

行はもうするなよ」

「h a i !」

「そんじゃ、俺はこの辺で」
カカツ：

くストーキング三人娘視点く

「やっぱりバレてたんだよ」

「そうだね…」

（ボー／／／／／）

「くぎみー、ぼーっと突っ立ってどうしたの？」

「……薫先生、格好良かったなあ／／／／／」

（（くぎみーが完全に落ちた！））

「どどど、どうしよう!？」

「落ち着いて桜子! タタタ、タイムマシンを探して!」

「よし、わかった」

ストーキング三人娘、もとい

麻帆良チアリーディング三人娘は釘宮円という抑制剤を失った

（ストーキング三人娘視点終了）

「木乃香、お待ちせ」

俺は整形系の仕事をカカツと終わらせて、木乃香のところに舞い戻ってきた

「へへへ／＼／＼薫先生スゴかったで」

「そうかい。ありがとな」

「それじゃ、早よ行こか」

ピタッ

「おいおい、そんなに引っ付かれると歩きにくいだろ」

木乃香が俺の腕を両手で掴み、抱きつく形になっている

周りの野郎共から恨みの籠もった視線を向けられたが、スルースキ

ルA+の俺は格が違うため気にしなかった

FFF団の奴の方が、やはり凄いと改めて思った

それに木乃香程の美人が、抱きつかれながら歩いてたらと考えてみたら当然だった

くデパートく

「なあ、薫先生。これ着てほしいんよ」

木乃香が何枚か服を持ってきた

「構わない。ちょっと待っている」

俺は試着室に入り着替える

先生着替え中…

「木乃香、着替えたぞ」

「早く早く」

そこから、ファッションショーが始まった

まず一着目

クラ○ドの衣装

二着目

黒い執事さんの服

三着目

エネコン社長

後は…

英語を話す伊達さん

金ピカ放漫王

シヨタロイド

伝説の傭兵…e t c, e t c

服というか衣装を着させられていたが何枚か購入

木乃香には仕返しの意を込めて、俺と同じことをしてもらった

夢倶楽部（メインの仕事服）

脇巫女（緑）

化○語（制服）

緑色の電子の歌姫…e t c, e t c

カメラには収めたから、あとで刹那に渡してみたい

それ以前に俺はデパートにこんな服があることをツツコミたかった

「あのさ、明日菜へのプレゼントはどうした」

「は！忘れとった！」

誘った本人が忘れてどうする

明日菜のプレゼントと探しをしていると、ネギ少年がいた

「あ！ネギ君や」

「よ！ネギ少年」

「！？あ、木乃香さんと忍先生でしたか…」

「ネギ少年が一人で来るなんてどうした？」

「いや、実は…。明日菜が誕生日だと聞いたので、何かプレゼントを送ろうと思ひまして」

「いいやつだな。ネギ少年」

ネギ少年の仏ダージは少しだが回復したぞ

「だったら、ネギ君も一緒にプレゼント決めへん？」

「三人で何がいか決めようじゃないか」

「それはいいですね」

急遽、俺と木乃香とネギ少年の『明日菜の誕生日にプレゼントしようチーム』が誕生した

「まず、明日菜が何を貰ったら嬉しいかを考えようじゃないか」

「確かにそうですね。木乃香さん、なにかわかります？」

「うーん。そうやなあ…」

早くも手詰まりを起こしてしまった感

「そうだ。こんな時はプロに聞いてみよう」

「プロ？」

「心当たりがあるんですか？」

「モチのロン」

俺たちは路地裏を抜け、人通りの少ない高架下に向かい
そこにいる、いかにも占い師ですよ的な人を訪ねた

「一回頼めるか」

『何を占いましょうか？』

「知り合いの誕生日にプレゼントを渡そうと思ってな、どんなのが
いいか悩んでいた」

『つまりそれを知る為、私の持つ大宇宙暗黒四聖占いで視てもらおうと…』

「あんたの占いのことは、結構ネットで評判だからな」

『分かりました。では早速、始めましょう』

いかにもな占い師は

両手を広げて何かを呟く

『ガルマ・アナハム・ペツチンダサ・ワー・ウケトフヒ・ホイホイ
ツイテキテ——』

あれ？

今、ホイホイツイテキテって言わなかった？

『——ウホ・イイオトコ・ヤラナイカ・トルガリコーン・サイキン・ダラシネエナー・アンカケチャーハン・アンカケチャーハン・ワタシハ・ロムスカ・パロ・ウル・ラピユタツアツ——！』
長い呪文を唱えると、いかにもな占い師の構えている机から光が飛び出し、視界を遮った

てか何だよ。あの呪文！

目が痛い！

「目があ…、目があああ…」

『結果が出ました。音に関連があるものを渡すのがいいと』

「ありがとうございます」

『では、1500円になります』

俺は金を渡し、その場を離れた

占い研究部の木乃香は『大宇宙暗黒四聖占い』の始終がとても気に入っていたみたい…

――

「音か…」

「なんでしょか？」

俺とネギ少年が頭を悩ませていると木乃香が

「オルゴールなんてどうや？」

「k t k r」

ナイスなアイデアだ木乃香

俺らはオルゴールを購入し

明日菜を世界樹広場に呼んだ

「なによ木乃香。こんなところに呼び出して…」

「明日菜、お誕生日おめでとう」「おめっとさん」「おめでとうい
ざいます」

「木乃香、ネギ、薫先生…」

「俺らからプレゼントがある、木乃香」

「はい明日菜」

木乃香が明日菜に箱を渡す

「開けてもいい！」

「ええで」

明日菜は箱からオルゴールを取り出して、開く

「……………これ、私の好きな曲だ」

「そうだったのか」

「三人共、ありがとう」

こうして『明日菜の誕生日にプレゼントをしよう作戦』は無事に終了した…

その頃、円、桜子、美砂の三人は…

「ほら、くぎみー！ちゃんと歩いて」

「エへへへ／＼／＼薫先生／＼／＼」

「美砂！左をお願い」

「うん」

「いくよ。せゝの！」

バツ！

左右の肩を二人に担がれた円は足を引きずられながら、女子寮に帰って行った

第三十三話／木乃香とデート？いいえ、買い物です（後書き）

テスト期間に入っただので

二週間程、更新ができなくなります

勉強したくねええええ…

番外編その4――世界の自由人、忍竹薫…。魔法少女がリリカルな世界で、その

修学旅行編かと思ったか
番外編だよ

薫

「汚い流石作者汚いな」

作者

「汚いなは、褒め言葉だ」

番外編その4——世界の自由人、忍竹薫……。魔法少女がリリカルな世界で、その

やあ！

みんな元気？

誰に挨拶してるかって？

聞くだけ野暮ってもんだよ

俺の名は『忍竹薫』

麻帆良学園女子高等部3—A担任の忍竹薫

お馴染み薫先生だよ！

どうして担任がネギ少年じゃないのかだって？

それは簡単な理由だよ

ワトソン君

ネギ少年は元々、『立派な魔法使い』だっけ？

よくわからないが、『立派な魔法使い』とやらになったらしくて一度、生まれ故郷に戻ったらしい。それで俺が見事に担任へ昇格したわけなのだが…

ある日

目が覚めたら…

知らない場所にて
体が縮んでいた！

どこぞの高校生探偵もビックリだ！

縮んだと言っても

22歳の体から中学生の体

だいたい14歳くらいになっただけで、特に変化はない

困った事は幾つかある

まず、ダブルドライバーが無くなったこと

だが、ディケイドドライバーとオーズドライバーはあった

次に、使える能力が一気に減った

使えるのが

『博麗霊夢』

『霧雨魔理沙』

『アリス・マーガトロイト』

『パチュリー・ノーレッジ』

『鈴仙・優曇華院・イナバ』

『チルノ』

『八雲紫』

『藤原妹紅』

『魂魄妖夢』

『射命丸文』

『犬走椋』 『星熊勇儀』

『小野塚小町』

『永江衣玖』

それと：

『フランドール・スカーレット』

これだけでも充分だと思うが
減った方だ

できることなら

フ란の能力は使いたくない

危ないじゃん

ま、能力が使えなくても
スペルは使えるからいいんだけどね
グングニ棒出せまし

んで、ここはどこだ！『動くな！時空管理局だ！』

「なにいきなり話しかけてきてるわけ」

いきなり空から、杖を持った少年が粘着してきた

『時空管理局執務官、クロノ・ハラOWNだ。君にロストログア所持の容疑が掛かっている。おとなしく着いて来てもらおうか』

「はて、管理局なんてものは知らんな。それにロストログアとはなんぞ？」

『とぼけるな!! お前からロストログアの反応があったことは既に確認済みだ!』

俺はオーズドライバーを着け
コアメダルを入れて変身する

ティン ティン ティン

「タカ!トラ!バッタ! タトバ!タトバ!タトバ!」

変身するとクロノとかいう名の少年と俺の間にモニターが現れ、一人の女性が映し出される

「誰だ」

《先ほどは私の息子が失礼しました。私は次元航行艦アースラの艦長をしておりますリンディ・ハラウンと言います。ロストログアについて話をしたいため、そこにいるクロノと一緒にアースラまで着いて来てくれませんか?》

「断らせてもらうよ。わざわざ来てもらって申し訳ないけどさ…」

《……そうですか。クロノ執務官、抵抗の意思ありと見なし攻撃を許可します》

「へえ、思い通りにならなかったら力ずくでもか……。時空管理局ってのはそういう組織なんだな」

リンディさんは顔を俯かせてモニターを切ってしまった

『キサマ、おとなしくBJを解除しろ』

「さっきから聞いてりゃ、好き勝手に言いやがって！死ぬまでホットドッグを食べさせてやろうか？」

『ホットドッグはよして下さい』

クロノは頭を下げる

俺はその隙に距離を離す

『ま、待て！』

く主人公逃走中く

「しつこいなあく」

『オマエが逃げるからだろ！』

「危なっ！」

クロノが後ろから水色の光線を撃ってきた

勿論、グレイズしながら回避

ふむふむ

どうやら杖を媒体に魔法を使っているようだ

少し冷気があったから、氷属性の魔法
もしくは、自動で氷属性が付くのか

どちらにしろコイツだな

俺は、トラメダルとバッタメダルを抜き、赤いメダルに代える

ティン ティン ティン

「タカ！クジャク！コンドル！ タ〜ジャ〜ドル〜」

「はああ！」

『クツ…』

クロノはタジャドルに変身した時に発生した炎を杖で払う

「悪いが、ちゃっちゃと終わらせてもらおうよ」

俺は猛スピードで上空に飛び

メダルを左手に付いているタジャスピナーに入れてスキャンする

デレデレデレデレデレデ

「ギガスキャン」

ティン ティン ティン

「火、火、火、スキャンングチャージ」

すると身体を炎が包み込み、巨大な火の鳥になる

そのまま、クロノに突っ込む

《プロテクション》

クロノの前に青い壁が現れる

だが、そんなので防げるはずないだろ

『グアアアアアア！』

壁を突き抜け、クロノに直撃した

「リンディさん…、悪いことは言わない。さっさとコイツを連れて帰ってこないか？ ついでに俺に構わないでくれませんか？」

モニターが現れ、リンディさんが映し出される

《……………》

「だんまりですか。そうそう言っとくことができました。俺はまだ、実力の一部しかつかってません。クロノが五十人いたとしても全滅できるでしょう。俺の心遣いに感謝して下さい」

《何故ですか？》

「本当なら、息子さん。今頃、死んでますよ」

《！？》

「やろうと思えば、戦艦だろうが潰せますけどね。今回は初回サ―

ビスで許してあげますけど、次回は 아닙니다よ。多分」

《わかりました。私はアナタから手を引きます。ですが…》

「上からの命令とかかい」

《はい。そうなれば、再びアナタと対峙する事になります》

「んゝ。さて、どうしたものかなあゝ」

俺はひとまず、荷物を漁ってみた

ガサガサ

あ、携帯だ

因みに、俺の携帯は超鈴音特製の太陽光充電システム搭載や、モニター通話などができ、フル充電で3日は保つ優れものなのだ

電波は…

ちゃんと立ってるな

「リンディさん。こちら、俺の携帯番号です。なにかあったら連絡して下さい」

《わかりました》

「それでは、読み上げますよ。0901XXXX1XXXXX」

《登録しました。で、名前は…》

「ん？ああ、薫だ。忍竹薫」

《では薫さん。失礼します。それと、お気をつけて》

「はいよ」

俺は街の方に歩いていった

ここからはダイジェストでお送りします

「君たちは…」

「申し訳御座いません。私、星光の破壊者と申します」

「僕はね、雷光の襲撃者だよ」

「ふっ、妾は闇の統括者だ」

「長いから、セイとライとヤミだな」

『時空管理局、フェイト・T・ハラOWNです。大人しくして下さい』

「おいおい、管理局は俺に関わらないはずだろ」

「薫、ボクが行ってくるよ」

「何！ライ、抜け駆けは良くないぞ！」

「ヤミ、ここはライに任せましょう」

「そうだぞ。この前はヤミがやったじゃないか」

「むう…」

「じゃ、行ってきました」

「気を付けろよ」

「はい」

『全力全開！スターライト…』

（すみません薫…、アナタとの約束、守れそうにありません…）

『ブレイカー!』

(薰…)

「諦めんなよ! セイ」

「えっ!？」

「魔砲『ファイナル・スパーク』!」

「くっ…(油断した。このような塵芥に捕まろうとは)」

『少しでも、話を聞かせてくれへん?』

「フッ、貴様らと話す口は持ち合わせてはないがな」

『そうかい。なら仕方あらへん』《八神隊長!》『なんやねん』

「(ないかあったのか)」

《侵入者がそちらに向かっギャアアアアア!》

『なにがあつたんや! 応答せい!』

ドガン!

「ヤミイイイ！何処だあああ！」

「か、薫…」

「ヤミ！」

「遅いではないか…、バカ者…」

「悪かったな」

『なんや今の衝撃は…』

「おい管理局」

『誰や』

「ウチの家族に手を出した罪、その身を持って味わえ…、神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

「……………」

「……………」

「あの、お名前は」

「私は闇の書の管理人格。リイン・フォースと呼ばれていたことがあります」

「ではリンさん。何故、ここにいたのですか？」

「それは…」

「薫、私から説明します」

「セイ頼む」

「はい。まず私達は『闇の書』と呼ばれる物の残骸『マテリアル』なのです。当初の目的は永遠の闇の復活、一度滅びた『闇の書』を再び蘇らそうというものでした」

「それで」

「永遠の闇の復活には膨大な魔力が必要不可欠です。なので、密かに魔力を溜め続け『闇の書』の復活させようと思いました」

「それでその『闇の書』が復活して彼女がいるってことか」

「はい。ですが…」

「なにか問題があるのか？」

「…………、その…」

「なんだ」

「『闇の書』を復活させると…、私達は…、消えてしまうのです」

「そんなもん。俺がなんとかしてやる」

「マ、マスター／／／」

「んあ？どうしたリン？」

「あの…、今夜…、一緒に寝て頂けませんか？」

番外編その4——世界の自由人、忍竹薫…。魔法少女がリリカルな世界で、その

作者

「もしも、『リリカルなのは』の世界に行ってたらマテリアルズと
リインが家族になってたかもしれないな」

薫

「管理局は敵になると…」

作者

「とりあえずは強力状態となるな、できれば戦いは避けたいだろ」

薫

「激しく同意」

第三十四話／修学旅行でテンションがhighになる奴は絶対いるよね（前書き）

やっ と書けたよ

それにしても修学旅行編に入ったな…

ただでさえ遅い更新が
さらに遅くなりそうだ

第三十四話／修学旅行でテンションがhighになる奴は絶対いるよね

修学旅行当日

俺は教師の為、朝早く集合場所に来ている

集合場所に着くと、エヴァが茶々丸を連れてベンチに座っていた

「おはようエヴァ、茶々丸」

「遅かったな薫」

「おはようございます。薫先生」

「いやいや、エヴァが速いだけだろ。あれか、楽しみで寝れなかったから早く着ちゃいましたというやつだな」

「フン！このワタシがそんな子供のようなことをする筈ないだろ」

「マスターは昨日から待ちきれない様子で、何度も持ち物を確認したり、修学旅行の栞を読まれておりました」

「何を言ってるんだ！この、巻いてやる！」

「あ、いけませんそんなに巻いては…」

15年も行けなかったんだ
そりゃ楽しみだろうな

それから少しずつ
生徒が集まってきた

俺は和美と沙代を呼び
周囲に無意識干渉を施す

見られた困るし

「2人共、カードはちゃんと持ってきてる？」

「「はい！…えっ！？」」

「そーいや言っでなかったな」

和美と沙代に仮契約の経緯と簡単な理由を教えた

「そうだったんですか」

「へへへ」

「ま、機会があれば2人で話せばいいだろ。用件はカードをちゃんと持ってきてるからだから、戻っていいぞ」

「は、はい」

沙代は自分は班に戻った

「和美は、個人的な用か？」

「そうです。私のアーティファクトでしたっけ？普通のカメラだったんですけど…」

「そりゃ、普通に使ったからじゃね」

「? どういうことですか?」

「あのカメラは、魔法を撮ると何か起こるらしい」

「何かって…」

「わるい。そこまではわからないんだ」

「それと薫先生。一つお願いがあるんですけど」

「なんだい?」

「目を瞑って下さい」

「ああ」

俺が目を瞑ると

「薫先生…。私、沙代が仮契約してるって知ったとき気付いたんです」

「……………」

「ちょっとだけ嫉妬しました。だから…」

!!?」

唇に柔らかい感触を感じて、目を開けるて

眼前に和美の顔がいつぱいに広がっていた

「これでチャラにしますね／＼／」

まるで悪戯に成功した子供のような笑顔で去っていった

『みなさーん！電車に乗ってくださいさーい』

さて、京都に出発だ！

和
美
視
点

修学旅行当日

きちんと荷物は纏めた

カメラも持つてる

カードは：

よし

私は荷物を確認して集合場所の大宮駅に向かった

く大宮駅く

駅に着いたら、沙代ちゃんと一緒に薫先生に呼ばれた

なんだろう？

「2人共、カードはちゃんと持ってきてる？」

「はい！…えっ！？」

「そういや言ってなかったな」

聞いてませんよ！

私だけじゃなかったんですか！？

待って！

カードを持ってるってことは、沙代ちゃんも薫先生とキスをしたって……ッ！

なんだか胸がモヤモヤする

なに、この感じ

「ま、機会があれば2人で話せばいいだろ。用件はカードをちゃんと持ってきてるかだから、戻っていいぞ」

「は、はい」

沙代ちゃんが自分の班に戻って薫先生と2人つきりになると、胸のモヤモヤが晴れた

もしかして、嫉妬してたかもしれない。いえ、してたに違いない

「和美は、個人的な用か？」

え！？

あ、残ってんだから用があると思うわね！ええっと、用事…用事…

「そうです。私のアーティファクトでしたっけ？普通のカメラだったんですけど…」

ひとまずコレでいいでしょう

一度、使ってみただけど普通のカメラだったし

「そりゃ、普通に使ったからじゃね」

「？どういうことですか？」

わからないなあ…

「あのカメラは、魔法を撮ると何か起こるらしい」

「何かって…」

薫先生。そこが重要です

「わるい。そこまではわからないんだ」

私は「分からないんですか」と言いたかったが…

「それと薫先生。一つお願いがあるんですけど…」

無意識にそう言っていた

「なんだい？」

「目を瞑って下さい」

「ああ」

薫先生が目を瞑る

「薫先生……。私、沙代が仮契約してるって知ったとき気付いたんです」

これは私の本音

「……………」

「ちょっとだけ嫉妬しました。だから……」

私は薫先生と二度目のキスをした

「これでチャラにしますね／＼」

と、言い残して自分の班に戻った

『みなさーん！電車に乗ってくださいーい』

よし、京都だ

「はい薫先生。あーん」

「見ろ茶々丸！速い！速いぞ！」 「そうですね。マスター」

（モジモジ…） ピタッ

「zzz…」

「……………どうしてこうなった」 俺は六班の方々と近い席にいる

六班は沙代、エヴァ、茶々丸、刹那、ザジの五人で構成されている

今の状況を説明すると

沙代は弁当のおかずを俺に食べてもらおうとしている

刹那は沙代と反対側に座り

手が重なっている

エヴァと茶々丸は窓から流れ行く景色を楽しみ

ザジは頭に小鳥を乗せて寝ている

「薫先生が食べてくれない……………、グスッ」

「泣くな。ほら、食べるから」

パクッ

モキュモキュ
モキュモキュ

ゴクン：

「どうですか？」

「薄味だが、しっかりとついでる。どちらかというと美味しい」

「本当に美味しいですか？」

「料理に嘘はつかない」

「か、薫先生！」

「何だ、刹那？」 「あ、あーん／＼／＼」

刹那：。お前もか

端から見れば両手に華で

羨ましい光景かと思うだろう

違うんだよ！

沙代がこっちを凝視してくるのに加え、刹那は恥ずかしさを抑えながら箸を向けている

あんなに顔を赤くして
とっても恥ずかしいに決まってる。その勇気に俺は、一人の男として応えてやらないといけない気がする

「あーん」

パクッ

モキュモキュ
モキュモキュ

ゴクン

「ど、どうですか？」

「強いていうなら普通」

「ガーン!!」

刹那が落ち込んだ

「だがな…」

「え!?!」

「なんつうか、『誰かに食べてほしい』って気持ちで籠もってたぞ」
「そ、そうですか／＼／＼」

「ああ」

俺が頭を撫でると

「はうっ」

なんて声を上げて、固まってしまった

「俺は見回りに行くから、大人しくしてろよ」

「はーい」

カカツ

残りはネギ少年のいる五班か…

ネギ少年がいるというか

居座っている

いや、拉致られてる？

まあいいか

五班は問題を起こさなければ
普通なんだけどね

メンバー構成が

夕映・明日菜・木乃香・ハルナ・のどか

大丈夫だろ

けど、一応は確認しとこう

「おいすー」

「薫先生おいすー」

「おいすーです」

「あ、忍先生」

「なにしてんだ？」

「トランプですよ。薫先生もどうですか？」

「いいだろう。貸してみ」俺がトランプを受け取ろうと、手を伸ばすと沙代と和美のカードが懷から落ちた

「なんやこれ？」

あろうことか木乃香が拾った

「和美と沙代ちゃんや。かわえーなあー」

ネギ少年と明日菜がカードを見て、ヒソヒソと話している

「これ、どうしたん？ウチもほしーな」

「そうだな…、機会があれば」

「今じゃ駄目なん？」

「今はな」

先程からネギ少年と明日菜に、見られてる

やれやれ…そんなに見ないでほしい、穴があきそうだ

「それじゃ薫先生、ウチのもいつか作ってくれへん？」

「ああ、いつかな。ほれ、きり終わったぞ」

カードとランプを交換すると、ネギ少年に呼ばれた

「あの忍先生。ちょっといいですか？」

「わるいな。ランプはまた今度」

五班の方々に詫びて、席を立つ

――ネギ少年視点――

忍先生の服から何か落ちた

「ネギ、あれって」

明日菜さんが僕の耳元でそう言った

木乃香さんが拾ったカードみたいなものに、沙代さんと朝倉さんが描かれていた

仮契約カードじゃないですか

待てよ。忍先生がカードを持っているってことは…

忍先生は魔法使いなんだ！

それに、沙代さんと朝倉さんも関係者だなんて

「ネギ、ネギ、アレって仮契約カードよね」

「そうみたいです。どうやら沙代さんと朝倉さんのみたいですけど」

「なんで薫先生が持つてるのよ」

「そんなの知りませんよ。魔法使いだからじゃないですか？」

「アンタ、ちょっと聞いてみなさいよ」

「明日菜さんが聞いて下さいよ」

「同じ教師でしょ」

「分かりましたよ」

タイミングを見計らって…

「あの忍先生。ちょっといいですか？」

よし聞いてみよう

「忍先生、魔法使いですね」

「正確には違ったりする」

「それじゃ、さっきのカードはなんですか？」

「カード？ ああ、コイツか」

「その二枚があるってことは、沙代さんと朝倉さんも魔法を知ってんですね」

秘密もここまでか

「そうだな。俺が教えたのは自己防衛の手段だけ。それと、前に聞いたな『魔法を使えたらどうするか？』って」

「は、はい」

「あれは、簡単に言ったつもりだったが少し付け足すよ。魔法を知るのは自由だ。でもな、そこから足を踏み入れると今までの生活に戻れなくなる。魔法を知らなきゃ、沙代も和美も普通の生活ができた…。俺のせいで、人生を狂わしてしまうかもしれない。俺はそうならないために2人を守りたい」

「……………」

「だから俺が、魔法を自分の為に、アイツらの為に使う」

「それでも、困っている人がいたらどうしますか？」

「その時がこないとわかんないな…」

「わかりました。わざわざすみません」

「こっちも黙ってて悪かったな」

そのあとはネギ少年と軽い談笑をしていると――

『お菓子の中にカエルが』

『どっから沸いてきた』

『／（＾Ｏ＾）／』

などと悲鳴が聞こえたところに向かう

「どうした！」

「薫殿！助けてほしいでござる」

扉を開けると、楓が抱きついてきた

すると、カエルの一匹が楓の額に乗った

「（ブクブクブクブク）」

「（気絶したー！）」

とりあえず、カエルは凍らせよう

凍らせる（カチコチだ）

凍らせる（冷凍だ）

凍らせる（カチコチだ）

凍らせる（冷凍だ）

カゝエルのクセに生意気ゝ

だから黙らせるわゝ

チルノ流冷凍カエルの完成

見て下さい

あのカエルがまるでオブジェのように氷づけになっています

「かゝえゝでゝ。起きろ」

「…………ハッ！拙者はいつたい。カエル！カエルは嫌でござる！」

「安心しろ。カエルは既に氷の中だ」

「うう…、助かったでござる」

「そうかそうか。んじゃ早く俺から降りろ」

「むう…」

楓は名残惜しそうな顔をして降りた。俺みたいな奴に乗っかっても面白くないだろ

「ハア…（もっと薫殿とくっ付いていたかったでござる。それに、なかなかの体つきだった故、少々うつとりしてたでござる）」

『ま、待てー！！』

ネギ少年の声が聞こえた

「俺は仕事に戻るわ」

どうして、次から次へと仕事を増やす

何故か新幹線にいたツバメが

『親書』と書かれた封筒をくわえて飛んできてた

如意笛でツバメを叩き落とすと

何かが飛んできてツバメを真つ二つに斬った

何かが飛んできた方を見ると刹那が刀を竹刀袋にいれていた

「…あ、ネギ先生…」

「さ、桜咲…さんと忍先生？」

後ろにネギ少年がいた

「あの…これ…落とし物です…」

刹那はネギ少年に親書を渡した

「え、あっ！コレはボクの大切な親書！あ、ありがとうございます！大切なものなんです！」

「それはネギ先生の物ですか？では、気をつけた方がいいですよ。特に『向こう』に着いてからは…。それでは」

「じゃ、じゃあなネギ少年」

俺は刹那の後を追い、もといいた車両に戻った

「刹那…、麻帆良に戻ったら補習な」

「ど、どうして!？」

「訳は自分で考えろ。そしたら補習の件はなし」

刹那は考え出した

「頑張ってね。せっちゃん」

「せ、せっちゃん…／／／はう／／／」

また、固まってしまった

く数十分後く

アナ『京都、京都で御座います。お忘れ物御座いませんよう。お願い致します』

「よし。京都だ！全員、乗り込めー」

『『『おー^^』』』

俺たちは京都に降り立った

第三十四話／修学旅行でテンションがhighになる奴は絶対いるよね（後書き）

最近、朝倉がメインヒロインになってきてる気がする

そうだ！

皆さんは、今までの番外編

番外編その1／おい……。決闘しろよデュエル

番外編その2／元々、主人公のいた世界での話

番外編その3／Shinobu／steynightってなんぞ？

番外編その4――世界の自由人、忍竹薫……。魔法少女がりりカルな世界で、その瞳は何を見るのか――

でどれが一番好きですか？

興味があるので教えてほしいです

人気があったのは、『続・番外編』として書いてみます

第三十五話／清水寺を『しみず寺』と読んだことは、誰にでもある（前書き）

修学旅行1日目

酒は飲んでも飲まれるな！

第三十五話／清水寺を『しみず寺』と読んだことは、誰にでもある

俺は新幹線から降りると

日本の古都

京都の街中がお出迎えしてくれた

『ヌハハハハ！待っている！すぐさま寺巡りをしてやるからな！！』

エヴァのテンションが半端なく上がっている

「ハイハイ！まず初めに清水寺に活きますよ」

「「「ハイ」」」

（清水寺）

「京都だぁー！ー！ーっ！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「誰かつ！！飛び降りれっ」

「では拙者が…」

「おやめなさいっ！」

「俺が行くわ」

「薫先生もやめて下さ——Σ遅かった！」

ギャラリー達

『エエエエエエエエエエエエエエ』

「ただいま（ドヤア）」

「速い！もう戻ってきたのか！」

俺は清水の舞台から飛び降りて、戻ってきた

『ここが清水寺の本堂いわゆる“清水の舞台”ですね』

『やっと来れたのだな…。夢にまで見た、京都に…』

『そうですよ。マスター…』

「よかったな。エヴァ」

そんなエヴァと茶々丸の会話を聞いて少し涙がでた

「夕映よ。ここらで清水の舞台で飛び降りたら生存率はいくらだったけ」

「85%ぐらいです」

「よし、お前ら。ここから飛び降りたら、20人中3人は死ぬらしい、くれぐれも飛び降りないように」

本来ならばネギ少年が注意するのだが、肝心のネギ少年が：

「わーっ凄い！京の街が一望できますねーっー」

教師というより

一人の子供に戻っている

「ネギ少年。はしゃぎすぎて落ちるなよ」

「大丈夫ですってっ……うわっ！」

パシッ

身を乗り上げて手を滑らせたネギ少年の足首を掴んで救出した

「ほらみろ。言わんこっちゃない」

「す、すみません」

これといった騒ぎをない

だが3-Aは誰が火種を起こすかわからないから、警戒しなくては…

『そうそうここから先に進むと恋占いで女性に大人気の地主神社があるです』

夕映よ！それは拙いだろ

「え！」

「恋占い！？」

『ちなみに…、その石段を下ると、有名な“音羽の滝”に出ます。
あの三筋の水は飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びが成就するとか
…』

今回は夕映が発端になった

「これから大変だぞ。ネギ少——あれ？どこいった？」

いつの間にかネギ少年がいなくなっていた

「忍先生……！」

声のした方を見ると、雪広委員長やまき絵に連れられていたネギ少年がいた

「いやあゝ。青春だな…」

恋だの愛だのは中学生とかの特権だしな、ここはネギ少年に犠牲と
なってもらうのがいいだろう

俺自身、京都に来るのは二回目な訳でテンションが上がらない訳が
ない

多少の事は目を瞑る

瞑りたかった

「なんで雪広委員長とまき絵が目隠しして、落とし穴に落ちてるんだ」

新手のギャグですか？と言いたかった

落とし穴に落ちているのもあるが、のどかが岩に手をついたまま気絶している

「木乃香、ここは任せた」

「はいな」

カカツ

俺のアンテナの感度はさすがA＋と思うほど今日は冴えている

だが勘が鋭いのは時として不幸を招くのである

「薫先生。今からホテルで一晩過ごしませんか」／＼／

円だ：

でもいつもと違う

目がトロンとし
頬を紅潮させていため
どこか色っぽい

そう

酒を飲んだ感じた

「ほら、キスしましょう／＼／＼」

円は俺の首に手を回し顔を近づける

酒を飲むと本能が出てくるというが、ここまで大胆になるのか…

てか酒臭っ！

「薫先生…、好き…ZZZ」

円はそのまま、体を俺に預けて寝てしまった

その後、なにがあつたかを纏めよう

飲むと効果があるという滝の水が酒に変わっていて

それを飲んだ3-A

酔いつぶれた奴らをバスに運び、介抱した

（夜・旅館前）

夜中に抜け出さない生徒がいらないとは限らないから、見張りをして

います

もう少ししたら、職員の入浴時間

つまり、見張りをして時間をつぶしてるのだ

「暇だ…」

暇である

この上なく暇である

いや、正確には暇ではない
ただ変な感じがする

誰かに見られているような
そう、監視されてる気分

千里眼を使い、周囲を確認

………

………

………

……

…いた

三人組で一人は白髪の青年

一人は黒髪の少年

もう一人は刀を持った少女

俺はコンビニに行く振りをしながら三人の背後に回り

「動くな」

続けてこう言う

「アンタらが何を考えてるかは知らんが、ウチの生徒に手を出したら承知しないよ…」

すぐさま、『オプティカル・カモフラージュ』を使う
カモフラージュが便利すぎる

〓？視点〓

「動いたで、早よ仕事にとりかかろうや」

「小太郎はん。今日は偵察やから手え出したらあきまへんで」

「じゃあない。こっちは雇われてる身やしな」

「そうやで、依頼主の命令は絶対『動くな』！」

な、なんやこの圧力
体が…、動かへん

『アンタらが何を考えてるかは知らんが、ウチの生徒に手を出した

ら承知しないよ…』

バツ

「誰もいない…」

後ろから声が聞こえたから
振り向いて見たけど
誰もいいひんかった

な、何者や…

…？視点終了…

脅しはこのくらいでいいだろ

「で、さっきから俺に付いてきてなんのうだ青年」

「やっぱり気づいてましたか」

背後から、白髪青年が現れた

「朝からジロジロと何が目的だ？」

「さて、何だろう？僕の狙いはあくまでネギ・スプリングフィールドだから」

「青年よ。それなら俺を監視する必要はないだろ」

「周りの人間を調べるのは当然のことでは…、それと、僕は女だよ」
そう言って

白髪青年、もとい女性は胸元を見せる

「僕は着痩せするタイプだから、よく間違われるんだよ」

「そうか。そりゃ悪かったな」

「分かってくれたならいい。流石に恥ずかしいんでね／＼／」

「恥じらいがあるなら初めからそうするな」

…にしても僕っ子か

蒼、今どうしてるかな？

会いたいよ

「あの…、大丈夫かい？ 凄い落ち込んでるみたいだけど」

「ごめん。ちよつとね…」

白髪の女性に慰めなれた

いつの間にか落ち込んでいたみたいだ

「そう、僕はこれで失礼するよ。あと忠告ありがとう」

「おう。またな」

白髪の女性はどこかに去っていった

「あ、名前聞いたくの忘れた」

〳白髪の女性視点〵

「ただいま」

「フェイトはん。どこに行ってたんや」

「ゴメン」

クンクン

千草が僕に近づいて臭いを嗅いできた

「男の人の臭いがする」

「え!?!? そんなわけ／＼／＼」

「顔、真っ赤やで」

「ち、千草の……………、バカアアアアア!」

あの人、また会えるかな

第三十五話／清水寺を『しみず寺』と読んだことは、誰にでもある（後書き）

フェイトが女の子になっちゃった…

この後どうしよう…

いつでも感想はお待ちしてます（キリッ

第三十六話／風呂と猿と猿と猿と猿（前書き）

修学旅行編・1日目の夜

風呂といえはあの歌です

第三十六話／風呂と猿と猿と猿

バンバンバンバン♪
アビバビバノノノ♪
バンバンバンバン♪

「いい湯だな。ネギ少年よ」

「そうですね」

俺とネギ少年は旅館の露天風呂に入っている

「今日1日、この為に頑張ったのかもしれないな」

「そうでっせ忍の旦那」

「おや、いつぞやの動物ではないか」

「オレっちはカモ妖精の「カモ君ですよ。忍先生」いや、「そうかカモか」…それでいいっす」

風呂は心の洗面所とはよく言ったものだな、なんだか清められてる気分だ

「そうだ旦那。桜咲刹那について、なにか知りやせんか」

「カモよ。いきなりどうした？教師としては個人をどうこう言いたくはないんだが…」

「あの忍先生…、実はですね――」

「刹那がスパイだって？ハハハハッ！そんなわけないよネギ少年」

「でもよ旦那。新幹線の中にいたツバメの式神はきっとアイツのもんでっせ」

「ツバメ…、ああ。アレは刹那が斬ったんだよ」

「えっ!？」

「親書が持つて行かれそうになっただろ。それを刹那が取り戻したんだよ。確か勘違いされる言い方をしたけどさ、刹那はスパイなんてことはしないよ」

「でも…」

ガラガラ

ネギ少年が言いかけた時
風呂場の戸が開いた

「どうして補習なんだろう？」

「刹那、今は教師の時間だぞ。いくら混浴だからといって入浴中を襲うのはちょっとね」

「か、薫先生にネギ少年／＼／＼／」

「刹那がその気なら、俺はいつでもWelcomeだったりする」

「いや、確かに薫先生とは結ばれたと思ってますが、そのような事はキチンとお付き合いをしてからにしてからで／＼／」

「なんか照れるな／＼／」

「ここまで言わせたんですから、私のこと薫先生に貰って頂きますよ／＼／」

「わ、わーお」

な、なんてこった

先生大変なことになっちゃたよ

「あ、あの薫先生…」

「ん？どうした、刹那？」

「いえ、その…、私は「ひゃあああゝっ！」このちゃん!?!」

「脱衣所の方だな。行くぞ」

「はい!」

木乃香の悲鳴が聞こえたので脱衣所へ向かう

なんつうか…、今の時間は教職員の時間だからな

決まりを守った修学旅行を

と言いたい、3－Aに難しい話だったりする

それはそうと、脱衣所で俺たちが見たものは…

「木乃香！」

「このちゃん！」

「木乃香さん！」

「いやあゝん！」

「ネ、ネギ！？見てないで助けなさいよ！」

「あ、せっちゃん、薫先生！？見んといてく／＼／＼」

猿に下着を脱がされているアスナと木乃香がいた

まさかの光景に立ち尽くしていると木乃香の下着が脱がされる
いわば、すっぽんぽんだ

さっき会った白髪の女性は

谷間があつた為、それなりにある

木乃香は白髪の女性程はないが、中学生としては胸があるほうと見た

そうしている内に

木乃香は外へと連れてかれ——って！

いやいやいやいや

そんな姿で出たらマズって

「逃がさん！神鳴流奥義…『百烈桜華斬』！！」

刹那の放った斬撃は、まるで桜の花びらが何十枚も舞っている様に見える

「刹那…、いちいち技名を言う必要はあるのか？」

「いや…、技名を言わなかったら只の剣を振るっただけで素っ気ないですから…」

それは認めるよ

「おっと、こんなことしてる場合じゃなかった筈だが？」

「あ、そうでした！大丈夫やったこのちゃん！？」

「せっちゃん、ありがとな。なんやよーわからへんかったけど、助けてくれたんやろ？」

「ううん。このちゃんが無事でよかった…」

「よかった…」

「なにがですか？」

「せっちゃんが前みたいに『このちゃん』て呼んでくれて…」

「い、いや！アレは、その…」

「ウチ、嬉しいんよ。これからも、このちゃんって呼んでくれへん？」

「こ、この…、ちゃん／＼／＼」

「せっちゃん」

良い話だな…

ちよっとだけ、涙が出てるわ

キキッー！

ほら、猿も泣いて…

猿？

「キャア~~~~！せっちゃん、薫先生！助けて〜！」

「このちゃん！」

うお！なんだこの小猿軍団！
日光から出張してきたのか！？

それに、大猿に木乃香が連れてかれてる

着ぐるみか、着ぐるみだって言ってくれよ！

どれを使おうかな？と

ポケットを漁っていたら

ちよっとした異物があつたので取り出してみる

「……………」

赤い缶だった

それも2つあつた

缶の開けると、変形してタカになった

カンドロイドですか

「大きな猿がいるから、追いかけて」

『△△△△』

タカは頷き、飛んでいった

「明日菜、ネギ少年。ここは任せた。行くぞ刹那」

「はい」

俺はダブルドライバーを着ける

「それは!？」

ネギ少年よ何を驚く？

「ビート ファルコン」

俺は羽を出し、もう一個のタカカンを開ける

「先に飛んでいったタカちゃんのとこに案内してくれ」

『△△△△♪』

俺と刹那はタカカンのあとをおった

〳京都駅〵

「誰もいい…」

「恐らく人払いの結果でしょう。相手は関西呪術協会の呪符使いです。着ぐるみを着て、あの身のこなしですから、かなりできるでしょう」

刹那は詳しいなあ〵

補習の件は免除しよう

『刹那さん！忍先生！』

「ネギ少年に明日菜、速かったな」

ネギ少年と明日菜が追いついた

「あの猿女、どこにいるのよ」

明日菜、あんたこの前まき絵に『明日菜のおさる』って言われたんだよ。人のこと言えないよ…

ホームに止まっていた電車に乗り込む猿女を見つけ、あとを追って乗ると、電車が発進した

コレで袋小路となったから、前の車両へと追い込んむだけ

『お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす…』

前方で猿女が札を持ってお祈りすると、大量の水が迫ってきた

「凍符『マイナスK』」

俺は弾幕を放ち水にぶつける
すると、水が一気に凍り勢いよく破裂した

急激に凍らす事で密度の差ができ、それで亀裂が生じて破裂させるのだ

こういった最小限の力で最大の攻撃は持久戦に使える

やがて別の駅に着き、扉が開くと猿女は出て行った

「猿女、そろそろ諦めて木乃香を返してはくれないか？」

「それは出来ん相談やで。木乃香お嬢様を返しませんえ」

「ま、待て!!」

再び木乃香を抱きかかえて逃げ出す猿女

また追いかけてこだよ

だが、さっきの言葉から、狙いは木乃香だと推測できる

ネギ少年と明日菜はイマイチわからないようだ

「刹那、二人に説明を」

「はい。西には、このちゃんを麻帆良に…、東へ送った事を快く思っていない連中もいます。おそらくですが…、このちゃんの力を使って、関西呪術協会を牛耳ろうと企んでいるものと思われます」

「ええーっ?!」

「な、何ですか、それは…?!」

ネギ少年と明日菜は想像よりも大きい出来事に、声をあげて驚いた

すると、三日月の形をした何かが飛んできたので回し蹴りで破壊する

「凄いわぁ」

昨日の三人組のゴスロリ少女が剣を持って現れた

「神明流です。お初に」

神明流？そんなんしらん

「助っ人か、まあいい…。ここで木乃香を連れ戻せば問題はないんだからな。刹那、アツチの剣士は任せた」

俺が猿女の方を見ると…

「まったく、しつこい人は嫌われますえ？」

そう言いながら猿女は、また札を構える

「食らいなはれ！！三枚呪符…京都大文字焼き！！」

今度は水ではなく文字通り、大の字に広がった炎が現れ壁を作る

「ファルコン マキシマムドライブ」

俺の左手に右足が炎を纏う

「ファルコンキック」

飛び蹴りを放つと大文字を通り抜けて、猿女の目の前に飛び出す

「危ないでんな」

「まだだよ。ファルコン…」

「えっ！？ちょっ！コッチには人質がい——」

「パーチ！」

「あれ〜〜〜」

ファルコンキックが避けられたが、すかさずファルコンパンチを繰り出す

呪符で防がれるが、ファルコンパンチの威力の前では無意味
猿女は木乃香を手放して、飛んでいってしまった

F10なめんなよ

「このちゃん！」

「せつちゃん、ナイスキャッチ」

猿女の手から離れた木乃香は
重量に従い地面に落下したが
刹那が受け止める

刹那…、男より男っぽいよ

俺は地面に降りて
変身を解く

「刹那、木乃香は無事か？」

「ええ。どうやら眠らされてるようでして…」

「そうかい」

今の騒ぎで起きないとか

それはそれで一種の才能かと思うぞ

第三十六話／風呂と猿と猿と猿と猿（後書き）

スマブラのキャプテン・ファルコンは強いよ

速いし火力あるし

縦復帰も、横復帰もできるし

接近戦でのリーチもあるし

なんだよアイツ

現在の状況

とりあえず、リョウメンスクナのところまでは書けた

あとは修正をするだけ

だが、更新は週1となる

第三十七話／奈良公園の鹿に、鹿煎餅を1セット丸ごと食われた友人がいたな

少々、スランプ気味です

次回から更新が

今までより遅くなるかも知れませんが、許して下さい

第三十七話／奈良公園の鹿に、鹿煎餅を1セット丸ごと食われた友人がいたな・

〔修学旅行・二日目〕

本日は奈良を班別自由行動できる日である

ネギ少年は明日菜のお誘いで五班と行動することになった

俺はどうしたかって？

今まさに取り合いが始まっている

「先生ー。私達といこうよ」

「それより薫先生、一緒にホテー」

「真名、抜け駆けはいけないでござるよ」

「そうネ！薫先生はワタシの婿ネ」

オイ！miss！ミス！oi！

古菲、それは違うぞ！

『先生…、それ、ホンマなんか…？』

ゾワッ！

俺は背後にとてつもない殺気…、いや、言葉では言い表せない何かを感じて振り向く

『嘘っていつてゝな』

そこには木乃香がいた

だが、目が据わっている

包丁を持っけていてもおかしくな――

『フッフ…』（チラツ）

持っけていらっしやるー！

「ううう嘘だから！古菲の冗談だからね」

「そうやったんか」

マジでヤバかった

一応、メモしとくか

木乃香のヤンデレになることがある。つまり、少々独占欲が強い

「まあ、ここはジャンケンで公平にきめるのはどうだ？」

俺は案を出す

平和的解決方法だからな

「それじゃ、薫先生。私と行こうか」

真名がジャンケンをしないで

腕を組んできた

「ジャンケンはしないのか？」

「前のテストでの約束を、ここで使わせてもらおうよ」

「前の約束……、アッ」

思い出した

だいぶ前に『満点を取ったら一つだけ、なんかしてやる』系のことをして、真名が満点を取ったんだっけ

「という訳で、ゴメン！」

こうして俺は真名のいる班

四班と行動することになった

班員を紹介します

裕奈、亜子、アキラ、まき絵、真名

以上の五名

3－A運動部グループです

（真名視点）

私は前に薫先生との約束を思い出して、班行動に連れてきた

私は何を焦っているのだ

出来ることなら薫先生を独り占めしたい

それに今じゃなくてもよかったはず、それなのに何故…？

（真名視点終了）

（亜子視点）

どどどどどうしよう！

早くしないと薫先生が取られちゃう！

頑張るんやウチ！

やればできる！

スーハー

スーハー

ウチは落ち着いて先生を誘おうとしたんやけど…

「それじゃ、薫先生。私と行こうか」

真名さんが薫先生の腕にしがみついた

た、確かに真名さんは背も高いし、胸も大きいアキラみたいにスタイル抜群やから

ウチ、勝てへん…

で、でも

ウチはせめて、先生の隣にいたいから手を伸ばした

（亜子視点終了）

キュッ

「んあ？どうした亜子？」

旅館から外に出ようとしたら亜子が服の袖を摘んできた

「……………／／／」

真名は隣で、ジト目で見てくる

「何か言わないと置いてくぞ」

「手え…」

「ん？」

「手え、繋いで下さい／／／」

「あ、ああ」

亜子と手を繋ぐと

『薫先生〜！みんな〜！早く早く』

裕奈の声が外から聞こえた

「じゃ、いくか」

「ははは、はい／＼／」

俺は亜子の手を引いて裕奈のもとに向かった

――

「はい先生。あ〜ん／＼／」

「あ、あ〜ん」

パクッ

美味だな…

「そんじゃ亜子。あ〜ん」

「あ〜ん／＼／」

現在、とある茶屋で亜子と団子を食べ比べしている

後ろの席では一班の円が「いいな」とかい、真名の手には折れた団子こ串があり、どこから「ラブ臭大発生だー!」とか聞こえた

昨日の今日で気が抜けないが
生徒が癒やしになってくれる

――
（東大寺）

「あの、薫先生……。少しいですか／＼／」

俺は亜子に引っ張られて人気のない場所に連れてかれた

「こんなところに連れてきて一体どうしようっていうんだい？」

「いや、その…（モジモジ）」

話しづらいか…

てかさ、なんか覗いてる奴がいるし

「亜子。ちょっと待っててくれ」

～三人称視点～

「薫先生と亜子がない」

裕奈が、亜子と忍竹がないのに気づいた

「2人でどっか行ったりして…」

「「「(!!!)」」」

「どうしたの？みんな？」

この時、まき絵を除く三人の心が繋がった

(まさか、亜子が薫先生に…)

(それだけは避けなくてはいけないな)

(でも、それじゃ…)

(ま、待とうよ！取り敢えず2人を探そう)

(そうだな)

(わかったよ)

「?」どうしたの三人共…」

1人何があったか分からないまき絵であった

〽少女探索中〽

「いたいた」

「亜子だけみたいだね」

「薫先生はどこかな？」

「……………」

四人は亜子がいるところをこっそりと覗いている

「おい」

突然、後ろから声がした

〽三人称視点終了〽

「おい」

俺は何故かそこにいた裕奈・まき絵・真名・アキラに声をかける

「覗き見とはいただけないな。ほら、観光観光」

すると、四人はカカツと姿を消した

俺は亜子のところに戻る

「亜子、待たせて悪いな。で、なんだっけ？」

「あの、う、ウチ！薫先生のがす、す、す——／＼／＼」

何を言おうとしたか悟った俺は人差し指を亜子の口に立てる

「亜子、悪いけどそこまでだ」

「……………」

「知ってると思うが、生徒と教師の恋愛はいけないことだ。亜子の気持ちは嬉しいがな」

「いえ、突然こんな事言っても迷惑になるし…、先生と生徒ですし…、で、でも、ウチは…、この気持ちを知ってもらいたかったんです……（グスッ）」

「亜子、ごめん。と、言いたいところだが——」

「ふえ？（泣）」

「——そんな決まり、俺は嫌いだ。人を好きになるのはその人の自由なんだ。だからな亜子。俺は高校を卒業して、それでも俺が良かったら受け入れてやるよ」

いろんな奴に言ってるけど
これ、本心なんだよね

「約束だよ。薫先生！」

「ああ。やっぱり亜子は笑ってる方が可愛いぞ」

「えっ！そそそそんな／＼／」

「んじゃ行こうか。みんな待ってるし」

「はい」

俺は亜子の手を取って合流しに向かった

第三十七話／奈良公園の鹿に、鹿煎餅を1セット丸ごと食われた友人がいたな・

次回！

ついに修学旅行編

二日目のイベントが発生

誰が勝ち

誰が生き残るのか

刮目して見よ！

第三十八話／いきなりキスされる人の気持ちとか考えた事があるか？マジでぶっ

修学旅行2日目

ついに始まった

あのイベント！

いったい誰が勝ち残るのか
その真相は…

あとがきにお知らせ

第三十八話／いきなりキスされる人の気持ちとか考えた事があるか？マジでぶく

修学旅行二日目・夜

〽ホテル嵐山〽

「先生達には悪いけど、ここは私の為に犠牲になってもらわなきゃ」

「頼みますぜ、文屋の姉さん。コレが上手くいきゃ金がつぽ——
じゃなくて、アニキのサポートになるんでい」

「その代わり…」

「報酬の件、安心してくだせい」

「「グフフ…」」

何者かが薄暗い中、怪しげな笑みを浮かべ笑っていた

同時刻、ネギと忍竹の部屋

「どうしたネギ少年。そんなに思い詰めた顔をして」

「忍先生…、実は——」

少年説明中

「――というわけなんです」

「そうか。のどかがネギ少年に告白ね」

「僕はどうしたらいいですか」

「まあ落ち着け。俺は亜子に告白されたぞ」

「えっ！？それで忍先生はどうしたんですか？」

「高校を卒業したらまた来いって伝えた」

「忍先生は凄いです」

「そうでもないぞ」

「でも、僕からすれば凄いですよ」

「俺は自分の思っている事をそのまま伝えただけだ」

「思っていること…」

「ネギ少年、ひとに相談する時、既に答えを見つけてるらしいぞ」

「そうですか？」

「そうらしい。ということで頑張れネギ少年」

「さてと、そろそろ始めますか」

私は3－A各班の部屋のテレビに映像を映す

「くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&薫先生とラブラブキッス大作戦！！」

「ルールは簡単。各班から二名ずつを選出し、新田先生方の監視を避けながら旅館のどこかにいるネギ先生か薫先生のどちらか一方とキスすること。妨害あり！ただし武器は両手の枕投げのみ！！上位入賞者には豪華商品プレゼントがあるよ。参加者は今から十分以内に私に連絡してね」

「む…、いま寒気がしたような…」

「ぼ、僕もしました」

「気分転換に見回りでもするか？」

「そ、そうでしょうか…」

そこでネギ少年は一枚の紙を出す

「なんだそれ？」

「刹那さんがくれたんです。確か身代わりの紙型と名前で、ペーパー
ゴーレムみたいな物らしいですよ」

「へえ、そんなんあるんだ」

「早速やってみます」

—ぬぎ—

「あ、間違えた」

「焦らない焦らない」

—ミギ—

「ネギ少年、カタカナの方がいいんじゃない？」

「はい。やってみます」

ーホギルヌプリングフィールドー

「あれ？なにか違うような…」

「だいぶ違うぞ」

何枚か失敗して、何とかネギ少年の名前、ネギ・スプリングフィールドと書き終えた

「えっと、たしか呪文は…」

ネギ少年はメモ帳を取り出した。カンニングペーパーやないか！

「お札さん、お札さん、僕の代わりになってください」

呪文というかお願いをすると、身代わり紙型に光が溢れ出す

そして、目の前にネギ少年そっくりな人物が現れた

「こんにちはネギです」

「わー스ゴイヤー！！ボクそっくり。西洋魔法にはこーゆーのは無いなー」

「おお…、そっくりだ」

何体か目の焦点が合っていない様な奴もいるがな…

俺には『フォーオブアカインド』と『大きな葛籠と小さな葛籠』があったな

「ここで僕の代わりに寝ててね」

「ネギです」

……何だか返事がかなり心もとないんだが

「ネギ少年。そんな身代わりで大丈夫か？」

「はい、大丈夫ですよ！では、行ってきます！」

ネギ少年は杖を片手に飛んで行ってしまった

「俺は寝るとするか」

俺は壁に背中を預けて寝る体制になる

何かあったら困るからな

夜・23時

3-Aの各班が一斉に動き始めた

テレビモニターには監視カメラを通して、各班の様子が見られる

『さあ！いよいよ始まりました。修学旅行特別企画！！くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&薫先生、ラブラブキッズ大作戦！！まずは各ペアの紹介をしましょう！！』

テレビに朝倉の顔が映る

次に、各班の参加者が画面に映し出される

1班..風香・史香ペア

2班..古・超ペア

3班..雪広・長谷川ペア

4班..明石・和泉ペア

5班..綾瀬・宮崎ペア

6班..エヴァ・茶々丸ペア

参加者の紹介が終わり
各自枕を構える

『そりじゃ、ゲーム開始！！』

さあ、夜はこれからだ！

「忍先生。戻りました」

「おかえりネギ少年」

ネギ少年が帰ってきた

「そうそう。俺は見回りに行くから。先に寝ていてくれ」

「わかりました。おやすみなさい」

「おやすみ」

「お前ら、何をやっている!!」

「し、新田!」

「あわわわわわ」

「三人とも朝まで正座!!」

早速捕まってしまった

鳴滝姉妹と雪広委員長

千雨は半ば雪広委員長に強制参加させられた為、めんどくさいみたきで部屋に戻っていたらしく正座の被害は受けなかった

別の廊下では：

ロボーの反対側

そこでは、このゲームに参加してない長瀬楓と、同じくゲーム不参加の龍宮真名が戦闘をしていた

真名は開始と同時に薫とネギ少年の部屋へと向かったが、楓が道を封じていたのだ

長瀬と龍宮：

いや、忍者と拳銃使いのハイレベルな戦闘が繰り広げられていた

「楓、今日は私が勝たせてもらうよ」

「たとえば真名といえ、今宵は拙者が勝つでござる」

本当に枕で戦っているのかと疑いたくなるような攻防の傍ら

「裕奈…」

「亜子、今のうちだよ」

「う、うんっ」

「（ごめんね。真名さん…）」

4班の裕奈と亜子は

真名が楓を引きつけている内に薫とネギ少年のいる部屋に向かった

「こんばんは先生」

「こんばんは薫先生」

「よおエヴァ、茶々丸。消灯時間はとっくに過ぎてるぞ」

見回りをしていたらエヴァと茶々丸に出会った

「やっぱ吸血鬼は夜に行動するものなんか？」

「さあ、どうだか」

せめて答えてくれたっていいでしょ

「まあいい、俺は一度目は許す男だからな、今部屋に戻れば許してやるがな」

「ククク…、それより先生」

「なんだ？」

「キスしないか」

「エヴァは駄目だが、茶々丸なら大歓迎だ」

「何故だ！」

おやおや

最近の幼女はキレイやすい

「そんなの決まっている。エヴァより茶々丸の方がタイプだからだ
！！」

「ならば力づくでさせてもらおう！行くぞ茶々丸」

「は、はい／＼／＼」

茶々丸が突っ込んで来るのん避け、すれ違う時に

「茶々丸…、愛してる」

そう囁いた

「はうっ！」

茶々丸は頭から煙を出して倒れてしまった

「『封魔陣』」

次にエヴァへ『封魔陣』を放つ

「ぐっ、この程度のなら…っ！魔法が使えないだど！」

「動けないうえに魔法が使えないなんて、戦いでは戦死したも当然

だな」

『封魔陣』

それは妖怪の類の行動を著しく制限するものである

この世界では、行動と魔力を封じるみたい

「ってことでエヴァ」

「な、なんだ！」

「戦死者は朝まで補習（正座で）」

『ヒギイイイイ！』

6班も脱落した

現在残っているチーム

2班..古・超ペア

4班..明石・和泉ペア

5班..綾瀬・宮崎ペア

このゲーム

誰が死に（捕まり）、誰が優勝^{キス}するのか

後編へ続く↓

第三十八話／いきなりキスされる人の気持ちとか考えた事があるか？マジでぶっ

刹那のアーティファクトをどうするか検討中

原作通りにするか

それともオリジナルにするか

オリジナルなら

どんなのにしようかを…

第三十九話／馴れないものは、いつまでも経っても馴れない（前書き）

2日目の夜

後半戦でございます

第三十九話／馴れないものは、いつまで経っても馴れない

修学旅行二日目・夜

現在、3－Aは『ラブラブキッス大作戦』というゲームを行っている

既に、3チームが敗退し波乱が渦巻いている

そんななか、このゲームの標的になっていると忍竹薫は…

「薫先生！大人しく拙者とキスしてほしいでござる」

「畜生！捕まってたまるか」

「楓、私が先生の動きを止めるからそのうちに」

「了解でござる」

麻帆良武道四天王の一角を担う『長瀬楓』と『龍宮真名』に追いか
けられていた

それは遡ること数分前

「なるや楓」

「真名もなかなかでござる」

2人は向かい合いキメに入ろうと構えた時

「はいはいそこまで。消灯時間は過ぎてるから早く部屋に戻りな」

「「!」?」

声のした方を向くと

楓と真名が争っていた原因

このゲームの標的の1人

忍竹薫がいた

「真名、一旦手を組まぬでござるか?」

「どうしてだい?」

「拙者も真名も、1対1では薫先生には勝てぬでござる。そこで協力するのがいいと思うでござる」

「それもそうだね」

楓と真名は枕を捨て、クナイと拳銃を構える

「バックステツポォ!」

「待つでござる!」

「楓、追うよ」

そして今にいたる

「(てかなに!このスプリンター!どうして…、俺を…、追って…)」

楓が俺を飛び越えた

「(抜いたー!)」

「薫先生…。これでもう逃げられないでござるよ」

「いい加減諦めたらどうだい」

挟まれたか…

一本道の前後に楓と真名

正に八方塞がり

／(＾Ｏ＾)／

どうすんよ…

どうすんのよ!

薫が絶望的は状況に陥っている時、別の場所では…

のどかと夕映は何だかよく分からない場所をほふく前進で進んでいた

「ゆ、ゆえ〜」

「何ですか、急ぎますよ」

「何でネギ先生のとこ行くのにこんなとこ通ってるの〜？部活みたい…」

「私の考えでは、このルートが最も安全かつ速いのです」

前を進む夕映は、旅館の見取り図をのどかに見せる

一体どこから手に入れた

「着いたです」

夕映はとある天井の裏で動きを止める

「この下がネギ先生のいる部屋です」

夕映は、どこからかロープを取り出して部屋の中に降りる

のどかも夕映に続いて降りて行く

どうすんよ…
どうすんのよ！

正に八方塞がり
四面楚歌
絶体絶命

ふと脳内に言葉が響く

（神は言っている。ここで死ぬ運命ではないと…）

ムリポ

「はあ。わかった。諦めたらよ」

「それじゃ、私とキスしよう」

「その前に場所を変えてくれないか？ここだと、ちよつとな」

俺と楓と真名は場所を
階段の踊場に移した

「2人に聞いたことがあるんだけど」

「「なんだい？／＼なんでござるか？」」

「相手が俺でいいんか」

「ああ／＼／」

「いいでござる／＼／」

「私はむしろ、薫先生ではないと嫌だな」

「拙者も同じでござる。拙者は薫先生のことを好いてるでござるか
ら、薫先生以外とはしたくないでござる」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

「当然だ」

「ニンニン♪」

真名が近付いてくる

「薫先生…／＼／」

「真名…」

俺と真名はキスをする

「ハア…ハア…／＼／」

真名、そんな顔をされたら虐めたくなっちゃうよ

「次は楓だn——ん！」

「か、薫…先生…／＼／」

「これで満足か」

仮契約を終えた俺は

この騒動を終わらせる為に歩き出した

「おっと！言い忘れてたけど…」

「どうしたんだい？」

「なんでござるか？」

「朝まで正座」

また別の場所では…

「超さん」

「ネギ先生、なんアル…か…」

超の後ろにネギ？（複数）が現れた

「ちゅ」

ネギ？（複数）がいきなり超にキスをしようとした

ドス！

「こ、今度はナニアル…笛？」

ネギ？（複数）の唇は超には届かず

その代わり、頭に笛が刺さり消えた

「危なかったな超」

「あ、薫先生」

忍竹は、伸ばした笛を元の長さに戻した

俺はひとまずネギ少年の分身を見つけた

しかも複数体

コレを見られたら、流石に魔法を隠しきれない

俺はそう思い

それなりの殺傷力のある『如意笛』を取り出す

いきなりネギ少年達が超にキスをしようとしているのを見てしまい、
如意笛で頭を貫いた

「危なかったな超」

ネギ少年達は「どうもホギでした」とか「みぎでした」とか言って、
煙をあげて人型になった

全く、乙女のファーストキスを奪おうなんて万死に値する！

迫られたら別だよ

和美の時は仕方なかったし
ウチのシマじゃノーカンだから

「そうだ超。和美がどこにいるか知らないか？」

「そういえば、向こうの方に行ったのを見たネ」

「ありがとう」

俺は超の指差した方に走った

超視点

また誰か『ちようしてん』って読んだアルね

作者さん。次回から鈴でお願いしたいネ

（分かった）

鈴視点

いやゝ

まさかネギ先生がワタシの初めてを奪おうとするなんて、許せないネ
しかも、この旅館全体を仮契約の魔法陣が覆っているから危うくネ
ギ先生と仮契約するところだったアルよ

仮契約するならワタシ、ネギ先生より薫先生の方がいいネ／／／
ともかく、ワタシの初めてを護ってくれた薫先生には感謝しなくち
やいけないアル

「そうだ超。和美がどこにいるか知らないか？」

ありや、薫先生は和美を探しているアルか

「そういえば、向こうの方に行ったのを見たネ」

確か、このゲームが始まる前にアッチの方に行ったのをみたアル

「ありがとう」

薫先生はそう言って走って行ったネ

あ、仮契約

「薫先…生…」

ワタシは呼んでみたけど、もう誰もいなかったヨ…

———
ななな、なんなのよこれ！

どうして、長瀬さんと龍宮さんのカードがでてくるの

ま、まさか2人共薫先生としたんじゃない？

いやいや、落ち着け朝倉和美

仮に2人が仮契約したとしても、それが薫先生としたとは限らない
相手がネギ先生かも知れないじゃない

うん

そうよ！きつとそうに違いないわ

「コレはきつと忍の旦那とのカードでっせ。文屋の姉さん」

言わないでええええ！

お願いだから言わないでええええええ！

長瀬さんも龍宮さんも背が高いし私より胸あるし…

こうなったら薫先生と既成事実を作って…

「あゝさゝくゝらゝ」

えっ！？

「あゝさゝくらゝ」

俺は階段下の小さなスペースにいる和美を見つけた

「な、なにかな？薫先生？」

「それじゃ聞くけど、手に持ってるカードは何かな？」

「えっと…その…こ、これは…」

その時、別のカードが出現した

「なんだこりゃ？」

えゝと

n o d o k a m i y a z a k i …

遅かったか

ネギ少年のことだから

自分から仮契約するとは考えにくい

だとすると、なんらかのアクシデントだな

のどかは性格からして戦闘には向いてないな

となると、必然的に仮契約したネギ少年がのどかを守らなきゃいけないくなったな

10歳には、少々キツイかも知れないな

ま、俺がどうこう言う問題じゃないし

どうするかを決めるのは、のどか自身だからな

俺ができるのは、陰ながら生徒を守ることだけ

ネギ少年の手が届かないところは、俺がなんとかしてやるか

『ただいま宮崎のどかがネギ先生とのキスに成功しました！よってこのゲーム、宮崎のどかの優勝です！』

ゲームだと…

「それじゃ、薫先生。お休みなさい」

ガシッ！

俺は部屋に戻ろうとした和美の肩を掴む

「なあ朝倉…」

「ななな、なにかな？か、薫先生（汗）」

「ゲームって、なんのこと…」

「そ、それは…」

「少し、O☆H A☆N A☆S H I ☆しようか？」

「イヤアアアアア！H A☆N A☆S E！！」

俺は朝倉をスキマ（特製）の中に連行した

（スキマ内）

「アアッ！らめええ／／／」

「我慢しなくていいんだよ。和美」

「アッ／／／アアアアアアアア／／／／／」

………

………

………

………

…

「和美…」

「か…、薫…先生…／／／もっと、虐めて下さい／／／」

そのトロンとしたイヤらしい表情…
ゾクゾクする

だがな、ここで一步退くのが大人の対応

俺は『狂気の瞳』を使って和美を元の状態に戻し眠らせてから、スキマを出す

もちろん、アフターケアも施しとく（この辺の気遣いが人気の秘訣）

さっきの和美

それを『和美M』としよう

その和美Mの人格に境界を作り、封印した

八重ぐらいしたかな

「カード…、作っちゃったな…」

俺は真名と楓のカードを見て、そう思った

真名は関係者だし

楓に至っては忍者だし
いい方じゃないのか？

「まあいいか。真名のカードは…。ん？M a n a A r c a n a？」
『徳性・愛』

『方位・北』

『色調・黒』

『星辰性・月』

『称号・背中を守りし者』

『アーティファクト・王の弾薬庫』 （バビロニア・フルバースト）

そんで楓の方は…

『徳性・節制』

『方位・西』

『色調・青』

『星辰性・水星』

『称号・正体不明の暗殺者』

『アーティファクト・AS』 （アサシン・ソリッド）

とりあえず明日にでも渡すとして

俺は仕事に戻るとしますか

仕事？

見回りですけど何か？

ゝ忍竹薫、ネギ・スプリングフィールドの部屋の前ゝ

「ゆるな」

「どうしたの亜子？」

「負けちゃったね…」

「……………うん」

「ゆーなはさ、ネギ先生と薫先生のどっちが狙いやったん？」

「薫先生だけど…」

「ウチも薫先生を狙ってた」

「そうだったんだ」

「にしても意外だったな」

「な、なにが？」

「ゆーなは明石教諭、お父さんの事が好きなんやろ？」

「うん。お父さんは好きだよ」

「それじゃなんで薫先生の事を狙ったん？」

「……………確かにお父さんは好き。でもね、薫先生とは違うの。お父さんは家族として好きなかもしれないけど、薫先生を見てると胸がドキドキして、嬉しくて、気が付いたらいつも視界に入れてた。たぶん…、ううん…、私絶対に『薫先生に恋してるんだ』ってわかって、薫先生の事が好きな人は沢山いるから誰にも負けたくなくて

…それで…」

「だったらウチも負けへん」

「亜子…」

「ゆーな、これからは友達で、ライバルだよ！」

「うん！」

人知れず、友情が深まった
明石裕奈と和泉亜子

だが、二人の恋路は険しい棘の道であることは誰も知らなかった…

「「やめてそのナレーション！」」

第三十九話／馴れないものは、いつまで経っても馴れない（後書き）

刹那のアーティファクトをどうしようか…

原作通りにするか

オリジナルにするか

皆さんどっちがいいですか！

凄く知りたいです

第四十話／Q『AKB48』とは、为什么呢？

正解はあとがきで（前書

現在の募集中のもの

一緒に戦ってくれる他作品の主人公の方

刹那のアーティファクトを原作通りにするかオリジナルにするか

仮契約してほしい人

書いてほしい番外編

第四十話／＼Q『AKB48』とは、为什么呢？

正解はあとがきで

修学旅行・三日目

この日は一日中、完全班別自由行動である

振り返ってみたら

一日目は清水寺での飲酒事件に、木乃香の救出

二日目は亜子に告白されて、夜に変なゲームに巻き込まれて真名と楓と仮契約する

今日ぐらいゆっくりしたい

（ゆっくりしていいね！）

頭の中にゆっくりが浮かんだ

自分、疲れてんのかな…

「でさ、なんで京都まできてゲーセンにいるんだ」

俺は5班のメンバーとゲーセンにいる

ネギ少年と明日菜、のどかはクレームゲーム

夕映とハルナはカードゲーム

ハルナが京都限定カードを手に入れる為みたいなのだが

そのゲームが遊戯王である

作者は『インフェルニティ』『図書館エクゾ』『ドラクニティ』『邪神エイリアン』を持っているみたいらしく

朝起きたら腰にデッキケースが付いていて『インフェルニティ―デッキ』が入っていた

「あゝ。また負けたゝ」

「惜しいですよハルナ」

どうやら負けたみたい

「薫先生ゝ。決闘^{デュエル}しよゝ」

ハルナが誘っていた

「構わん」

「薫先生。ハルナは強いですよ」

「大丈夫だ。問題ない」

俺はハルナの反対側に座り、デッキをセットした

「薫先生。準備はいい」

「いいぞ。さあ…、満足しようぜ！」

「デュエル！」

「デュエルだあ！！！」

早乙女ハルナ LP 8000

VS

忍竹薫 LP 8000

「私の先攻！ドロー！」

ハルナ手札6枚

「私は『ゴフリンバーク』を召喚。効果により手札からレベル4のモンスター『ゴゴゴゴレム』を攻撃表示で特殊召喚。効果使用により『ゴフリンバーク』は守備表示になる。さらに、二体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！現れろ！『No.39 希望王ホープ』カードを二枚伏せてターンエンド」

早乙女ハルナ LP 8000
手札2枚

モンスター

『希望王ホープ』

魔法・罫

伏せカード2枚

「俺のターン！ドロー！」

手札6枚

「俺はモンスターをセツト。カードを3枚伏せターンエンド」

忍竹薫 LP8000

手札2枚

モンスター

セツト1枚

魔法・罠

伏せカード3枚

「私のターン！ドロー」

ハルナ手札3枚

「俺はここで罠発動『インフェルニティ・インフェルノ』手札を2枚捨て、捨てた枚数だけデッキから『インフェルニティ』と名のついたカードを墓地におくる。俺は『インフェルニティ・ネクロマンサー』と『インフェルニティ・デストロイヤー』を墓地に送る」

「わざわざカードを捨てるなんて…、なにが目的なの？」

「秘密だよ」

「だったら、解き明かすまで！私は『アチャチャアーチャー』を攻撃表示で召喚！『アチャチャアーチャー』の効果発動！このカードの召喚にした時、相手に500ポイントのダメージを与える！」

忍竹薫 LP7500

「バトル！『希望王ホープ』でセットモンスターに攻撃！『ホープ剣スラッシュ！』」

ホープがセットモンスターに切りかかる

すると盾の様なモンスターが現れる

セットモンスター↓『インフェルニティ・ガーディアン』

『希望王ホープ』 ATK2500

VS

『インフェルニティ・ガーディアン』 DEF1700

しかし、ホープの剣はガーディアンを斬れなかった

「ど、どうして破壊されないの！？」

「『インフェルニティ・ガーディアン』の効果発動！コイツは手札が0枚の時、先頭、魔法、罠、効果モンスターの効果では破壊されない」

「な、ナンダッター！」

「さあ、どうする?」

「くっ、私はカードを一枚伏せてターンエンドよ（大丈夫、伏せカードは『ミラフォ』に『筒』、『炸裂装甲』まだ大丈夫）」

早乙女ハルナ LP8000

手札2枚

モンスター

『希望王ホープ』

魔法・罠

伏せカード3枚

「俺のターン！ドロー！」

勝った：

「俺は手札の『インフェルニティ・デーモン』の効果発動！手札が0枚の時にこのカードをドロー場合、相手に見せる事で特殊召喚することができる。俺は『インフェルニティ・デーモン』を特殊召喚する。『インフェルニティ・デーモン』の効果発動！このカードの特殊召喚に成功した時、デッキから『インフェルニティ』と名のついたカードを1枚手札に加える。俺は『インフェルニティ・ミラージュ』を選択する。そして、『インフェルニティ・ミラージュ』を召喚！『インフェルニティ・ミラージュ』の効果発動！手札が0枚の時、このカードをリリースすることで、墓地の『インフェルニティ』と名のついたモンスターを2体を選択して発動。選択したモン

スターをフィールドに特殊召喚する。俺は『インフェルニティ・ネクロマンサー』と『インフェルニティ・ビートル』を特殊召喚」

モンスター

『ガーディアン』

『ネクロマンサー』

『ビートル』

『デーモン』

「『インフェルニティ・ビートル』なんていつ…！あの時！」

そう『インフェルニティ・インフェルノ』の発動時に手札から落としたんだよ

「『インフェルニティ・ビートル』の効果発動！手札が0枚の時、このカードをリリースすることで、デッキから『インフェルニティ・ビートル』を2体まで特殊召喚する」

モンスター

『ガーディアン』

『ネクロマンサー』

『デーモン』

『ビートル』

『ビートル』

「レベル4の『インフェルニティ・ガーディアン』と『インフェルニティ・デーモン』にレベル2の『インフェルニティ・ビートル』をチューニング！破壊をもたらす光に正義の鉄槌を今ここに下す！シンクロ召喚！殲滅せよ『A・O・Jディサイシブ・アームズ』」

モンスター

『ディサイシブ』

『ネクロマンサー』

『ビートル』

「『インフェルニティ・ネクロマンサー』の効果発動。手札が0枚の時、墓地から『インフェルニティ』と名のつくモンスターを一体、特殊召喚する。『インフェルニティ・デーモン』を選択する。再び、『インフェルニティ・デーモン』が特殊召喚に成功した為、デッキから『インフェルニティ』と名のつくカードを手札に加える。『インフェルニティ・ガン』を選択。レベル4『インフェルニティ・デーモン』とレベル3『インフェルニティ・ネクロマンサー』にレベル2『インフェルニティ・ビートル』をチューニング！霧の満ちたる谷に潜みし蛇竜よ、吹き抜ける突風と共にその姿を現せ！シンクロ召喚！乱舞せよ『ミスト・ウォーム』」

モンスター

『ディサイシブ』

『ミスト』

「『ミスト・ウォーム』の効果発動。このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを3枚まで持ち主の手札に戻す。『希望王ホープ』と伏せカード2枚を手札に戻す」

「（しまった！ホープと筒が！）」

「『インフェルニティ・ガン』を発動。コイツは1ターンに一度、手札の『インフェルニティ』と名のついたモンスターを1体墓地に

送ることができる。だが、俺の手札は0枚。よってもう一つの効果を使う。手札が0枚の場合、このカードを墓地に送る事で、自分の墓地に存在する『インフェルニティ』と名のついたモンスターを2体まで選択して自分フィールド上に特殊召喚する。蘇れ『インフェルニティ・ネクロマンサー』『インフェルニティ・ビートル』」

モンスター

『ディサイシブ』

『ミスト』

『ネクロマンサー』

『ビートル』

「『インフェルニティ・ネクロマンサー』の効果により墓地から『インフェルニティ・デストロイヤー』を特殊召喚。レベル3『インフェルニティ・ネクロマンサー』にレベル2『インフェルニティ・ビートル』をチューニング！海底に眠りし古の竜よ、海を荒らす穢れに制裁を！シンクロ召喚！降臨せよ『海神竜ギシルノドン』」

モンスター

『ディサイシブ』

『ミスト』

『デストロイヤー』

『ギシルノドン』

ハルナは絶望的な絶望のど真ん中に落ちた

「バトル！『インフェルニティ・デストロイヤー』と『アチャチャ

アーチャー』に攻撃」

「甘いよ薫先生！罨発動！『聖なるバリアーミラーフォース』」

「そんな反撃は読んでいる！罨発動！『トラップ・スタン』このターン、このカード以外の罨の効果が無効にする」

「うそお！」

「バトル続行！行け『インフェルニティ・デストロイヤー』」

『インフェルニティ・デストロイヤー』ATK2300

VS

『アチャチャアーチャー』ATK1200

早乙女ハルナ

LP8000↓7100

「『インフェルニティ・デストロイヤー』の効果発動。相手モンスターを戦闘で破壊した場合、相手に1600のダメージを与える」

「えっ！？ちよっ、おまつ！キャアアア」

早乙女ハルナ

LP7500↓LP5900

「フィールドからレベル3以下のモンスターが墓地に送られたことにより、『海神竜ギシルノドン』の攻撃力が3000になる」

ギシルノドン

ATK2300↓ATK3000

「『海神竜ギシルノドン』でダイレクトアタック『ハイドロブラス
ト』」

早乙女ハルナ

LP5900↓LP2900

「続けて『ミスト・ウォーム』の攻撃！『ウォームプレス』」

早乙女ハルナ

LP2900↓LP400

「これで最後だ！『A・O・J ディサイシブアームズ』で攻撃！
『ジャステイス・オブ・ブレイク』」

早乙女ハルナ

LP400↓LP2900

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「ハハハ…。ホープいたのにワンキル…」

「っ、強すぎです…」

「このまま負けっぱなしは悔しいわね。夕映、デッキ調整するわよ！」

「はいです！」

ハルナと夕映はどこかへ行ってしまった

俺は鉄拳でもするか

ラスボスにあと一回勝てばクリアのところで――

「あの忍先生」

タイミングが悪いな

「おや、どうしたんだいネギ少年？」

「親書を届けようと思ったので、忍先生にも来てもらおうと…」

「そ、頑張って」

「えっ！？ 忍先生、来てくれないんですか！」

「んじゃ、ちょっと待て。コイツを叩きのめすから」

ドスッ！ドスッ！ドスッ！

ドバン！

《KO》

「よし、行こうか」

く先生移動中く

「なあ明日菜…」

「なによ」

「どうして付いてくる」

「いいじゃない。別に減るもんじゃないんだしさ」

「ま、そうだな」

結局、俺と明日菜とネギ少年の三人で行くことになった

するとネギ少年に光の玉が浮遊してきて

ポ^ポンッ！

と音を出してちっちゃい刹那になった

「皆さん、大丈夫ですか？」

「刹那さん!？」

「ハイ、私は連絡係の分身です。ちび刹那とお呼び下さい」

「かぁ〜いいいよぉ〜」

「えっ!?!?!」

俺はちび刹那を抱きしめた

「きゃっ／＼／＼」

「?なっ!」

「お持ち帰りいいいい!」

この後、明日菜のハリセンを受けて真面目に関西呪術協会を目指す
ことになった

「この階段長いね」

「そうですね。もうだいたい登った筈ですが…」

「頑張ろ頑張ろ」

「てか…、なんでアンタだけ浮いてんのよ!（怒）」

「コッチの方が楽だし」

俺は石段を頑張って登るネギ少年と明日菜を横目に『博麗霊夢』の『空を飛ぶ程度の能力』で浮きながら移動している

頭の上にちび刹那を乗せながらだ

「にしても、この長さは異常だな」

「こ、これはもしや…」

「どうかしたの？ちび刹那」

「ちょっと先まで様子を見て来ます」

「気を付けるんだぞ」

そう言ってちび刹那は先に進んでいった

それからしばらくして後ろからちび刹那が現れた

「わっ！？後ろから来た！？」

「やはり…これは無限方処むげんほうしよの呪法です！どうやら私達は閉じ込められてしまったようです…」

「「「な……………」」」

「な？」

「「ナンダッテー！」」

俺と明日菜とネギ少年の叫びが重なった

「は、話をしよう…」

「僕たちは関西呪術教会を目指していたら、何時の間にか敵の罠にかかっていた…」

「催眠術とかエンドレスエイトとかそんなちゃっちなもんじゃ断じてねえ。もっと恐ろしいものの鱗片を味わったわ…」

「それはいいとして……………」

ゴクン…

「出れねえエエエエエエエ！ループかよ！CCの桜ちゃん呼んでこいよ！！」

「お、落ち着きなさいよ！」

「無理だから、無理だからね！」

嫌だよ永久ループ

ザウルスさんも吃驚だよ

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

「すまん。落ち着いた」

「そ、それではここから出ましようか」

「そうね。こんな気味の悪い所、さっさと抜けましょ」

『おっと、そうはさせへんで！』

俺達が歩き出すと、黒い髪をのちよつとした不良スタイルの少年が出てきた

『悪いが、ここから先には行かせられへん』

「すみません。どちら様でしょうか？ 私たちはここから出たいのですが、先程の台詞から脱出方法をご存知ですね。宜しければ教えていただけますか？」

「それはな、あそこにあr……って、なに言わせんねん！」

「チッ、惜しかった」

「まあ、ワイに勝てたら考えてやらんでもないがな。よしコイヤ！」

「いやあゝ。何とかして穩便にことを運べませんかね？」

「ん？　なんや、その兄ちゃん？　ビビってんのちゃうか？」

「誰がビビってるって証拠だよ！　コッチが礼儀正しい大人の対応してやってれば、つけあがりやがって！　ネギ少年、ちび刹那を頼む」

俺はちび刹那をネギ少年に渡す

「おっ、やる気になったか兄ちゃん。ほなら行くで！」

「調子にのるなよ…、本気出すぞ！」

――
三人称視点――

「おっ、やる気になったか兄ちゃん。ほなら行くで！」

バツ！

「調子にのるなよ…、本気出すぞ！」

ダン！

不良少年と忍は、お互いを目標に跳び

バキッ！

お互いの頬を殴った

殴られた反動で不良少年は石段に飛ばされたが、殴り合った場所から近いため着地した

それに対して忍は石段の下の方に飛ばされた

だが、『射命丸文』の能力『風を操る程度の能力』で勢いを殺して浮いた

「少年、なかなかいい拳だな」

「そうかい。兄ちゃんもなかなかだぜ」

忍のコレでも手加減している

本当なら『星熊勇儀』の能力『怪力乱神を扱う程度の能力』で不良少年の首と胴体が離れるどころか、見るも無惨な姿になっていただろう

「これならどうや！」

不良少年はどこからともなく

黒い狼を四匹、呼び出し忍に仕掛ける

「数なら数で対抗だ。『百万鬼夜行』」

今度は大小様々な大きさの忍が大量に出現し、狼に飛びかかっていた

その数、約1000000

だが殆どが、ちび刹那と同じかそれより小さいかである

わー

でやー

おりゃー

などと声を挙げ、狼を押し潰していく小さい忍達

不良少年にも遅いかかるが、弾かれて消える

「ハハハハ！なんや、おもしろくないか兄ちゃん」

「駄菓子菓子、序の口だったりするが」

「そうかい、んじゃ本気になって貰おうかつ！」

すると、不良少年の周りの空気が弾けパワーアップした感じになった

「おお！よく分からないが、なんか凄いぞ！」

不良少年の変化に心が躍る忍

パワーアップとか変身とか

男にとっては憧れだから仕方ないだろう

「こちらも少しだけ本気を出そうではないか：魔操『リターンイナニメトネス』」

忍を人形を不良に投げる

どンドン投げる

これでもかと投げる

「へへ、なんや自棄になって人形投げかい」

不良少年は投げられる人形を弾く

弾かれた大量の人形は不良少年の足元に散らばる

「もういい加減にせい！」

痺れを切らした不良少年が投げられている人形を掴み取ると――

ピキーン

「ん？ なっ!？」

ドドドドドドドドガン!

不良少年の持つ人形が爆発し、それに誘爆されるように散らばった人形が爆発する

「だめ押しだ」

忍は爆発で発生した煙の中に人形を投げた

コイツも例に漏れず、爆発を起こす

やがて煙が晴れるとそこには、服がボロボロになり、いたるところに煤のついた不良少年が倒れていた

「くっ…、なんつーパワーや、千草の姉ちゃんから貰った符。全部使こうてもこんな…」

「ほお、今を受けても気絶したしとわな。お前、本能的に長寿タ イプ」

不良少年は人形が爆発する瞬間、人形から手を離して呪符を取り出した。その数、八枚――

それを全て防御に回しても
自身へのダメージは避けきれなかった

倒れている不良少年に忍が近づく

「へへへ…、兄ちゃん、強いな…。約束通り、出方を教えたる…」

不良少年は鳥居を指差す

「あの鳥居の…、裏側の四隅に…、少し窪みがあるんや…、調べて
みい…」

「そうか。ありがとな」

忍は立ち上がり、鳥居に向かおうとするが…

「あ、ちょい待ち…」

「どうした」

不良少年が忍を呼び止める

「兄ちゃん…、名前…、なんつうん？」

「…………忍だ。忍竹薫。お前は」

「犬神、小太郎…、や…」

ガクッ

「そうか」

名前を言うと不良少年――

犬神小太郎は気を失った

「忍先生」

今度はネギ少年と明日菜が来た

「大丈夫でしたか？」

「ああ」

「でさ。あの子は…」

「大丈夫だ。明日菜。ダメージで気絶してるだけだ」

「そう…」

明日菜は小太郎が少し心配みtainな様子

「そんじゃ出始めに、この空間から出ますか」

「そうですね」

その後、忍、ネギ、明日菜の三人は無限方処から脱出した

～三人称視点終了～

「……………」

「どうしたんですか忍先生？」

「おっと！すまない。少し考え事をしていてな」

そう、考えてみればおかしい

相手の狙いは親書と木乃香

親書が欲しければ複数人でかかってくればいい

無限方処だったか

あれは明らかに時間稼ぎする為の――

「ネギ少年！ちび刹那はあるか！」

「あ、はい。ここ」呼びましたか薫先生？」……」

「刹那、今どこにいる」

「えっ！？シネマ村ですが…、それがなにか？」

「そうか。俺が着くまで木乃香の側を離れるなよ」

「それって…」

「いいな！」

「は、はい！」

「ネギ少年、悪いがここからは一人で行ってくれ」

「ちよっ！」

「シネマ村は…、この方角だな。突符『天狗のマクロバースト』」

第四十話／＼Q『AKB48』とは、なんでしょう？

正解はあとがきで（後書

タイトルの答え

『アーカーナイトビート』という遊戯王のデッキ名

デッキを40枚

EXデッキを8枚にしたデッキの略称

みんな

わかったかな？

正解者にはジュースをやろう

第四十一話／シネマ村には、シンケンジャーよりハリケンジャーの方が似合う

シネマ村での木乃香争奪戦？

前回までの三つのあらすじ

一つ、関西呪術協会の総本山に向かう

二つ、犬神小太郎が現れ妨害をする

三つ、小太郎は時間稼ぎだと気づき忍はシネマ村に飛んだ

第四十一話／シネマ村には、シンケンジャーよりハリケンジャーの方が似合う

「俺！参上！…、違うな。俺！見参！」

関西呪術協会入り口からシネマ村の入り口まで『天狗のマクロバースト』で飛んできました

速い速いwww

最速たる由縁が分かりました

待ってろよ刹那

ちび刹那は風圧に耐えきれなくて消えちゃった（残念

ん

やはり、京都に来たら和装をしなくてはいけない気がしてしょうがない

てな訳で…

「すみませ〜ん。衣装貸して頂けませんか〜」

〜先生着替え中〜

「ま、こんなものか…」

今回の衣装は f a t e のアサシン風です

コレがしっくりきたからだ

でも物干し竿はないよ

変わりに長刀『楼観剣』と短刀『白楼剣』の二刀を用意しました
頭には笠かさを被ってます

現在は、木乃香と刹那の搜索をしております

「ったく。いったいどこに居るんだよ」

適当に歩いていたら

前から馬が走ってきた

乗っていたのは

先日見たゴスロリ少女に似ていて、大きめな何かを担いでいた

他人の空似の可能性だってある

実際、チラッて見ただけだから確定はできない

気にせず搜索しますか

（搜索中）

見つからない…

マジ焦るんですけど

すると誰かが走りながら

「決闘だあああ！」とか叫んでいた

野次馬な奴らは見にくるな

ひとまず行ってみるか

カカツ！

人が集まってるな

何かの撮影か？

でもカメラがない…

撮影でもなく

芝居でもないなんて

本当の決闘ですか？

昼間っからスプラッタなんて勘弁してよ

とりあえず止めますか

「あいや待たれよ！」

俺の一声で野次馬が道を開く

橋の上には白いゴスロリ少女が立っていた

「誰ですか。せっかくの楽しみを邪魔するのは」

「それは悪かった。でもな、こんな時間から橋の真ん中に朱え花あ咲かそうとするのはいただけねえなあ」

「これは私闘あらへんで。そちらのお嬢さまを賭けた決闘なんです。どこのお侍さんは分かりまへんけどどいてくれへん？それとも、あんたさんがウチと戦ってくれるんかいな？」

『どなたかは存じませんが、この決闘には巻き込めません。どうかお引き取りを』

後ろを振り向くと刹那がいた

笠で顔を隠しているから気づいていないみたい

「黒髪のお嬢さん。下がりなさい。俺がやろう」

「ですが！」

「まあ落ち着けやせっちゃん。そんなに怒ったら助かるもんも助からねえ」

「えっ！？どうして私の名前を…」

「俺だよ」

俺は笠を少し上げる

「か、薫先シングッ！」

「静かにしろ」

俺は刹那の口を塞ぐ

「ここは一芝居打たせてもらうぞ（ヒソヒソ）」

「分かりました。お願いします（ヒソヒソ）」

立ち上がり、ゴスロリ少女と向き合う

「お嬢さん。この子は俺の妹分だな。傷つける訳には行かないんだよ…。その代わりと言ってはなんだが、俺が相手をしてやろう」

「お侍さんが代わりに戦ってくれるんかいなあゝ」

「そうと言っている。それとお侍さんじゃなくて、忍と呼べや」

「ウチの名前は月詠どすえ。ほな始めましょ忍はん」

――三人称視点――

「お侍さんが代わりに戦ってくれるんかいなあゝ」

「そうと言っている。それとお侍さんじゃなくて、忍と呼べや」

「ウチの名前は月詠どすえ。ほな始めましょ忍はん」

すると、月詠の姿が消え、忍の間近に現れる

ガキン！

「!？」

鉄と鉄がぶつかる音

その音は、忍の『白楼剣』と月詠の刀がぶつかる音

普通の人間ならば、月詠の一手で上半身と下半身がサヨウナラする

月詠は、その一撃が防がれた事に少々驚いて後ろに下がった

「今のを防ぐなんて、忍はんやりますなあゝ」

「なあに、たまたまだよ」

忍はそう言うが実際は違う

『魂魄妖夢』の能力『剣術を扱う程度 of 能力』を発動している。でも、素で動体視力と反射神経は良いので、どの道防げていた

「次いくでえゝ。にとーれんげきざんてつせーん！」月詠は跳び、空中で刀を振るうと三日月の形をした斬撃が忍目掛けて飛んでいく

忍は『楼観剣』で斬撃を弾幕を放ち相殺する

「今のは、少し自信あったんだけどなゝ。ウチ、何だか楽しくなあ

てきもうたわ。忍はん！もつと殺り合いましょか」

月詠はそう言い忍に突っ込み、切りかかる

忍は、あえて『白玉楼』で防ぎ『楼観剣』で反撃する

月詠は下がり、回避しようとするが防がれた剣は短刀、反撃に来る
剣は長刀

つまり、回避する距離が長い

斬り合いは1センチ：

いや、1ミリでさえも致命的になりかねない

回避仕切れない月詠は、左腕を犠牲に『楼観剣』を防ぐ

それにより、月詠の左腕からは鮮血が流れ落ちる

「はああ（ぞくぞく）コレや…。この感じ、溜まらへん。もつとウチを感じさせてえなあ」

一言で済むなら月詠は『狂ってる』…、そう言い表せられるかも知れない

だが、彼女からすれば殺し合いの感覚が快感で堪らない

人間は快感を求める生き物

むしろ生き物は皆、本能で快感を得るために行動している
その中でも人間は理性により、本能を抑えている

月詠は：

月詠の快感は斬り合うことで

この快感が性欲、食欲、睡眠欲よりも勝ってしまう
斬り合う快感：

それを求める獣となってしまうのだ

ガキン！

キンキンキンキン

キンキンキンキンガキン！

既に十数手の打ち合いをした忍は月詠の攻撃の両方の刀で受け止めて
払うのと同時に下がり、距離を放つ

着地した月詠は再び斬り合いをしに突っ込む

忍は「天観剣『六根清浄斬』：」と言うと『楼観剣』を構え消える

忍の姿が消えると月詠の動きが何かに斬られた姿で固まり、五枚の
桜の花びらのようなものに囲まれる

すると忍が急降下し、月詠を橋に叩きつけた

何が起ったのか説明しよう

忍が『六根清浄斬』を発動し『楼観剣』を構えようと、一瞬で月詠に
一太刀いれた

忍が5人に分身して月詠の周囲を回転し、月詠を斬り抜ける

そして、月詠は花びらに固定された

5人の忍は月詠を斬る抜けると跳び、空中で一つになり月詠に急降下して橋に叩きつけた

三人称視点終了

俺は月詠を担ぎ、こう言う

「この者の弔いは自分が行う。よって、コレにて失礼」

シネマ村を出て行く

月詠を少し離れた木陰に寄り掛けさせてシネマ村に戻った

「か、薫先生！月y「薫先生く！」！！」

「グハッ！」

刹那の言葉は遮られた
木乃香の攻撃

俺に238のダメージ

「薫先生く。格好良かったでく（ごろごろ）」

「ちよっ、木乃香…、鳩に頭…、ぐりぐりはマズッ…」

「このちゃん、それ以上は薫先生が危ないです」

「それはあかん！」

俺は木乃香から解放された

「それにしても、せっちゃんも薫先生、お芝居上手かったでー／＼

／

「あ、ああ。学生の際は演劇を少しやっていたからな」

「ほえー。そうなんやー」

「あの…、月詠は…」

「ん？ そうだったな刹那、月詠はシネマ村の外にいる。気絶させたけど、目が覚めるころは夜になってるだろう」

「そうですか」

パンッ！

「そーや！」

木乃香が何か思い付いた様だ

「薫先生。ウチこおへん？」

「木乃香の家か…、確か京都だったな。木乃香を預かってる身とし

ては挨拶しとかなきゃな」

「それじゃ決まりやな！行こ！せっちゃん。薫先生」

そんな訳で急遽、木乃香の家に向かう事になりました

一応、学園長に連絡…
いないか

第四十一話／シネマ村には、シンケンジャーよりハリケンジャーの方が似合う

今週でオーズも最終回か…

改めて考えると

オーズは結構、何かと考えさせられる話が多かったな

ちよつと重要なお知らせ ネタバレもあるよ(前書き)

ちよつとだけお知らせ

ちょっと重要なお知らせ ネタバレもあるよ

皆さん

こんにちはこんばんは

作者の3MXでございます

この度はタイトル通りちよつと重要なお知らせがあります

正直なところお知らせというより今後の展開に関わることです

まず始めに

既にご存知がとられますが

『仮面ライダー○○○』が終了しました

ここまではいいのですが

13人目の平成ライダーこと『仮面ライダーフォーゼ』

その実態は未だ明らかになっておらず映画で登場しているだけです

自分は毎週日曜朝8時はテレビの前に待機し仮面ライダーを見ています

何が言いたいかと申しますと

今後『仮面ライダーフォーゼ』に変身するかしないか！

というもので御座います

それとですね

木乃香のアーティファクトが思いつかない

リア友にも協力してもらいましたが
「やっぱパスしていい？」

オンドルウギツタンデスカ！
ウゾダドンドコードーン！

そう返されちゃったよ

その他の仮契約者

今は、沙代、和美、真名、楓は効果と形状は考えてあります

今後の仮契約者として

木乃香、刹那、アキラ、茶々丸、古菲がいます

木乃香以外は何とかなりました

次に仮契約候補者に

千雨、ザジ、裕奈、亜子、円の5人

個人的に5人とも好きなんだよね

裕奈、亜子、円は恋愛パワーとやらで魔法を知るみたいになりそう…

準仮契約候補者として

ハルナ、夕映、のどか、超、葉加瀬、美空

超救済フラグとのどかの多重仮契約フラグです
のどかは多分

「私：ネギ先生も薫先生も、両方好きになっちゃった…」
みたいなセリフがあったりするかもしれない

葉加瀬が薫と仮契約をすることで最強に見える

その他の方々

委員長、鳴滝姉妹、まき絵、夏美、五月、千鶴、美砂

→この方々は

あれです。魔法とは関わってほしくないからです

ここから、皆さんの要望や話の展開と日常編での好感度などで昇格
や降格があるかもしれません

まとめると

木乃香のアーティファクトを考えて頂きたいのと↑コッチは速めに
締切たぶん9月10日までだと思う

仮契約してほしい人の募集↑こっちは気長に待ってます
学園祭編までには決めたい

今後は修学旅行編終了↓日常編開始↓仮契約者強化訓練↓学園祭編

の流れとなっております

皆さんからの質問も受け付けます

主人公の過去とか

ローゼンメイデン第4ドール蒼星石に会う前の話（番外編の複線が
あったりします）↑作者としては書いてみたい

ちょっと重要なお知らせ ネタバレもあるよ(後書き)

感想は常時受け付けてます

第四十二話／ねえねえ、君ん家ってどんな家…。おい、ちゃんと見えよ！（前妻

木乃香の実家か…

Vスクナは、もう少しで完成かな？

やれやれだぜ…

第四十二話／ねえねえ、君ん家ってどんな家…。おい、ちゃんと覚えよ！

前回のあらすじ

俺はみよんな事から木乃香の実家に行くことになった

あらすじ終了

なんだかんだで来ちゃったけどさ…

「なんでお前らまでいる」

最初は俺と木乃香と刹那で行くはずだったんだけど

「いいじゃない。減るもんじゃないんだしさ」

「そうですよ。私は木乃香のお父さんに興味があるだけですけど」

おわかりだろうか

ハルナと夕映がついてきている

あれ？

この会話、前にもあったような…

この際だ

突っ込むのはもうやめよう

何かあったら困るし沙代と和美を呼んどくか

俺はこっそりタカカンを起動させて飛ばす

「（頼んだよ。タカちゃん）」

「（△△△△）」

「そんじゃ、行きますか」

「因みに」

「沙代と和美は直ぐに来た」

「団体移動中」

「この石段、長いねえ」

「いったい何段あるんですか？」

「皆さん。もう少しで着きますから、頑張ってください」

「ハハハ」

「俺は小太郎と戦った石段を登っている」

「関西呪術協会の総本山って」

「木乃香の家だったりする予感」

「登っていたらネギ少年と明日菜にであつた」

「あれ刹那さん？って、何でこんなにいるの！」

「あ、はい。実は――」

明日菜の質問に刹那が説明しついると、和美が…

「あ、見て見て。あれってが入り口じゃない？」

「おおー！何か、雰囲気ある！」

長い石段の先に巨大な建築物の屋根がちよこつと見えた

ダンジョンでいう魔王の城

日本だから…

メンド、魔王の城でいいか

とにかく怪しい雰囲気醸し出している

「それじゃ、レッツゴー！」

「あー！ちよつ、おまつ！」

ハルナの一言で俺とネギ少年、明日菜と沙代を除く6人が入っていく

明日菜は止めようとしたが
全く効果がない

諦めも肝心だぞ

俺も建物の中に入ると

『お帰りなさいませ、このかお嬢様ー』

たくさんの巫女が木乃香の帰りを迎えていた

脇は開いていない

選り取り見取りの巫女さん達が木乃香や俺、他の奴にと挨拶をする

やっぱりここって木乃香の家なんだな

デカいなあ…

「では本堂へご案内いたしますので、あちらの者について行ってください」

挨拶が終わると、巫女さんの内の一人が案内役をしてくれるようだ

案内役の巫女はそのまま軽く会釈すると、「ゆっくりして行ってね」と言い歩き始める

俺らは巫女さんの後について行きだけの簡単な事をするだけ

こうして案内された本堂はかなり大きかった

凄く大きかった

凄く…、大きいです

壁伝いには巫女さんが正座で座っており

中には琴などの楽器を演奏している者、矢を装備した護衛、レッツ

ゴーな陰陽師ような者などがいた

みんな緊張しているみたいで
背筋がピシヤツとしている

もつとリラックスしようぜ

それから間もなく、奥から誰かが近づいてくる音がした

そして、姿を現した人物は眼鏡をかけ、神主の格好（ZUNさんじゃないよ）に少しやつれた顔の男性だった

「お待たせしました。ようこそ明日菜君。木乃香のクラスメイトの皆さん。そしてネギ先生。私が関西呪術協会会長の木乃香詠春です」

「お父様、久しぶりやー」

「ははは、これこれ」

木乃香に抱きつかれる男

木乃香のお父さんだろ

「へー、木乃香ってこんな御屋敷に住んでたんだー」

「うんうん。それにしても、こんなに大きな御屋敷に住んでる割には普通の人だよねー」

和美とハルナは感想を述べているがスルー

ネギ少年が詠春さんに近づき親書を出す

「あ、あの長さん。これを…、東の長、魔帆良学園学園長、近衛近右衛門から西の長への親書です。お受け取りください」

詠春さんは親書を受け取る

これでネギ少年の仕事が一つ終わった

「確かに承りました、ネギ先生。大変だったようですね」

「い、いえ…」

詠春さんは静かに親書を読m

ブリッ！

！？

親書破いちゃったよ！

「お父様。ど、どうしたんや…」

「——ってのは」

「えっ！」「忍ってのはどいつだあああああ！」

自分ですか！？

自分をご指名ですか！？

何故に！

「貴様かああああ！」

「バックステッポオ！」

詠春さんはいきなり俺に襲いかかってがバックステッポオで回避

「なんすっかいきなり！」

「貴様なんかに、木乃香は…、木乃香は…、やらんぞおおおおお！！」

詠春さんは巫女や護衛の人に抑えつけられて静まった

「いや、先ほどはお見苦しいところを見せてしまい。申し訳ございません。忍先生、本当に申し訳ございませんでした！」

「いやいや、そんな謝らなくても、何があったのですか？」

「コレです」

詠春さんに破いた親書の後半部分を渡された

「えーと…。『婿殿よ。もう一つ大事な話がある。実は木乃香の婚約者を忍竹薫君にしようと思う。木乃香は忍君が相手ならいいと言っておる。では頑張るのじゃぞ 関東魔術協会会長・魔帆良学園

学園長・近衛近右衛門』……」

俺は携帯を取り出し学園長に電話をする

トゥルルルル
トゥルルルル

『はい』

「薫です。学園長」

『ほお、忍君ではないか。なにかあったのかの?』

「今晚、木乃香の実家に泊まることになりそうなので連絡を」

『うむ。では儂から連絡を入れておこう』

「ありがとうございます。あともう一つ」

『なんじゃ?』

「廃線『ぶらり廃駅下車の旅』」

『それはいいんほぎゃあああ!』

プーン

携帯から電車の通った音が聞こえたので通話を止める

コレで悪は滅んだ

「そうです皆さん。今から山を降りられると日が暮れてしまいます。君達も今日は止まって行くといいでしょう。歓迎の宴をご用意させていただきます」

「えっ、やったー♪」

「ラッキー！」

「あんた達はついてきただけでしょ…」

木乃香父の提案に、ハルナと朝倉は盛り上がる

「あっ、でも僕たち修学旅行中だから帰らないと…」

「ネギ少年よ。そこは大丈夫だ。学園長を通して連絡は行ってるからな」

そして、俺たちは歓迎の宴に参加した

キングクリムゾン！

ふう〜。食ったわ

俺は本山の廊下をひたすら歩いている

特に理由はない

仕事、恋愛、全てにおいて理由！意味がないといけなと思うってんじゃないですか！？

そんな訳ねえじゃん！

俺は適当に襖を開けた

そこにあつた物に俺は驚愕してしまった

「なんだよ…、コレ…」

そこには、巫女さんの形をした大量の石像が置かれていた

全てが何らかの恐怖から逃げるような形をして…

第四十二話／ねえねえ、君ん家ってどんな家…。おい、ちゃんと言えよ！（後妻

【予告】

ついに時は放たれたリヨウメンスクナ：

石にされてく人々：

暴走する忍：

次回！

伝説と暴走と最強フォーム

但し、タイトルは変更される場合があります

第四十三話／頂上決戦！小さな600歳VS幻想の仮面先生VS顔面2つ（前編）

ストックが出来るまで我慢できねえ！

ヒッハー投稿だあ！

それにしても、今回もひでえできだ！

もうどうにでもなれだあ

E・N・D様が『遊戯王5Ds—現在の誓い^{いま}』でコラボさせていた
だきました

どうな話かは→で

第四十三話／頂上決戦！小さな600歳VS幻想の仮面先生VS顔面2つ

「なんだよ…、コレ…」

俺が適当に開けた襖には
大量の石像があった

そして一つ、至ってはいけない事実直面してしまった

「はっ！まさか、この石像は詠春さんの趣味で作られた物なのか！」

だとすればヤバイ

見つけたら確実に死ねる
見なかった事にしよう

俺は何も見えない
何も開いてない
石像なんて知らない

にしても静かすぎる…

アイツ等がこんなにも静かな筈がない

なんか嫌な予感がある

『か…、薫先生ー！』

沙代が物凄い勢いで走ってきた

「どうした？そんなに急いで」

「そっそれが――」

――

（回想）

「美味しかったね」

「そうですね」

私は宴の後、皆さんとお話していました

するといきなり、白い髪の男の子が来て

「悪いけど、その子。貰うよ」

どういうこと？

今度は、木乃香さんの周りを警備の人が囲い込んで守った

「邪魔だね。『石の息吹き』」

白い髪の人は煙を警備の人噴きかける

その煙に触れた警備の人が石になっちゃった

煙は私達のところまで来ていた

ここで逃げたら後ろのみんなが：

「来れ！（アディアット！）」

私はみんなを守るために使ったのですが

「キャアアアア！」

「ハルナーー！」

（回想終了）

「それで煙が晴れたらハルナさん石にされてて、木乃香さんが浚われて、刹那さんと明日菜さんとネギ先生が追って——」

「和美は！」

「朝倉さんは無事です」

「良かった…」

『沙代ちゃん！運び終わったよ』

次に和美が来た

「ありがとうございます」

「和美。話は沙代から聞いた。俺は木乃香を助けに行く」

「それじゃ、私も――」

「構わないが、2人共…、一ついいか」

「はい」

「今回の件は死ぬかも知れないぞ。それでもいいのか？」

俺の問いに和美は少し考えたが、俺の目を見て

「はい」

そう答えた

「私も行きます！」

やれやれ…

「負けたよ。それじゃ、行こうぜ…、と言う前に少しでも戦力を増やしてくか」

俺は楓と真名のカードを出す…

『その必要はないよ。薫先生』

『同じく』

何処からか真名と楓が現れた

「いたんなら最初から出てこいよ」

「コッチも大変だったんでね」

「そうかい。後これ、2人のカード無くすなよ」

真名と楓に仮契約カードを渡す

「んじゃ、みんな行くぞ！」

俺たちは木乃香の救出に向かう

（三人称視点）

忍達が木乃香救出に向かって5分、刹那と千草と戦っていた

明日菜とネギ少年は前鬼と後鬼を相手にしている

「千草！このちゃんを返せ！」

「それはできない相談ですよ。お嬢様には少し協力してもらわんといけない」

千草は木乃香のところに跳び

呪文を唱える

すると、大量の鬼が姿を出現する

その数、約2000

「このタイミングでこんなに出されたら…」

流石にこの数じゃどうしようもできない

刹那は諦めたくない故
奇跡を願ってしまった

誰かが助けに来てくれることを…

『それほどでもない』

「!？」

刹那の願いは叶った

この世界における主人公によって…

～三人称視点終了～

俺は最速の速さで木乃香のどこに向かった

すると明日菜に刹那、ネギ少年と千草って奴と戦っていた

するといきなり、鬼が大量発生した

バーゲンですか？なんて言いたく数だった

『このタイミングでこんなに出されたら…』

刹那が挫けそう

俺はいつの間にか飛び出して

「それほどでもない」

と言っていた

「薫先生。どうしてここに…」

「おれは通りすがりの普通にいる教師なのだが、E・i春のお誘いで総本山にて一番風呂にINして木乃香の救出に遅れていたのだが、『はやくきてゝはやくきてゝ』と泣き叫んでいる生徒のために俺はとんずらを使って普通ならまだ付かない時間できょうきよ参戦すると―『きた!』『教師した!』『メイン教師きた!』『これで勝つる!』と大歓迎状態だった。ネギ少年はアワレにも教師の役割を果たせず死んでいた」

「まだ死んでませんよ!」

「そんな事はどうでもいい。まずは木乃香の救出が優勢だろうが!」

俺が話をしていると鬼が襲ってきた

会話中の攻撃は控えるべき
死にたくなければそうするべき

「兄貴！ひとまず障壁を！！」

「うん！ラス・テル・マ・スキル・マギステル…逆巻け春の嵐、我らに風に加護を…『風花旋風風障壁』！！」

ブワッ！

『ろっと！』

『これじゃ手が出せに…』

ネギはカモの指示で俺達の周囲に障壁を張った

「この障壁は2、3分しか保ちません！今の内に作戦を！」

「作戦と言っても…、俺がアイツ等をやればいいと思う。一般論で」

「皆さん、私がここに残ります。その内にお嬢様を追って下さい」

「刹那さん！？一人じゃさすがにキツイですよ！」

「それじゃあ私も一緒に残る！」

「確か、明日菜のアーティファクトは退魔効果がみたいのがあるっぽいから。鬼どもには有効だと思うがどこもおかしくはない。そんなじゃ余りの俺とネギ少年で木乃香さんを追うことになったな」

「わかりました、ではこの障壁を解くと同時に強行突破します!」

方針も決まり

ネギ少年が障壁を解除しようとしたが：

「ちよ／＼と待ったあ!!」

「えっ、どうしたのカモくん？」

「この作戦をより確実に遂行する手段を閃いたんだZE!」

「ほあ…、言ってみろよ」

「それはな…フッフッフ…」

「早く言わないと裏世界でひっそりと幕を閉じることになるぞ」

カモは俺の脅しに耐えきれず話し出した

「俺らには手札が多ければ多いほど良い!そこで刹那の姉さんが兄貴か忍の旦那と仮契約すりゃあ、戦力増強で作戦成功率もうP!っう訳よ!」

「なんですと!」

「そ、そそ、そんないきなり…、私と薫先生がキ、キス…、だなんて／＼／」

「ははあ／＼。つまり相手は忍の旦那が良いんだな? (チラッ」

「おい…」

「し、しまったぁ!! 粉バナナ!」

自ら墓穴を掘った刹那

「さぁ2人とも! 時間が無いぜ、さっそくぶちゅーと」

「ぶちのめすぞカモ」

「ごめんなさい。仮契約して下しあ。お願いします」

カモは本能的に謝っている

俺と刹那の周りに魔法陣が浮かび上がり淡い光を放つ

「よ、よろひくお願いひまふ…／＼／」

「刹那、本当にいいのか」

「はひっ! にゃにがれすか?」

「ほら、俺さ。仮契約はしたことあるけど…、全員、俺のことが好きって言ってくれたしさ…。好きじゃない相手とはキスしたくないでしょ」

「そんな!?! ち、違います!! / / / 私は薫先生のことか!」

「んっ!?!」

俺は刹那にキスされた

………

………

………

くちやつ……

俺と刹那は唇が離れる

実際には僅かだが、俺には永遠のように感じた

「私は……薫先生のこと大好きです／＼／」

「あ……、ありがとう／＼／」

「そろそろ風が止みます！忍先生！行きますよ！」

「わかった」

俺はタカメダルとチーターメダルを緑のメダルに入れ替える

一方刹那は……

「わ、私……、ついに言ってしまった……／＼／その上、キ、キキ、キ
スまでして／＼／私は、私は！」

刹那……

そんな状態で大丈夫か？

気にせずメダルをスキャンする

ティン ティン ティン

「クワガタ！カマキリ！バッタ！ ガータガタガタガタキリバ！ガタキリバ！」

「ウオオオオオ！」

「風が止むと同時に仕掛けます！『ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！来れ雷精風の精！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐』！」

ネギ少年が呪文詠唱を初めると、風が弱まり障壁が消える

俺は障壁が消えると同時に走り出す

すると、俺が50人になった

コレがガタキリバコンボの能力分裂

「かかれえええ！」

『ウオオオオオ！』

「『雷の暴風』！！！」

「何！西洋魔術師か！！！」

ネギ少年魔法により、周囲を囲んでいた鬼が纏めて消える

「スキャンニングチャージ！」

俺は一斉にメダルをスキャンして、鬼に『ガタキリバキック』を決める

それにより、広い道が作られる

ネギ少年は杖に跨り、最高速度で抜ける

「急ぐぞネギ少年！」

「ハイ！」

俺とネギ少年は木乃香を追いかける

「む？こいつは…、ネギ少年！後ろから何か来るぞ」

「えっ？」

振り返ると、無数の黒い犬がこちらへ襲いかかって来るのが見えた

「確かあれって…」

「あれは狗神！？日本の使い魔の一種だ！」

「と、とにかく逃げて下さい！！」

全力で飛ぶネギ少年、だが差はどんどん詰められていく…

「このままじゃ、追いつかれちゃいますよ！？」

「俺がやる」

バチバチバチバチ

俺はカマキリヘッドから電撃を放ち、狼を撃墜する

「小太郎、いるんだろ！狗神なんか捨てて掛かってこい！！」

『やっぱり強いな。忍の兄ちゃん』

「それほどでもない（キリッ）」

小太郎は俺を褒めるが

謙虚に答えた

「それじゃ、リベンジさせてもらうで」

駄目だな小太郎

本当に強い奴は口で説明するより先に手がでるな

俺はパンチングマシンで100とか普通にだすし

「悪いけど君の相手をするほど暇じゃないんだ。代わりに相手をし

てくれる人がいればいいんだがな…」

『その心配はいらぬでござるよ』

楓が俺に追いついた

「おや、後の三人はどうした？」

「皆、リーダーと刹那殿に協力してるでござる」

「そうか。んじゃ、ここは任せたぞ」

「任されたでござる」

「それではお願いします」

俺とネギ少年は再び動き出すが、小太郎はそれを許さない

「おっと！行かせへんで！」

「ちっ、楓！」

楓は小太郎の足下に手裏剣を投げて一瞬、動きを止めさせた

その隙に俺らは木乃香のもとに向かった

次に現れたのは

白髪的青年に見える女性

初日の夜に会った彼女

「この人…、長さんが言ってた白髪の少年!？」

「僕の名前はフェイト・アーウェルックス。以後お見知り置きを、ネギ・スプリングフィールド君と…、あ、あなたは／／／」

白髪の女性↓フェイトは俺を見るや顔を赤くする

「俺か？俺は忍竹薫」

「フェイト・アーウェルックス…、です／／／」

「よろしくなフェイト」

「ふあい！（呼び捨てにされちゃった…、は、恥ずかしい／／／）」

「聞きたいことがあるんだけど、いいか？」

「なんでしょうか？」

「本山にいた人、フェイトが石にしたの？」

「……………はい」

「どうやったら、元に戻るか教えてくれない？」

「えっですね。時間が経てば戻るようにしてます／＼／」

「そうだったか。よかった」

「それじゃ、私…、失礼します／＼／」

フェイトは何か恥ずかしそうに水の中に入って消えてしまった…

「忍先生…、先に行きましょう」

「あ、うん」

カッ！

「「！？」」

俺達が動きだそうとした時

それなりに近いところから強烈な光を放つ巨大な柱が空を突き抜ける

光が収まるとそこには——二つの顔と、四つの手足を持つ巨大な鬼がいた

「なんじゃなりや？」

次に千草が近づいてきた

「どうです。これはリョウメンスクナといって、彼の有名な『千の

呪文の男』が封印した鬼神や。この力があれば関西…、いや、関東も支配できる力が——「おい、女…」！？」

千草に話かけてきたのはリョウメンスクナ

「我を完全復活させたのには礼をいう。しかし、貴様のような者に手を——！」

リョウメンスクナはネギ少年を見つけるや、拳を引き

「千の呪文の男！」

振り下ろした

「なにしとるんや！そんなガキほっぽってさっさと関西呪術協会を潰さんか！！」

「女…、誰に口を聞いている…」

「ウチはあんたの封印を解いた。だからあんたはウチの命令に従う義務が——」

リョウメンスクナは千草を掴む。手に胸から下が手の中に入ってる形で…

「な、何をする。離さんか」

「貴様如きが我に命令できると思ったか」

ゴキゴキゴキガキ

「ガッ！」

リョウメンスクナは手を開く

千草は重力に従い地面に落下する

「ヤベッ！」

俺は足をチーターにして、地面に落ちる前に千草の落下地点に向かい、受け止める

「召喚！忍竹薫の従者『マナ・アルカナ』」

「呼んだかな先生」

「真名。コイツを総本山に連れて行って治療させやってくれ」

「いいのか？」

「救える命は救わなきゃ」

「フッ、わかった」

真名は千草を背負い、総本山に向かった

リョウメンスクナは木乃香を摘み手のひらに乗せた

「木乃香！」

「木乃香さん！」

「この小娘…、これほど強大な魔力を持っているとは」

リヨウメンスクナが地面を撫でると鬼がわき出てくる

それは最低でもって、体長2メートルはある

さらにリヨウメンスクナは木乃香を体内に吸収した

この時、俺の怒りは有頂天どころか天元突破した！

「デメエ…、木乃香をどうする気だ…」

「安心しろ。小娘には何もしない…。ただ我が体内で魔力を全て絞り出してもらうだけだ…」

今、何だった…

木乃香の魔力を全て絞り出しすだあ？

そんなことしたら木乃香は…

助ける？

無理だ。リヨウメンスクナの体内にいる

じゃ…、なんでここにいます？

木乃香を助ける為に…

助けられないでしょ？

そうだな…

それじゃ、俺は何の為に力を手にしたの？

……………

誰も救えない

生徒一人として救えない

それなら全部——

——壊してやる

三人称視点

リョウメンスクナが木乃香を取り込むと、忍の変身が解け顔を俯かせる

顔を上げたと思ったら
何かが違う

目が紫色になっていて
忍の体から3枚の紫色のメダルが飛び出し、勝手にオーズドライブ
ーに入って傾く

今度はオースキャナーが独りでに宙を浮きメダルをスキャンした

ティン ティン ティン

「プテラ！トリケラ！ティラノ！ プ・ト・テラーノザウルス！」

忍が変身すると周りにいた鬼は氷漬けになる

「■■■■■■ーーー！」

この世の声とは思えない叫びを上げる忍…

その姿は、紫の装甲状の外骨格が覆い
今まで使ってきたどのコンボよりも、攻撃力、防御力共に高い

そして、プトティラコンボの能力は冷氣

忍は背中の中を巨大化させ一度だけ羽ばたくと、その衝撃で氷漬け
になった鬼は砕ける

残った鬼に走り出す忍

相手の数は100を軽く超えている

しかしそれを、払いのけるように次々と風払っていく

半分くらい減らすと、忍はオースキャナーで再びメダルをスキャン
する

ティン ティン ティン

「スキャンニングチャージ！」

忍の両肩に付いている角のような物が伸び、前方の鬼に突き刺さる
羽を広げ前方に冷氣をとばす

角の突き刺さった鬼とその周りにいた鬼は氷漬けになる

忍は巨大な尻尾を出現させ、周囲の木や、凍ってない鬼をなぎ倒し
ながら氷漬けを鬼を粉碎した

この攻撃でリョウメンスクナの出現させた鬼は全滅

忍は地面に手をつ込み何かを取り出した

それはティラノザウルスの頭を模した斧

またの名を『メダガブリュー』

忍はセルメダルを投入して、メダガブリューの口を閉じる

「ゴックン！」

持ち手をリョウメンスクナに銃を撃つように構え、引き金を引く

「プットッテラーノヒツサーツ！」

メダガブリューの銃口に黒い渦ができ、ブラックホールのような物になり光線のように発射される

メダガブリューから出た、黒い光線はリョウメンスクナの右肩を消滅させた

「グッ！グアアアアアアアアア！」

忍は空を飛び、リョウメンスクナの腹に突っ込み貫いた

腹を貫いた衝撃で木乃香が飛び出す

ここで変身が解け、落下する

三人称視点終了

……やあ

……まあそういうな

……アイツもよくやってくれてるじゃないか

……そうだな。後は目覚めるのを待つだけ

……君の話は断れないよ。神は絶対だからね

……また何かあったら連絡するよ

俺は声が聞こえたので目を開けると、黒い服を肌の上に着て、ジーンズを履き、片手に携帯のような物を持った男性がいた

「やあ」

「……………」

「そんな顔をするな」

「生まれつきこの顔なんだが……」

「ろっと！それはすまなかった」

なんか凄いユーモアが溢れている人だな

「実はウリエルに頼まれてね。君を助けるようにって」

パチン！

男性が指パッチンをする、俺の体を白い光が包み込む

「心配するな。それは君に力を与える聖なる光だ」

「みんなはどうなったか分かるか？」

「みんな…？ああ、お前の近くにいた奴らか。大丈夫だ。最も君が一番重傷だけだな」「そうか…」

そんな話をしていると、体を包み込んでいた光が消える

「これでいいだろう。さっ、お前は自分の居場所に戻るんだ。じゃ、行こうか…」

「力って何の力だ？」

「いずれ分かるさ」

カッ！

男性が再び指パッチンをする、俺の視界はブラックアウトした

三人称視点

リョウメンスクナが復活し、忍がプトティラコンボを使った時――

刹那と明日菜は

援護に来た、相坂沙代・朝倉和美・龍宮真名、真名が呼んだ古菲と共に鬼を倒していた

「クッ…、数が多い。それに伝説の鬼神までも」

「刹那、ここは私たちに任せて先に行け」

「しかし沙代さん！」

「刹那さん。行って！」

「明日菜さん…、わかりました。頼みましたよ」

刹那は白い羽を広げて飛んだ

すると一筋の黒い光線がリョウメンスクナの右肩を消し、小さな紫色の物が腹を貫いた

刹那は一気に加速してリョウメンスクナのところに向かった

「このちゃん！薫先生！」

地面に向かって落下する木乃香と忍を受けて止めて地面に降りる

「ん…、あれ？せつちゃん？」

「このちゃん…、よかった」

涙を浮かべながら刹那は木乃香を抱きしめる

「そうや！せつちゃん、薫先生は！？」

「その…、薫先生は…」

刹那は地面に目をやる

そこには、まるで死んだように意識を失っている忍がいた

『刹那さん』

刹那と木乃香にネギ少年が近づいてきた

「どうしましたかネギ先生？」

「少し、時間を稼いだけただけませんか？」

「なにか良い考えでも…」

「どうやらエヴァさんが来てくれるみたいで」

「わかりました。やりましょう」

刹那とネギ少年はリヨウメンスクナに向かった

『木乃香の嬢ちゃん』

カモが現れた

「なんや」

「正直に言って。アニキと刹那の嬢ちゃんじゃ戦力が違いすぎて、時間稼ぎにはならねえ」

「それじゃ、どうすればええんか!？」

「忍の旦那に手伝ってもらう」

「でも、薫先生は…」

「忍の旦那は見たところ、外傷はねえ。たぶん精神がやられてんだろ。そこで、木乃香の嬢ちゃんが忍の旦那と仮契約すれば、忍の旦那は目を覚ます筈だぜ」

「……ほな、仮契約する」

「がってんだい」

カモは忍の周りに仮契約の陣を書く

「木乃香の嬢ちゃん、こん中に入ってください」

魔法陣の中に入る木乃香

「そしたらキスしてください」

「キ、キスってそんな／＼／＼」

流石にいきなり言われたら誰だって驚くよな

「ウチ、キスするで」

――チュッ

魔法陣は光り

忍が描かれているカードが出現する

「……………木乃香」

仮契約を済ませると忍が目覚めた

「薫…、先生」

「ああ…」

「うえええええん（泣）」

急に木乃香は泣き出し
忍に抱きついた

「…………グスッ…、心配したんよ」

「ごめん」

『グオオオオオオオ！』

「「!？」」

右肩を消され

腹を貫かれたリョウメンスクナは、完全な姿に戻り叫んだ

『この小童が…、いい気になるなよ…』

「行かなきゃ…」

「駄目や！」

忍は起き上がるが木乃香が止めに入る

「戦わんというて！薫先生が傷つくの…、もう、見たくないんや…」

忍は木乃香の頭を撫でる

「木乃香。先生ってのはな、どんなことがあっても生徒を守らなきゃいけないんだよ。だから——んっ！」

木乃香は忍にキスをして

言葉を遮らせる

「コレは、前払いや。絶対、無事に帰ってきてな」

「ああ」

三人称視点終了

さてと…

やりますか

「鬼符『ミッシングパワー』」

俺は巨大化する

サイズはリョウメンスクナと同じくらいの大きさ

拳をひいて

ゴキッ！

ズダァァン！

ひとまずリョウメンスクナの右の顔をグーパンして、殴り倒す

バゴン！

次に左の顔を蹴り上げて、再び地面に殴りつける

一方…

地面にいるネギ少年や、刹那、木乃香は…

「先生…。おっきくなつとる…」

「こんな戦い、めちゃくちゃです」

「すごい…」

上から木乃香、刹那、ネギ少年がそれぞれ別の感想を持っていた

再び忍に戻る

流石は完全復活した鬼神

簡単には倒れてくれないか

だが、そろそろ終わりにしないとな

俺が大きく振りかぶると

リョウメンスクナも振りかぶる

おもしろー
力比べだ

俺とリョウメンスクナは同時に殴り

ズドン！

クロスカウンターのようになって、お互いに倒れた

そこでミッシングパワーが切れ、元の大きさに戻った

「痛ってえなあ！」

『情けないなあ薫よ！』

「その声は…、エヴァ」

エヴァが茶々丸を連れて参戦してきた

「ふっ、これがリョウメンスクナか…。どれ、少し相手をしようじゃないか…」

エヴァは詠唱を始める

「契約に従い我に従え、氷の女王！来れとこしえのやみ！『えいえんのひょうが』！！」

リョウメンスクナは氷漬けになり、動きを封じられる

「たわいもないな…。これで終わりだ！全ての命ある者に等しき死を――」

ピシッ！

エヴァが再び詠唱をすると、リョウメンスクナを閉じこめている氷に亀裂が走る

「其は安らぎの――！？」

バリン！

『どうした…。この程度か…』

バキッ！

リョウメンスクナは氷から抜け出して、エヴァを殴った

てか、コッチに飛んできてヘブラッ！

「おい！薫！ちゃんと受け止めろ！」

「馬鹿言っちゃいけねえ！というか攻撃効いてねえだろ」

「むっ…」

「まあいい。今はリョウメンスクナをどうにかする事が先だ」

「……………」

「……………」

「……………エヴァ、おもえ、いま想像を絶する最悪なことを思いついたのではないか？」

「薫もか。言ってみろ」

「おうk、同時に言うべ」

エ「真祖の吸血鬼の私に、貧弱な教師の攻撃を重ねて強引に奴を倒す」

俺「最強の教師の攻撃に雑魚吸血鬼の攻撃を重ねて強引に奴をぶちのめす」

「おいィ？ よりにもよって吸血鬼の足元にも及ばない人間が雑魚呼ばわりすることで、私の攻撃がそっちに向かうんだが？」

「ああ、同感だな。封印された合法ロリが。このままだと俺の堪忍袋の緒が有頂天なんだが？」

「……………（怒）」

「やってる場合じゃありませんよ！！ なんとかできるならなんでもいいですから、お願いします！！」

「たすかに、ネギ少年の言う通りだな。ここで一步引くのが大人の醍醐味。今は言い争っている暇はぬえ。目の前の敵に集中するべき。それと色々言って悪かった」

「私も言い過ぎたところがあったな。悪い」

俺の頭に声が響く

（レティホワイト、風見幽香、鍵山雛、ルーミアの封印が解けられました。複合スペルを獲得）

レティか…

ちようどいい

「ハマするんじゃないぞ、エヴァ」

「薰こそな」

「魔法の射手・氷の52矢！／雪符『ダイヤモンドブリザード』」

エヴァの魔法の射手は俺の放った暴風雪により、威力とスピードが増すがダメージは少ないみた

両腕でガードされた

「コレじゃ駄目だな。エヴァ！もう一発『えいえんのひょうが』で頼むわ」

「ああ」

エヴァは魔法の詠唱

俺はスペルを複合させる

「『契約に従い我に従え／複合スペル』」

「「氷の女王！来れとこしえのやみ！／凍符『パーフェクトフリーズ』冬符『フラワーウィザラウェイ』」」

「「『えいえんのひょうが！！』／凍結『エターナルアイスエイジ！！！！』」」

リョウメンスクナは『えいえんのひょうが』と『エターナルアイスエイジ』をうけ、完全に氷漬けになった

リョウメンスクナが閉じ込められている氷は、まるで花のような造形をしており

一つの芸術となっていた

「全ての命ある者に等しき死を其は安らぎの地『おわるせかい』」

「凍符『マイナスK』」

氷に亀裂が走る

そして…

パリン

リョウメンスクナと共に碎け散った…

第四十三話／頂上決戦！小さな600歳V S 幻想の仮面先生V S 顔面2つ（後妻

クソ

後日談が出来あがらぬえ

このままだと俺の寿命がストレスでマツハだぜ…

なんかかんだでボツになった裏話に俺！参上！（前書き）

ちよつとした休憩ついでの息抜きに書きましたがどうぞ

なんかかんだでボツになった裏話に俺！参上！

3MX 「画面の向こうのみんな！こーんにちわー！」

忍「何やってんだ」

3MX 「挨拶に決まってるだろ」

忍「てかまたやるのか？この裏話。前は後書きでやんなかったっけ？」

3MX 「覚えてないよ」

忍「ハァ。サイキンダラシネエナ」

3MX 「新日暮里！ホイホイチャーハン！」

忍「流石だな」

3MX 「それ程でもない。じゃ始めるか」

忍「おー^^」

3MX 「今回、最初に公開するボツシーンはこちら」

「これ、どうしたん？ウチもほしーな」

「そうだな…、機会があれば」

「今じゃ駄目なん？」

「今はな」

3MX「第三十四話のワンシーン」

忍「トランプをきってたら沙代と和美のカードが落ちたところだな」

3MX「こっちがボツになったシーン」

「これ、どうしたん？ウチもほしーなー」

「そうか。だったら今すぐ作るか？」

「ホンマに！ヤッター！」

「それじゃ、キスするか」

「ほえ？」

「木乃香…」

「だ、ダメや薫先生／＼みんな見てっん！？／＼／」

3MX 「てな具合で木乃香と仮契約する」

忍 「知らなかった」

3MX 「あたりまえだろ。それから第三十四話には、もう一カ所ボツになったシーンがあるんだよ」

アナ 『京都、京都で御座います。お忘れ物御座いませんよう。お願い致します』

「よし。京都だ！全員、乗り込めー」

『『『おー^^』』』

忍 「これって最後のところだろ。なんでボツがでたんだ」

3MX 「やっぱり東方有頂天系列の動画を見てるブロンティストとしては『乗り込めー』じゃなくて『みのりこめー』にしたかったんだよ」

忍 「どっちでも同じでしょ」

3MX 「それに東方有頂天を支えてきた『東方陰陽鉄』が完結しちゃってさ。あの時は深い悲しみに包まれたな」

忍「最近では日常生活でもブロ語が出てしまうくらいブロ語を使ってるらしいじゃか」

3MX「ど、どうやって俺が日常的にブロ語を使っているって証拠だよ！そんなことがあったらちよとそれsyれにならんしょ…」

忍「そうですか。確かに洒落になりませんね。ブロ語ありがとうございます」

3MX「それ程でもない」

忍「……………」

3MX「チクショウ…お前はバカだ…」

忍「次は俺が紹介する。え〜と…」

カンペ

（第三十六話）

忍「第三十六話のこのシーンだ」

「どうして補習なんだろう？」

「刹那、今は教師の時間だぞ。いくら混浴だからといって入浴中を襲うのはちよとね」

「か、薫先生にネギ少年／＼／／／」

「刹那がその気なら、俺はいつでもWelcomeだったりする」

「いや、確かに薫先生とは結ばれたと思ってますが、そのような事はキチンとお付き合いをしてからにしてからで／＼／」

忍「おいイイイイイ！寄りにもここかよ！マジでふざけんなよ！」

3MX「そ、そしてコレがボツになったシーンだ」

「どうして補習なんだろう？」

「やべ、隠れな「誰だ！」（ビクッ）」

「そこだな斬岩剣！」

「待て刹那！俺だ！」

「えっ！？」

ニギニギ

「あわわ、ゴメンナサイ！」

「刹那…」

「わっ！」

「逃がさないよ」

「か、薫先生／＼／＼離れてく、ください」

ピト

「ひゃう！な、何か硬いものが当たって」

「刹那が悪いんだからな。責任、取ってもらうぞ」

「ん！？んんん！ん……」

――

忍「アウトオオオオ！」

3MX「いきなりどうした！持病か」

忍「何だよこの展開！大人の階段登ったよね！」

刹「そうですよ！第一、薫先生とそんな事したら……／＼／＼」

忍「うおい！刹那、いつの間に」

刹「ああ！ダメです！そんなところ……舐めちゃ／＼／＼」

忍「おーい刹那ー」

刹「先生…私、初めてなので優しくして下さい／＼／」

忍「これ以上はマズい！スタッフ！スタッフ！」

スタッフ「そいやッ！」

刹「あっ！」

ドサッ

3MX「刹那を一撃とは…凄い漢だ」

忍「なあ作者。もう終わりなわけないよな」

3MX「まあね。次はここ」

「このタイミングでこんなに出されたら…」

流石にこの数じゃどうしようもできない

刹那は諦めたくない故

奇跡を願ってしまった

誰かが助けに来てくれることを…

『それほどでもない』

忍「俺が群がる鬼を目の前にして諦めかけていた刹那の前にカカッときょうきょ参戦したシーンだな」

3MX「本当はこちら」

「このタイミングでこんなに出されたら…」

流石にこの数じゃどうしようもできない

刹那は諦めたくない故

奇跡を願ってしまった

誰かが助けに来てくれることを…

『諦めんなよ…諦めんなお前！どうしてそこで諦めんだそこで！周りのことと思えよう！応援してくれてる人のことと思ってみろって！ダメダメダメダメ諦めたら。あともうちょっとのところなんだから。俺だってこの-10℃の中、シジミがトウルって頑張ってたんだよ！だからこそ、Never give up!』

3MX「もっと熱くなれよおおおおお！」

忍「熱いから熱いんだよ！」

3MX「ぬるま湯なんか浸かってんじゃねえ！」

忍「今日からお前は」

忍・3MX『富士山だ!』

千雨「2人が壊れたから私が進行するよ」

「小太郎、いるんだろ! 狗神なんか捨てて掛かってこい!」

『やっぱり強いな。忍の兄ちゃん』

千雨「このシーンは小太郎のイメージを崩さない為に修正を加えて出来たらしい。因みに元々はこうだ」

「小太郎、いるんだろ! 狗神なんか捨てて掛かってこい!」

『ヤローオブクラッシャー!』

千雨「……………うわ。少年のイメージが崩壊するセリフだな。ん? どうした」

スタッフ

「ここからはボツ設定の紹介をお願いします」

千雨「あいよ。なにに。修学旅行編ではディケイドを使用する予定だったが、とある都合の設定変更によりディケイドの使用は延期になりました…。へえ」

スタッフ

「これ」

千雨「DVDか、再生すればいいのか」

スタッフ

（コクリ）

千雨「んじゃ再生」

《もし修学旅行編でディケイドを使っていたら　くもしディケ》

「おい！薫！ちゃんと受け止めろ！」

「馬鹿言っちゃいけねえ！というか攻撃効いてねえだろ」

「むっ…」

「まあいい。今はリョウメンスクナをどうにかする事が先だ。エヴァ、力を貸せ」

「なにか策があるのか」

「まあな、ちょっとくすぐったいぞ」

《final form magister EEE EVANG
ELINE》

「何をするKひゃ！」

『なんだこの姿は！』

「キバアローならずエヴァアローと言ったところかな」

『よくは分かんが、いけるか薰』

「ああ」

《final form magister EEE EVANG
ELINE》

「キバって…いこうぜ！」

千雨「てな具合にリョウメンスクナを倒すのか」

3MX「そうだぞ」

千雨「びっくりした！」

忍「諸条件によりディケイドの使用が延期になったのは本当のことらしい」

3MX「ディケイドにはオリジナルの設定を付け足して修正を加え

てるので、登場はまだ先になるかな？」

忍「なあ作者。ちゃんと毎週フォーゼ見てる？」

3MX「安心しろ。録画しながらリアルタイムで見てるからな」

忍「素晴らしい解答だ素晴らしい」

3MX「それ程でもない」

千雨「あのさ作者。気になった事があるんだがいいか？」

3MX「なんだい」

千雨「黒い服を肌の上に着て、ジーンズを履き、片手に携帯のような物を持った男性って誰だ？」

忍「確かに気になる」

3MX「ああ：彼は大天使ルシフェル。そう言えば分かるかな」

千雨「あの某スタイリッシュ脱衣アクションのアイツか」

3MX「正解だ。ジュースをやろう」

千雨「9本でいい」

少女ジュース中々

忍「作者。もう裏話はないよな」

3MX「一通り話したから」

忍「んじゃ、そろそろ終わりにしますか」

千雨「私からだな。コホン…今回の裏話はいかがでしたか」

忍「修学旅行も残すところあと2日」

3MX「忍は無事に麻帆良に帰れるのか!!」

超「これからも『M・R・P・F』 Magic Ride Project Freedom 仮面の幻想教師 麻帆良に俺! 参上!』をよろしくネ」

3MX「!？」

忍「!？」

千雨「!？」

なんやかんだでボツになった裏話に俺！参上！（後書き）

忍へのお便り

この小説の感想

やってほしい番外編

日常編でメインにしたい人

などは感想の一言までどうぞ

木乃香のアーティファクトはまだ募集中です
9月いっぱいまでかな

番外編その5——呪われた道具の世界で俺は兵器になった——（前書き）

C3シーキューブアニメ化おめでとう！

作者はラベル派だけど全巻読んでるよ

注意

この話はただ委員長とイチヤイチヤしているだけです

番外編その5——呪われた道具の世界で俺は兵器になった——

「戻ってきたな」

「何か戻って着ちゃった」

再び、白い世界に来ました
コレで三度目

「次はどの世界に行くんですかい…」

「分かっておったかい」

「もはやパターンだよ」

流石に二回も別世界に行ってたんだから

「今度は呪われた道具の世界——『シーキューブ』の世界に行ってもらおう」

「召喚獣に魔法ときて、今度は呪いですか。てっきり、魔法と科学が交差するのかと思って構えていたんだが…」

「そんな世界もあるにはあるんだがな。今は助けを求め——いや、なんでもない」

「で、今度は何をすればいいんだ」

「…ある女の子の呪いを解いてほしい」

「わかった。この麻帆良学園高等部3-A担任忍竹薫に任せな！」

「おお！引き受けてくれるのか」

「やります！」

「では頼んだぞ…。と、言いたいが一つ言っておくことがある」

「なに」

「向こうの世界は呪われた道具の世界、魔法や気は使えない。そこで――」

「俺が呪われた道具になるんだろ」

「そこまで分かっていたとはな…」

「何となくだが」

「すまない。私のせいで呪いを受けなくてはいけなくなるとは」

「気にするなよ。じゃ、いつもの頼んだぞ」

「コホン…。そんな呪いで大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない」

俺は白い世界から飛び降りた

「到着…、俺！参上！」

すると、俺の体を灰色のオーロラが通過した

「なにこれ…、制服？また学生かよ！コレで高校生するの三回目な
んですけど！」

元々いた世界で一回

『バカテス』の世界で二回

今回の『シーキューブ』の世界で三回目となりそうだ

さて、とりあえず荷物の確認といきますか

- ・生徒手帳
- ・超鈴音特製太陽充電可能の携帯電話
- ・財布
- ・カメラ
- ・バイクの免許
- ・保険証
- ・判子
- ・住民表
- ・仮契約カード
- e t c e t c …

それと写真が一枚

薄い水色のような色の髪

一見、普通の少女に見えるが

恐らく、この写真の少女が救ってほしい子なんだろう

てか呪いてなに？

よくよく考えみれば

魔法や気に科学といったものは、麻帆良でお世話になったから分かるけど

呪いとかいまいち分からないな…

いかにもオカルト

召喚獣は科学とオカルトの融合だけど、呪いはなかった

まずは、この世界での拠点に行きましょう

ここからはダイジェストでお送りします

「貴様！呪われた道具だな」

「ん？君は……ああ、そうか君か！」

「まさか貴様！？」

「待って待って！少し話でもしないか？」

「ええい！問答無用！」

「ちょっ！おまつ！」

「ええ。転校してきた忍竹薫と言います。どうも宜しく」

『席は…、委員長の隣でいい？』

「わかりました」

ガタッ

「宜しく願います」

「ああ。私は上野錐霞^{うえのきりか}という」

「なんすか。転校初日に校長室に呼び出すなんて」

「忍よ。校長にそんな態度で「いいよ楽にして」はあ…」

「んで」

「ん？ああ。忍竹薫君。君は禍具だよね？」

「!？」

「そうですよ。いつから気づいてたんすか」

「いろいろと調べさせてもらったよ。戸籍、人間関係、住所、目撃情報…」

「間接的にストーカーだろ」

「そう言わないでくれ」

「なんだ薫は弁当か」

「錐霞か…、びっくりした」

「一つくれないか」

「いいよ。はい、あゝん」

「な、何をさせるんだ／＼／＼」

「欲しいんでしょ！ほら、あゝん」

「う、あ、あゝん／＼／」

パク

「どう」

「全く…馬鹿げている……。だが、美味い…」

「だろ」

「春亮！薫！速くくるのだ！」

「そうです。女性は待たせるものじゃないですよ」

「落ち着きたまえ。祭りは急いでも逃げないぞ」

「む…まだそれを言うか。祭りだぞ祭り」

「はいはい。わかって——」

君がいた夏は

遠い夢の中

「わりい。電話だ」

ピッ

「はい」

『薫。私だ』

「なんだ錐霞か。どうした」

『いま、時間あるか？』

「まあ…あるけど」

『そ、そうか。でだな』

「うん」

『一緒に…祭りにでも…』

「いいよ」

『ホントか!?!』

「ああ」

『それじゃ、今から来てもらえないか』

「そんじゃ、待ってろよ」

「頼む薫！手伝ってくれ」

「頭を上げなさい春亮君」

「薫……………」

「必死こいて勉強しろやあああ！」

「サーセン！」

「薫！」

「今度は錐霞か」

「今度、家で勉強会でもしないか／＼／＼」

「構わん」

「約束だぞ／＼／＼」

――

「錐霞…もう一人で苦しむのは止めてくれ…」

「だが、これは…」

「もう…いいんだ…」

「かお…る……」

「俺がなんとかしてやる。絶対だ！」

「頼りにしてるぞ」

「分かってる」

番外編その5——呪われた道具の世界で俺は兵器になった——（後書き）

戦闘をしなかったので、この世界での忍について

呪い…重戦車の呪い

左目が呪い発動中にレーダーになる

息を吐くことで火炎放射を出せる。結構広範囲

戦車砲級の破壊力を持つ拳が放てる

重戦車なので防御は硬い（唯一ぬきの盾）

貧弱一般人が殴ると、合金を殴ると同じもの

棒状の物があれば重火器にできる。出来れば持ち手が欲しい。トンファーなら尚よし

脚はバースのキャタピラレッグになる

暴走状態になると

仮面ライダー竜騎に似たゾルダの契約モンスターの様など装備になり、全てを破壊尽くす

（ゾルダのファイナルベントにとてつもなく似ている攻撃を打ち込む）

ざっとこんなもんだ！

小説の感想

忍への質問

今日の朝ご飯などが御座いましたら、一言までどうぞ

番外編その6——今更、ISは遅いだろ…。そんなことよりデュエルしようぜ——

忍「テスト期間に投稿するとかないわ」

3MX「うっ…で、でもな。ただでさえ週一投稿で遅いんだからさあ」

忍「成績下がるぞ」

3MX「いやだあああああ」

番外編その6——今更、ISは遅いだろ…。そんなことよりデュエルしようぜ——

問題…ここは一体どこでしょう？

答えはIS学園です

いや〜ビックリしたよ

前振り構わずに飛ばすんだからさ

全く…

やれやれだぜ…

それにしても女しかない

前を向いても女子

後ろを向いても女子

右を向いても女子

左を向いても女子

上には青空が広がってるがな

もう一つ驚いたことがあるんだよね

自分以外にもう一人男がいたんだよ

ソイツがさ織斑一夏ってな

実は旧友なんだよ

しかも女尊男卑ときた

男の肩身は狭くなる一方だよ

そもそもISてのが昔住んでたとこの近所にいた幼なじみの篠ノ之？とやらの姉さんが作ったらしい

うろ覚えなのは

俺がバカテスの世界に行く前。ざっと一世紀は前のことだからだ

しかもご丁寧に俺専用のISまで用意してやがったからなああの神は
せいぜい楽しい学園生活をさせてもらうぜ

ダイジェスト

「自薦他薦でもかまわない誰かいなか」

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

「私は忍竹くんがいいです」

「私も忍竹くんがいいとおもいます」

「ちょっと待て！俺はS「ちなみに他薦されたものに拒否権などない」

「チクショウ：お前らバカだ：」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

「どうしたセムアザ。持病か!？」

「そのような選出は認められません! 大体、男が…クラス代表だなんていい恥曝しですわ! それと私はセシリアです」

「それは失礼した」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿とこの人にされては困ります!」
そろそろ怒っていいかな？

「いいですか!？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」

あゝもうダメだ

「だ、大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で『いい加減にしろよ』なんですか!」

「さっきから聞いてりやネチネチネチ悪口言いやがって…ISが無ければ何にもできねえ雑魚は黙ってろ!」

「そこまで言うのでしたら決闘ですわ!」

「ああ良いぜ。やってやるよ」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使いに――」

いえ、奴隷にしますわよ」

「ハッ構わねえ！でもなこっちが勝ったら俺の奴隷になってもらうからな」

「ま、まさか…一次移行！？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

「この姿はネオス、ネオスはまだ過程に過ぎない。ま、十分に強いかな」

「ですがいくら一次移行したとはいえ、私の敵ではありません！」

「だから焦るなってマリネオス！」

『その情報。もう古いよ』

「あ、鈴じゃないか」

「久しぶりね。薫、一夏」

「そうだな。そろそろHRが始まるから戻った方がいいぞ」

「分かった。それじゃ休み時間にね」

『ゲート遮断シールドレベル4 All Gates..Locke
d』

ピピッ（千冬さん。聞こえていますか）

『忍君！？どこですか』

『薫、聞こえてるぞ』

（俺がゲートぶっ壊して中に入りますんで、後をよろしくお願いします）

『できるのか』

（当たり前だ。俺を誰だと思ってる）

『そうだったな』

（でわ）ピッ

「行くぜグランネオス」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

ふーん

見た目は男っぽくしてるけど
ありゃ女だな

複雑な事情でもあるのか…

「ラウラ・ボーデヴィツヒだっけか？ 出会い頭に人をぶつのはいた
だけねえな」

「貴様、手を離せ」

「アンタが一夏に手を出さないのなら離してやるぞ。言っとくが、
俺は織斑先生より強いからな」

「!？」

「驚くよな普通」

「……………めん」

「ああ？」

「認めん…」

「なにがだ？」

「貴様が教官より強いなど認めん」

「ラウラ、事実だ。受け止めろ。訓練機だったが私は一方的にやら

れた」

「はいはいそこまで」

「何のつもりだ」

「止めるつもりは無かったんだがな、いろいろと壊しすぎだ。織斑先生が来ちまったらどうすんだよ」

「くっ」

「今度学年別トーナメントがあるんだが、そっちで決着を付けたらどうだ」

「あゝ、シャル。シャンプー勝ってきたか……」

「か、かおる／＼／＼」

「あーそのーゴメン」

「どうしたラウラ？ 散々、大口叩いたのにこの程度か」

（私は…私は…負けたくない！）

「いいぜ。それが本気だっていうのなら俺も本気で行くぜ！カオス
ネオス！」

「アイツ、ふざけやがって！あれは千冬姉の技だ！」

「落ち着け一夏」

「なんだよ！邪魔しようってなら薫もぶっ飛ばし！」

ドスッ

「ガハッ」

「いい加減にしろよ。テメエが出て来るのはとんだお門違いだ。コレは俺とラウラの喧嘩だ。それにだ、お前じゃ俺には一生掛かって
も勝てねえ」

「クソッ」 バタッ

「待たせたなラウラ。安心しろ助けてやる」

《第二次移行完了》

「ちようどいい…ノヴァマスター！」

「悪かったな一夏。別に恨まれてもしかねえことしちまってよ…でもな、誰にだって譲れない物はあるんだよ」

スタツスタツスタツ

「……………そんなこと、分かってる。強く…なりてえ。薰みたいに強く、強く…なりてえ……」

「薰！貴様を嫁にする異論は認めん！」

「ちょっと薰！どういうこと！」

「うわ！鈴！壁壊すなよ。てか危ねっ」

「薰さん。私も少しいいですか？」

「ヤバイ…このままだと俺の寿命がリアルでマツハなんだがな。前門の虎、前門の狼状態をどう回避するか…バックステッポオ！」

カカカッ

「逃がさない」

「待って下さい」

「畜生！不幸だああああ！」

番外編その6——今更、ISは遅いだろ…。そんなことよりデュエルしようぜ！

本編では出なかった説明

メインヒロインは鈴になるかな？でも、真耶や千冬さんでもいい気がする

忍のIS

IS名 ネオス

言わずと知れた遊戯王GXの過労死モンスター

第一次移行で『ネオス』＋ネオスピーシアンの融合状態

第二次移行で『HERO』＋属性の融合状態になれる
zeroやノヴァマスター、ガイア、トルネードなど

第三次移行で

ネオスナイト、ネオスワイズマン

第四次移行（最終形態）で

ゴッドネオスになる

その力、無限大

忍のIS学園内

部屋は教員棟で真耶と同じ

よく千冬さんが来る

後にシャルと同室になる

忍？千？そ
と？冬？の
真？さ？他
耶？ん？教員

以上！

第四十四話／一難さってまた一難とか…（前書き）

後日談だから観なくても問題ぬえ

【宣伝】

『MAHORA不思議ドリンク研究会』 作者はヨシユア13世様
この物語は夕映が普段持っている不思議な味のドリンク
通称MAHORAドリンクをコンプしようとする物語でございます
一度は観るべき死にたくなければそうするべき

第四十四話／一難さってまた一難とか…

リョウメンスクナを倒した俺達は木乃香の実家こと、関西呪術協会の総本山に戻った

千草がリョウメンスクナに握り潰されそうになったが復活したてだったのがよかったのか、骨が何本か折れただけで済んだみたい

「んっ……」

「おや？目が覚めたようだな」

「ここは…っ！」

「ここは総本山だ。それとまだ動かない方がいいぞ。リョウメンスクナに握り潰されそうになったんだからな」

「そうやった…」

「詠春はアンタの怪我が治るまで、ここで治療してくれるだとか」

俺は部屋をあとにした

千草の部屋を出て行った俺は最上階から月を眺めていた

「……………」

「薫先生？どうしたんやこんな場所？」

「木乃香か…」

「そうや〜」

木乃香は俺の隣に座る

「あのな〜薫先生〜。一つお願いがあるんよ」

「言ってみろ」

「ウチと…仮契約してほしいんよ／＼／＼」

「なんだ。キスしてほしいのか？」

「そうやで〜／＼／＼」

「仕方ないな／＼／＼」

いくら遠回しに言われてもキスしてほしいとか言われると照れるんだよ

「先生…」

「木乃香…」

俺は木乃香を押し倒して
仮契約をした

「木乃香、これから言うことは真実だ。ちゃんと聞いてくれ」

「うん」

同時刻・総本山のどこか

「困ったことになったな…」

「そうでござる」

「私から一つ提案があるんだが」

「なに真名さん？」

「薫先生を譲れないのは皆同じ。それなら、お互いに共有しあえばいいんじゃないか」

「で、ですが、問題もあります」

「なんだ刹那」

「その提案に問題があるのではなく。薫先生に問題が…」

「どうした。言ってみろ」

「その…薫先生には誰かを惹き付けるところがあります。ですので、恐らくこのメンバーはクラスの半数はいくかと思うのです」

「確かにそうでござるな。昨夜のゲーム、我々以外に薫殿を狙っていたのは明石殿に和泉殿、古菲にエヴァ殿と茶々丸殿の最低でも5人はいたでござる」

「そんなにいるんですか!?!」

「む…それは困った」

「……………! 皆さん、こういうのはどうですか」

(ゴニョゴニョゴニョニョ)

恋する乙女は何かを企んでいるようだ

そして、また別の場所では…

「うゝん。コレは困った」

関西呪術協会会長及び近衛木乃香の父『近衛詠春』は頭を悩ませていた

「あの千草という少女の言っていたことが正しければ、私はとんで

もない事をしてしまったようだ」

時は遡り数時間前

真名が千草を担いで総本山に着き、治療を受ける前：

「急患！急患！」

石化の魔法が解けたがリョウメンスクナの復活に慌てる総本山。そこに千草が運ばれていた

「ゴホッゴホッ」

千草は咳と共に血を吹き出す

「まっ…てや…」

「なにか言ってる」

「詠…春はん…」

「君は？」

「天…ヶ…崎千草」

「天ヶ崎…」

天ヶ崎は昔、関西呪術協会を破門された
この時、詠春はリョウメンスクナを使つての復讐と思つた

だが千草の発言は詠春の考えていたこととは違った

天ヶ崎は関西呪術協会のある組織に嵌められて破門されたこと。その組織はリョウメンスクナを復活させて関西呪術協会を乗っ取ろうとしたこと。そして自分がリョウメンスクナを復活させて組織に復讐するところ語った

しかも天ヶ崎を破門に追いやった組織には関西呪術協会の古株が何人もいる

下手にそいつらの首を飛ばせば苦勞しないのだがリョウメンスクナが消滅したとはいえ。復活した後には古株が消えればパニックになるだろう

ポク…ポク…ポク…チーン！

「フッフ…我ながらいい考えだ…k t k r」

詠春…

お前もか

忍と木乃香は…

「薫先生」

「なんだ木乃香？」

「えへへ。呼んだだけや／＼／」

「なあ木乃香」

「なんや？」

「呼んだだけ」

「それでも嬉しいんよ／＼／」

イチャついていた：

まずはこちらの回想を見て頂きたい

～回想～

忍は魔法に関わることは何を意味するのか、どういふものなのかを
木乃香に伝えた

その時の答えがこれだ：

「ええよ。ウチ、どんなことがあっても薫先生から離れたくあら
へんから…だから…ウチのこと守ってや。ウチも薫先生のこと守る
さかい」

それを聞いた忍は

「嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

と返した

〽回想終了〽

とまあね…

作者「爆発しろ！」

てな具合に次の日の朝

俺は詠春やネギ少年の親父さんがいた組織

『赤き翼』 つう奴の隠れ家に来ている

正直、こんなことしても行方不明の親父さんの手がかりは見つからないな

ま、一般論で

そんで適当に見て回っていたら集合写真のような物があつた

この写真には詠春らしい人が見られる

この赤髪は、ネギ少年の親父さんだろ

このフードが多分クーネル

そんでこの白黒の烏賊みたいなのは仮面ライダー

………仮面ライダー

ちよっ！おい！

てかなんだよ

このライダーは初めて見たぞ

ライダーは俺だから…

あ！そうか！

いつかこの時代に行くからこの写真があるのか

納得

別に過去に行くぐらい

夢の中にはいたり宇宙人と戦ったりするよりはましだな

「なあ詠春。この烏賊みたいなのは誰だ？」

「ああ、彼はフォーゼ。少し変わっててね。突然現れたと思ったら姿を消す奴だった。結果としてはフォーゼには助けられたけど素顔は見せてくれなかった。ま、一番驚いたのはこの写真を撮った後に空を走る電車に乗って行方不明になったことかな」

「そうなんだ」

『フォーゼ』と『デンライナー』か

この二つから察するに

大戦で仮面ライダーがいたことになる

ライダーは俺だけしかないから、きつと過去にいくんだな

仕方ないね

「それと忍さん」

「どうした？」

「木乃香のこと、よろしくお願いします」

「わかってる。生徒を守るのが教師の役目ですから……みんな、そろそろ戻るぞ。ただでさえ一晩経ってんだからな」

『『『は〜い^^』』』

「薫先生〜」

「木乃香、いきなり抱きつくな」

「へへへ／＼／＼」

木乃香は俺の腕に抱きついて
詠春にこういった

「お父様。ウチ、薫先生と幸せになる／＼／＼」

「なん…だと……」

詠春は立ったまま気絶した

第四十四話／一難さってまた一難とか…（後書き）

木乃香のアーティファクトは修学旅行編終了ギリギリまで募集します
寄せられた案をちょっと修正したりしますが^^

第四十五話／修学旅行はまだまだ続く（前書き）

今後の展開を考えて遅くなりました。取り合えずば修学旅行編4
日目と5日目を書きます

多分、11月中は4日目と5日目です

第四十五話／修学旅行はまだまだ続く

これは、本来語られることの無かった物語りという話数稼ぎの話である

薫「おい！やめろ！バカ！この話は早くも終了ですね」

おはようみんな

忍竹薫だ

修学旅行もついに折り返し、残るところあと二日である

振り返ると実に大変であった

昨夜にいたっては伝説の鬼神を倒してしまった

正直いって眠い

だがそんなことも言ってられない

おそらくだが、木乃香以外に魔法を知った奴がいる

俺は貧弱一般人の気配を感じずにはいられなかったから気づいたのだが

困ったことになったな

ぶっちゃけ夕映とハルナ

夕映は興味が無いことには感心がない
しかも勉強に対しての興味が無いのだ
バカレンジャーの一角を担う由縁である

問題はハルナの方だ

噂は千里を走るらしいがハルナの場合、千里を超える
スピードも凄まじい

それになんとか尾行されてるし：

三人称視点

旅館の自販機の影に隠れて夕映とハルナは忍を監視している

その理由は極単純

昨夜の一件に関わっている

木乃香の実家に行ったとこまでは別に構わにいが、フェイトの魔法
で二人とも石にされた
しかもガン見状態で石化していたのだ

忍にとっては遅かれ速かれ、いずれは訪れてしまうだろうと思って
いたこと

そもそも何故、二人はネギ少年ではなく忍を監視しているというところ
こういう経緯があった

~~~~~

「ねえ夕映。どうするの？」

「何がですか」

「決まってるじゃない。昨日のことよ」

「そうですね」

「ちょっと！『そうですね』じゃないでしょ！」

「そう言われても困るです。そもそも十中八九ネギ先生は魔法使い。  
下手に刺激したら魔法で何をされるかわからないです」

「それじゃ、ネギ先生が攻撃してくるみたいじゃない」

「あくまで可能性の話です。まあネギ先生は攻撃をするような人では  
ありませんが、記憶を消すぐらい造作も無いはずですよ」

「確かにそれはあるわね…」

「お！薫先生に聞いたらどうですか？」

「薫先生にかゝ。うゝん」

「昨日、薫先生は木乃香のお父さんに挨拶に行っただけです。恐らく無関係でしょう」

「わからないよ。もしかしたら薫先生も魔法使いかもしれないし」

「それなら大丈夫です。薫先生は手を出しませんから」

「確かにそうだね」

「それじゃ行くです」

~~~~~

という訳で二人は忍を監視していた

だが二人には致命的な致命傷が存在している

皆さんは夕映とハルナの姿形は知っている筈だ

そして頭にあれが生えてることも…

三人称視点終了

「……………何してんだあいつら」

俺はみよんな視線を感じたので振り返ってみると、自販機から見覚えのあるアホ毛が生えていた

（あゝ。どうして3－Aの連中は行動が速いんだよ。その力を授業で発揮しろって話だよ）

「…夕映、ハルナいるんだろ。出てこいよ」

『（ピクッ！！）』

「そうか、だったらそのアホ毛………抜くぞ」

「「すいまえんでした；；」」

「で、なんの用と言いたいが…昨日か」

「そうです。薫先生は魔法使いなのですか？」

「そうだよ」

「そうでしたか…」

「で、それを聞いてどうした。魔法使いになりたいとかか？」

「確かに魔法は憧れるけど、昨日みたいな目に遭うのはやだなあ」

「私も同じです」

「そりゃそうだな。別に俺は、魔法の事を二人が黙ってくれるならどうしようとは思わない。その気になりゃ口封じぐらい余裕のよっ

ちゃんだしな」

「……………」

「このまま黙って普通の生活をするのか、いつ何があっても文句の言えない世界に入るか…麻帆良に帰る前に決めろよ。ま、修学旅行は今日明日あるんだから、じっくり考えろ。じゃあな」

あとはアイツ等の決める事だ

もし、こっちにくるなら…

そんな時はそんな時だ

自分の運命は自分で決めろと言う名台詞があるしな

第四十五話／修学旅行はまだまだ続く（後書き）

作者は東方有頂天が好きだ！

ブロントさんが

汚い忍者が

リューサンが

内藤が

痛風が

戦死が

凄い漢が

ブーメランが好きだ

特に汚忍蟬と大草原が好きだ

陰陽鉄も冥府鉄も好きだ

諸君らに問おう

東方は好きか！？

ニコ堂は好きか！？

『F a t e』は『なのは』は『遊戯王』は『I S』は『ネギま！』

は好きか！？

私は好きだ！

この小説を読んでいる方をお願いしたい

当分先の話だが

是非、完結までお付き合いして頂きたい

突然だが人気投票を開催する

主人公こと忍竹薫を除いたキャラクターで行います

投票期限は修学旅行編終了まで、トップ3に入ったキャラは一話だ

けですがメインになります
皆様の投票
待ってまゝす

もしかしたら話の展開上
仮契約するかも知れない：

皆さんにちょっとだけ…(前書き)

前話の後書きを見てからの方がいいです

皆さんにちょっとだけ…

幾つかお知らせです

前回の後書きに載せましたランキングですが

いつもは感想の一言に送って頂きますが、活動報告にお願いします
それが一つ

二つ目に時折転生者を忍君にぶつけようと思います

最初の1人目の転生者は名前と能力が決まっています

どんなに強くてもタイマンで忍君は高確率で一番最強ですので、その
時点での強さの確認になります。忍君は実際に回避不可能な一撃
必殺を初手でぶっ放すような野郎ですけどねへへ;;;

3つ目ですが

仮契約についてです

現時点で、朝倉和美、相坂沙代、龍宮真名、長瀬楓、桜咲刹那、近
衛木乃香がいます

他に、『この人と仮契約して』とかあればお願いします

という訳で簡単なお知らせでした

皆さんにちょっとだけ…（後書き）

よろしく願いします

多分、修学旅行編で転生者は1人でます

調子ぶっこいた能力ですが

忍君の汚いやり方で完全撃破されます

第四十六話／そーいや4泊5日の京都奈良の旅だよね（前書き）

皆さんどうも3MXです

このところ忙しくて短いのか書けませんがどうぞ

活動報告でいろいろと募集中で御座います

第四十六話／そーいや4泊5日の京都奈良の旅だよね

4日目・朝

夕映とハルナには時間を与えた

あとは2人しだい

俺は残りの修学旅行を楽しむとしますか

本日、行動を共にする3班のメンバーを紹介します

雪広委員長

ちう

麻帆良チアリーディング三人娘

「ちょっと待て。誰が私の事をちうと呼べなんて言った」

「なんのことだい？」

危なかった

ついに地の文まで感知するようになってきたか；；

せっかく裏話にも出れたんだから多目に見てほしいよ

「で、雪広委員長。今日はどこに行くんだい」

「はい。本日は奈良をお散歩しようと」

「んじゃ、出発」

『『おーへへ』』

「てな訳で着きました」

「いやゝ。やっぱり着くの速いね」

「そりゃ隣だしな」

「雪広委員長。まずどうする？」

「そうですね。では奈良公園に行きましょう」

「まあ無難だな」

「ということで奈良公園です」

「あれ？いつの間に着いた！？」

「どうした？」

「いや…私たち、いつ奈良公園に着いたんだと…」

「お前は何を言ってんだ。さっき歩いて来ただろ」

「…………あ、ありのまま起こった事をそのまま話すぜ。私たちは奈良公園に行こうと思ったたら着いていた。催眠術とか瞬間移動とか、そんなちゃっちなもんじゃ断じてぬえ。もっと恐ろしい何かの鱗片を感じたぜ…」

「千雨。何か変なもんでも食ったか？」

「いや、それはない」

「そうか。体調が悪かったらいつでも言えよな。一応、副担任なんだから」

「あ、ああ」

さて、ぬらひょんのお土産に一匹捕まえてくるか

千雨視点

全く…

私も遂に非常識の仲間入りか
できれば遠慮したい

せつかくの修学旅行だ
楽しむとするか

むう

初めて鹿を見るけど結構可愛いんだな

ん？

薫のやつ

ロープなんて持って何をする気だ…

鹿に気づかれた

ドン！

『グハッ！』

か、カオルーーーー！

今、薫が鹿、鹿に飛ばされて…

ハッ！あれは…鹿煎餅！

食いついて ドン！

『グベラ！』

カオルーーーー！

委員長！薫が、副担任が鹿に！

『グッ』

まさか…まだ向かうつもりか！？

いや、あれは

木に登ったあああ！

飛んだあああ！

ドシャ

そのまま落ちた！

また登ったあああ！！

でも降りた！

『面目ないです』

万策尽きてる

ドン！ 『グハッ！』

カオルーー！

何が、どうなって…

『ふん！』

防弾ジョッキ着てるし！！

『オラッ！』

ドスン！

取っ組み合った！

そのまま、後ろに、周りこんで：

『ウオオオリヤアアア！』

決まったああああ！

バックドロップ！

決まりました

この対決

3分41秒バックドロップで忍竹薫の勝ちです

ハッ！

私は一体：

てか、この状況は：

副担任が鹿にバックドロップをロープでって

私は何を言ってるんだ

納得イカネー！！！

第四十六話／そーいや4泊5日の京都奈良の旅だよね（後書き）

遂に現れた噛ませ犬

忍の前にどんな奮闘をする

さあ！武器の貯蔵は十分か！

次回

『M・R・P・F ｾﾞ Magic Ride Project Freedom 仮面の幻想教師 麻帆良に俺！参上！ 第四十七話／無限の剣製？あゝ、知ってるよ。アレでしょ？アレがああなっ
てアレになるアレでしょ？』

第四十七話／無限の創製？あゝ、知ってるよ。アレでしょ？アレがああなってマ

忍竹

「珍しく次回予告と同じタイトルだな」

作者

「そりや偶には同じにするよ」

忍竹

「なに？今回は結局俺無双なわけ？」

作者

「まあそうだな」

忍竹

「てかさ俺はどんどん人外になってきてないか」

作者

「気のせい気のせい W W W それじゃ 第四十七話始まるよ」

忍竹

「うは
W
W
W
W
W
W
W
W
W
おK
W
W
W
W
W
W
W
W
W
W
W
W
」

第四十七話／無限の剣製？あゝ、知ってるよ。アレでしょ？アレがああなってマ

午前のあらすじ

忍は鹿と戯れた結果、捕獲に成功した

修学旅行4日目・午後

「なあ、大丈夫か」

「千雨、心配はいらない。大丈夫だ」

「…流石に誤魔化しきれないぞ」

「大丈夫はな、大いに丈夫と書くんだ。英語で言うところマンタイ」

「そうか。体の傷凄いな」

「それ程でもな…あ」

「……………」

「おいィ…」

「ムリしなくてもいいんだっ!？」

「どうした」

「いや、今誰かに見られていたような気が…」

「気のせいじゃね」

「そう…だよな」

「何かあったら俺を頼りな」

「わかってる」

「さて、もう一匹捕まえるか」

「ヤメイ!!!」

俺は千雨にど突かれて中止させられると同時に視線を感じた
明らかに殺意の籠ったやつを…

＼同時刻・奈良公園＼

あれは、ちうちゃんじゃないか！
ん？

俺が誰だって？
そうだな、自己紹介がまだだったな

俺の名は衛宮サイトっていう…
まあ転生者だ
しかもチート付

名前から分かるかも知れないがFateのアーチャーとゼロ使のサ
イトの能力に直死の魔眼、魔力チートを貰った
これで原作ブレイクしようとしたんだが

男子校生だったのが唯一の誤算

しかも忍竹薫とかいうやつが2－Aの担任をしてやがる
神が言うには、俺は脇役らしい

フザケンナヨ

だったら、あいつ殺して俺が主人公になるまで

く再び忍視点く

「千雨、少し外すわ」

「あ、いいけど」

「わるいな」

俺は奈良公園から出て行き誰もいない場所に向かう

ちゃんと着いてきてるな

「なあ、いい加減止めないか。正直、付きまとわれるの迷惑なんだ
が」

「やっぱしバレてたか忍先生」

「いったいなんの用だ。俺は人を待たせてるんだが」

「俺の用件だあ？簡単だ。さっさと死んでくれ忍竹薫！投影開始」
トレース・オン

俺は名前も知らない奴が双剣で斬りつけてくるのを後ろに回避する
てかトレース・オン！とか厨二臭しかしいんですけど

「おいおい。最近の生徒は教師に刃物を向けるのか？」

「そんなのはどうでもいい。テメエの存在は死んだ後に消える。転生者は俺だけでいいからな！」

「はあ。分かった本気で来い！その代わり、死んでも後悔するなよ」

てか俺はさ呼び出しじゃね？

「だったら行かせて貰うぜ」

名前も知らない奴は呪文を唱え始めた

「I am the bone of my sword (体は剣で出来ている)」

Steel is my body, and fire is my blood (血潮は鉄で 心は硝子)

I have created over a thousand blades (幾たびの戦場を越えて不敗) Unknown to Death (ただの一度も敗走なく)

Not known to Life (ただの一度も理解されない)

Have withstood pain to create many weapons (彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う)

Yet, those hands will never hold anything (故に、生涯に意味はなく)

So as I pray, "unlimited blade works" (その体はきっと剣で出来ていた)」

すると世界は紅くなり

空には鹵車

地面には無数の剣が刺さっていた

「どうした？驚いてこえもでn

「ゴリユ」ガハッ！」

「はいはい。お喋りここまでだよ」

俺は名前も知らない奴（次から名無し）の頬を殴った

「テメエ…トレース・オン投影開始エクス…」

「忍者が1人、忍者が2人…」

『カリバー！／ファイナル分身』

（三人称視点）

衛宮は冷静な表情をしていたが内心焦っていた

それもその筈、衛宮の能力には直死の魔眼がある

その魔眼は、全てのものに存在する死を『死の線』として見る事ができる

だが衛宮には忍の『死の線』が見えなかった

いや…見えるはずもなかった

そう、忍には全てのものに存在するはずの『死の線』が存在しなかったからだ

そのため衛宮は、アンリミテッド・ブレイドワークスを使い、エクスカリバーを放った

「ハッハッハッ！消し飛びやがったぜ！コレで、コレで俺が主人K
「バキッ」グハッ！」

衛宮はエクスカリバーに消し飛ばされた筈の忍竹に殴られた

「バカな！テメエはエクスカリバーをモロに受けた。生きてる筈が
…」

「ハッハッハッ！空蟬だよ。さて、そろそろ終わりにするとします
か」

「クソッ！だったらもう一発ッ！？」

衛宮は忍の足元に巨大なガマが出現したことに驚いた

（何をしようが高々カエル一匹、まとめて葬ってやる）

しかし、この考えは浅はかく愚かしいものであったが
時既に時間切れ

「エクス…ってオイ！何をする！うわあああああ！」

衛宮はガマに飲み込まれた

「ハッハッハッハッハッハッ！」

それを見ていた忍は汚い三段笑いをしていたが

ベロン

ガマに飲み込まれた

「うおおい！ガマ！やめてくれええ」

「クソッ！出せ！出せ！」

衛宮は投影をしようとするが、ガマの体内では使用できなくなっていた

「はあゝ。こうなったらアレを使うしか無いか…うおおおおお！」

忍は何かをしようとするがガマは光り出し

「み、じ、ん…隠れの術！ハッ！」

ドガアアアアアン！

大爆発した

爆発を超至近距離で受けた衛宮と忍は地面に倒れてぴくりとも動かない

だが忍は立ち上がった

「ああ。かけてて良かったリレイズ」

忍は衛宮に近づき意識を確認するが

「死んだか…ま、微塵を受けたんだ。当たり前か」

衛宮の死により無限の剣製の空にヒビが入り、砕けた

「戻ったか」

アンリミテッド・ブレイドワークスと共に衛宮の亡骸も消滅していた

「修学旅行中なのに後味わりいな」

そして忍は千雨のいる3班のもとに向かった

「……………そういや、ここはどこだ」

…お前、それでいいのか？

第四十七話／無限の剣製？あゝ、知ってるよ。アレでしょ？アレがああなってマ

今回登場した雑魚

名前…衛宮サイト

能力『直視の魔眼』『無限の剣製』『投影』『ガンダールヴ』『魔力チート』

哀れにも忍に喧嘩を売り防御不可回避不可の微塵隠れを喰らい裏世界でひっそりと幕を閉じるはめになった？

そもそも忍には奥の手があり

UBWを塗り潰すことがゲフンゲフン…

次回もお楽しみ

コラボ企画特別編 『ちょっとだけ過去の話／カードと生きる者との出会い』

今回は初のコラボ企画です

コラボする作品は『遊戯王5Ds—いま現在の誓い』

作者はE・N・D様で御座います

E・N・D様ゼライト君がまだあんまり話しませんが堪忍して下さいあ

てか活動報告に全然書き込みがない！神よ！コレは私に対する試練なのか！？

俺は超を止めようとしてカシオペアを破壊した

…破壊したまでではいいんだが

「どこだここ」

俺はカシオペアから溢れ出した光に包まれて見知らぬ地に来てしまった

そして、手元にはフォーゼドライバー
オーズとダブルがぬえ
ポケットには1〜40までのスイッチ

お！バイクを発見！

しかも鬼に追われてるし

「いっちょ助けにいきますか」

俺はフォーゼドライバーを着け1〜4のスイッチを入れる

〔3…2…1〕

「変身！」

シューーーーーー！

「宇宙キターーーーー（。V。）ーーーー」

変身を終わると

別の鬼がバイクにドロップキックをする

「クラッシュかよ！ああもう！」

鬼はバイクごと乗っている奴を踏みつけようする

俺は鬼とバイクの間に入り、鬼の足を受け止め言ってやった

「タイマン、張らせてもらうぜ！！」

とはいえ数が多いな

「ランチャー レイダーON」

俺は2と4のスイッチを入れ右足にランチャーモジュールを左手にレイダーを出す

「狙い撃つぜ！」

流石は近代兵器

いや違うな、ここでは未来兵器？過去？そーいやカシオペアでどこかの時代に跳ばされたんだっけ

まあ鬼にしては堅かったな

レイダーでホーミング機能付きのランチャーを飛びながらぶっ放して四体いた鬼のうち三体を消滅した

「あと一体！」

俺が残りを探していると

背後から四体目の、最後の鬼が近寄って鉄拳を空中にいた俺に降り下ろそうとする

『危ねえ！魔法カード《雷鳴》×三！！！』

バイクに乗ってた人が魔法を放つ

魔法カードって遊戯王しょ！

現役デュエリストがここにいますよ！ちなみに作者もデュエリストですよ

そんなことは置いといてコレで終わりだ

俺はランチャーとライダーのスイッチをOFFにし、1と3をONにしてレバーを引いた

「ロケット ドリル リミットブレイク」

右手のロケットモジュール超加速し、左足のドリルモジュールが回転を始める

「ライダーロケットドリルキック！！！」

そのまま鬼を貫いた

後でぐぐってみたら鬼じゃなくて鬼神兵だった
あまり変わらないからおK

『……………かっけえ／／／』

「ん？サインか？サインくらいなら描いてやるよ」

これが俺とメビウス（ゼライト）との出会いだっただ：

後半へ続く

コラボ企画特別編 『うちちょっとだけ過去の話／カードと生きる者との出会い』

コラボは時折書いていきます
次回もお楽しみに

『感想』から『忍やこの作品内での原作キャラへの質問』やら『作者の使用デッキ』とか知りたいひとはどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0326r/>

M.R.P.F ～Magic Ride Project Freedom～ 仮面の幻想教師 麻帆良に俺！参上！

2011年11月20日12時36分発行